砂時計

梅崎春生

［やぶちゃん注：本篇は雑誌『群像』に昭和二九（一九五四）年八月号より翌昭和三〇（一九五五）年七月号まで連載され、連載終了の同年九月に講談社から単行本「砂時計」（解説・福永武彦）として刊行された。恐らくは梅崎春生の小説の中でも最も長いものの一つである。

底本は昭和五九（一九八四）年沖積舎刊「梅崎春生全集」第四巻を用いた。

全二十九章で、底本では一頁で一行二十六字詰二十三行の二段組で二百十四ページ分あることから、単純計算しても二十五万字余りはある。四百字詰原稿用紙に単純換算すると六百二十五枚相当である。

実際に読み始めると判るが、この小説は非常に変わった展開構成を持っており、それは一種、「ヌーベル・ヴァーグ」風の突飛な映像で複数のエピソードが痙攣的に連結されてあるものであり、これを初出誌で読んだ読者はかなり面食らったであろうと思う。

私は本電子化注を二〇二〇年七月八日にブログ・カテゴリ「梅崎春生」で始動し、同月二十二日分割公開を終えた。これはそれに使用した電子テクスト注を縦書に変え、この冒頭注のみ書き変えて、そのままＰＤＦ化したものである。

なお、ルビはやめた。ルビを附すと行間が微妙にずれて、見た目が甚だいやらしく見えるからである。行間を均等にすればいいが、それがまた私には面倒であったので、まことに悪いが、底本のルビは本文と同ポイントで（　）で後に添えてある。傍点「ゝ」も太字とした。悪しからず。【二〇二〇年七月二十四日　藪野直史】］

砂時計

1

古ぼけた陸橋が線路をこえてかかっている。もしこれが昼間のことなら、それを渡ってしばらく行けば、貧弱な赤松の防風林となり、その向うに砂浜がゆるやかな勾配（こうばい）で海に傾いている。赤松は総じて潮風にいためつけられ、背丈も低く、枝や幹もねじくれて曲っている筈だ。陸橋から逆に引返せば、道の両側は畠となり、やがて小さな町の最後尾があらわれてくるだろう。

夜、陸橋のたもとには街燈があった。

しかしそれは緑のペンキを塗った一本の支柱と、裏を黒く塗ったブリキの笠だけで、電球はくっついていなかった。球の金具の部分だけが笠の中心にはめこまれ、そのままぎしぎしと錆（さ）びついていた。潮風の塩分のために、どうしても電球の寿命が短かかったし、一々電球を取替えるには、町の施設防犯協会は人手がすくなすぎた。防犯協会は来月の祭りの寄付集めにいそがしかった。だから陸橋の上は総体にうすぐらかった。空には星明りだけがあった。

彼は駅の方から土堤（どて）沿いに、ひとりで歩いてきた。そしてその街燈の下に立ちどまり、うしろをふり返った。駅の燈が見えるだけで、土堤上に人影は見えないようである。しかし土堤の斜面は暗かった。彼は警戒的な姿勢でそこらを見詰めながら、上衣（うわぎ）をそろそろと脱いだ。脱ぐのには意味があった。身のこなしが軽くなるからだ。四つにたたんで街燈の柱の下に置き、それからちょっと考えてネクタイに手をかけた。ネクタイを解くにはひどく時間がかかった。しかもこれはそれほど意味のあることでもなかった。彼はそのネクタイを四つ折りの上衣にきりきりと巻きつけた。そして腕時計に眼を近づけたが、やはり星明りだけでは指針の位置は見えなかった。耳を寄せるとセコンドの音だけはかすかに聞える。彼はあきらめて立ち上った。そのまま彼はうすくらがりの中で、両手を前から横に振り、膝を屈伸し、徒手体操の真似ごとのようなことをした。手足を動かすだけで、かけ声は出さなかった。（これは海軍体操の基本型だ）動作の途中で彼はそう気付いた。彼は土堤の方を見ながら、こわばった頬をゆるめ、笑おうと努力していた。（こんな時に海軍体操をやってもイミがない）彼の背の方のずっとずっと遠くで、汽笛が弱々しく尾を引いて鳴った。彼は体操を中止して、いくらか芝居じみた身振りで闇に身構えた。

陸橋は幅が十米ぐらいで、細い鉄のてすりが両側についている。土台が古朽している関係からか、手すりはいくぶんか外側に反っていて、鉄自身も虫が食ったようにデコボコになっている。夜だから今はそれは見えない。その手すりにそって、彼はふらふらと陸橋の中央まで歩いてきた。そして首を伸ばして下方を見おろした。

眼下に数条の線路が陸橋と直角に走っている。線路はかすかに光を帯び、地面から浮き上って見えた。線路と線路の間は暗く、なぜかそこだけは軟かそうに感じられる。彼は視線を陸橋の真下から、その線路の光の帯にそって、ずっと遠くの方に移動させた。

五十米ほどの彼方に、いくつかの燈がかたまって見える。そこが先刻までその待合室に彼がいた沿線の小駅だ。――待合室は狭い土間で、長い木椅子が二つ向き合っているだけであった。彼は先刻その一つのはしっこに腰をおろし、握り飯を食べていたのだ。握り飯は塩味だけで、しかも一つきりであった。その代りその大きさは赤ん坊の頭ほどもあった。オカズに沢庵（たくあん）が五片か六片ついていた。このお粗末な弁当は北小路がつくって呉れたのだが、それを受取ってからの後味はひどく悪かった。

待合室には上（のぼ）り二十一時五十九分着の普通列車を待つ客が、彼の他に三人いた。一人は和服にはかまをつけた老人で、次はリュックサックを持った壮年の男だ。それから少し離れて農婦らしい中年の女がぽつんと坐っていた。下駄を二つそろえ、木の椅子の上に実直に坐りこんでいる。二人の男は顔見知りらしく、ぼそぼそと会話を交していた。彼はいらいらと大時計を見上げたり、居眠りしている駅員の姿をガラス越しに眺めたり、会話に何となく聞き耳を立てたりした。会話は二人の共通の知人のゴヘイという男のことらしく、やりとりの中で何度もゴヘイという言葉が発音されていた。

「それがよう、爺さん」男はごつごつした声を出した。「二年間に三寸もちぢむちゅうのは、一体何だねえ？」

「そういうこともあるもんだ」

老人は仔細（しさい）らしく合点々々をした。ゴヘイという五尺九寸の漁師が、二年間に背丈が五尺六寸まで縮まったという話らしかった。リュックサックの男はしきりにそれを不思議がった。

「なあ、爺さん。いくらなんでもねえ」男は口をとがらせた。男の顔は彼もよく新聞などで見るある高名な将棋さしの顔によく似ていた。「ちぢむちゅうのはよくねえよ。不吉なことだね。痩せるちゅうのなら先ず判りもするが」

「いやいや、そんなこともある」老人は確信ありげに掌を振ってさえぎった。「栄養がかたよるとやっぱしちぢむのじゃ。わしも今まで何人かそんなのを見て来た」

彼はうつむいて沢庵を噛んだ。沢庵は完全に乾されて漬けられたものと見え、よくひねこびて、微妙な甘味があった。旨かったにもかかわらず、オカズに沢庵しかつけてくれなかったということに、彼はまだへんなこだわりを感じていた。しかしもうこだわりを感じる自分も無意味であった。彼は沢庵をすっかり食べ尽し、握り飯は半分残して、がさがさと新聞紙に包みこんだ。そして大時計を見上げたが、まだ時間までに三十分もあった。椅子に坐った農婦はそのままの姿勢で、うつらうつらと居眠りを始めている。それを見た時彼は発作的にするどい眠気を感じた。それは同時に酔いの前兆でもあった。

「しかしそりゃ何かのタタリかも判らねえ。それにゴヘイどんは、なんでもかんでもジャンボが好きだからなあ」

「ジャンボとこれと関係があるか」老人は間の抜けた口でせせらわらった。「そりゃやっぱしデッコリじゃよ。背がちぢむということは背骨がちぢむことよ」

ジャンボという言葉もデッコリという言葉も判らなかったし、この二人が何故他人の背丈ばかりを気にしているのか、それが先ず理解出来なかった。居眠りしている農婦にも二人の男に対しても、彼はさっきから漠然と軽蔑と不信の念を感じていた。彼は腰かけたままのろのろと上衣を脱ぎ、裏地の名前の縫取りに歯を当てた。これさえ破り取れば、もう彼が誰であるか判定するものは皆無となる。握り飯を食べながら考えついたことだ。しかしその縫取りは、服全体はくたびれているにも拘らず、案外に頑強であった。彼はついにいらだって、縫取りを含む三寸四方の裏地を、犬のようにばりばりと噛み破った。そういう彼の動作にも、二人の男たちは全然関心を示さない風で、相変らずゴヘイどんの話をつづけていた。彼は窮屈な動きで上衣をつけ、唾に濡れたぐちょぐちょの布片を、丸めて長椅子の下に弾（はじ）き飛ばした。そのついでに握り飯の紙包みを、がさがさと椅子の下に放置した。もう北小路のことは彼の意識から去っていた。そして思った。

（何も考えることはない！）

握り飯を食べる前に、一息に飲み干した一瓶のポケットウィスキーが、しだいに身内に回って、皮膚の内側からむっと熱くなり始めていた。もう意識と感官がかすかに乱れて来ている。それを自覚しながら、彼はポケットから莨（たばこ）を出して火をかけた。リュックサックの男が、その時向う側からふいに立ち上って、彼の方に近づいてきた。頑丈な男の軀（からだ）全体から魚臭がただよい動いた。男は膝までの長さの褐色の厚司（あつし）を着ていた。

「火をひとつ――」

彼の前に立ちはだかるようにしてそう言った。火だけを必要としていて、俺を必要としているわけではないのだな。そんなことを誇えながら、彼は黙ってマッチを手渡した。男は一本目を点（つ）けそこない、二本目で点けて、ぽんとマッチを彼の膝に戻した。煙をふいて席に引返しながら、もう老人とゴヘイの話にもどっている。その冷淡さに、彼は怒りというよりも、むしろ奇妙な可笑（おか）しさを感じた。それから時間がじりじりと経（た）った。

九時四十五分。彼は莨を床にすてて唾をはいた。静かに立ち上って、さりげなく待合室を出る。誰からか背中をじっと眺められている。その感じを引き剝（は）ぐようにして、彼は駅前の小広場に立った。街がそこからまっすぐ、一本の道をはさんで細長くつづいている。しかし家々のほとんどは燈を消して眠りに入っている。彼は一応そちらの気配をたしかめて、右へ折れてすたすたと歩き出した。線路沿いに土堤がつづいている。土堤上の乾いた小路を彼は追い立てられるように歩いた。陸橋まで来るまでに、彼は誰とも出会わなかった。月はまだ出ていなくて、空には星だけがあった。そして橋のたもとの街燈はひっそりと消えていた。――

シャツだけになった彼の姿は、陸橋の中央に行って、駅舎の方に右手首をかざすようにした。さっきより幾分拡大した瞳孔が、やっと腕時計の針の位置をとらえた。長針は五十七分

を指していた。それを確かめると、彼はゆっくりと身体を回し、陸橋を横断して反対側の手すりの前に立った。その方角から吹いてくる微風はたしかな潮のにおいがした。そちら側の陸橋の下は暗かったが、線路の列だけはうすうすと認められた。頭が二倍か三倍にふくれ上ったような気持で、彼はそれを見た。

彼方三百米の地点で、それらの線路は一斉に大きく彎曲（わんきょく）している。その彎曲の外側に砂丘があり、海がひろがっている。その地勢の概略を彼は知っていた。あと二分も経てば、その彎曲点にいきなり列車の前燈があらわれて、こちら向きに驀進して来るだろう。彼はそれを待っていた。上り列車の線路はすでに確かめておいた。彼は今その線路の正確な上方に立っていた。陸橋の高さは、彼の背丈ではかれば、四倍乃至五倍ほどある。彼はふたたび暗い線路を見おろしながら、鉄の手すりの脚を両手でつかみ、その強度をためすために一寸ゆすぶってみた。

その時前方でふたたび汽笛が鳴りわたった。夜空に反響しながら音は急速に近づいてきた。

彼の全身の筋肉は突然、発作的に慄（ふる）え出した。同時に彼の意識や判断力は、ほとんど麻痺（まひ）したようにその働きを止めた。彼は棒立ちになり、これ以上には出来ないほど眼を大きく見開いた。汽笛は鳴りやんだ。そしてかなた前方の闇のまんなかに、いきなりまばゆい前燈がぬっとあらわれた。予定通りの時刻である。その前燈はあらわれて、驀進してくるという感じではなく、一瞬静止しているように見えた、強烈なその光は、陸橋のみならず、枕木や線路やそこらに散らばる小石までも、かっと照らし出した。

彼は打ち倒されるように急いで腹這（ば）いになった。細い鉄の手すりの根元をきゅっと摑み、下半身を思い切り曲げて、手すりと、手すりの間に押し込んだ。そのままおそろしい空間に全身を投げ出した。しかし両掌がかたく手すりを握りしめているので、彼の身体は紐（ひも）のように無抵抗に陸橋にぶら下った。しかしこれは彼の予定した動作ではなかった。ほとんど無意識に身体だけが動いたのだ。陸橋があまりにも高過ぎるから、背丈の分だけでも、垂直距離を稼ごうとしたのか、いきなり飛び降りるには勇気を要するから、二重スイッチみたいなやり方で、一旦ぶらりとぶら下り、それから落ちようと試みたのか、とにかく彼はぶら下っていた。ぶら下ったまま彼は獣じみた大声を立てた。その声が走ってくる汽車の轟音と重なった。――彼は手すりから掌をもぎ放した。そして一個の物体として線路めがけて落下した。その落下の瞬間に彼は失神していた。

三分後、彼の意識は回復した。彼は生きていた。陸橋の下の暗い線路上に、身体をうつぶせに平たく伸ばしたまま、彼の意識は突然昏迷からよみがえった。頬にあたるのが枕木であり、右膝にごりごり触れるのがレールであると知った時、彼はぎょっとして上半身をもたげた。陸橋の翳（かげ）が額を圧しつけた。彼は血走った眼で線路の彼方を見た。かの彎曲部の方角からせまりつつあった前燈は、もう見えなかった。二十一時五十九分着の上り普通列車は、二十二時三分通過の準急行列車をやり過ごすために、上りの本線をあけわたし、すで

に待避線に入って停止していた。――上半身を支えてついた両掌に、砂利（じゃり）石の角がぎしぎしと食い込んでくる。全身的な悪感（おかん）と共に、突然つよい嘔気（はきけ）が来た。アルコールと胃液の混ったどろどろのかたまりが、咽喉（のど）にこみ上げて来た。彼はむせて嘔き、涙を流し、顔を上げてあえいだ。汽笛が鳴りわたった。そして前方の闇に、ふたたび前燈がぎらりとあらわれた。

それは先刻のよりもひと回り大きく、彼の涙粒を通して、執拗（しつよう）な悪夢のようにギラギラと分裂した。彼は反射的に大声を上げ、レールの外にころがり出た。二三度つまずきながら必死に動き、三尺ほどの石垣に足をかけ、それにつづく土堤の斜面を大急ぎで這いのぼった。音は見る見る近づき、いきなり錯雑（さくざつ）した光の帯となって、陸橋の下を轟轟（ごうごう）と通過した。光の流れは十秒ほどつづいた。彼は草を摑み、顔だけをうしろに回してそれを見た。轟然たる流れはすっかり行き過ぎて尾燈だけになり、それは途方もない速さで、吸いこまれるようにかなたに遠ざかって行った。ふたたび陸橋にはしんかんと闇が戻って来た。

（ああ。あいつは急行なんだな）

彼は大きく身慄いをして溜息をつき、そしてのろのろとポケットを探った。ハンカチはなかった。ハンカチは街燈の下の上衣のポケットの中にあった。彼は土堤の上に立ち、シャツの袖で口辺を拭いた。そのまま両掌で顔をおおってつぶやいた。呟きというよりそれは空気の擦過音に近かった。

「やりそこなったんだ」

どこがどうなって失敗したのか、事情はまだ呑み込めなかった。しかし失敗したことだけは確かであった。彼は右足を引きずるようにして歩き出した。落ちた時レールにぶっつけたらしく、右の膝がぎくりと痛い。頭の働きも少々バカになっているようで、普通列車に轢（ひ）かれるのと急行に轢かれるのとどちらが痛いだろう、そんなことをぼんやり考えながら、彼は陸橋の中央まで来た。駅の待避線には普通列車が停っていた。感情のない眼で彼はそれを見た。（どうして線路が間違ったんだろう？）彼はびっこを引きながら、やっと街燈の下までたどりついた。渇きがはげしかった。彼は街燈の支柱に片手をもたせかけ、駅に到る土堤道をじっとすかして見た。

「誰かに見られたかな。それとも――」

誰かに目撃されたとすれば、その誰かの急報によって、駅から駅員たちがやって来るかも知れない。しかし土堤の上には人影もなく、そういう気配も見えないようであった。風の音以外はしんとしていた。彼はぎくしゃくと腰を曲げ、柱の下の上衣からネクタイをつまみ上げた。そしてそれをシャツの襟に通した。全身は虚脱しているのに、指だけがそれ自身独立した生き物のようにしきりにびくびく動くので、結ぶ操作になるとうまく行かなかった。彼は舌打ちをして、それをかたわらの黒い草叢に投げ捨てた。誰も見ていなかったとすれば、と今度は上衣を拾い上げながら彼はそう考えた。そうすれば、誰も知らないところで俺は懸命にことを敢行し、そして誰知れず失敗してしまったことになる。ケシツブにでもなったよ

うな惨めさが彼を包んだ。失敗にしても、全然他人に知られないよりも、知られて笑いものにされた方が、まだしも救われる。しかし同時に、待合室の二人の男や居眠り農婦を思い浮べた時、そして彼等から眺められることを想像した時、彼は身もすくむような嫌悪と羞恥を感じた。

汽笛が鳴った。待避線の汽車がにぶい音をひびかせて、ゆるゆると動き始めた。

陸橋の向うから、それと同時にごとんごとんと鈍重な音が近づいてくる。

彼は大急ぎで上衣の袖に手を通し、ハンカチで顔をぬぐい、ズボンの塵（ちり）をはたいた。ここにこんな時刻ぼんやりと佇（た）っている、それを見られるのはまずいという意識もあったが、同時に居直る気持もあった。彼は莨をとり出して口にくわえた。やはり指がしたたか慄えるので、マッチがなかなか点かない。それだけのことで彼は若干いらだった。

陸橋をわたって近づいて来るのは、そのおぼろ気（げ）な輪郭からして、牛車らしかった。

支柱によりかかって煙をはき出しながら、彼はそれを見詰めていた。近づいてくるのをむしろ待っていた。

牛車の通過で小さな陸橋はかすかに振動した。

牛を牽（ひ）く男は彼の前まで来て立ち止った。そしてのんびりと声をかけてきた。

「ちょっと、火をひとつ」

それは疑いを持つ男の口調ではなかった。牛車の荷から強い潮のにおいがした。夜目の感じから言えば、海藻を沢山たばねて積んでいるらしい。こんな時刻にこんな多量の海藻をどこに運ぶのか。

ここらあたりの連中は、概して誰もマッチを持っていないようだな。海藻のことよりは先ず彼はそう考えた。そしてポケットからマッチを取出して、やや不機嫌に手渡した。何故か莨の火を貸す気にはなれなかった。

男は一すりで正確に火を点けた。男の武骨な顔が火の色に照らし出された。先のとがった麦わら帽子をかぶり、頬や顎には無精鬚（ぶしょうひげ）が密生している。口には短い煙管（きせる）を横ぐわえにしている。その男の顔の斜め下のところに、牛の顔があった。牛は意志も感情も持たない眼で、じっと闇を見据（す）えていた。マッチが燃え尽きる短い時間に、彼はその牛の眼を見た。ある感じが胸を通り抜けた。焔は消え、マッチの軸は一本の火線となって地に落ちた。火線は地面にあたり、ちょっと身をくねらせるようにして消えた。

「へえ」

男はそう言った。低い声で掛け声をかけ、牛車はごとごとと動き出した。あの牛の眼のことを俺は案外あとあとまで覚えているかも知れない。ふと彼はそんなあまり意味のないことを考えた。そして事実その牛の眼の奇妙な印象を、彼は後になっても時にふれては鮮明に思い出したりしたのだが。――口もからからに乾いていたし、闇ですう莨（たばこ）はひどく不味（まず）かった。しかしそれを捨てることはしなかった。牛車のにぶい車輪の音がすっかり聞えなくなるまで、彼は支柱に背をもたせかけ、じっと動かないでいた。

［やぶちゃん注：「海軍体操」非常に詳しい解説が、「Web Magazine VITUP（ヴィタップ）！」

の「海軍体操を知っていますか？①」から、②・③・④とある。また、画像が悪いが、YouTube のReinaChannel に戦中のニュース映像の「海軍と体操」1及び2で見られる。

「ジャンボ」不詳。北関東や新潟では葬式の方言ではある。

「デッコリ」不詳。東北では「肥大しているさま」を言う。]

2

午前九時。

男は火事の夢を見ていた。逃げ出そうとするが、どうしても逃げ出せない。うんうんうなりながらもがいている中に、ぽっかりと眼を覚ました。障子に穴があいていて、そこから朝の光が小さな束になって射し入り、男の鼻に当っているのだ。火事の夢はそのせいだと知れた。

「ちくしょうめ！」

男はがばと上半身を起し、鼻を撫でさすった。鼻は日の色を吸ってあたたかかった。

「へんなところに日が射して来るんだな。全くおどろかせやがる」

男は枕もとのタオルでぶるんと顔をふき、そして寄り眼になり、片眼を閉じたり開いたりして、自分の鼻を眺めた。見おろした。

（日本人は得意になる時、鼻が高いという表現を使うが、外国人はどうかな）

男は小学校の時のことを考えていた。男は少年の時は成績が良くて、たいてい一番か二番か、三番と下ったことはなかった。彼の母親は父兄会から戻って来ると、彼の頭を撫でながら、ほんとにあたしゃ鼻が高いよ、とほめて呉れた。そのことを男は思い出していたのである。

「英米人はあまり使わないようだな」

彼はひとりごとを言いながら、どたんばたんと蒲団を折りたたみ、部屋の隅に押しやった。煙草を探したが、空箱だけなので、仕方なく灰皿の中の比較的長いのをつまみ上げた。今日失業保険が貰えるので、昨夜は焼酎で金を使い果たしてしまったのだ。

（つまり日本人は、他人からほめられると、伏目になる。伏目になると、自分の鼻が見える。そこで鼻が高くなったような錯覚を起すのだ）

短い煙草を苦労して吸いながら、彼は考えた。

（そこにゆくと英米人は、ほめられてもうつむかない。得意になって空を見上げたりする。だから鼻が高いという発想が出て来ないんだ）

その後彼は順調に学業をおさめたが、ある大学の英文科在学中に母親が死に、そこで何となく中途退学をしてしまった。いささか英語に学のあるのは、そのせいであった。中退をしたのは、学問に興味をうしなったせいではない。もっといいことがこの世にあるような気がしたからだ。もっといいこと？　しかし実際にはいいことはなかった。雑誌社に勤め、そこが潰れたので、現在は失業中の身の上なのである。

「そろそろ出かけるとするか」
彼はのろのろと立ち上り、寝巻を脱ぎ捨てる。すると廊下の方から、女の声がした。
「起きたの？」
「起きたよ」彼は答えた。「今から着換えして出かけるところだ」
「朝飯は？」
「まだだよ」
「うちで食べればいいじゃないの。おいしい味噌汁と目刺があってよ」
このすがりつくような女の声を、彼は嫌いではないが、あまり好きでもなかった。彼が間借りしているこの家の娘で、母娘して彼を養子に迎えたがっている。養子になれば、物質的に彼は不自由はしない。それは彼にも判っていた。しかしこの世には、そんなところにおさまるより、まだまだいいことがあるんじゃないか。
「飯なんか要（い）らないよ」彼はいくらかつっけんどんに答えた。「今日は保険がおりるから、それで御馳走を食うんだ」
「まあ、意地悪！」
彼は返事をしなかった。黙って部屋を出ようとすると、足音がばたばたと廊下を逃げて行った。娘の年齢は彼より二つ上になる。彼は玄関に出て、破れかかった靴を穿（は）こうとしたが、底から釘が出て足の裏を刺したので、彼はキャツと悲鳴を上げて、力まかせにその釘を引っこ抜いた。そして穿き直した。
外に出ると、いつの間にか雲が出て、空がどんよりと曇っていた。さっきまでの日の光が嘘のようであった。
午前十時。
交通事故があった。五十がらみの労務者風（ふう）の男を、オート三輪が引っかけたのである。オート三輪はそのまま逃げてしまった。サイレンを鳴らしながら、救急車が近づいて来た。彼は道端の、被害者に一番近い場所に立って、一部始終を観察していた。被害者は足を痛めたらしく、立ち上れない。
「イヤだよ。イヤだよ。そんなのには乗れねえ」被害者は彼を見上げてわめいた。「たすけて呉れえ」
「だからこの車がたすけに来たんだよ」
「これがないから駄目なんだ。駄目なんだよう」
被害者は左手を上げて、親指と人差指で輪をつくった。彼はそのそばにしゃがんだ。被害者は口から皮膚から、ぷんぷんと酒のにおいを発散させている。
「あれはタダなんだ。心配しなくてもいいんだよ」自分でもびっくりするくらいのやさしい声が、彼の口から出た。
「病院もタダで、ちゃんと飯も食べさせて呉れる。行ったら行ったで、きっといいことがあるよ」
被害者は何か言おうとした。が、もう救急車が到着して、ばらばらと屈強の係員たちが飛

び降り、被害者を担架の上に乗せた。そのあおりを食って、彼はころりんと地べたに尻餅をついた。係員たちはそれをたすけようとも、手を貸そうともしなかった。やがて救急車の音が遠ざかり弥次馬たちが立ち去ったあと、やっと彼は尻を上げて立った。そして呟いた。

「まったくてきぱきしたもんだな」

どういうわけか、あの被害者が非常にうらやましい気分がする。彼は感動に似たものを感じながら、ばたばたとズボンの尻をたたいた。

午前十一時。

彼は職業安定所の、失業保険金の受取所にいた。それは二階の北側の部屋である。求人側は南向きの室で優遇されるが、保険金受領者は北側で冷遇されるのだ。なにしろ金をもぎ取って行くのだから、いい待遇を受ける筈がない。

失業保険金受給資格証と失業認定申告書を窓口に差出し、あとは木製長椅子に腰をおろして待っているだけだ。この待っている間、彼はいつも強い希望と幸福を感じる。

(何で皆うらぶれたような、面白くない顔をしているんだろうな)

彼はここを訪れる度にいぶかる。

(昨日まで貧乏していたのに、今日いくばくかの金が入る。貧乏している時にしけた顔をするのは当然だが、金が入るというのに何であんな表情をしているんだろう?)

常にそうであった。ぶすっとふくれた顔、眉をしかめて憂鬱そうな顔、怒ったような顔、そんなのばかりだ。中には手で頭をかかえて、今にも死にそうなやつもいる。それがどうしても彼には理解出来ない。しかも働かなくて、それで金が入るのではないか。どこに愁い顔をする必要があるだろう。

次々に名が呼ばれる。呼ばれた者は背を曲げるようにして、窓口に歩いて行く。たいていの場所は、同じ境遇にある者が集まると、一種の連帯感が生じるものだ。それがここにはまるでない。まるで国鉄の駅のように、お互いに関係がない風だ。駅には身分や貧富の差もあれば、幸不幸の差や行先の差もある。連帯感のないのは当然だ。ところがここでは身分や境遇が共通している。失職したという点で、皆は同じなのだ。それなのに、どうして連帯感が生れて来ないのだろう。何故背を丸め、眼をそむけ合うようにして、生きているのだろうか?

(猫背と失業という点では、皆はよく似ているな)

失職と猫背について、あれこれ考えをめぐらしている中に、突然彼は名を呼ばれた。ヒエッというような頓狂な返事と共に、彼は立ち上って、窓口に歩いた。疣(いぼ)のついたゴム板の上に、受取るべき金が乗っている。彼はそれを取上げ、丁寧に二度数えた。

「これ」と彼は窓口の女に言った。「百五十円、多いんじゃないでしょうか?」

「百五十円?」痩せて青白い中年の窓口女の眉が、きりりと上った。「多けりゃ困るんですか。これでもあたしの計算は確かなんですよ」

「確かじゃないとは言いませんよ」女の剣幕にびっくりして、彼はおそるおそる答えた。「でも、現実には、百五十円ほど多いような気がするんです」

「気がするのは、そちらの勝手です！」女は扇形に紙幣を開いて、ちゃっちゃっと数をかぞえた。「も一度数え直して下さい」

こちらは貰う方で、向うは呉れる方の身分である。同じ境遇ではないが、仕事の上では関係がある。何か気持のつながりがあってもいいんじゃないか。これではまるで斧で縄を断ち切るようなものではないか。彼はちらと支払係の女の顔を眺め、も一度支給額を数え直した。やはり百五十円多かった。

（まさかおれが貧乏たらしい格好をしているので――）彼は内ポケットにそれをしまいながら考えた。（百五十円恵んでくれたんじゃあるまいな）

しかしそれ以上言い出すのは面倒だったし、その必要もないような気がする。損をするわけではないのだから、これでよろしい。彼は胸を張って部屋を出て行く。

午後零時。

彼はカレーフイス屋にいた。

安定所を出て、街角の店で煙草を一箱買った。腹は減っていた。すかすかに減っていた。そこで煙草の一服は、後頭部がしびれるほど身にしみた。彼は煙草を捨て、ふらふらと街を歩きながら、食堂を探す。

（何かうまくてどっしりしたものを食いたいなあ）

しかし直ぐ食堂に飛び込むことはしない。腹が減った時の愉しみは、うまそうな店を探すこと、それから入って注文するまでであって、注文して品物が運ばれて来た時から、人間はだんだん不幸になって行く。期待や希望がなくなって行くのだ。しかし人間はうまさにまぎらわされて、そのことを知らない。食べ終った瞬間に、人間は食欲においてもう極度に不幸になっている。もうそれ以上食べることは出来ないからである。彼は経験でそのことを知っていた。

『カレーライス専門店わにざめ』

しばらく歩いている中に、そんな店を見付けた。たちまち彼はその店が気に入った。というより空腹が極限にまで来ていたのである。

（鰐鮫（わにざめ）とは獰猛（どうもう）そうな名前だなあ。こちらが食うんじゃなく、まるで向うから食われるみたいだ）立ち止って彼は考えた。（しかも専門店と来ているからなあ。専門で、不味いわけがない）

彼は決心をして、のれんを分けてつかつかと店に歩み入った。カレー屋のくせに、入口には縄のれんがかけてあった。店は混んでいた。辛うじて席を一つ見付けると、彼は指を立てて注文した。またたく間にカレーライス一丁が運ばれて来た。彼は一匙含んで口をもぐもぐ動かした。

「うん。これはからくてうまい」

近頃彼はカレーのからさがなくなって来たような気がする。小学生の頃誕生日には、かならず母親がカレーライスをつくって呉れたものだ。その頃のカレーライスはからかった。水を飲みながら、ふうふう言いながら食べたものだ。今はそうでない。ワサビも唐辛子も、それ

ほどからくなくなった。実際にから味が減ったのか、それとも大人になってからいという感覚が鈍麻したのか。彼は給仕女に思わず話しかけた。
「このカレー、からいね。うまいよ」
「そりゃそうでしょう」女給仕はちょっとしなを作って答えた。「修羅印カレー粉が、ふんだんに使ってあるのですもの」
「修羅印カレー？」彼は反問した。「あまり聞いたことがないような、あるような、カレー粉だね」
　そして彼は五分ぐらいで一皿をたいらげ、ちょいと首をかしげて水を飲んだ。
「もう一皿呉れえ」
　午後一時。
　彼は街角の小公園のベンチに腰をかけて、すいすいととびまわるツバメの姿を眺めていた。おなかがいっぱいになっている。そこで腹ごなしのつもりで公園の子供たちのキャッチボールの仲間に入れてもらい、球を投げたり受けたりした。その彼の姿を、大きな桜の木の下からチョビ髭（ひげ）の太った男がじっと見守っていた。チョビ髭はマドロスパイプをくわえ、だぶだぶのレインコートを着こんでいた。足には地下足袋をはき、ちょっと見には、請負師かなにかのようであった。空はどんよりと曇っていた。二十分ばかりで彼はキャッチボールをやめた。キャッチボールをやっても、くたびれるだけで、一文の得にもならなかったからだ。
「なかなかボール投げがうまいじゃあないか」ベンチのそばでタオルで汗をふいている彼の方に、チョビ髭がのそのそと近づいてきた。「そうとうに年季をいれた腕だね」
「へへへ」彼はわらった。「中学時代にすこしやったんでね」
「お前さん、仕事はあぶれかい？」
　チョビ髭は彼を見据（す）えるようにした。へんに威圧的な眼の色であった。
「そうですよ」いくらか当惑を感じながら、彼は返事をした。「よくわかるんだなあ」
「それがおれの商売だよ」チョビ髭はパイプでベンチの横木をこんこんと叩いた。「いい仕事があるんだが、やる気あるかね。夜の仕事だが、日当ははずむよ」
「いくら出してもらえるんです？」
「八百円だ」
　チョビ髭はぶっきらぼうに答えた。
「八百円？」彼はびっくりして聞いた。「まさか危い仕事ではないでしょうね」
「どん仕事にも危険はつきまとうよ」チョビ髭は白い歯を見せてにやりとわらった。「バラス積だって、道路工事だってさ。危くない仕事なんて、今時どこを探したってあるものか」
「しかし、危険にも程度があるんでね」
「たいしたことはないよ」チョビ髭はあたりを見回した。
「もし万一に、怪我でもした場合には、治療費はもちろんこちらで持つし、治療期間中は一日五百円の割で持つよ」

「へえ。そしてそれはどんな仕事です？」
「仕事の内容は、現場につくまでは教えられない」
「さあ、それは――」彼はちょっと渋った。「なにはともあれ、仕事の種類を教えてもらわないことには――」
「じゃよしな」
　チョビ髭はあっさりと言いすて、向うむきになって、さっさと歩きだした。彼はあわてて呼びとめた。なにかいいことがあるような気がしたからだ。
「親方、親方」親方という言葉が自然と口からでた。まさしく親方らしい風体であった。「ちょっと待って、おれ、その仕事をやるよ」
「そうか」チョビ髭はそれを予期したように、すたすたと立ち戻ってきた。そして再びにやりとわらった。「考え直したか」
　チョビ髭はそれから、仕事にかかるについての、かんたんな指示をした。待ち合わせ場所、Q線のP駅のホーム。待ち合わせ時間、午後八時。手頃の石を十個持参の事。服装はなるべく身軽にする事、などであった。質問は一切封じられているので、彼は黙って神妙な顔で、チョビ髭の言葉を聞いていた。最後にチョビ髭は、彼の頭から足の先まで見まわしながら、しゃがれた声でいった。
「靴か。靴じゃまずいな。お前、地下足袋は持ってねえのか」
「うちに帰りゃあるけれど――」そして彼はおそるおそる質問をこころみた。「靴じゃまずいんですか」
「うん」チョビ髭はうなずいた。「この仕事は、多分、走らねば、ならんことになるからな」
「走るんですか」彼はちょっと情なさそうな顔をした。彼は走ることにあまり自信がなかったのだ。「短距離ですか。長距離ですか？」
「まあ中距離だね」
「ええと、では、手頃の石といいますと、その大きさは？」
「このくらいだ」チョビ髭は彼の眼の前に、拳固をにゅっと突き出した。その頑丈な指に太めの金指環が二つも光っていた。「このくらいの大きさのを十個だ！」
　――午後八時。
　彼はP駅のホームに立っていた。雨がしとしとと降っていたので、彼は番傘をさしていた。レインコートは質屋に入っていた。やがてチョビ髭が改札口からのそのそとやって来た。その姿をみとめて、ホームのあちこちから、五六人の男たちがぞろぞろと集まって来た。彼もその一人だ。彼はその男たちをじろじろと見回した。男たちはお互い同士をじろじろと眺めあい、その風体でもってお互いが同類であることを確認した。彼のようにポケットを石でふくらましているのもあれば、信玄袋につめこんでぶらさげている奴もいた。しかし、雨衣をつけず、のんびりと番傘をさしているのは、彼一人だけであった。その姿をチョビ髭が叱りつけた。
「仕事に出かけるというのに、番傘なんかさしている奴があるか！」

「でも――」
「でもじゃない。さっさと捨ててこい」チョビ髭は声を荒らげた。「でないと、つれてってやらねえぞ」
彼はしぶしぶと番傘を捨てにいった。いや、捨てるのはもったいないので、駅員詰所の横にそっと立てかけ、足早に戻ってくるとチョビ髭が日当のことを皆に説明しているところであった。
「いいか。今、半金の四百円を渡す。残りの四百円は明日のこの時刻に、この場所で支払う。わかったな」チョビ髭の語調は、有無を言わせぬ強引さに充ちていた。「さあ、みんな掌を出せ！」
つき出された六つの掌に、チョビ髭は手早くちょんちょんと四百円ずつをのせていった。のせられた順に掌は、一つずつひっこんだ。
「出発！」チョビ髭は低い声で号令をかけた。「仕事の指示は現場でおこなう！」
チョビ髭を先頭に、一行七名は改札口を通りぬけ、夜の町に足を踏みいれた。
チョビ髭はここらの地理にくわしいらしく、明るい街並をさけ暗い路地をずんずん歩いていった。六名も黙々とあとにつづいた。雨は少しずつあがりつつあった。場所によっては雲の切れめさえ見えつつあった。しかし雨は彼の服を濡らし、シャツを濡らし、ほとんど肌までとどいていた。迷路のような路地を曲ったり折れたりしているうちに、彼は空気の中に、なにか食欲をそそるような刺戟性の匂いを嗅ぎはじめていた。それはまさしく昼飯に食べたカレーのにおいであった。それと同時に、工場の単調な機械音が次第に彼に近づいてきた。
……
［やぶちゃん注：「鰐鮫」「大鰐鮫」、軟骨魚綱板鰓亜綱ネズミザメ目オオワニザメ科オオワニザメ属オオワニザメ *Odontaspis ferox* という標準和名の鮫はいる（本邦近海にも分布）が、捕獲されたり、現認されたりすることがかなり稀れなサメである。
「修羅印カレー」不詳。梅崎春生の造語と思われる。
「雨衣」「あまぎ」と読んでおく。］

3

その建物が最初建てられた時は撞球（どうきゅう）場だったそうだが、そのことを覚えている人は今はほとんどいないだろう。なんでもそれは明治の末期だということだ。しかしそう言われて見れば、二階の床（ゆか）もたいへん頑丈に出来ているし（撞球台の重さを支えるためにだ）、柱の数もすくないし（多いとキューの邪魔になる）、全体的にいかにも撞球場くさい家相を持っている。この一郭は戦時中この区でも奇蹟的に焼け残ったところなので、戦後の新しい町並を通ってここにたどりつくと、人によってはほっとした感じを持つだろうし、人によっては戸惑うような気持になるかも知れない。そういう特別の雰囲気がある。しっとりとくっついた生活の垢、あるいはカビ、そんなものがどことなく感じられるのだ。

おかしなもので戦後立てられた電信柱にしても、この一郭のやつだけは、他の新しい町並のそれにくらべて、すっかり古びてしまっている。周囲に無理に同調したようにくろずんでいる。なにか風化作用みたいな力がここには働いているらしい。

わずか焼け残っただけにここらの建物について言えば、製本場だったこともあるし、海産物罐詰倉庫だった時期もあるし、階下がパチンコ上が喫茶室だったこともある。製本屋ならまだしも、パチンコだの喫茶だのはどうしてもこんな建物では具合が悪いらしく、客の入りも思わしくなくて、直ぐにつぶれてしまった。木造ペンキ塗りの二階建てだ。ペンキは緑色の筈だが、褪色（たいしょく）したり剝（は）げかかったりしている。屋根のてっぺんには変な形の飾り屋根がくっついていて、その下につばめが巣をつくっている。現在のところ階下はS土地建物会社で、階上が白川社会研究所ということになっていた。

土地会社の方は近来一般の金詰りと地価騰貴（とうき）のせいで、この頃はあまり営業が活発ではないようだ。それに先般某大土地会社が農地法違反のうたがいで調べられたりしている。いずれその余波が群小土地会社にも及んでくることだろう。農地法を犯していない土地会社なんか先ず現今にはあり得ないからだ。だから階下の社員たち（と言っても、四、五人ぐらいしかいないが）は、去年あたりにくらべると顔色もすぐれず、笑い声もあまり立てなくなった。無理もない話だ。

空はうっとうしく曇っていた。つばめが一羽しなやかに身をひるがえしてはしきりに飾り屋根の下に出入りしていた。

白川研究所所員の栗山佐介は道の反対側に立ち、首をあおむけてつばめの動きを眼で追っていた。口を半開きにし、そして首をそんな角度に曲げると、佐介はふだんよりもっと頭でっかちに見える。佐介はつばめが好きだったし、またつばめが飛ぶ季節が好きであった。つばめはほとんど空気の抵抗を感じていないような飛び方をした。

「つまり」鞄をぶらぶらさせて道を横切りながら佐介はぶつぶつと呟（つぶや）いた。「あれなんだな。つまり、あれだ」

佐介は建物の入口に入った。すぐ右手に二階に通じるリノリューム張りの階段がある。階下の事務室は客が一人もなく、がらんとしていた。『贈S土地建物会社』の金文字の入った途方もなく大きな壁時計が、十二時十五分前を指している。佐介はレインコートを脱ぎながら階段をぎしぎしとのぼった。この頃栄養が偏しているせいか、階段をのぼるたびに足が重い。

階上は七坪か八坪ほどの広さで、机だの戸棚だのが雑然と配置されてある。印刷インキのにおいが鼻をうった。壁には大きな黒板がかかっていて、それに肉太な白いチョーク文字で、

今週の標語

この世に弱味なき人間なし

相手のすべての退路を絶て

そして各文字に赤チョークで圏点（けんてん）をつけてある。その黒板の前の小卓で女事務員の熊井がしきりにガリ版を刷っていた。熊井は二十五六歳で、顔が肥ってまんまるで、顔色もややまだらをなしていて、ボーンレスハムの切口を連想させた。だから熊井はハムとここでは呼ばれていた。その旧式の謄写器をばたんばたんと開閉するたびに、熊井のサイプリーツのスカートが微妙な動きを見せるので、同じ所員の牛島がうしろから定規（じょうぎ）の角でつついてからかっていた。定規は鼠をもてあそぶ猫の手のような動き方をした。ハムは身をくねらせ、声をはずませて叫んだ。

「よしてよ。インキが手にくっつくじゃないの、助平」

「クリさんが出て来たよ」

牛島は定規のいたずらをやめ、逆にまたがった椅子の角度をずらして、入ってきた佐介の顔を見た。佐介はレインコートを自分の机にほうり、誰にともなくあいさつをした。

「こんにちは」

彼はそのまま机や屑箱の間をすりぬけて歩いた。部屋の一番奥に、ここの主任格とでも言ったかたちで、須貝という中老の男の卓がある。佐介はその前に立ち止った。須貝は卓に両肱（ひじ）をつき、頭をかかえるようにして、厚味のある印刷物にじっと眼をおとしていた。その表紙には昭和五年司法省発行『司法研究』第十二輯（しゅう）と印刷してある。その白髪混りの頭に佐介は低い声で呼びかけた。

「菅医院に行ってきましたよ」

須貝はびっくりしたように、片肱をがくんと卓から辷り落した。声をかけたのが佐介だと判ると、須貝は大急ぎで表情をとりつくろい、とがめるような眼付きをつくった。須貝は心臓が悪い。刺戟を受けると直ぐそんな表情になってしまうのだ。だからこれは意志的なものでなく、反射的な擬態と言った方がいいかも知れない。須貝は横柄に反問した。

「それでどうだった。菅に会えたのか？」

「会えました」

「金は出したか？」

「取りあえず二万円だけ貰ってきました」

「二万円？」須貝は上目使いしてちょっと口をとがらせた。「そりゃ少いじゃないか」

佐介は立ったまま皮鞄をひらき、やや厚ぼったい封筒をとり出して、須貝に手渡した。

「少いと言っても、僕の月給はそれの四分の一です」

「そりゃ初めからの約束だよ」

「そうです。約束です」

「君は一週間のうち、月、水、金だけしか出勤して来ない。五千円で充分だ。それに歩合（ぶあい）もあるし――」須貝は前歯の抜けた歯ぐきを見せてちょっとわらった。「もっとも君は成功率が低いから、自然と歩合も少くなるが」

「まだ経験が浅いからですよ」牛島が定規をカチャカチャ言わせながら、はたから口を出し

た。「クリちゃんはそのうちにいい仕事師になるよ。筋がいいからな」
「筋がいいか」
須貝は卓の引出しをあけて何か探そうとしたが、思い直して封筒を二つに折り、内ポケットにしまい込んだ。
「まあ、いろいろ勉強するんだね。詰将棋の勉強なんかが、この仕事に案外役に立つんだよ。これは一種の頭脳のプレーだからね」
「さっきの話ですが――」と佐介は真面目な顔で言った。
「週に三日しか出ないから五千円じゃなくて、五千円しか出さないから週に三日なんですよ。まあ、どっちでも同じようなことだが」
「そうだ。同じだ」須貝は大きくうなずいた。「それで、どう切り出したんだ。医師会に密告するとでも言ったのか？」
「まあ、そんなものです」
佐介は今朝の菅医院での情況を思い出していた。時刻が早かったから、菅医師はまだ食事をすましていなかったらしい。菅は顔色も悪く終始なげやりな口のきき方をした。佐介が菅に面会を求めたのはこれが四度目だ。そして診察室での用談は十五分ほどで済んだ。菅は長身の背をやや曲げ、足を引きずるようにして薬局に引込み、三分後にはその封筒をぶら下げてあらわれて来た。菅はもう口はきかず、つよく侮蔑をこめた眼で佐介を見た。そういう眼付きにたじろぐことを佐介はしなかった。そうすることをずっと以前から彼はやめていた。
「どんな顔をしてたかい」
「乞食に呉れるみたいな顔でしたね。封筒をよこす時は」
「高慢ちきな顔だろう」
「そうです」
「金をしぼられるやつの、そうだな、五十八パーセントぐらいは、とかくそんな表情をつくるもんだ。覚えとくがいい。つまり卑屈のうらがえしだ」須貝は顔をあおむけ、顎（あご）をことさらに突き出し鼻翼をびくびくと動かして見せた。
「高慢ちきな顔って、ほら、こんなだろう」
須貝は以前新聞記者だったが、某舞台俳優の情事をネタにゆすり、それが発覚してクビになったという話だ。のっぺりした顔をもっていて、数年前帝銀事件犯人のモンタージュ写真が市井（しせい）に配布された時、容疑者と見られて危く留置されそうになったことがある。当人はどういう了見かそれを自慢話のひとつにしている。佐介は動きのない表情でその須貝の顔をしばらく見おろしていた。
「そんな表情ではなかったですね」やがて佐介は断定するように言った。「あなたのその顔は、高慢というよりは滑稽です」
「そうか。滑稽か」
須貝はもとの顔に戻って、興ざめた口調で言った。
「滑稽なのはお互いさまだよ。君のその五頭身だって、そっくりそのままお笑い草だ」

刷り上げた紙をワクから外（はず）して揃えながら、ハムがくすっと笑い声をたてた。佐介はその方をふりむいた。須貝や栗山佐介だけではなく、この部屋にいるものは皆、牛島も、ハムも、窓辺の机にいる嘱託名義の玉虫老人も、普通人にくらべるとどことなく滑稽なところがあった。ハムは笑いやめて、刷り上ったものを戸棚に乗せた。このガリ版は『白川研究所報』で、一週に一度百刷（す）られ、そしてどこに配布されることもなく、やがて四つに裁断されて所員たちのメモ用紙になってしまうのだ。何のために『所報』が毎週刷られるのか、ハムもよく知らないようだし、疑いを持ったこともないらしい。彼女は自分の席に戻って、引出しから探偵小説を出して読み始めた。玉虫老人は朝刊の束から記事を切り抜いては、一枚ずつスクラップブックに丹念に貼りつける作業をつづけている。老人が無表情なのは耳が遠いからであった。佐介は首を元にもどして、皮鞄を閉じた。

「しかし、まあ、なんだな」須貝は莨（たばこ）にマッチを近づけながら、ひとりごとのように言った。「少いと言っても、二万円出したということは、一応自分の麻薬中毒を認めたということにもなるな。まんず成功の部類だ」

「そうです」

「それをネタにして、同業者の中毒患者の名を聞き出す手もあるな」牛島が定規で首筋をかきながら言った。「医者で中毒者というのが、都内にも相当にいるらしい。そいつを調べ上げるんだな。中毒者は何らかの形でお互いに連絡し合ってるに違いないもんな」

「そうだな。それも面白い」

「ハシタ金をしぼるより、その方が得でしょうな。当研究所としても」

「うん」須貝主任は考え深そうに眼をしばしばさせた。

「それが本筋かも知れんな。しかしそりゃ栗山君にちょっと無理だろう。もすこしベテランじゃないとねえ。鴨志田君にでもやってもらうか」

鴨志田というのは栗山佐介と同年で、少年航空兵上りで、そしてここでは佐介よりずっと古顔で、腕利きということになっていた。関西方面に出張中で、今日はここにいない。佐介は自分の席に戻って、鞄をどさりと机上に投げ出した。別に不快なわけではなかった。机上に白い封書が一つ乗っている。栗山佐介宛のものだ。彼はそれを裏返して見た。発信人の名はなかった。彼は封を切った。

「なんなら俺がやってもいいですよ」

と牛島がその佐介を横目で見ながら言った。その時壁の鳩時計から鳩が飛び出して、つづけさまに十二声啼いた。この可愛い声を出す精巧な鳩時計は、この殺風景な部屋にはしごく不似合いな備品であった。これは牛島が昨年あるバレリーナをゆすった時、記念品としてついでにカチ上げて来たものだ。

「あら、もうお昼だわ」とハムが時計を見上げた。「富岳軒になにか注文する？」

「僕はライスカレー」と須貝があたりを見回して言った。

「俺もライスカレー」と牛島が須貝を見て言った。

「あたしもライスカレー」とハムが玉虫老人へ近づきながら言った。

「わしはみんなといっしょ」
肩をハムから叩かれて、きょとんとあたりを見ながら玉虫老人が言った。この研究所のそれぞれの人員の食欲は（いや、食欲だけにも限らないが）、たいへんに自主性がなくて、誰かがラーメンと言い出すと大体総員がラーメンだったし、ヤキメシだと皆がヤキメシだ。他人と異ったものを食べることを、おどおどとおそれるような傾向が多分にあった。まるでそれ以外の食物には毒でも入っているかのように。ハムは濃過ぎる口紅を舌でちろりとなめ、佐介を見た。
「あんたもライスカレー？」
「いや。僕はハムライス」
「あんたは近頃ライスカレーの時は、いつも仲間はずれをするのね」ハムは怨（えん）ずるような眼で、非難がましい口を利いた。「どうしてなの。なにか事情でもあるの？」
「そう」佐介はうなずいた。「家庭の事情」
「家庭の事情で、食べ物が好きになったり嫌いになったりするの。へえ、だ」とハムは下唇を突き出した。「それにあんたは独身で間借りの身分でしょ。家庭も何も持ってないじゃないの」
「独身者はその独身が家庭さ」
佐介はそう答えながら、椅子に腰をおろした。そして拡げた一枚の便箋の文章をよみなおした。それにはわざとらしい活字体のペン字で、

『今の調査を打ち切れ。打ち切らねばお前の身は危険である。右警告す』

ただそれだけ書いてある。佐介は一瞬その文言（もんごん）を皆に披露したい誘惑にかられたが、思いとどまってそれをたたみ、封筒の中に戻した。披露したって仕方がないし、この身の危険が減じるわけでもない。佐介は現在任せられている件を頭の中で数えてみた。さっきの菅医師の件をのぞけば、役人2、大学教授1、高級指圧師1、バーマダム1、写真師1、以上の六件だ。むつかしい事件はまだ佐介のところに回って来ない。それだけの力量がないからだ。そして六件とも早急を要する性質のものでなく、今週の標語にあるように、向うの退路をじわじわと絶ち、徐々にその弱味をしめ上げて行くだけでいい。こっちが追いつめるというより、向うの方で追いつまってしまうのだ。だからそれはわりに単純にして持続的な仕事であった。この警告状もその六件のうちの誰かのらしいが、それが誰だかはちょっと佐介にも見当がつきかねた。佐介は封筒を二つ折りにしてポケットにしまい、ぼんやりと窓外を眺めた。ハムは富岳軒に電話のダイヤルを回しはじめた。茫々（ぼうぼう）とつらなる家並の上に、どんよりと白茶けて濁った梅雨時（つゆどき）の空がある。つばめの影がひらりと窓を横切って消えた。（おれは残念ながらカレーは厭だ）佐介は空をまじまじと眺めた。そしてまた考えた。（人間というものは、いくらじたばたしたって、その環境には勝て

っこないものだ。とてもつばめのように身軽にはゆかない）佐介は自分が借りている部屋のことを思い、そして白茶けた空の色からウドンの茄（ゆ）で汁（じる）を連想した。二年ほど前、佐介はソバ屋で働いていたのだ。そのソバ屋は神田にあって、よくはやって忙しい店であった。朝は八時頃から粉をねって機械にかけ、先ずウドンとヒモカワをつくる。ウドンとヒモカワはのびる率がすくないからだ。それがすむと今度はソバ。配給の粉はアメリカ製で腰が弱く、さらさらして粘り気がない。だからソバと言っても、戦前のそれにくらべると、ソバ粉の含有量は半分ぐらいしかないのだ。それ以上ソバ粉をふやすと、汁の中できれぎれになってしまう。腹が空けば勝手に何でもつくって食べていいきめになっていて、初めのうちこそ喜んで月見ウドンだの肉ナンバンなどをこしらえては食べたが、半月も経たないうちに、そんなじゃらじゃらしたものは見るのも厭になってしまった。出来たてのウドンをつけ汁につけて、するするとすすり込む、せいぜいそれがせきのやまで、他には手を出す気もしない。つまり生（き）のウドンに直面してしまったわけだ。人間だってウドンだって同じようなものだろう。このソバ屋の主人は空気枕みたいな肥り方をしていて、そのくせ手足は細く、男色趣味を持っていた。人使いも荒くて、なにかと言うと自分の若い時の苦労を持ち出してくる。佐介はこの店にそれでも三ヵ月ほども働いた。三ヵ月もいると粉のこね方もうまくなる。そしてウドン粉をこねるのも、今の仕事、人間をこねかえすような仕事も、さして変りはない。同じことのように今の佐介には思える。またつばめが窓を横切った。

「これはおかしいな」

須貝が机の引出しから鍵束をとり出し、その一つを眼に近づけながら言った。佐介はそちらに首を動かした。須貝がつまんでいる鍵は割に大型で復雑なギザギザがついているところから、ここの重要書類保管庫の鍵とわかった。金属製のその書類庫はA金庫と呼ばれ、須貝の席のうしろ、この室の一番奥まった場所に据えられている。ここの仕事にほんとに必要な資料は、ほとんどそこにしまわれていた。須貝の声にはへんな緊迫感があった。

「どうしたんです」と牛島が自席から訊ねた。

「いや」

須貝は鍵を鼻にもって行って、くんくんと嗅（か）いだ。

「粘土かな。牛島君、ちょっと来て呉れや」

牛島は須貝の卓のそばに立ち、鍵を光にかざしたり、またにおいを嗅いでみたりした。佐介も立ち上って、のろのろとそこへ近づいた。

「粘土？」牛島はガチャリと鍵束を須貝の掌に戻した。

「まさかねえ。でも――」

「誰かが粘土を使ってこの鍵の型でもとったんじゃないか」須貝はやや表情をこわばらせて、じろじろとあたりを見回した。「乾いた粉みたいなものがへばりついてたよ。それにへんに油くさいような――」

「そりゃあんたの指の脂（あぶら）ですよ」牛島も同じように周囲を見回しながら、とってつけたように言った。「ここに働いてる者で、そんなことをやる奴はないよ」

「何も君たちを疑ってるわけじゃない。わけじゃないがだ――」
「他の鍵にはくっついていないんですか」と佐介は訊ねた。
須貝は他の鍵もざらざらと掌にひろげて、そこに顔を近づけた。ちょっとの間白けた沈黙が来た。ハムは椅子にもたれて小説本を読みふけっているし、玉虫老人は手まめに記事を切り抜いている。須貝はぐふんとわざとらしいせきばらいをした。
「老眼鏡を忘れてきたから、よく判らん」須貝はあきらめたように眼をはなし、A金庫の鍵穴に鍵をがちゃりとさし込んだ。「まあ、お互いに用心することだな。ここにはいろんな連中が出入りすることだしな」
「型をとったのは俺じゃねえですよ」と牛島が低くささやくように言った。
「僕でもありませんよ」かぶせるように佐介も発言した。声は牛島のそれよりもちょっとばかり高かった。須貝はA金庫の錠をそろそろと開きながら、首だけを二人にむけた。その眼はむしろ打ちひしがれて、おどおどしたような光さえあった。
「もちろん僕でもないよ」須貝は内ポケットからさっきの二万円入りの封筒をとり出し、それをA金庫内に収めながら、奇妙な弁解の仕方をした。「鍵を管理しているのは僕だからな、その僕が型をとるわけがない」
「誰もあんただとは言ってねえですよ」と牛島が言った。
「まあ気のせいかな。粉だとおっしゃるが、こんな梅雨時の季節だから、カビが生えたんじゃなかろうか」
「カビか」
須貝は金庫の錠をしめて、にやにやとつくり笑いをした。牛島も笑いながら、足音を忍ばせるようにして自席へ戻った。須貝はちょっと考えて鍵束を、卓の引出しにではなく、内ポケットにしまいこんで丁寧に釦（ボタン）をかけた。
「カレーはまだか。腹へった」
「何を読んでんだい？」牛島ははずみをつけて、ハムが読んでいる本をひょいと取り上げた。
「なんだって『殺人準備完了』だって。女の子のくせにおっそろしい本を読むんだな」
「返してよ！」ハムは中腰になって両手を伸ばした。「何を読もうとあたしの勝手じゃないの。探偵小説よ。作者のアガサ・クリスティは女なのよ」
「うん」須貝が自席でうなずいた。「探偵小説も勉強になる。大いに読み給え」
「僕もその本を読みましたよ」佐介は半分須貝に、半分ハムに向けた風に口をひらいた。そしてふと霜柱を踏みしだくような酷薄な快感が彼をそそった。彼は押しつけた声を出して言った。「犯人はね、ネビル・ストレンジなんだよ。意外だろう。大した悪者なんだ」
「まあ、ひどい」ハムは両掌を拳固にして、まっかになって地団駄を踏んだ。
佐介はうずくような気持でその顔を直視した。
「折角三分の二まで読んだのに、犯人の名を言ってしまうなんて。いいわ、きっと思い知らせてやるわよ。悪者！」
［やぶちゃん注：「リノリューム」リノリウム（linoleum）。亜麻仁油などの天然原料をもと

に製造される建材で床材やインテリア素材として使われる。「linoleum」の語はラテン語の「linum」(「亜麻」)と、同じくラテン語「oleum」(「油」)を合成した混成語で、開発者のイギリスの発明家フレデリック・ウォルトン(Frederick Edward Walton 一八三四年〜一九二八年)の命名で(一八六〇年特許取得)、発明当初は「カンプティコン」(Kampticon)と呼んでいたのを改名した。日本に於ける商標権はスイスのフォルボ・フィナンシャル・サービス社(Financial Services AG)が保有している。現在、亜麻仁油以外にジュートなどの植物繊維の他、ロジン(Rosin:マツ科 Pinaceae の植物の樹液である松脂等のバルサム類を集めてテレピン精油を蒸留した後に残る残留物)・粉状木材・石灰石・コルク粉などからも製造されている。

「サイプリーツのスカート」思うに「scye pleats」で、折り畳まれて開いた襞状になったスカートのことと思われる。

「帝銀事件」の発生は昭和二三(一九四八)年一月二十六日。本作発表の七年前である。帝銀事件は私にとって因縁の深い事件である。私が二十代の頃に出遇った老人は私の「帝銀事件」に対する独自の推理を、微笑しながら、黙って聴いておられたが、最後に「君の推察は概ね正しい。……私が死んだら、私の手帖をあげましょう」と言った。そうして「あの事件だけは真実が語られなければいけない……」と呟いた——彼は敗戦前後の内務官僚であった人物なのである……

「ヒモカワ」幅広の薄い平打ちうどんの別名。

「殺人準備完了」一九四四年にイギリスの小説家アガサ・クリスティが発表した長編推理小説「ゼロ時間へ」(*Towards Zero*)。彼女が読んでいるのは本作発表の三年前の昭和二六(一九五一)年早川書房刊の「世界傑作探偵小説シリーズ」の第九巻として「殺人準備完了」の邦題で三宅正太郎氏によって訳されたそれである。]

4

ぺちゃんこの鞄を横抱きにして、栗山佐介はリノリュームの階段をぎしぎしと降りた。階下の土地事務所では、中年の客が一人ソファーに腰をおろし、事務員の一人と商談を交していたが、靴音を耳にして口をつぐみ、じろりと佐介の方を見た。卓には紅茶と洋菓子の皿が乗っている。その客の視線を受け流すようにして佐介は表に出た。(あいつ、売り手だな)そう思っただけだ。この建物に出入りし始めて、もう二ヵ月になるから、よその会社のことにしても、それくらいのことは判る。客の身なりや物腰などで判る。土地を持っているやつといないやつとの違い、売りたがっているやつと買いたがっているやつとの違い、それが身のこなしのどこかに出ている。生活の条件がじかに出てくるのだ。(おれにはそんなものはないだろう)佐介は歩道と車道の境をぶらぶらと歩きながら考えた。(第一おれには生活の条件なんてものはないのだから)しかしこの考えは佐介のうぬぼれに過ぎなかった。空は午前中よりも暗く、大気もねっとりとしてきた。また雨が近づいてくるらしい。

角のベーカリーのところで、同僚の牛島康之が佐介にせかせかとうしろから追いついてきた。牛島はちゃんとビニールのレインコートの釦（ボタン）をかけ、額にうすく汗をにじませている。佐介はちょっと意外そうに牛島の顔を見て言った。

「なんだ。出かけるのかい？」

「うん。用事を思い出したんでね」牛島は形式的に空を見上げた。「こりゃ一雨来るかな。降るとちょっと困るんだがな」

「仕事がかね？」

「うん。仕事はロケーション先だ。雨が降りそうになったら、奴等は皆そこから引き上げるだろうしな」しかし牛島はそれほど困った口調でもなく、のろのろと佐介の歩調に自分のを合わせてきた。「クリさんはどこに行くんだい？」

「デパート」

「じゃおれもデパートに行こう。なんだかむしゃくしゃするんだ」牛島は肩を佐介に寄せてきた。並んで歩いていると、肩で押してきて道の端まで相手を押しつけてしまう。そんな歩き方をする男が時々いるが、牛島のもそれであった。「どうもうちの研究所は近頃面白くねえやな。クリさん、お前、面白いかい？」

佐介は首を回して、顎が張って色が黒い、ちょっと下駄の形に似た牛島の顔をじっと見た。こんな顔の男の歳はわりに判りにくいものだが、三十五六にはなるのだろう。白川社会研究所にはもう一年近く勤めていて、だから佐介のような見習い所員でなく、れっきとした正式所員だ。いつも女事務員の熊井とふざけてばかりいて、怠けているように見えるが、それでもかげではちゃんと仕事はしているのだろう。もっとも恐喝なんて仕事は、生産的でもなければ労働的でもない、一種のゲームみたいなものだから、しょっちゅうイライラと忙しがっていては成立しないものだ。だからあの古風な建物の二階の連中は、須貝主任を初めとして、いつもごろごろと遊んでいる感じだ。それは面白いとか面白くないとか、そんな言葉で表現する筋合いのものでないように佐介には思われる。そこで彼は黙っていた。牛島はまた右肩をすり寄せてきて、いどむような口調で言った。

「近頃、どうもおかしいとは思わないかい？」

「おかしいと言うと？」

「うちはどこからかねらわれてるぜ。きっと誰からかねらわれているんだ」

「どうしてそれが判るんだね」

「そりゃ判るさ」牛島はあたりを見回してせかせかと早口でささやいた。「そらA金庫の鍵型だって、まんまとやられちゃったじゃねえか。まったくうちの連中は間が抜けているよ」

「だってあんたは先刻、ありゃ粘土の粉じゃない、カビだと――」

「ありゃあ、カビ、じゃなかった」行人とすれちがうたびに牛島は声をとぎらせた［やぶちゃん注：途中でやめること。］。盛り場に近づくにつれて、すこしずつ人通りが多くなってくる。「ありゃカビじゃない。おれも昔鍵型をとる仕事を少々やったことがあるんだ」

「そうかね」佐介もすこし警戒的な気分になって口をきいた。それは行人に対してだけでな

く、そんなことを言い出してきた牛島に対してもだ。「やはりそれは粘土でやるんかね」
「いや、粘土を使うのは素人だ。ヅブの素人（しろうと）だね。粘土じゃどうしても型がずれちゃうんだ。だから専門家は他のものを使用するな」
「たとえば、どんなものを？」
「それはそうと、さっき出て来るとき」と牛島は佐介のその問いをはぐらかした。「階下（した）のソファーに男が一人腰かけてただろう。見たかね」
「見ない」
　佐介はウソをついた。底意の知れない問いには、肯定するより否定する方がまず無難だ。この二毛ヵ月でそのやり方をすっかり佐介は身につけていた。そして佐介は今のところ研究所の男たちとは、いわば触手だけの交際しか保っていない。ところがこの牛島康之は一週間ほど前から、しきりに佐介に近づいてきたがる気配があった。その態度にはなにか企みみたいなものがぼんやりと感じられた。牛島は怪談の語り手みたいに声を押し殺した。
「おれはだな、あいつの顔を、どこかで見たような気がするんだ。あいつはこの一週間、毎日階下に通ってきて、そして長い間ねばっている。知らないか」
「知らないね」
　牛島は自分でしゃべることで、だんだん脅（おび）え、また無理に力んでいるように見えた。ただしそれが牛島の本音（ほんね）なのか演技なのか、まだ佐介には見当がつかなかった。こちらも表情や応答を控え目にする必要があった。
「あいつは土地を売込みに来てるんじゃなかろう。売込みだけなら一週間もかかるわけがないからな。あいつはどうもあそこでおれたちの出入りを見張っているらしい。いや、確かに見張っている」
「それじゃあ警察関係というわけかな」
　歩きながら牛島はぎくりと肩を動かした。肩を接しているので、その動きはすぐに佐介につたわってきた。佐介は肩を引いた。
「いや、刑事か何か、今のところ判らんが、しかしとにかく、あいつはおれたちの味方じゃ絶対にない。あの眼は、やはり敵の眼だ。これは間違いないよ。用心しなくちゃ」
　やがて家並の向うに七層の百貨店の建物が見えてきた。うすよごれた梅雨空の色を。バックにして、その壁の色はへんにどぎつい黄色で、一面べたっと濡れているように見えた。牛島の肩にじりじりと押され、とうとうデコボコの舗装路を端まで追い詰められ、佐介ははっと身をひるがえして牛島と入れ替った。すると今度は牛島はあたり前だと言わんばかりに左の肩を寄せてきた。
「そりゃあんたのカンかね」すこし経って佐介が訊ねた。
「論理的なものじゃないらしいね」
　牛島はむっとしたように頬をふくらませて佐介を見た。
「カンだって、ばかにしなさんなよ。おれはお前さんより五つ六つ年長だし、つまりお前さんよりたくさん、ずっとたくさん経験をつんで来たわけだぜ。終戦後だって、おれはいろん

な仕事をしてきたんだ。しかしてへんでもドジを踏んだことはねえよ。あぶなくなりそうになると、いち早くおれは逃げ出してしまうんだ。それがおれのやり方だ。残った連中が皆ひっくくられたりペシャンコになってるのに、おれだけは悠々と次の仕事をやっているという寸法さ。君子あやうきに近寄らず、というのがおれのモットーだ。判るかね。いいか、おれはお前さんに教えてやっているつもりだよ」

「ふん」佐介は口の中で言った。「梁上（りょうじょう）の君子かな」

「おれは戦争中、船に乗っていた」牛島の声はさっきほど沈痛でなく、いくらか浮き浮きしてきた。「ネズミという動物は実にカンのいいやつで、この航海で船が沈没すると思えば、皆波止場にどんどん逃げ出して行きゃがるんだ。実に大したもんだよ。もっともあまりカンが働き過ぎて、沈まない船から逃げ出すこともあったがね。ある時おれが乗っている船艙（せんそう）にネズミが一匹もいなくなったことがあった。いつもの航海とちがって、どうも船室に寝ててもガリガリと音がしない。前の寄港地で全部上陸したらしいんだな。こりゃ大変だ、本船は沈むに違いねえ。そう思って、もう船長以下総員びくびくものよ。今日沈むか、明日沈むかと、おれも実は半分観念してたんだが、さしたることもなく、無事船は次の港に入ったな。で、その日は総員上陸して、盛大に祝杯を上げたよ。ええと、おれは何の話をしてたんだったっけ」

「カンの話」

「ああ、そうだ。つまりおれは、そのネズミなんだ」

道ばたの電信柱のかげに、子供が一人立っていた。子供はへんな顔をしていた。頬っぺたをいっぱいにふくらませ、そして身体全部が緊張していた。こみ上げてくる笑いをこらえている風（ふう）にも見えた。すこし向うの塵箱から、やせおとろえた白犬がゆっくりと子供の方に歩いてくる。その子供の口から瞬間水がほとばしって、白犬の耳から顔にかかった。白犬は大げさな啼（な）き声で飛びのき、濡れた顔をぶるっとふるって、路地の中に一目散に逃げて行った。子供は二人の顔を見上げながら、満足そうに歯を見せてわらった。

「おじさん。おれ、犬に、水をかけてやった！」

その呼びかけを無視して、二人はのろのろと子供のそばを通過した。佐介は頬にうす笑いをうかべていたし、牛島は顔をややあおむけて顎（あご）をつき出していた。十米ほど過ぎて佐介が言った。

「あんたがネズミだということは判ったが、すると——」

「ネズミはネズミでも」と牛島が口をはさんだ。「ただのネズミじゃねえと言って貰いたいね。これでもおれはわりかた自尊心が強い方なんだ」

「あんたがただのネズミではないとして」佐介は面倒くさそうに復唱した。「そうすれば白川研究所は沈没船というわけかな」

「はっきり沈没したわけじゃないが、遠からず沈没するというきざしがあるな。お前さんが入所した頃から、研究所も急速に下り坂になってきた」

「そんな言い方だと、下り坂はまるで僕が原因のように聞えるね」

「うん。それは偶然の一致だろう、とおれは思ってるんだがね」そして牛島は横目でじろりと佐介を見た。「どうもあれ以来、皆の仕事の成績が上らなくなってきたな。半年がかりでかかっていた相手に自殺されたり、暗闇で誰かにひっぱたかれたり、脅かしに行って逆に脅されて帰ってきたりさ。なっちゃねえや。『この世に弱味なき人間なし』か。『相手のすべての退路を絶て』だってさ。まったく笑わせるよ。うかうかしてるとこちらの退路の方が絶たれてしまうぜ。なあ」

「ああ、そう言えば、僕のところにも今日手紙が来てたな」

佐介は内ポケットから無造作に二つ折りの封筒をつまみ出した。牛島はびくりとして立ち止り、封筒を受取ってあたりを見回した。佐介も立ち止った。

「見てもいいのかい？」

「いいんだよ」

二人は道の端に寄り、電柱のかげに向き合って立った。牛島は便箋をひろげ、眼をぐるぐる動かして、急がしく文面を読み終えた。ふたたび周囲をぎろりと見回して、封筒を佐介のポケットにそっとつっこんだ。その秘密めかした動作は、もし誰かが見ていたとすれば、かえって不審の念を抱かせたにちがいない。

「こういう手紙が来たらだな」少し経って牛島はもものしく訓戒した。「すぐ報告しなくちゃ駄目じゃないか。こちらにも都合があるんだ。しかしまさか、これがアリバイというわけじゃなかろうな」

「どういう意味だね、それは」

「いや」ちょっと狼狽の色を走らせ、そしてわざとらしく肩をゆすって牛島は歩き出した。

「それで、この脅迫状、どこから来たのか、アテがあるのかね？」

「ないね。でも、大したことじゃなかろう」

「いや、いや、そこがお前さんの若いところさ。そういうことを放って置くと、ことによっては大変なことになる。小さな傷でも放って置くと、そこからバイキンが入るようなものだ」

「バイキン」佐介は短くわらった。「バイキンはむしろ僕らの方だろう」

「クリさん。お前の前任者だってそうだぜ。ヘビという綽名（あだな）があったほど腕っこきだったが、脅迫状を無視したばかりに、ある晩、京王線明大前のホームからまっさかさまに落ち、頭の鉢が割れて死んじまったんだ。だからおれたちも一同参考人として警察に呼ばれた。おれたちは口をそろえて、やっこさんは近頃イライラして神経衰弱気味でした、と述べ立てたんだな。そこでとうとうヘビさんは自殺ということになった。なんのヘビさんが自殺するような男かよ。誰かに突き落されたにきまってらあね。これが他殺ということになれば、サツじゃあ全力をあげて犯人を探し出すだろうさ。そうすりゃどうなる。犯人が自白すりゃ、ついでにおれたちの仕事の内容まで全部ばれちまうじゃないか。だからさ、お前さんもそんな手紙をかろがろしく持ち回っちゃいけねえんだ。もし誰かにうしろから不意にぐさりとやられたらどうする。お前の死体のポケットから、その手紙が発見されるだろう。するとお前さんは自分が死ぬという迷惑だけでなく、手紙を発見されることによっておれた

ちにも大迷惑をかけるわけだぜ。判ったかい。くれぐれも注意をしてくれ」
「うん。判った」佐介は素直に言った。
「それにだな」牛島は自分を制するように声を低くした。「それでヘビさんは死んでどうなったと思う。おれは告別式に行ったんだ。告別式なんていうセンチメンタルなものは大嫌いなんだが、とにかくおれは行った。杉並区東田町の奥まった小さな家だ。二間か三間しかないその古家に、未亡人と、小学校三年生を頭に五人の子供がいた。家財道具もあまりない。ヘビさんは腕ききだったから、相当な歩合も入ってた筈だが、なにしろ大した酒好きの遊び好きだったからな。それに自分が直ぐ死ぬとは考えないから、ろくに貯蓄もしなかったんだろう。その日は雨がしとしと降っていて、貧乏たらしい告別式だったよ。横死したからって、白川研究所から見舞金も出なきゃ退職金も出ないのだ。それも仕方がない。雇傭（こよう）契約がそうなっているんだから。ヘビさんみたいに業務上で死んでも、びた一文出ないんだぜ」
「そんな時みんなで交渉してみたらどんなもんかな」
「お前さん。さっき、おれたちはバイキンだと言ったな」牛島は唇を曲げて笑った。「バイキンというやつは、原則的に群居はするが、団結はしないものなんだ。それにお前、所長々々と言うが、白川弥兵衛所長は病気と称して、一度も研究所に出て来ねえだろ。おれだってまだ一ぺんも所長の顔を見たことがねえんだ」
「僕だって」
　勤め始めて日が浅いし、それに一日おきのことだから、佐介にはまだ白川研究所の機構がよく呑みこめない。見習い所員として、須貝主任の手を経て資料や材料を与えられ、そして指示通りの行動をするだけだ。いろんな資料や材料がどんな具合にして集められるのか、ながらく病気だという白川所長から須貝主任にどんな連絡方法がとられているのか、佐介はほとんど関知しない。研究所には佐介をふくめた定員の他に、臨時的な連絡員や情報売込みの男、その他得体の知れない男女が随時出入りする。ここに勤め始めて以来、同業者や同業の会社が東京には意外に多いことを、佐介は知った。しかし白川研究所の特徴は、他の同業団体とちがって、会社などを相手にしない。つけまわす対象は個人だけだ。会社相手の恐喝は、同業者間の競争がはげしいし、それによほど巧妙な戦法と優秀なメンバーを具えていないと、たちまち会社側からはねかえされてしまう。個人相手というならば、白川研究所程度の弱体団体でもけっこう運営出来るのだ。しかも個人の方が自らの秘密を守ることが固いから、したがって警察に探知される率がすくないわけだ。それなのに近頃の研究所の成績は、牛島の説明によると、ガタ落ちだという。佐介にしても入所以来、成功した事件と言えば、今朝の菅医師の件をふくめて二件しかない。菅医師のが二万円、その前のが一万二千円、合わせて三万二千円だ。見習い期間中の歩合は一割というキメで、彼が今までに取得した歩合金は、計算してみると三千二百円に過ぎないのだ。
「あまりいい商売じゃないな」
　街はざわめいていた。広告塔の放送やラジオのひびき、自動車の警笛、その他のあらゆる

雑音が、それらが全部ひっくるまってひとつの立体的な音響になるのではなく、ばらばらに千切れたと思うと不規則につながり、十文字に重なっては折れ曲り、消えたと思うと別の音がかぶさってくる。そんなでたらめな音の動きと同じく、街を歩く人々は皆ばらばらで、肩をぶっつけ合ったり、押されて歩道をはみ出たり、ある種の虫の集団のように、全体としてはほとんど無意志な動き方をしていた。店々は乱雑な色彩でかざり立て、道ばたでは安物のハンドバッグを若者が大声上げて売りあおり、また中年の男が水を張った金だらいを前にして、セルロイドの小舟をうかべて売っていた。小舟は尻にとりつけた樟脳（しょうのう）の力によって、水面を自在にスイスイと動いている。雑踏の中にまぎれこんでから、牛島はしだいに無口になってきた。無口になるだけでなく、眼付きも少しずつするどくなってきたようだ。悪党であるためには、まず悪党らしくあらねばならぬ。その信条を実行しているらしかったが、それにしてもこんな巷（ちまた）の人ごみの中では、二人の格好や身のこなしは妙に田舎じみて見えた。あの古びた建物のある一郭では、あんなにもピッタリしていたのに。

「うん」

牛島はあいまいにうなずいて見せた。しかし、あまりいい商売でないのは何か、二人の考えていることはお互いに食い違っていた。

「どこに行くんだね？」

デパートのつるつるした入口にやっと足を踏み入れた時、牛島は額の汗をふきながら、佐介の顔を見て言った。レインコートにむされて、牛島の顔は一面あおぐろく汗に濡れていた。

「書籍部」

「そうか」牛島は視線を宙に浮かせた。「じゃ、おれは屋上にでも上ってみるかな。久しく高いところへ上ったことがないからな」

「突き落されないようにするんだね」と佐介はまじめな顔で言った。「七階から落ちるとなれば、まずは生命はないだろう」

「今晩、暇あるかね？」牛島は佐介のその言葉を黙殺して言った。「暇だったら、午後六時、駅の西口の改札付近で落ち合わないか。ちょっと相談したいこともあるんだ」

「相談って、僕にかい？」

「うん。そうだよ」しかしその瞬間の牛島の眼は、信頼というよりもむしろつよい疑いと困惑の色にみたされているように見えた。何故ともなく佐介は一歩あとずさりした。

「そうなんだよ。それとも相談には乗れねえと言うか？」

「今晩、僕はうちの近所の連中との会合があるんだ。だから六時は困る」

「何の会合だね？」

「そ、それはあんたと関係ないことだよ」

「もちろん関係ないさ」牛島は粘りつぐように言葉をついだ。「じゃ、午後四時はどうだね。もうロケーション行きはあきらめた。四時までおれはここの屋上で時間をつぶしてるよ。どうだい？」

「四時か」佐介は首を傾けた。「うん。四時ならいいだろう。改札付近だね」

そうだと答えるかわりに牛島は掌（て）を上げ、そして背を向けて大階段の方に歩き出した。佐介はエレベーターの方角に歩を移しながら、その後ろ姿にしばらく眼をとめていた。透明な雨衣につつまれた牛島の格好は、ちょっとセロファンに包まれたお歳暮（せいぼ）の鮭（さけ）かなにかを連想させた。職業からくる孤独感のようなものが、その後ろ姿にただよっている。（あの男、屋上まで階段をトコトコ登って行くつもりかな？）佐介は鉄扉の前に立ちエレベーターを待ちながら考えた。（屋上に別に用事はないから、それで足で登るというわけかな。理屈にあってるような、あってないような――）満員のエレベーターは佐介の身体を三階まで運んだ。

書籍売場は三階のすみにあった。佐介はあれこれ探して、ミッキー・スピレインの『裁くのは俺だ』という探偵小説を買った。自分が読むつもりではない。さっき『殺人準備完了』の犯人の名をばらしたばかりに、熊井の激怒を買い、代償として別の一冊を買って贈ることを約束させられたのだ。『裁くのは俺だ』を包装している女店員に佐介は声をかけた。

「それには、ノシをつけて呉れませんか」

「ノシ？」

「ええ。ノシ。小さなものでもいい。贈り物にするんだから」

女店員は妙な表情をつくって佐介を見、そして本を持って向うに行ってしまった。ずらずら並んだ本の背にぼんやりと眼をさらしながら、佐介は犯人をばらした瞬間の感じを反芻（はんすう）していた。腕に貼りついた大きな絆創膏（ばんそうこう）を一気にひっぱがす快感、そんなものがその瞬間にはあったのだ。（しかしその代償として百五十円はすこし高いな）あのハムのような顔をした熊井は、佐介にある種の感情をもって対している。たんなる好意とはちがう、もっとべたついたお節介のやり方で、ハムは佐介にまつわりついてくるのだ。佐介に対して優越感みたいなものも感じているらしい。ハムは白川研究所に勤め始めて、五ヵ月になる。佐介よりも三ヵ月先任になるわけだ。仕事と言えば『研究所報』を刷ったり、使いに出たり、そんな雑用ばかりだが、研究所全体の仕事に直接関係はなくても、間接に片棒かついでいることは否めない。（なにしろ他人の幸福や秘密をゆすぶることによって生きようと言うんだからな）悪というものをたくさん積み込んで航行する大きな船、佐介は瞼（まぶた）の裡（うち）にそんなものを思い浮べた。その船からのおこぼれや排出物を追って、眼の色をかえて泳いでいる魚の群。不潔なものをいちはやく嗅ぎあて、むらがりとまるやくざな蠅。蠅の舌なめずり――。

［やぶちゃん注：本章で初めて舞台が「東京」であることが示される。「杉並区東田町」とも出るが、ここは昭和一七（一九三二）に町名が成立し、昭和四四（一九六九）年に廃止されて、現在は「梅里二」及び「成田東一」と同「三」から「五」が当該する。この付近である（グーグル・マップ・データ）。白河研究所から徒歩で行けるところに「七層の百貨店」があり、その「壁の色はへんにどぎつい黄色」とあるところからロケーションが特定出来るはずだが、私は生憎、東京には疎い。識者の御教授を乞うものである。

「ミッキー・スピレインの『裁くのは俺だ』」アメリカの小説家でハードボイルド探偵小説を得意とした“ミッキー”・フランク・モリスン・スピレイン（Frank Morrison "Mickey" Spillane　一九一八年〜二〇〇六年）の「裁くのは俺だ」（*I, the Jury*）はスピレインの代表作であり、私立探偵マイク・ハマーを主人公とする「マイク・ハマー」シリーズの第一作で、金に困っていたスピレインが一九四七年に出版社に自ら原稿を持って売り込み、出版されたデビュー作でもある。邦訳は中田耕治訳で早川書房から単行本で、本「砂時計」発表の前年の昭和二八（一九五三）年に刊行されている。」

5

午後一時二十分。

白川研究所主任格の須貝は、二階の窓ぎわに椅子を据え、それにまたがって道路をぼんやりと見おろしていた。嘱託名義の玉虫老人は自席で、小さな歯ブラシとコップの水で、外した入れ歯の掃除に専念している。入れ歯は老人の顔かたちからするとやや大き目に見えた。その入れ歯の人造歯ぐきは、肉色というよりも毒々しい代緒色（たいしゃいろ）で、須貝は時々横目でそれをにらみながら、いまいましげに、舌打ちをした。この玉虫老人の目課である入れ歯掃除を、須貝主任は好んでいなかった。（なにも勤務先で入れ歯掃除をしなくてもいいではないか）老人の机上のコップの水は、入れ歯の残滓（ざんし）でうす濁りしていた。女事務員の熊井はこの部屋にいなかった。部屋にいるのは須貝と玉虫だけであった。

窓から見おろす五間道路は、やはり舗装ががたがたで、剝（は）げたり穴があいたりしていた。かなたの電信柱のわきにリヤカーが乱雑にならべ立ててある。そこらあたりに栗山佐介の姿が見えた。佐介は鞄を前に両腕で抱くようにして、ゆっくりゆっくりこちらへ近づいてくる。（ああ、やっと戻って来たな。それにしてもあの鞄の持ちかたはどうだ。まるで蟹（かに）のフンドシにそっくりじゃないか）須貝は舌打ちをするかわりに、歯の奥をチュウと吸った。（しかし、どうもあいつは得体の知れないところがあるな。一体あいつは何を考えてやがるんだろう）そして須貝は立ち上り、椅子をそこらにがたがたと片づけ、机の間をすりぬけるようにして自席へ戻ってきた。やがて玉虫老人は入れ歯掃除を完了し、口中にコクンと挿入した。こけていた頬が元通りふくらんで、老人は十歳ばかり若返った。コップの水を捨てに階下に降りる老人と、その時下からのぼってきた佐介とは、狭いリノリュームの階段でぶっつかった。

「た、だ、い、ま」

佐介はそう声には出さず、口だけその形にして見せた。どうせ玉虫老人は耳が遠いのだから、声を出すだけ損だからであった。そして二人は、あやうくコップの水をこぼしそうになりながら、窮屈にすれちがった。佐介はそのまま重い足をはげますようにして、とんとんと階段をかけ上り、研守所に入ってきた。今度は声を出して言った。

「ただいま」

「やあ」須貝は何食わぬ顔で、机の上に両脚を投げ出して、回転椅子の背に安楽そうに頭をもたせていた。靴はぬいでいるので、派手な色柄の靴下が『司法研究』の上に乗っかっている。この研究所の男たちの中で、須貝はもっとも年長のくせに派手好きで、身だしなみも一番よかった。

「ねえ、君。その鞄の持ち方だけは止めたがいいね」

「なぜですか」佐介は丸抱きにした鞄を自分の机に放った。

「なぜかというと、そんなかかえ方をすると、よっぽど大切なものが、その鞄の中に入っているように見られるのだ。そうだろう?」須貝は机上の靴下の親指をぴょこぴょこと動かした。「どこに行ってたんだね?」

「デパートです」

「うん。デパートは広告攻勢でずいぶん賑わっているだろうな。おかげで中小商店は上ったりだ。誰かと一緒に行ったのかい?」

佐介はあいまいに首を横にふった。そういう質問にはひとまず否定しておく方が安全だからだ。

「何を買ってきたんだね?」須貝は佐介の手にあるものを見た。

「本です」

「ああ、探偵小説か」

須貝は片頬だけでにやりと笑った。その悪党らしい笑い方が須貝にはたいへん得意らしい。須貝にしても牛島にしても、もともとよろしくない職業に従事しているのだか、ことさらすごんだり秘密めかしたりする必要はないのに、時折こんな悪党的ポーズをとりたがるのは何故だろう。それは彼等が本質的には善良であり、お人好しだという証拠なのかも知れない。悪の職業に従事していても、その全部の人間が悪のかたまりというわけではなかろう。人は時に善意をもって悪事をはたらく。

「さっきはずいぶんハム嬢にしめ上げられたな。ムり［やぶちゃん注：ママ。］もないよ。探偵小説なんてものは、人生と同じで、終末に至るまでのたのしみなんだからな。途中を省略して、いきなり一巻の終りをつきつけられちゃあ、誰だって怒るよ」

「そうです」

「僕たちだって、自分が何時頃どういう死に方をするか、五年後に脳溢血で死ぬか、十年後に原爆でやられるか、あるいは一週間後に崖から落っこちてくたばるか、それが判ってしまえば、もう生きていることの意味がなくなってしまう。知らないうちが花なのよ、というわけだな。だから君の行為は、『殺人準備完了』において、ハム嬢の読むことの生命を絶ったというわけだ。残酷な所業というべきだよ。で、何を買って来た。ミッキー・スピレインか?」

佐介はだまって須貝の顔を見た。

「そうか。スピレインか」

卓上の電話のベルが鳴った。須貝は受話器をとり上げた。玉虫老人が歯ブラシをさしたからのコップをぶら下げて、とことこ入って来た。

「僕の前任者のヘビさんという人は」がちゃりと受話器をおろした須貝に佐介は問いかけた。「ホームから突き落されて死んだんですか？」
「そんなことも牛島が話したのか？」須貝は片頬で笑い、満足げに足の親指をピコピコと動かした。「君は今日昼過ぎ、外出した。するとつづいて、牛島も出た。牛島は角のベーカリーで君に追いついた。そこで君らは肩を並べて、デパートまでしきりに話しこみながら歩いたな」
　佐介は無感動な顔付きで聞いている。
「そして君らはデパートの入口のところで別れた。君は昇降機で三階にのぼり、書籍部でスピレインの『裁くのは俺だ』を買い、百五十円を支払った。そうだね？」
「そうです」
「それからまっすぐここに戻ってきたにしては、すこし時間がかかり過ぎた。どこかにちょっと寄り道したな。コーヒーでも飲んだか？」
「コーヒーは飲まなかったですね」そして佐介は鼻を鳴らした。「氷宇治です」
「氷宇治とはまたしゃれたものを！」須貝は気取った声を出した。「一方牛島は階段を一歩々々踏んで、屋上までのぼりつめた。屋上で二十分ばかりあちこちの景色を見回していたが、やがて子供の遊び場に行き、お金を出すとガチャガチャと動く木馬があるだろう。あの子供用のさ。それに大の男の牛島が十円はらってまたがり、年甲斐もなくガッチャガッチャガッチャと揺られた。よっぽど面白かったと見え、また三十円出して、三回分ガッチャガッチャガッチャと揺られた。それから木馬から降りるはずみに、レインコートの裾を釘にひっかけて、かぎ裂（ざ）きをつくった」
「あとをつけたのはハム嬢ですか？」
「そうだ」安楽な姿勢のまま須貝は得意そうに莨（たばこ）に火をつけた。「こんな仕事に今日初めて使ってみたが、なかなかしっかりしているな。電話での報告ぶりも要領を得ていた。あの女は使えるよ。ただし訓練すればの話だがね」
「今日は単に――」やや皮肉な口調で佐介は訊ねた。「訓練だけに使ったんですかね？」
「ふふん」あいまいに須貝は笑った。「どうだい。熊井嬢はどうやら君に気があるらしいな。あんなボーンレスハムみたいな女は、僕の数十年の経験からすると、むちむちと弾力があって、なかなか味がいいもんだよ。君なんか若いから判るまいが、結局女なんてものは、面相より実質だ。実質をねらった方がトクだよ」
　佐介はがさがさと包装をとき、小さなノシを貼りつけた小型本を乱暴にハムの机の上に放った。玉虫老人は小さな帳面をひろげ、それにかぶさるようにして何か書き込んでいる。外国人がやるように人差指を逆に曲げて、須貝がおいでおいでをした。佐介は須貝の卓に近づき、そこらの空いた椅子に腰をおろした。須貝はおもむろに尋開した。
「ヘビが突き落されたとはさっき牛島から聞いたんだね。そうだろう？」
「さて」佐介は小首をかたむけて答えをはぐらかした。
「ごまかしちゃいけないよ」老獪（ろうかい）な眼で須貝は佐介を見た。「さっき君は、僕

にウソをついた。デパートに一人で行ったとウソをついた。ウソをつくことは大変いいことだ。ただしそれは外に対しての話だよ。仲間うちでウソをつくなんて、もっての外だと思わないか。デパートに行くまでの会話に、ヘビの話が出たんだろう？」
「そうです」
「ふん。牛島がヘビの話をしたとすれば、どんな関連においてそんな話が出たか、大体想像がつくな。ふふん」
「やはりヘビさんは突き落されたんですね」
「そりゃ僕にも判らん」須貝の眉はちょっと曇り、声も低くなった。「酔っぱらって誤って落っこちたのか。あのホームにはちゃんとした柵があって、誤って落っこちるわけはないと僕も思う。残るのは、自殺と、他殺だ。警察では自殺となったが、まあ僕には判らないけれども、自殺する原因はなかったと思う。現在の快楽に執着する方の型だったからな。残るのは他殺だ。すると誰がヘビを殺したか。僕に判るのは、ヘビを殺したのは僕でないということだけだ。つまり、僕以外の誰かだな」
　須貝は莨（たばこ）をごしごしともみ消した。
「それで当研究所はヘビ君の後任として君を雇った。たくさんの志望者から君をえらんだのは、別に君の手腕を買ったわけじゃない。面接だけでは手腕のほどは判らんからな。ただ僕は、人間に対する君の考え方が面白かったから、点を入れたんだ。しかし人間観だけでは仕事は出来ない。この研究所に来て、君はいくつ仕事を仕上げた？」
「今朝の菅医師を入れて、二件です」
「たった二件か」須貝はわざとらしく渋面（じゅうめん）をつくった。「もっとも近頃、当研究所の仕事は不活発になっている。惰気満々だ。末期的症状にちかい。だから君だけを責めるわけには行かないが」
「そうです」
「ヘビ君の死後、どうも調子が良くない。研究所内でもいろんな故障が出たのは、君も見た通りだ。二週間ほど前、小型計算器がいつの間にかなくなったが、あの犯人もまだ出て来ない。大損害だ。鴨志田も出張期間を三日も過ぎているのに、まだ関西から戻って来ない。これも何か間違いでもあったんじゃなかろうかと思う。またさっきも、A金庫の鍵型をとられたらしい形跡があった。誰かが殺されたり、何かが盗まれたり、型をとられたり、いろんなことが起きる。それぞれの事件が起るのは、それぞれの犯人がいるからだよ。やる奴がいるから、事件が起きるのだ。どこかに犯人がいる」
「そう。あなた以外にね」
「そうだ。君も時にはいいことを言うな。原則として僕以外の者を、誰一人として信用しない。しないことにしているんだ」須貝は机上から足をひっこめ、回転椅子をギイと鳴らして佐介の方に向き直った。「角のベーカリーからデパートまで、牛島はどんな話をした？」
　佐介は無表情に沈黙していた。二人は顔を見合わせたまま、一分開ほど過ぎた。とうとう須貝が根負けして口を開いた。

「言わないな。ここでは言えないようなことを話し合ったのか」
「いや、何を話し合ったのか、今考えていたところです。どうも近頃記憶力が悪くなって――」
「放射能のせいだとくるんだろう。わるい冗談だ。しかしまあ信用してやろう」須貝は椅子ごと一尺ばかりぐいと佐介に近づいた。「僕は君を当研究所に入れた責任者だ。だから君の身のふり方についても、最後まで責任をとるつもりだから、君も僕を信頼してほしい。判るね」
佐介は表情をくずさず、うなずいた。
「まったく君の顔は埴輪（はにわ）の顔にそっくりだな。もすこし表情が動かせんのか」
「動かせるけれども、動かさないのです」
「なぜ？」
「その方がトクだし、それに僕もあなたと同じく、僕以外のものを原則的に――」
「信用しないか」須貝は今度は両頬でにやにやと笑った。佐介もつられて笑い出しそうになったが自制した。「まあ、それもよろしかろう。若いくせに見事な覚悟だ」
「ああ、そうだ」佐介はすこし大きな声を出した。「道ばたの犬に水をはきかけた子供がいたっけ」
須貝はきょとんとした顔で佐介を見た。そして黒板の『今週の標語』の方を顎でしゃくった。
「そら、『この世に弱味なき人間なし』だ。僕にだって弱味はある。僕も弱いあわれな人間だ。そして弱味があるのは個人だけでなく、個人の集まり、団体、機関、みんなそれぞれ弱味を蔵しているな、当研究所も例外でない。ところで弱味というやつは、こちらが攻勢に出ている場合は割に気にならないが、守勢になってくるとひしひしと身にしみてくる。自分がまるで弱味だらけになったような気がしてくるものだ」
そして須貝は警戒するように四周（あたり）を見回した。玉虫老人はさっきと同じ姿勢で手帳にかぶさっている。須貝は視線を佐介に戻して声をひそめた。
「一昨日書面で連絡があったが、白川所長の病気がまた悪くなった。もう長いことはなかろうと言うんだ。しかしまだこれは秘密だよ。誰にも言っちゃいけない」
「所長に万一のことがあると、ここはどうなるんです」
「そりゃもちろん解散だろうな」
その時階段をこつこつのぼってくる足音がした。二人は入口の方を見た。
「ハムかな？」
若い電報配達手が入口に姿をあらわした。佐介は椅子をはなれ、四つ折りの電報を受取った。研究所宛てになっている。須貝はそれを受取ってひらいた。須貝の眼は急に緊張して、同じところを三度四度いそがしく往復した。
「ふん」
須貝は押しつぶされたような奇妙な表情になり、それを佐介に見せようか見せまいかと

ためらった揚句、結局手渡した。佐介は電文を読んだ。

マツイマコトハジサツデナイゾ
ワタシガチヤントシツテイル

このふざけたような電文を、佐介は二度くり返して低く音読した。
「これはなんですか」佐介は眼をぱちぱちさせながら、電報を須貝に戻した。「マツイマコトというのは？」
「ヘビ君の本名だ」須貝はうたがわしそうな眼で佐介を見た。「君は自分の前任者の名前も知らないのか」
「知らないですね。関係ないから」
「一体どいつがこんな電報をよこしゃがったんだろう」[やぶちゃん注：「よこしゃがったんだろう」はママ。普通なら、「よこしやがったんだろう」である。]
須貝はまた電文を読み直し、ひっくりかえして裏をしらべ、今度は窓の方にかざして透して見た。さしたる発見もなかったらしく、いきなりくしゃくしゃに丸めると、それを大型の灰皿の上に乗せた。佐介がマッチをすった。
「ヘビ君のことが話題に出たかと思ったら、もうこんな電報が到来した」須貝は若干恐怖にあおざめているようであった。「だから兇（わる）い昔話はしちゃいけないんだ。僕は小さい時よくお婆さんからそう言われた」
くしゃくしゃの電報は灰皿の中でじりじりと煙をふき出し、それからパッと焔になって、やがてくろぐろと燃え尽きた。紙のときの形のままの黒い灰を、須貝は鉄の丸文鎮でおさえつけてコナゴナにした。
「ふん。ふふん」不快さをふりはらうように、須貝は唇を曲げてわらった。「マツイマコトハジサツデナイゾ、か。七七七五の都々逸（どどいつ）調と来やがる。三味線にも乗りゃしねえ。まったく悪質な厭がらせだな。こんなことをやるやつは、素人じゃない。きっと僕たちの同業者だろうな。職業道徳も地におちたもんだ。業者間でお互いの弱味をつくようになっちゃあ、もうおしまいだな」
「同業者だとすると、いずれこれをネタに恐喝に来るでしょう」
「来るかも知れん」須貝は憮然（ぶぜん）として腕を組んだ。「内憂外患こもごもいたるか。そろそろ第二会社の設計も必要となってきたな」
「第二会社？」
「そうだ」須貝は腕を解いて、背後のA金庫の扉をパンパンと叩いた。「所長がくたばっても、この金庫の中の資料は、まだまだ活用出来る。むざむざと散佚（さんいつ）させるのはもったいない話だ。ところがこれを活用出来るのは、僕たちだけだろう」
「そうです」
「須貝社会研究所、か」須貝は電報のことはすっかり忘れ果てたように、天井を向いて酔っ

たように瞳をかがやかせた。その表情は少年のように純真で無邪気であった。「ここの資料をそっくり無償でいただき、須貝研究所というのを設立する。場所もここでは困るな。もすこし都心に進出して、盛大なかまえとする。いや、あまり盛大にやると、目をつけられるおそれがあるから、やはりこぢんまりと行くか。所長用の自家用車、所員用の自動車、二台は欲しいもんだな。うん、いや、所員用には自転車がよかろう。自転車でたくさんだ。自転車は足の運動にもなるし」

「そうですな」

「なんだ」須員は夢からさめたように視線を佐介に戻した。「あ、君か。そうだ。さっき言ったように、君を当所に入れた責任者は僕だ。だから君の身のふり方についても、いろいろと考えている。どうだね。もし須貝研究所が設立されることになったら、君も所員にならないか。やはり少しでも気心が知れている方が、僕の方も都合がいいからな」

佐介は黙って窓の方を眺めていた。壁の鳩時計から鳩が飛び出して、二声啼いた。二時だ。するととたんに玉虫老人がごそごそとあたりを片づけ、帰り仕度を始めた。老人はたいへん耳が遠い筈だが、時計の音だけは、はっきりと聞き分けるらしい。老人の勤務時間は午前十時から午後二時までということになっているのだ。道をはさんだかなたの屋根瓦（がわら）すれすれに、白い腹をこすりつけるようにしてつばめが飛ぶ。佐介の沈黙を須貝は拒否とったらしく、すこし猫撫で声になった。

「いや。君の将来は僕が保証するよ。君はまだ二件しか成績を上げていない、それは目下の悪条件のためだと思う。須貝研究川においては、不自由はさせない」

「やはり」小さな虫でも眺める眼付きで佐介は言った。

「そこでも見習い所員ですか」

「うん、いや」須貝はちょっと狼狽した。「ええ。君をだな、今見習い扱いにしているのは、これはつまり僕の親心だよ。何故かというと、今研究所は君も知っている通り、あまりいい状態にない。そんなことはないと思うが、もし万一、総員サツにあげられた場合にはだね、所員でも見習いの方だと、罪がぐっと軽くなる。おそらく無罪だね。将来ある君の履歴にキズがついては気の毒だから、そこで見習いということにしてあるんだ。須貝研究所ではもちろん見習いでなく正式所員だ。勤務も隔日でなく、月火水木、いや月月火水木金金だ。猛勤務だぞ、君だって隔日勤務じゃはり合いがなかろう。月、水、金とここに勤め、あとの火、木、土は何をしているんだね。うちで寝ころがってでもいるのかい？」

「ほかの所で働いています」

「へえ、よくそんなハンパな仕事が都合よく見つかるもんだなあ。会社か？」

「いえ。都内某団体の書記です」

「へえ。都内某団体とは大きく出たな」須貝はきらりと眼を光らせた。「まさかうちと同業の団体じゃあるまいな」

「ちがいますよ」

「そうか。新研究所が出来たら、そこは辞めてしまうんだな。ああ、そうだ。ハム嬢も入れ

てやろう。あれは使えそうだ」
「へえ。お先にごめんなさい」
帰り仕度をととのえた玉虫老人が、ぺこんと頭を下げて部屋を出て行った。それを見送りながら、佐介は訊（たず）ねた。
「牛島君は？」
「ありゃあダメだ」須貝は顔をしかめて掌をひらひらと振った。もうすっかり佐介に心を許したような態度だが、それが須貝の本音か演技かは、まだ佐介にはわからない。「あいつはだね、腕はあるが、惜しいかな徳がない。平気で仲間を裏切るやつだ。僕はせんからあいつのことをそう思っている」
そして須貝はものものしく周囲に気をくばり、声を低めて言った。
「あいつ、先刻、鍵型をとったのは俺じゃねえと、妙な弁解のしかたをしおった。あれが第一怪しい。とらないのなら、あらためて弁解する必要はないじゃないか。ひょっとしたら、鍵型をとったのは、あいつかも知れん。いや、あいつに違いない。だからごまかすために、粘土粉をカビだなんぞと言いくるめたんだな。もうなにか蠢動（しゅうどう）し始めているぞ」
須貝は回転椅子の上で姿勢を正し、無理にいかめしい表情をつくった。
「君に新しい任務を与える。いいか。牛島康之の身辺ならびに言動に対する監視。もちろんこれは秘密裡に行い、相手をして感づかしめてはならぬ。他の受持ちの仕事に出来るだけ優先して、これにかかって貰いたいな。ええと、この仕事をL十三号と名付けることにする」
「歩合は？」と佐介は即座に反問した。
須貝がそれに答えようとした時、足音が階段をこつこつとのぼってきたので、二人は会話をやめて同時にそちらを見た。大きなつつみを重そうにかかえたハムが入口に姿をあらわした。
「なあんだ。ハム嬢か」気技けがしたように須貝が言った。「何だい。手にかかえたものは？」
「卓上ピアノよ」ハムはつつみを自分の席においた。そして机上の『裁くのは俺だ』をとり上げた。「まあ、嬉しい。ミッキー・スピレインね。前から読みたい読みたいと思ってたのよ。まあ、ちっちゃい可愛いノシまでつけて」
ハムは手にした本に頬ずりしながら、佐介の方を見て**しな**をつくった。須貝がにがにがしそうに口を出した。
「もう栗山君には言っちまったよ。芝居はストップ」
「まあ、ひどい」ハムは**しな**を中止して口をとがらせた。
「その卓上ピアノはどうしたんだい。牛島はどうした？」
「牛島さんに見つかってしまったのよ」ハムはしょげた顔つきになった。「あれから牛さんが屋上から降り始めたのよ。だからあたしも尾行して行くと、七階から六階、六階から五階と、まるでお上（のぼ）りさんみたいに、一々陳列をぶらぶら見物して歩くのよ」
「牛島らしいや」と須貝が笑った。

「そして五階のピアノ売場の前に立って、大きなグランドピアノを五分間ぐらいにらんでいたの。今考えると、牛さんはもう尾行に気がついていて、ピアノの肌はピカピカしていて、よくうつるでしょう。だからそれを鏡がわりにして、背後の様子を探ってたんじゃないかと思うんだけど」

「そうかも知れんな。あいつも抜け目ないからな」

「あたし、遠くからそれを見張ってたんだけれど、牛さんがピアノ売場からひょいといなくなったの。あたし、びっくりしてさ、すぐそのグランドピアノまで飛んで行ったの。しかし牛さんの姿は見えない。まかれたかなと思って、あちこち見回していると、ピアノの下から手がにゅっと出て、あたしの足首をギュッとつかんだのよ。あたしびっくりして、キャッと飛び上ったわ。牛さんはピアノの下にもぐり込んでかくれてたのよ」

「ピアノの下とは考えたな」

「ごそごそ這い出して来て、怕（こわ）い顔で何しにここにきたんだと聞くから、ピアノ買おうかと思って来たと答えると、お前みたいな女にピアノを買う金がある筈はないと言うの。だから、金がないから、卓上ピアノにするって答えたら、卓上ピアノは玩具売場だと言うでしょう。そしてあたしの腕をつかんで、無理矢理に玩具売場にひっぱって行ったの。だから、あたし、仕方がないから、卓上ピアノをひとつ買ったのよ」

「いくらした？」須貝が心配そうに訊ねた。

「千四百円」ハムは涼しい顔でガサガサと包装紙を剝（む）きながら言った。「もちろんこれは研究所費から出るんでしょうね、仕事の上で買ったんだから」

「どれ、こちらに寄越しな」須貝は渋面をつくって、手を伸ばした。赤塗りの卓上ピアノはニスのにおいをただよわせながら、須貝の机の上に運ばれた。「千四百円とは高いもんだねえ。も少し安いのはなかったのかい」

「五百円ぐらいからあったけれど、そんな安物、いくらなんでも恥かしくって買えやしないわ」

須貝はますます表情を渋くして、白いピアノの鍵のひとつを、中指で不器用にポン、ポンとたたいた。その音は佐介にふと鳩時計の鳩の音を連想させた。佐介は何気なく言った。

「玉虫老人は、あの人は耳が遠いということですが、実はよく聞えるんじゃないかしら」

須貝はぎょっと眼を見開いて、佐介の方を見た。

「なぜ？」

「いや、何となくそういう感じがしたんです」

［やぶちゃん注：「放射能のせい」本篇は昭和二九（一九五四）年八月号から開始しているが、その五ヶ月前の同年三月一日、当時アメリカの信託統治領であったビキニ環礁でのアメリカ軍によって水爆実験「キャッスル作戦」(Operation Castle) の一つブラボー実験（Castle Bravo）が行われた。当時の和歌山県東牟婁郡古座町（現在の串本町）のカツオ漁船第五福龍丸はアメリカが設定した危険水域外で操業していたにも拘わらず、多量の放射性降下物（「死の灰」）を浴び、無線長だった久保山愛吉氏は約半年後の本篇始めの初出の翌月九月の

二十三日に満四十歳で亡くなった。この時、船員とともに被曝したマグロが築地市場の地下三メートルに埋められたが、実は当時の厚生省が認めた被災船は第五福龍丸以外に実に八百五十六隻もあり（これも以外にもあった可能性が濃厚であるが、アメリカを憚って被害の実態は今も実はよくわかっていないのである）、全国で捨てられたマグロは四百五十七トンにも及んだという。まさに当時は築地界隈だけでなく、全国的に「被曝マグロ」の風評被害が起きる大騒動となっていたのである。本篇初出の前月である同年七月三日発行の『別冊文藝春秋』第四十号記念特別号に乗った山之口貘の詩「鮪に鰯」（私の電子化）を読まれよ。

「須貝研究所というのを設立する。場所もここでは困るな。もすこし都心に進出して、盛大なかまえとする」とあるということは、白川研究所は都心にはないということが判る。ウィキの「都心」によれば、昭和三三（一九五八）年までは『千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区を『都心６区』と呼んだ』とある。取り敢えずそれに従うと、その辺縁の豊島区・荒川区・墨田区・江東区・品川区・目黒区・渋谷区・中野区となる。単なる印象であるが渋谷区・目黒区・品川区辺りの可能性が強いか。]

6

人間は何時なんどき、どういう急激な病気で、あるいはどういう不慮な事故で、死んでしまうか判らないものだ。判らないからこそ人間は安んじて生きている。しかし、じりじりと長い時間をかけて死んで行くのと、ぽっくりと頓死するのと、どちらが当人にとって幸福か。私などは今のところ、どちらかと言えば、後者の方が望ましいような気がするが、しかしこういうことはやはり当面して見ないと判らない。それでは、残される者にとってはどちらが望ましいか、これもその時の条件や環境、それらの復雑な組み合わせによって異なるのだろう。今から十数年も前のことになるが、東京の某郊外にある山川病院長山川医学博士は、友人に誘われて、生れて初めて海釣りに行き、一尺ほどの魚をやっと釣り上げたとたん、心臓麻痺をおこして舟中で急死した。六十三になっても、初めて魚を釣り上げたことは、相当にショックだったにちがいない。とかく初めての経験というやつは、新鮮で快適な半面に、非常におそろしいものを含んでいる。

山川博士は腕は確かで人望もあり、病院も割に繁昌していたが、博士の派手好きと浪費癖のために、財産は遺族にほとんど残らなかったそうだ。二階建ての大きな病院も没後人手に渡ってしまった。そしてそれは病院ではなくなってたちまち養老院に変身した。現在も養老院で、正式には『夕陽（せきよう）養老院』と呼ばれている。老人だから夕陽というわけなのだろう。ここに入っている老人は、開院以来爺さんばかりである。婆さんは入所する資格がない。どうして婆さんを入れないか。婆さんだと長生きをする。統計上そうなっている。長生きをされると回転率が悪くなるからだ、という噂も一部には流布されている。院内の爺さんたちも大体そう思っているらしい。夕陽養老院は私立の養老院だから、もちろん無料ではない。入所の当初に金を払わねばならぬ。戦前にはその額が八百円だったが、戦後は物価

の昂騰（こうとう）につれて、現在では十万円にまではね上った。十万円さえ払い込めば、あとは死ぬまでただで世話をしてくれるわけだ。そして入所の資格年齢は六十歳以上ということになっている。資格年齢を下げると、その分だけ生きられてかなわないからだろう。

現在の夕陽養老院長は黒須玄一と言って、身の丈六尺近くもある壮漢だ。歳は四十五六だが、周囲の房毛だけのこして、てっぺんはすっかり禿げ上っている。色は浅黒く、眉毛がふとぶとと濃い。それに三寸ぐらいの長さの剛（こわ）い顎鬚（あごひげ）をたくわえている。眼光もけいけいとして、人を射すくめるような光を放つ。射すくめると言うより、咎めだてをするような、と言った方がいいかも知れない。いつも紺地の詰襟服を好んで着用し、院内をのっしのっしと巡視して回る。短軀にして倭小（わいしょう）なのが多い爺さんたちの中で、黒須院長の巨軀は大へんに目立つのだ。そして黒須院長は自らのことを『信念の人』と呼んでいる。時にはそれに『鉄の如き』という形容詞をつけることもある。そういう心臓ぶりが、院内のある種の爺さんたちの趣味にはなはだしく合わないのである。この逞（たくま）しい黒須玄一院長は、しかしこの養老院の経営者ではない。つまり彼は雇われ院長に過ぎないのだ。数名から成りたつ経営者団によって、一年ほど前黒須玄一はここの院長に任命された。そしてこの一年間彼は院内の改革（爺さんたちにとっては迷惑な話であったが）に努力して、かなりの成功をおさめた。そこで経営者たちからの覚えもめでたく、月給も初めにくらべると二倍になったという話だ。そんなことにおいても院長をこころよく思っていない向きが確かにある。黒須院長が咎めだてをするような眼相になったのも、そこに一因があるらしいのだ。

今、夕陽養老院に収容されている爺さんの総数は九十九名である。九十九名が二階建てコの字型の建物の各部屋に、それぞれ分散して入っている。住居は一人あたり最低三畳を確保するという約束だったが、黒須院長が就任以来、何とかかとか口実をつけて、一人あたりを二畳に減らしてしまった。すなわち六畳間には三人というわけだ。収容人員も六十六名から九十九名に増加した。二畳というと一坪という勘定になるが、人一人が生きて行くのにたった一坪とは、いくらなんでも狭過ぎるだろう。爺さんたちが不平を言うのもムリはない。

爺さんたちは皆、当初にまとまった金額を納入する能力を持っていたわけだから、世の並の放浪者や極貧者とはすこし違う。子供夫婦とそりが合わないとか、世の荒波にもみくちゃにされて生きて行くのがイヤになったとか、理由はそれぞれあるが、最後の平穏な生活を求めて入所してきたことにおいては、皆一致している。その平穏な生活の形式を、白蟻が材木をすこしずつ食い破るように、黒須院長が一年にわたってじりじりと食い破ってきたわけだ。爺さんたちがそれで黙っておさまる筈がない。

こうして梅雨に入る前後から、爺さんたちの動静はすこしずつざわめき始め、黒須院長の眼はますますたけだけしい光を増して来た。そしてニラ爺の退院問題をきっかけとして、在院者と院長との衝突が始まったのだ。

午後一時二十分。

黒須院長は詰襟服のボタンをきちんとかけ、顎鬚をしごきながら、正面玄関のバルコニーの上に佇立（ちょりつ）し、空をじっと見上げていた。空の色はまるでポタージュのようにねっとりと重苦しい。今にも雨が降（お）ちて来そうだ。黒須院長はかねてからこのバルコニーに佇（た）って、悠然と空を眺めるのが大好きであった。こういう姿勢をとると、いかにも『信念の人』らしく見える。その点において彼はこの場所を愛好していた。しかし今日は単にポーズをとるためにここに立っているのでもなければ、空模様を心配しているのでもなかった。彼は空を眺めながら、ニラ爺の処分のことについてあれこれと考えていたのだ。午前中黒須院長は威儀を正し、街の自転車屋に出かけ、リヤカーの売値をたしかめてきた。自転車屋の主の言によると、新品で一台一万円から一万二千円ぐらいするという。それは黒須院長の予想より五割がた高かった。

「うん」やがて顎鬚をぐいとしごき、黒須院長は決然たる口調でひとりごとを言った。院長はバルコニーに出ると、とかくひとりごとを言う癖があった。「これはやっぱり韮山（にらやま）に負担させよう。もともとこれはあいつの過失だ。過失を放っておくと癖になる。おいぼれを増長させると全くきりがない。負担をこばめば、もちろん即時退院処分だ！」

黒須院長は眼玉をぎろりと光らせ、空から地上に視線を移した。この建物の前庭は、黒須院長の就任当時は、一面の芝生と花壇で、爺さんたちの好い日向ぼこの場所になっていたが、今は彼の改革方策にしたがって芝は全部引っ剝がされ、掘りくりかえされてすっかり畠になっている。前庭のみならず、構内の空地という空地は残らず畠になってしまった。一千二百坪のこの夕陽養老院は、建物と畠からなっていると言っても過言ではない。トマト、胡瓜（きゅうり）、いんげん、茄子（なす）、さつま芋、ねぎ、さまざまの種類の野菜がところ狭しと生い繁っている。そのあぜに点々と、数名の爺さんがそれぞれの姿勢で、虫をつまんで潰（つぶ）したり、病葉（わくらば）などを摘み切ったり、いろいろと世話をやいている。その姿を今このバルコニーからも眺めることが出来る。もちろんこれは任意の労働でなく、黒須院長が発案した輪番制の強制労働だ。〈適当な労働は長寿の秘訣〉黒須院長は満足げに畠や爺さんたちを見おろしながら、またひとりごとを言った。

「うん。初めてにしては割に良く出来たな。これもひとえに俺の企図が良かったせいだ。だからして、収穫の四分の一は俺が頂戴する権利があるな。いや、四分の一とは控え目すぎる。三分の一と行こう。それにしても、あの韮山爺のやつ！」

太い眉をびくびくと動かして、黒須院長は腹立たしげに舌打ちをした。黒須院長をして舌打ちさせた事件は、数日前のことだ。その日の午後、早実りのトマトを総員労働で採取したところ、予想外の収穫高で、院内消費を差引いてもなおリヤカー一台分が余った。そこで黒須院長はこれを売却することに決定した。ただちに夕陽養老院備品のリヤカーに搭載（とうさい）し、五十円という報酬でこれを行商して回る希望者をつのって見ると、予想に反して誰も希望して出て来ない。報酬が少なすぎると言うのだ。黒須院長は内心腹を立てたが、面に出すわけにも行かず、止むなく今度は七十円に値上げしたところ、やっと韮山爺さんが一歩進み出て来たというわけだ。韮山爺さんは院内ではニラ爺と呼ばれ、年齢も満で七十三歳

で、ここでは古顔の一人に数えられている。頭は禿げて腰も曲り、年齢のせいか頭もすこしぼけていて、とかく珍奇な振舞いが多い。訪ねてくる身よりもなく、おそらく煙草銭かせぎに希望して出たのであろう。黒須院長はちょっと心配して訊（たず）ねてみた。

「大丈夫か？」

「大丈夫でやんす」

ニラ爺はもごもごと口の中でそう発音した。当人が大丈夫だということだし、他の爺にたのめば七十円ではイヤだと言うだろうし、結局ニラ爺行商の件を容認したのだが、それが黒須院長近来の大失敗だったわけだ。

午後三時半、ニラ爺はトマト満載のリヤカーをえいえいと引っぱって、裏門から出発した。そして帰院して来たのは、もう夜中の二時過ぎで、ニラ爺は極度の疲労のために雑巾（ぞうきん）のようにしおたれていた。しかもリヤカーは引かずに手ぶらでだ。あんまり張り切りすぎて、遠くまで行商して歩いたので、ついに道に迷い、それでこんなに遅くなったのだと言う。いろいろ心配して（リヤカーやトマトのことなどを）寝ずに待っていた黒須院長は、半分怒鳴るようにして訊ねた。

「リヤカーはどうしたんだ」

「へえ」ニラ爺の体躯はおそれおののき、一回り小さくなったようであった。「電車の踏切りで、電車と衝突しまして」

「なに？」里一須院長はぎろりと目を剝（む）いた。「衝突だと。衝突と言うのはだな、大体同じ質量のものがぶつかり合うことだ。それを電車とリヤカーが衝突だなぞと――」

「へえ」ニラ爺は面目なさそうにますます小さくなった。

「そいじゃ、はね飛ばされましてん」

「なにい。はね飛ばされたあ？」黒須院長は椅子からすっくと立ち上った。「どの電車線の、どの踏切りだ」

「へえ。Q電鉄です。運転手のやつがカンカンに怒りまして――」

ニラ爺はくどくどと弁解を始めたが、黒須院長はそれにほとんど耳をかさず、動物園の熊のように部屋をどしどしと歩き回ってばかりいた。そして夜が明けるのを待ちかねて早速Q電鉄にかけ合いに行ったが、電鉄側では、当方の手落ちではなくそちらの過失だ、と冷淡につっぱねる。一時間余りもねばってみたが、向うでは頑強にそう主張する。電鉄側には証人がいるらしいが、こちらはニラ爺の言葉だけで、それを裏づけるものが何もないのだ。しかもニラ爺は老齢で頭がぼけているし、正式に争っても勝ち目はなさそうであった。そこで黒須院長はかんかんにふくれて、とりあえず現場に急行した。問題のリヤカーは第十三号踏切りのそばの溝の中に泥まみれになり、横だおしにころがっていた。こわれて使用出来ないことは、さわってみるまでもなく、一目でわかった。

（リヤカーははね飛ばされて、ニラ爺には異状がないかわりに――）バルコニーから地上をにらみ回すようにしながら黒須院長は考えた。（ニラ爺がはね飛ばされて、リヤカーが無事であった方が、どんなに良かっただろう。そうすれば明目にでもニラ爺の後釜（あとがま）

に新入院者が十万円持って入ってくる。今のままじゃリヤカーの損害だけでも一万二千円だ）

そして黒須院長はくるりと回れ右をして、バルコニーにつづく院長室にのっしのっしと歩み入った。こめかみの血管が怒張して青くふくれ上っていた。

（それにあいつらは、リヤカーのことについては毫（ごう）も反省の色は見せず、行商手当の七十円を早く払えと言いやがる。今どきの老人は全くなっておらん。義務のことは忘れて、権利ばかり主張する。なんという嘆かわしいことか！）

あいつらと言うのは、当のニラ爺と、ニラ爺と同室の松爺と滝爺の。ことであった。松爺と滝爺は、同室のニラ爺の窮状に同情して、そして黒須院長にたてつく気になったのだろう。黒須院長は部屋のすみの卓に行き、大やかんからコップに麦茶をなみなみとついだ。なまぬるい麦茶は一気に院長ののどを胃の方に流れ落ちた。濡れた顎鬚を詰襟服の袖口でぬぐいながら、黒須院長はまたひとりごとを言った。

「ひょっとかすると、あいつら、アカじゃなかろうか」

思わず自ら発言した『アカ』という言葉のひびきに、黒須院長はぎょっと脅（おび）えた様子で、おどおどとあたりを見回した。しかしその脅えの色はすぐに顔から消えて、咎めだてするようなたけだけしい光が、ふたたび眼によみがえってきた。黒須院長は院長卓の頑丈な回転椅子にどっかと腰をおろし、宙をにらんでじっと眼を据（す）えた。

このリノリューム張りの院長室は、山川医院時代は診察室だったという話だが、黒須が院長になって以来、彼はいろいろ新しく調度類を購入し、重厚にして威圧的な雰囲気をつくり上げることに成功した。だから院内の爺さんたちは、前の院長時代は気軽に院長室に出入り出来たが、今はお白洲（しらす）に出るみたいでどうも具合が悪い、とこぼす者が多い。黒須院長が購入した調度類は、並外（はず）れて巨大なものばかりなのだ。院長が使用する扇は仕舞用の舞扇だし、卓上の灰皿ときたら直径一尺にちかかった。これら巨大なものの組み合わせが、高圧的な雰囲気をかもし出すのに大いに役立っている。黒須院長はその大型の回転椅子の上で、厚味のある胸をぐいと反らした。

（明日の午後は月例の経営者会議があることだし――）黒須院長は右掌で禿げた顱頂部（ろちょうぶ）をしずかに撫でさすりながら考えた。あたかも経営者たちの気持を撫でおさめるかのように。――院長にこわいものがあるとすれば、すなわちこの経営者会議がそれであった。雇われている関係上、院長はどうしても彼等に頭が上らないわけであった。（それまでにどうしてもリヤカー事件を始末して置かねばならん。俺の黒星となると大変だからなあ）

黒須院長はぬっと立ち上った。そして大戸棚の上から硯箱（すずりばこ）をおろして、また院長卓に戻ってきた。硯箱も大きくて、ちょいとしたスーツケースほどの体積をもっていた。黒須院長は卓上に紙をのべ、おもむろに硯箱のふたをとった。それから眼を閉じてふかぶかと深呼吸をした。筆で字を書く前にそうするのは、院長の少年時代からの習慣だ。その習慣は院長の父親から仕込まれたものであった。だから黒須院長は今でも、眼を閉じて深呼

吸をする度に、あの厳格だった父親のことを思い出す。父親は地方の中学の書道の教師で、不遇の生涯をおくって死んだ。黒須院長は眼を閉じたまま、やや感傷的な声でつぶやいた。

「お父さん。……お父さん」

父親は院長ほど大きな体軀は持っていなかった。むしろ目本人としては小さい部類に属していた。その小男から、どうしてこんな大男が生れたか、院長自身も知らない。父親は教師の故もあって大へん厳格な性格で、院長は少年時代毎朝四時にたたき起され、習字を徹底的にやらされた。黒須院長が現在能筆家であるのも、ひとえに幼少時代のこの訓練のためである。その頃、その地方の新聞社で、年に一回小学生の書道大会というのをやっていて、出来の良い順に、天、地、人、五客、秀逸、入選、という等級をつける。院長も父親に命じられて毎年これに出品するのだが、もしも、天、地、人、に入らないで、五客にでも落ちようものなら、父親はかんかんに怒って院長を荒縄でしばり上げ、物置に放り込んでしまうのだ。そしてその日一日は、泣いてもわめいても、飯ひとつぶも食べさして貰えなかったものだ。たしかにあのスパルタ式教育が、今の自分の土性骨（どしょうぼね）をつくり上げた、と眼をつぶったまま院長は考える。

「……お父さん」

父親は背は低かったが、頭だけは今の院長と同じく、てっぺんがきれいに禿げ上っていた。ある夜すこし酔っぱらって、いきなり立ち上った瞬間、その禿頭を電燈の球に打ちあてたのだ。その頃の電球は今のと異って、その尖端に短いするどいガラスの針が突き出ていた。内部を真空にする技術が進歩していなかったから、電球製造中にどうしてもこういう針が出来てしまうのだ。不運にも父親の禿頭にそのガラスの針が突きささって、父親は大げさな悲鳴を上げた。そして禿頭には小さな孔があき、薄い血がそこから滲（にじ）み出てきた。電燈のあかりに照らされたその血の色を黒須院長は昨目のことのように思い出すことが出来る。そして院長の父親は、その傷口からバイキンが入り、バイキンはやがて全身に囲り、その頃はペニシリンもなかったから、二週間目にとうとう死んでしまったのだ。死ぬ前の日に父親は院長を枕もとに呼びよせ、『如何なる場合でも信念をもって生きよ』という遺言をのこした。それ以来黒須院長は、父親のその遺言を拳々服膺（けんけんふくよう）し、信念をもって今まで生き抜いて来た。もっとも近頃の黒須院長の『信念をもって生きる』ということは、『自分に都合よく生きる』ということとほとんど同義語になってしまってはいたが。

――

「よし！」黒須院長は力強くつぶやいて、眼をかっと見開いた。そして筆にたっぷり墨を含ませて、紙におろした。さすがは能筆をほこるだけあって、墨痕りんり、筆は生けるものの如く自在に紙上をおどった。

『告示

院生韮山伝七は去る六月×目、本院備品のリヤカー

を破損せしめ、使用不能にいたらしめたり。これひ

とえに本人の不注意に因するものなるによって、向う一月以内に 事務局に 一万二千円を納入弁償すべし。弁償不能の場合には、院長の権限をもって退院を命ずることあるべし。右告示す。

夕陽養老院長　黒須玄一』

そして黒須院長は筆をとめ、ちょっと考え込む顔付きになった。ふたたび筆をとって余白につけ加えた。

『以後本院の建物備品を、故意と不庄意たるを問わず破損破壊せるものは、この事例に即して処分するものとす。

院長㊞』

黒須院長はしずかに筆を置き、院長卓の引出しから告示用の院長印を取り出した。これもれいによって途方もなく巨大なハンコで、電気アイロンぐらいの大きさがあった。それに朱肉をまぶし、自分の署名の下にべたりと押しつけた。そして院長は満足そうに顎鬚をしごきながらにやりと笑った。

「先ずは、これでよしと」

リヤカー破損の件を明目の会議で披露することは、いと辛い限りであるが、しかし直ちにこういう処置をとったと報告すれば、経営者たちも不満には思うまい。いや、不満どころか、よろこぶに違いないのだ。経営者たちが望んでいるのは、在院老人の回転率の早さであり、すなわちそれによる入院料十万円の間断なき流入である。端的に言えば、爺さんたちが続々死亡してくれることを希望しているわけだ。爺さんが一人死ぬと、すぐ都内某大学付属病院に遺骸を持って行く。病院ではこれを解剖（かいぼう）の実習に使用し、あとは火葬してちゃんと骨壺に入れて戻して呉れる。それだけでなく、別に三千円という金までつけて呉れるのだ。それに都の方からも三千円という葬儀料がとどく。そういう副産物すらあるのだから、爺さんたちの死が待望されないわけがない。院内爺さんの誰かが死ぬと、この世に残された爺さん仲間は、それぞれのへそくりの中から香奠（こうでん）を出す。一人々々の額は少くても、数十人分とまとまると、ちょいとした金額になるのだ。この香奠は、夕陽養老院歴代院長の**ほまち**になるという不文律があった。一人五十円出すとしても、総数九十何名だから、五千円近くになる。一月に平均四人死ぬとして、院長の**ほまち**は月約二万円となるのだ。副収入としては相当な金額だ。そして香奠返しにはビスケット一袋ぐらいで済ませることになっている。――この度の退院処置というのは、前例にないことであるが、院内から消滅するという点では、退院も死亡の一種と見なしていいだろう。解剖料という副産物は入らないとしても、経営者たちがよろこばない筈がないのである。

「重畳（ちょうじょう）。重畳」

黒須院長は書き上げた告示を手にして、回転椅子から勢いよく立ち上った。在院老人数を六十六名から九十九名と五割増しにすることによって、れいの羽根運動からの援助金も一躍五割増しになった。実を言うと、有料養老院は募金の補助を受ける資格はないのだが、そこはそれ渡りをつけて、うまくごまかしてあるのだ。その点においても、経営者たちの黒須院長に対する信任はあつい。今度の退院制度を確立することによって、ますます信任が深まって行くことであろう。

（しかし、こういう制度を確立することにおいて、あのおいぼれどもが黙っているかどうか）

院長室の扉を押して廊下に出ようとする時、黒須院長の脳裡をちらとかすめた危惧（きぐ）はそのことであった。院長は唇をきっとむすび、眉をびくびく動かしながら、廊下をまっすぐ階段の方にあるいた。掲示板は階下玄関の右側にあるのである。院長はやや足音を荒くして、階段を降り始めた。

（うん。なんとか言って来ても、頑としてはねかえしてやる。あいつら、齢をくっているだけで本質的には烏合（うごう）の衆なのだ）古ぼけた階段は黒須院長の靴の下でぎいぎいとにぎやかに悲鳴を上げた。その複雑な摩擦音は、しかし黒須院長の心情を鼓舞し元気づけるというより、何故かむしろ気持をひるませ潰（つい）えさせたようであった。院長の足どりは急に弱くなった。（いや、やはり正面衝突するのはまずい。押しつめられてくると、あいつら何をやり出すか知れたもんじゃない。懐柔策をとる方がいいかも知れん。そうだ。やはり懐柔と恫喝（どうかつ）、その二本立てで行こう。両方をうまくあやなして行くなんて、院長商売もはたで見るほどラクじゃないな）

階段を降り切ったところで、黒須院長はややぎょっとしたように立ち止り、手にした告示を背にかくすようにした。前方五米ばかりの場所に、痩せた滝爺が立っていたからである。滝爺というのは本名を滝川十三郎と言って、以前は某新聞社の記者だったとのことだが、割に理屈っぽい口やかましい老人であった。滝爺は廊下にひっそりと立ち、どんぐり眼でじっと黒須院長を見詰めていた。告示を背に回した自らの弱味を恥じて、その反動で黒須院長は横柄な声を出した。

「何か用か？」

「院長」滝爺も押しつぶしたような声を出した。「おれたちは一度院長とじっくり話し合いたいことがあるんだ」

「何か用か？」黒須院長は同じ問いをくり返した。在院老人の大部分は黒須玄一のことを、院長さん、院長さま、あるいは院長先生と呼ぶ。この滝爺は黒須のことを、院長、と呼び捨てにする少数者の一人であった。「用というのはニラ爺のことか？」

「うん。それもある」滝爺は追い詰めるように一歩進み出た。「しかし、それだけじゃない。いろいろ問題があるんだ。今日、院長は時間が空いてるか？」

「うん」黒須院長は相手を咎めるように眼を険（けわ）しくさせた。「昼間は事務でいそがしい。夜分なら三十分ぐらい時間を割（さ）こう」

「夜分でもいいよ」

そして滝爺は何かつけ加えようとしたらしいが、思い直したように口をつぐみ、回れ右をすると、肩をそびやかして玄関から前庭へ出て行った。黒須院長は滝爺の姿が見えなくなるのを待って、始めて掲示板に近づいた。

（おれ、と言わずに、おれたち、と復数で来たな）告示をがさがさと拡げ、鋲（びょう）でその四隅をとめながら院長は考えた。なにか不安な感情が湧いて来そうだったので、院長は直ちにうんと下腹に力を入れて、それを押しつぶした。鋲を親指でぎりぎりと押しながら、黒須院長は呪文（じゅもん）のように呟（つぶや）いた。

「懐柔と恫喝。懐柔と恫喝。ええい。なにくそっ！」

［やぶちゃん注：「仕舞用の扇」「仕舞」とは、能・芝居・舞踊などで、舞ったり、演技したりすること。或いは特に、能の略式演奏の一つで。囃子（はやし）を伴わず、面も装束もつけず、シテ一人が紋服・袴（はかま）・扇だけで、謡だけを伴奏に能の特定の一部分を舞うものを指す。ここは後者ととっておく。

「顱頂」頭の頂（いただ）き。

「五客」「ごきゃく」と読み、俳句などの選に於いて、「天」・「地」・「人」の「三光」の次に位する五つの優れた作品を指す。

「拳々服膺」心に銘記し、常に忘れないでいること。「礼記（らいき）」の「中庸」が原拠。

「服膺」は「胸につけて離さない」の意。

「**ほまち**」は「帆待ち」で、本来は、江戸時代に、運賃積み船の船乗りが契約以外の荷物の運送で内密の私的収入を得ることや、その収入金を言った。そこから転じて「外持」「私持」などとも当て字して、「臨時に入る個人的な収入」・「個人的に秘かに蓄えたへそくり」の意となったものである。

「れいの羽根運動」「赤い羽根共同募金運動」のこと。現行のその公式記載に、『共同募金及び共同募金会に関する基本的な事項が、社会福祉法に規定されて』おり、この『運動は、都道府県を単位にして行われ』、『各都道府県内で共同募金としてお寄せいただいたご寄付は、同じ都道府県内で、子どもたち、高齢者、障がい者などを支援するさまざまな福祉活動や、災害時支援に役立てられ』、『共同募金運動を推進するための組織として、都道府県ごとに、県内の各界を代表する役員で構成された共同募金会があり』、『都道府県共同募金会には、助成先を決定する「配分委員会」が市民参加により設置されており、助成団体や金額が決められ』ているとある。

「恫喝」「恫愒」とも書く。嚇（おど）して怯（おび）えさせること。］

7

午後便の午後配達手が赤い自転車をひいて、この古ぼけた一郭に入ってくるのは、大体午後三時前後であった。日曜日だけは郵便物の量が減るから、それより一時間ばかり早目になるが、他の曜日はおおむねその時刻と見て差支えない。短靴、皮ゲートルで足がためした若

い配達手は、いつもS土地建物会社の大きな壁時計を見て、三時を回っておれば心がせくし、まだ三時前だとゆっくりした気分になるのだ。今日配達手がこの古風な建物に足を踏み入れたのは、三時にまだ七八分はあったが、彼はいつもと違ってほっとした表情を見せなかった。うすにごった空から、今にも雨が落ちて来そうなので、ゆっくりとしてはおれないのである。ひとくくりの郵便物を階下の事務所に投げこむと、すぐに右手の狭い階段を身軽に二階までかけ上った。白川社会研究所宛ての郵便物は、うすっぺらな封書が一通きりであった。配達手はそれを顔のまんまるい女事務員に手渡し、ころがり落ちるようにして階段をかけ降りた。赤い自転車にまたがった彼の肩をかすめて、一羽のつばめが高速で飛翔（ひしょう）した。

白川研究所須貝主任にかるい脳貧血を起させたのは、まさしく熊井嬢が受取ったその一通の封書であった。それまで須貝は相変らずだらしなく両脚を卓上に乗せ、気楽そうに口笛で『アロハオエ』をふいていたのだが、封を切って中からぺらぺらの美濃紙（みのがみ）を引っぱり出し、さらさらと一読したとたんに頭からさっと血が引いて、眼界がまっくらになったらしい。脚は卓上に乗せたまま、身体は回転椅子からすべり落ちて、尻がどしんと床にぶっつかった。須貝はその衝撃のために笛のような悲鳴を上げた。

その物音にふりかえった熊井と栗山佐介は、事態を察してたちまち敏活に動き始めた。佐介は階段をかけ降りて車道をつっ切り、向いの薬屋からアンモニアと気付薬を買ってきたし、熊井は水に濡らしたハンカチで、ふたたび椅子にずり上げられた須貝の額や頬をかいがいしく冷やしてやった。アンモニアのにおいが強烈すぎたのか、須貝は顔をひどくしかめ、そしてやっと正気に戻った。

「ウ、ウィスキーをくれ」

須貝は弱々しく呟（つぶや）き、自分の卓の引出しを指差した。そして佐介が注いでやった一杯のポケットウィスキーのおかげで、どうにか血が頭に戻ったらしく、あおざめた頬もしだいに元の色に復してきた。しかし椅子から手荒くずり落ちたために、櫛目の入った頭髪はくしゃくしゃに乱れ、ネクタイは惨めにゆがみ、ズボンも埃だらけになって、身だしなみも何もめちゃくちゃになってしまった。須貝は正気に戻った瞬間にもうそれを気にして、ズボンの埃をはたいたり、ネクタイに手をやったり、まごまごと櫛を探したりした。ネクタイの修正は熊井が手を貸してやった。

「今おれの鼻の先に持ってきたのは、一体ありゃ何だい？」

床にぶっつけた尻の個所を揉みほぐしながら、須貝は不機嫌に口をひらいた。皆の前で醜態を見せた自分に対して、あきらかに須貝は怒っていた。

「何だい。アンモニアか。ひでえものを嗅がせやがる」

佐介はその須貝に横顔を向けて、卓上に拡がった美濃紙の文言に視線をおとしていた。それは同じくここの所員の鴨志田吾郎の辞表であった。字画が一糸乱れず整然としているのに、どこか品がないのは、代書屋にでも代筆させたものであろう。

辞　表

私こと鴨志田吾郎は今般一身上の都合により貴所を
辞任致したく右お届けします。

月　日　　鴨志田　吾郎　㊞

白川社会研究所長殿

このそっけない文章のあとの署名の下に押してある印は、正規のものでなく、拇印（ぼいん）であった。しかも使用されたのは印肉でなく、血液のようである。指紋をくっきりと浮き上らせたその人血は、すでにひからびて紫色になっていた。佐介は須貝の顔を見て、やや軽蔑的に言った。

「血判ですね」

辞表が拡げ放しになっていることに、須貝は今やっと気付いたらしく、あわててそれを取り込もうとしたが、すでに佐介に読まれてしまった後だったから、あきらめたように手をだらりと下に垂らした。熊井もその辞表に眼をやった。ちょっと気まずいような沈黙がそこにきた。

「ふん」沈黙に耐え切れなくなったらしく、須貝は鼻を鳴らした。「君たちはおれがこの辞表を見て、それで気が遠くなったと思ってるんだろう。飛んでもない話だ。おれは今日はまったく寝不足なんだ。昨夜麻雀（マージャン）で徹夜したもんだから、その疲れが今一挙に出て来たんだ。何だい、こんな悪趣味な辞表！」

「まあ、血判なのね」熊井は顔をしかめてそこに近づけた。「なんて古風な。まるで赤穂浪士みたいだわ」

「うん。あいつは少年航空兵上りの、特攻隊くずれなんだ」須貝はすこし元気をとり戻して、手を伸ばしてウィスキーの小瓶をつかみ、ラッパ飲みに一口ごくんと飲んだ。

「特攻隊ってやつは、血判が大好きなんだ。なんとか一家などと称して、まったくやくざ気取りだ。栗山君。消印をちょっと調べてくれ。大阪になっているか」

佐介は封筒をとり上げ、眼を近づけて見た。受付局のところはスタンプインキがずれていて、うまく判読出来なかった。佐介は窓辺に行き、眼を大きくして消印をにらんだ。

「やはりずれていて読めませんね。それに日付けのところも」

「あいつ、大阪に出張したっきり戻って来ないと思ったら」須貝は激しく舌打ちをした。「とんでもないアプレ野郎だ。辞表一つ出せば片がつくと思ってやがる。ここはただの役所や会社とは違うんだ。そんな勝手な真似はさせないぞ。草の根を分けても探し出して、徹応的にしごき上げてやる。あいつ、きっと大阪でまとまった金を摑（つか）んだもんだから、それでおれたちと縁を切る気になったんだな。きっとそうだ」

「大阪にはどんな用件で出張したんですか」

「そ、それは君と関係ない！」触るとサッと引込むイソギンチャクのように、この善良にして狡猾な恐喝主任はすばやく殻に立てこもった。「そういうことはお互い同士といえども、

うかうかと口外出来ないのだ。壁に耳あり、障子に目あり」
「人に口あり、魚にエラあり」熊井がそれに続けてふざけた口をきいた。辞表を見て失神したこのだらしない主任に対して、彼女ははっきりと軽蔑に似たものを感じたらしい。それが露骨に彼女の口調にあらわれていた。須貝はむっとして何か言おうとしたが、結局何も言わなかった。のっぺりした顔が平家蟹（へいけがに）みたいな惨めな表情になり、熊井をにらみつけた。
「おかしいな」窓のそばで封筒をかざしていた佐介が目をはさんだ。「この郵便の受付け時刻、どうも『前０－６』と読めるんだが、午前の零時から六時の間とは、変な時間に出したもんだな」
「そりゃ大金を握ったもんだから、酒を一晩飲み明かして、そして五時頃郵便局に行ったんだろう。きっと駅の郵便局だな。あいつの故郷はたしか九州だったから、ふん、九州にトンズラしやがったに違いない。どれ、ちょっとその封筒を寄越（よこ）しなよ」
須貝は自分の整然たる推理にちょっといい気持になったらしく、鼻翼をふくらまして封筒を受取った。そして仔細らしく裏表をしらべ、においを嗅いでみたりした揚句、カチンとライターをつけ、灰皿の上で無造作に燃してしまった。あとの二人は黙って冷然とその須貝の動作を眺めていた。
「ま、これでよしと」須貝主任は先ほどからの気持の動揺をかくそうとして、不注意にもつぶやいた。「なんとこの事件を所長に報告したものかな。くたばりかけているということだから、いっそ頬かぶりの握りつぶしと行くか。もうこの研究所も終りだな。そろそろこちらも逃げ出しの準備と行くか」
「鴨志田君は逆に敵の術中におちて人質となり、そしてこの手紙を書くことを強制させられた、という仮説も成立するでしょうねえ」奥歯で噛みしめるように佐介はゆっくりと発音した。須貝は呟きのぶつぶつをやめて、ぎょっとした顔を佐介に向けた。「第一にこの辞表は鴨志田君の字じゃない。代書屋か何かの筆跡でしょう。それがどうもおかしい」
「そうよ。血判なんて古風過ぎると思ったわ。あたし」熊井は探偵小説の愛好者らしく、やや飛躍した推理を持ち出した。「きっとカモさんは敵につかまって、生駒（いこま）山中かどこかの一軒家に監禁されたのよ。そしてそこでさんざん打たれたり叩かれたり、拷問（ごうもん）されたりして、その時出た血でむりやりに拇印を押さされたのよ。それに違いないわ。あたし、そんなのを、一度読んだことがあるんだもの」
「おい、おい。見て来たようなことを言うなよ」須貝は本当に脅（おび）えたふうな声を出した。須貝自身もそういう想像を持っていて、それを熊井にはっきり口に出されたものだから、それでなおのこと脅えたらしい。須貝はそしてあわててウィスキーを掴み、またごくりと一口飲みこんだ。「あまり僕をおどさないで呉れ。僕のデリケートな神経を、これ以上刺戟してくれるなよ。うん。そう言えばこれはカモの字じゃないようだな。あいつにこんな字が書けるわけがない。封筒の方の字はどうだい。おい。これの封筒はどこにやった？」
「封筒は今あなたが燃しました」

「燃した？」須貝は眼をうろうろさせて、やっと灰皿の燃えがらを見つけ、絶望的に拳固をかためて自分の頭をしたたかなぐりつけた。
「ああ、何と言うことだ。ずらかる奴がいるかと思うと、何かたくらんでいる奴もいる。変な電報が来るし、鍵型はとられるし、てんでわやくちゃだ。おい。ハム嬢。暦で今日という日を調べてくれ。きっと仏滅か何かに違いない」
　熊井は壁にぶら下げてある高島暦をはずして、ぱらぱらと頁をめくった。この古風な暦本は、その日の仕事の成否だという方角の是非を知るために、この研究所では大いに活用されていた。恐喝という古風な職業にふさわしい備品であった。
「大安、と出ているわ」熊井は感激のない口調で言って、ばたりと頁を閉じた。
「大安だと？」須貝は半白の頭髪をかきむしった。「暦までが僕を莫迦（ばか）にする。人がこんなに困っているのに、大安とはなにごとだ。よし、そんならこちらにも覚悟がある。今日は仕事はやめだ。僕は家へ戻る。戻って大安楽に酒でも飲むぞ。君たちもう帰ってよろしい。いや、栗山君はあのＬ十三号の仕事をやってくれ。判ってるだろうな。相手は相当のしたたか者だよ」
「判っています」
「手抜かりなくやってくれよ」須貝はそそくさと立ち上り、ふと気がついて、上衣の内ポケットのＡ金庫の鍵をたしかめた。そして熊井に顔を向けて猫撫で声を出した。
「ねえハムさん。気がむしゃくしゃするから、憂さばらしに映画でも見に行かないか。映画のあとで晩飯をおごってやるよ。うなぎの安い店を見つけたから」
「あたし、も少し居残るわ」
「残らなくてもいいんだよ」サイプリーツのスカートにおおわれた熊井の豊かな腰に、好色的な視線を這わせながら、須貝は一段と声をやさしくした。「今いい探偵映画をやってるんだよ。とてもスリルがあって面白いそうだ。『朝日』の〈純〉がそう賞めていたぜ。気張ってロマンスシートと行こう」
「おことわりするわ」熊井は意識的に佐介の方をちらと見た。「だって須貝さんは、映画の方はろくに見ないで、あたしの手を握ったり足にさわったり、そんなことばかりするんだもの。いやになっちゃうわ」
　須貝ののっぺりした顔が見る見るあかくなった。そして乱暴に卓上の鞄を引き寄せた。そのとたんに鞄が赤い卓上ピアノにふれて、白い鍵盤が人をからかうようにポロロンと鳴りひびいた。それでまた須貝は腹立ちをそそられたらしかった。
「はっきり言って置くけれども、この卓上ピアノの代金は研究所費から出すわけには行かないよ」須貝は鞄を小脇にかかえながら、うってかわった底意地のわるい声を出した。「第一にこんな卓上ピアノを、当研究所は必要としていない。この研究所に卓上ピアノとは笑わせやがる。めくらさんの家がテレビを買うようなもんだ。これは買った当人に支弁して貰うことにしよう。ざまあみろだ」
「なにさ、この帝銀！」熊井は小さな声でののしって肩を噛んだ。

「でも」と佐介はたすけ舟を出した。「こんな仕事に卓上ピアノが不必要だとは、一概には言えないでしょう。仕事がうまく行かなくてイライラしてる時などに、このピアノで心を慰めたり――」

「僕にあてこすってるのか」須貝はせせら笑った。「卓上ピアノ如きでイライラがなおるなら、誰も苦労はしねえや。余計な口は出さずに、L十三号の手筈でもととのえて置け。今週中に第一回の報告をまとめて出すんだよ。じゃあ僕は帰る」

須貝は鞄をかかえていない方の手を伸ばして、わざと荒荒しく鍵盤をひっかき回した。高低さまざまの音が出鱈目（でたらめ）に入り交って、湿った空気の中をころがり回った。須貝はせいせいしたという顔付きで、背筋をまっすぐに立て、気取った歩き方で部屋を出て行った。階段を降りて行くにぶい足音がした。

「あ。雨が降ってきたわ」

どすぐろく濁った空が、もう持ち切れないように、ぽつりぽつりと雨をおとし始めた。故（ゆえ）もないけだるさを感じながら、佐介は窓の方へ足を動かした。熊井は主任卓に腰をおろし、膝を組んだままじっとしていた。佐介は窓から街を見おろしながら口をきいた。

「その卓上ピアノ、僕が買って上げようか」

「無理しないでもいいわ」さっきの怒りのためにまだ熊井の声はこわばっていた。「主任がああいうことを言うんなら、デパートに戻して来てもいいのよ。デパートだから受取ってくれるわ」

「いや、僕もひとつ欲しいと思っていたんだよ。いや、その言い方は間違っている。これを見たとたんにこれが欲しくなったんだ。さっき主任から歩合金の二千円を貰ったから、それで払うよ」

「家に持って帰るの？」好奇心をそそられたように熊井が言った。「そして自分の部屋で弾くの？」

「いや、そうじゃない。そんなへんてこな趣味は僕にない」

おちて来る雨の粒がしだいに多くなってきた。この建物を出て十間［やぶちゃん注：約十八メートル。］ほど歩いた須貝がたまりかねたようにレインコートを頭からかぶり、あばれ馬のようにかけ出して行く姿が眺められた。雨が降って来たからとて、とことこ戻ってくるのは、彼の見識が許さなかったのであろう。頬にうす笑いをたたえて佐介はそれを眺めていた。熊井がふたたび訊ねた。

「じゃあどうするの？」

「贈り物にするんだよ」

「贈り物？」熊井は膝を組みかえて、食い入るような視線を佐介の横顔にそそいだ。佐介はまたわらっていた。「あんた、なにを笑ってるのよ」

笑いを消して佐介はふりむいた。

「なにも笑っていないよ」

「笑ってた。あたしのことを笑ってたんでしょう」

「笑ってなんかいない。光線の具合でそう見えたんだろう」

「贈り物って、相手は女のひと？」と熊井は急に視線をするどくさせた。「女のひとでしょ」

「女じゃないよ」佐介は断言した。「そんなじゃらじゃらした相手じゃない。もっと気の毒な人々だよ。それに贈ろうと思うんだ」

「へえ。どんな心境で？」

「同情からだよ」

佐介はそして放心したような眼を、窓の外に向けた。雨はますますはげしくなり、家並や街路は茫（ぼう）とけむっている。皆それぞれ雨宿りしたと見え、街路にはほとんど人影は見えない。窓の中にも細かい雨滴がさあっとしぶき入ってきた。そして佐介は突然熊井の方に向き直った。

「今、僕は、何と言った？」

熊井はその佐介にいぶかしげに答えた。

「同情、って言ったわよ。なぜ？」

［やぶちゃん注：冒頭、日曜日に郵便が配達されているが、依然は日曜日でも普通郵便を配達していた。しかし、労働組合の要望や休日手当のコスト削減などの関係から、日曜日の普通郵便の配達は廃止された。但し、書留・速達・配達時間帯指定郵便・配達日指定郵便代金引換・電子郵便（レタックス）・「ゆうパック」などは日曜でも配達される。あるネットの記載では日曜の普通郵便配達は昭和四五（一九七〇）年頃に廃止になったのではないかという記載があった。但し、ここで栗山が日曜に社にいるのは杓子定規に言えば、おかしい。「3」で彼は月・水・金にしか出社しないと言っていることと矛盾するからである。まあ、暇な日曜に熊井でもからかいに来たと考えればよいか。なお、だとすると、栗山はこの社から徒歩で行ける圏内に居住している可能性が高いと考えてよいだろう。しかし、その結果として仕事を須貝から命じられてしまう。しかし、それを嫌がっている素振りはないが。

なお、ここいらで言っておくと、梅崎春生は総てではないものの、志賀直哉の「赤螺蠣太」の如く（主要な登場人物に海産・水産生物の名前が使用されている）、登場人物の名前に明らかに意識的に動植物を用いていることが判る。須**貝**・**栗**山佐**介**・牛島・**熊**井・**玉虫**・**鴨**志田・「**ヘビ**」・**韮**山・**菅**である。水に関係あるものも有意にある（**山川**・**白川**・**滝川**）。さらに、水産動物を用いた固有名詞や比喩も多いように思われる。「**わにざめ**」**鰐鮫**・「お歳暮の**鮭**かなにかを連想させた」・「**蟹**のフンドシにそっくり」・「触るとサッと引込む**イソギンチャク**のように」・「**魚**に**エラ**あり」・「**平家蟹**みたいな」等である。比喩は梅崎春生自身の好み（傾向）と言えば済まされるが、人名のそれは明らかに意図的である。海産生物フリークの私には非常に気になったので記しておく。

また、本章の佐介と熊井のエンディング・パートなどはすこぶる映像的・映画的である。シナリオというより、ここを映画のカメラマンなら、こう撮るだろうといった書き振りがいかにも素敵だと思う。

「アロハオエ」YouTubeのИльяАгутин氏の【和訳付き】アロハ・オエ（ハワ

イ民謡）"Aloha Oe" - カタカナ付き」で視聴出来る。ハワイ語で最も日常的な挨拶語として「こんにちは」・「さようなら」の意で、他にも「おはよう」・「おやすみ」・「ありがとう」・「愛しています」など多様な意を持つらしい。ここは鴨志田の辞表に引っ掛けた梅崎春生の別れの挨拶の皮肉の洒落であろう。

「アプレ野郎」アプレ・ゲール（フランス語：après-guerre）。「戦後派」の意。ウィキの「アプレゲール」によれば、本来は、『芸術・文学など文化面における新傾向を指す名称として、第一次世界大戦後のフランスやアメリカ合衆国等で用いられ、第二次世界大戦後の日本でも用いられた』が、『戦前の価値観・権威が完全に崩壊した時期であり』、『既存の道徳観を欠いた無軌道な若者による犯罪が頻発し、彼らが起こした犯罪は「アプレゲール犯罪」と呼ばれた。また徒党を組んで愚連隊を作り、治安を悪化させた。このような暗黒面も含めて、「アプレ」と呼ばれるようになった』とある通り、一部の若者たちの反道徳的傾向に対する批判的・軽蔑的呼称として専ら用いられた。]

8

夕陽養老院の建物は、二階建てでコの字の形をしていた。前身の病院時代には、ペンキも年に一回ぐらいは塗りかえられ、庭には芝生や花壇があり、鶏がそこらを歩いたりして、いかにも高級病舎らしい整頓ぶりを見せていたが、現在では鶏のかわりに豚が飼われ、芝生はすっかり畠となり、建物のペンキもぼろぼろに剝げ落ちて、折柄の雨にしっとりと錆色（さびいろ）に濡れている。バルコニーや院長室のある正面は、南向きでその幅もせまい。そこから後方に伸びる二棟の建物は、それぞれの位置によって、東寮、西寮と呼ばれている。韮山爺さんの居室は、その東寮の階下の一番どんづまりの位置にあった。つまりここを通り越すと、もうあとは便所と浴室しかないわけだ。あまり良い部屋ではなかったが、年に一回くじ引きで決めるのだから、文句は言えないのである。しかし、その年一回のくじ引きの期日を、もう一ヵ月も過ぎているのに、まだ院長側から何の音沙汰もないのだ。両三度かけあってみたのだが、近いうちにおこなう予定だという返事だけで、なにか黒須院長の態度はあいまいであった。

「そこがどうもおかしいと思うんだ」同室の松木爺さんが口をとがらせて、ぐるりと一座を見回した。うすぐらい六畳の部屋には、七八人の老人たちがそれぞれの姿勢で、壁に背中をへばりつかせて、車座をつくっていた。部屋の空気はこわばって、重苦しく緊張していた。

「去年までは毎年、チャンとした期日に、チャンと部屋替えのくじ引きがあったな。しかもそのくじは、俺たちの代表者がこしらえたんだから、不正も情実もなかった。つまり民主的に運営されていたわけだ。ところが今年はどうだ。あの海坊主（黒須院長はかげではこう呼ばれていた）は勝手に期日を引き延ばし、かけあってみてもごまかし口ばかりきく。きっとまた何かたくらんでやがると思うんだ」

「そうさな」長老の遊佐爺が白鬚を撫でながら発言した。「ひょっとするとくじ引きを廃止

して、部屋割りの権限を自分の手に収めようとたくらんでるのかも知れんな。わしはそう見当をつけている。あいつがやりそうなことだ」

「そんなことになったら大変だ」小机を前にして臨時の書記役をつとめているどんぐり眼の滝川爺が、ペンの柄でこつんと机をたたいて、口を入れた。「そうすればあいつは部屋割りを、論功行賞風にやるに違いない。すると俺なんかは、平素からよく思われていないから、いつまでたってもどんづまりの部屋だぞ」

「俺も」

「俺もだ」

「わしも」

「わしもだ」

一座の老人たちは、いっせいに眉を吊り上げて、異口同音にそう唱和した。とかく口がうるさく行動的であるために、この老人たちは院長側にはよく思われていなかったのだ。唱和しなかったのは、韮山爺だけだ。韮山爺は部屋のすみの一番うすぐらい場所に、きちんと膝を折ってうなだれていた。なにかそれは祈っているような姿勢に見えた。

「よし」遊佐爺が重々しくうなずいた。「じゃあ、滝爺さん、それも抗議の一条に加えてくれ」

滝爺はペンを持ち直して、机上の紙に力をこめてガシガシと次のように書きつけた。

『部屋割りくじ引きを早速行うこと。くじは例年通り在院者代表によって作製さるるものとす』

「それに拡張工事のことだな」遊佐爺はぐるりと一座をにらみ回すようにした。遊佐爺は夕陽養老院きっての年長者で、満七十八歳になるが、まだ体力も頑丈だし、声音もはっきりとしている。せんだってまでは八十歳というのがいたが、浴室のタイルでつるりとすべり、後頭部を打って死んでしまった。そこで遊佐爺が長老格に昇進したわけだ。若い頃は船乗りだったということだから、潮風に身体をきたえ上げたのだろう。「居住区は一人三畳宛（あてという約束を無視し、ごまかしにごまかしを重ねて、海坊主はわしたちを二畳にまで追い込んだ。それはごまかされたわしたちもだらしがなかった。これ以上だらしがないと、だんだん二畳が一畳半、一畳半が一畳と、追いつめてくるに相違ないと、わしらはにらんでいる」

「その通りだ」

「と言って、元通りの三畳を確保するために、在院者の三分の一に出て行け、と言うことは出来ない。一度入院したものを放り出すことは絶対に出来ん！」そして遊佐爺は韮山爺の方をちらと見た。すこし声を張り上げたのは、韮山爺に元気をつけるためのゼスチュアだと知れた。

しかし韮山爺はさっきと同じ姿勢で、うなだれたまま黙って窓ガラスの方に横目をつかっていた。ガラスの上には、どこから忍び入ったのか、一匹の大きなナメクジが鈍色（にび

いろ）［やぶちゃん注：濃い灰色。］の筋を引いて、ひっそりと這い回っている。韮山爺の眼は放心したようにそれを見ていた。さきほど玄関の告示を見た時の衝撃が、まだ韮山爺の胸に残っていて、何も考える力もなく、また一座の会話もほとんど耳に入らない風であった。韮山爺はナメクジの胴体が微妙に蠕動（ぜんどう）するのを眺めながら、お念仏のようにつぶやいた。「一万二千円。ああ、一万二千円」

「そうだ！」別の爺さんが勢（きお）い立った声を出した。「追い出すことはでけん。寮舎増築を要求せよ！」

「滝爺さん。それも書いてくれ」遊佐爺は目くばせをした。「それから食事の問題だ」

食事、という言葉を発音した時、一座の老人たちにかすかなどよめきが起った。院内生活において食事がどんなに重大な行事であるか、そのどよめきはそのことをハッキリ示していた。遊佐爺は効果を確かめるようにちょっと間を置いて、重々しく言葉をついだ。

「ひとことにして言えば、黒須院長が就任して以来、食事の質が低下したというわけではないが、たいへん不均衡になってきた傾向がある。それに以前とくらべて、鮮度も落ちてきたようだな。とにかくわしたちはカロリーさえ摂（と）ればいいのじゃない。老人には老人としての嗜好（しこう）があるんだ。朝には朝らしい食事、夕方には夕方らしい食事。わしらが欲しいのはそれだ。ところが海坊主は、わしらの嗜好を完全に無視しとる」

「そうだ。その通りだ」一座は異口同音に賛成した。「朝から刺身やテンプラを出すのはまあいいが、夕食に味噌汁一杯とタクアンだけとは、一体なにごとか」

「一昨日の朝のマグロ刺身は、たしかにあれは腐っていた」松木爺が口をとがらせた。「たしかにあいつは腐っておった。豚にやったら豚も食わなかったぞ」

「テンプラだって、身が半分千切れたようなのが出る」と別の声が言った。「第一これだけの大世帯に、栄養士が一人もいないなんて、違法じゃないか」

朝からテンプラが出たり、夕方にろくなおかずが出なかったり、そんな変則な状態になってきたのは、つい三ヵ月ほど前からのことだ。野菜は院内の畠のやつを使うから新鮮だけれども、動物性食品になるとどうも鮮度が怪しいのだ。どうしてそんなことになるのか、在院者は調理場に立入禁止ということになっているので、さっぱりその原因がつかめないのだが、毎日の問題であるだけに、不平はようやく在院者全体に瀰漫（びまん）［やぶちゃん注：一面に広がり満ちること。蔓延（はびこ）ること。］しつつあった。

「よろしい」遊佐爺は断を下した。「調理場の一般開放。これを要求の一つに加えよう」

「いや。それじゃ手ぬるい」松木爺が膝を乗り出した。

「開放だけじゃなく、材料仕入れや調理方法に、こちらの発言権を認めさせた方がいいぞ。なんなら料理係をクビにして、俺たちが輪番制でやってもいいくらいだ」

一座はがやがやとどよめいて、松木爺の発言に対する検討が始まった。雨は相変らずしとしとと窓ガラスを濡らし、室内の空気をしめっぽくさせていた。韮山爺はさっきと同じ姿勢で、やはり横目でナメクジをにらんでいた。ナメクジはぬめぬめした筋をガラスに残して、じりじりと上方に移動していた。（ああ。一万二千円）韮山爺は泣くような気持で思った。（向う

一ヵ月に一万二千円をつくらねば、俺はここから追い出される。追い出されたら、もう行くところはない。行くところがなければ、死ぬほかはない。しかし俺が死んでも、誰も悲しんではくれないだろう。死んだら死骸は無縁仏として埋められるだろう。無縁仏のお墓は、たいていじめじめしたところにあるものだから、大きなナメクジなんかが沢山這っているに違いない）韮山爺はぶるっと大きく身ぶるいをして、ナメクジから眼を放した。一座の談義はやっとまとまったところらしく、滝川爺がふたたびペンを握って、机上の紙に何か書き込んでいた。その時廊下の方から、小走りに走る乱れた足音が聞えた。つづいて小さな叫び声も。――滝川爺はペンを置き、中腰になって廊下に面する窓をあけ、大声で怒鳴りつけた。

「重大な会議をやっているんだから、遊びごとはよそでやってくれ。いい歳をしてなんだ。うるさいぞ！」

足音はぱたりと鳴りをひそめ、そして脅（おび）えたようにぼとぼとと向うの方に遠ざかって行った。滝川爺は舌打ちをしながら、ぴしゃりと窓をしめた。

「ほんとにしようのない爺さんどもだ。暇さえあれば、鬼ごっこやかくれんぼばかりして、子供じゃあるまいし」

一座の爺さんたちは顔を見合わせ、うなずき合いながら賛意を示した。その時の彼等の表情には、総じて優越の色があふれているように見えた。少くとも鬼ごっこよりも会議の方が高級だと言わんばかりに。

夕陽養老院の在院者は、必ずしもこの一座の老人たちのように、口うるさいいっこく者ばかりではなかった。いろんな型の老人がいた。勝負ごとに凝（こ）って他のことには全然関心を示さない爺さんもいるし、新興宗教に帰依（きえ）しているのや、また食べることだけがたのしみというのもいた。またすっかり童心にかえって、子供のように無邪気に遊ぶ爺さんのグループもいた。その連中がさっきから廊下で鬼ごっこをやって、会議の邪魔をし、滝川爺さんのかんしゃく玉を破裂させたわけなのだ。

韮山爺はその滝川爺の顔をそっとぬすみ見ながら思った。（ああ、ほんとのことを言えば、俺もこんなとげとげした会議より、鬼ごっこに仲間入りしたいんだがなあ）

「海坊主が就任して以来――」その時柿本爺がぎくしゃくと坐り直して口を切った。この爺さんはわりに無口な方だが、いったん口を開けば相当なうるさ型であった。「その感化を受けて、事務員や料理係の木見婆［やぶちゃん注：「きみばば」。「きみ」が姓。］までがわしらに横柄になってきた。これも何とかして貰わんけりゃならん」

「そうだ。それは元兇の海坊主に反省を求める必要がある」

「実際あの海坊主は、バカでかい小道具にかこまれて、威張りくさってやがるなあ。院長室のあの硯箱のでかいこと。まるでオマルみたいじゃないか」

「そう言えば、わしがこの間神経痛で寝たとき、俵（たわら）に診察して貰ったが、あの医者の聴診器もふつうのより一回り大きかったぞ。あれも海坊主の影響かな？」

俵というのは、週に二回院外から通ってくる、小柄で中年の医者のことだ。診察もぞんざいだし、注射のしかたも下手だというわけで、ここではあまり評判がかんばしくなかった。

「うん。あの聴診器も全く大きい」と別の声が嘆息した。
「まるで牛か馬を聴診するみたいだなあ」
「もしかすると、あいつは人間の医者じゃなく、獣医じゃあるまいか」滝川爺が小机から上半身を乗り出し、たまりかねたように口を開いた。「この間おれが腹痛で寝た時、来診してきて、先ず最初に指でおれの鼻をさわったよ。このおれを、犬と間違えたんじゃないか。どうもそうらしいぞ」
　ぎょっとしたような沈黙が来た。滝川爺のただならぬ発言が、各自の胸にぐんとこたえたのらしい。皆は姿勢を硬くし、なにか探るような眼付きで、お互いの顔をじろじろと眺め合った。韮山爺も同様に惨めになり、犬か猫なみに下落したような気分になって、無意識裡に左手を妙な形に曲げ、伸びた爪で窓ガラスをガリガリと引っ掻いた。
「猫みたいなことをするんじゃない！」滝川爺がそれを聞きとがめて叱りつけた。「ふん。万一あいつが獣医だとすれば、この俺たちは人間並みに取り扱われていないということになるな」
「そう言えばわしもあの医者から、咽喉（のど）をくすぐられたことがある」
「それは重大な問題だ」遊佐爺も落着かぬ風（ふう）に顎鬚（あごひげ）つまんで引っぱった。「それは至急に調査する必要がある。もし俵医師が獣医だったら、これはもう人権の問題だな」
「それも抗議に加えるかね？」と滝川爺はペンを持ち直した。
「いや。それは待ちなさい」遊佐爺は長老らしく静かにそれを手で制した。「事実をはっきり確かめてからにしよう。うっかりしてホンモノの医者だったら、逆手をとられてしまうからな。しかしこんなに皆で話し合うと、いろんなことがはっきりしてくる。たいへんいいことだ。初めての会合としては、まず成功の部類だな」
「院長とはいつ会見するんだね」
「さっき玄関のところで俺は海坊主と会った。そして会見を申し込んだのだ」滝川爺はペンを置き、どんぐり眼で一座を見回して、一語々々はっきりと発言した。「すると海坊主が言うには、昼間は事務でいそがしいから、今夜なら逢おうと言う。それも三十分だけだと言うのだ」
「それは横柄に出たもんだな」松木爺が言った。「なんであいつが忙しいものか。ま、しかし、夜なら夜でもよろしい。わしたちは論理を正しくし、ごまかされないようにして、今夜こそ海坊主の首ねっこをしかと押えてやる必要がある」
「そうカンタンに行くかねえ」ややひるんだ声がすみでした。「なにしろ相手は、鉄の如き信念を持ってるそうだぞ」
「大丈夫だ。大体大丈夫だと思う」遊佐爺がかわって自信あり気（げ）におっかぶせた。「わしの七十八年の経験によると、ああいう男は案外に弱いものだ。たとえばあいつの眼を見ると、まるで人を咎（とが）めだてするみたいな眼だ。心の中にひどい弱味を持っていればこそ、そんな眼付きをするのだ。弱味がなければ、もっと平静な眼色になる筈だな。それにあ

の巨大な灰皿やハンコ」遊佐爺は手でその形をなぞって見せた。「あれもごまかしのハッタリだ。あいつの気持か身体の中に、なにか小さな、倭小（わいしょう）なものがあるに違いない。だからこそバカでかいものを持ち出して、そこらをごまかしてしまおうとしているんだ。今まではあいつが攻勢に出ていたから、さしてボロを出さずに済んだが、今度こちらが攻撃側に立てば、きっとボロを出すに違いないのだ」

「それはちょっと楽天的に過ぎないか」柿本爺が唇を歪（ゆが）めて異議をとなえた。「相手は海坊主個人ではない。海坊主の背後に、またもろもろの大坊主が立っている」

「だからわしらは徐々にやるんだ」

「海坊主があんな挑戦的な告示を出したのは、相当な成算があるからだと俺は思う」柿本爺も負けていなかった。

「これは相当に綿密な作戦計画を立てないと、ひどい目にあう公算が大きいぞ」

「だからわしらは、徐々に、確実にやって行くんだ」遊佐爺もやや声を荒くした。「一歩々々やって行くんだ。そうだ。滝爺さん。昼間はいそがしいと、あいつは言ったんだな。先ず手始めに、それがホントかウソか、ひとつ隠密（おんみつ）を出してみようじゃないか」そして遊佐爺は眼を上げて、一座の一人々々の顔をおもむろに眺め、やがてその視線は韮山爺のところでぴたりと止った。遊佐爺は声をやわらげて呼びかけた。「ニラ爺さん。御苦労でもちょっと二階に行って、院長が何をしているか、そっと見て来てくれんか。相手に気付かれないように、そっとだよ。お前さんは身体が小さいし、足音もあまり立てないから、丁度よかろう」

「へ。わしが？」韮山爺はきょとんと顔を上げた。「わしが何をやるんで？」

「院長の様子を探ってくるんだよ」滝川爺がいらだたしげに口をそえた。「今なにをやっているか、そっと見てくるんだ。しっかりせえよ、ほんとに」

「へへ」

韮山爺は困ったような笑い方をして、それでもしぶしぶと立ち上った。長い間の正座で足がしびれたらしく、ひょこひょことびっこを引いて扉口まで歩いた。皆の表情はへんにつめたくなって、その動作を眺めている。扉のところで韮山爺はまた照れたような無意味な笑い方をした。

「へ、へへ」

韮山爺の姿が扉のむこうに消え、そして足音が廊下を遠ざかった時、遊佐爺は大きく呼吸をして口をひらいた。緊張した長談義のため、一座の面（おもて）にはかくし切れぬ疲労の色がただよっている。

「当然のことだがこの会議は、今回のニラ爺事件が中心になるべき筈だ。ところが当のニラ爺は、今わざと席を外（はず）して貰ったが、態度がぐずぐずしていて、何を考えているのか一向にハッキリしない。わしらと一緒に立ち上って戦う気持があるのかないのか。一体わしらはこういうニラ爺をどう取り扱うべきや――」

「こんなに重大な、自分に深い関係がある会議中、ニラ爺は何をしていたか」柿本爺が痛憤

にたえぬという顔付きで、窓ガラスを指さした。「おれたちの話は全然聞かず、あの窓ガラスのナメクジばかりを眺めていたぞ！」
みんなの視線のまっただなかで、ナメクジはのろのろとその針路を変えた。
韮山爺は廊下を曲った。曲り角に置かれた大きな屑籠のかげに、さっき滝川爺から怒鳴りつけられた甲斐爺が、こっそりしゃがんでいた。韮山爺はそれを見て立ち止った。
「一体何をしてんだね、そんなところで？」
「しーっ」甲斐爺は唇に指を立てて、小さな声で言った。
「かくれんぼだよ」
韮山爺は前後左右を見回して、自分も大急ぎで横っ飛びして甲斐爺のそばにしゃがみこんだ。そして同じく小さな声でささやきかけた。
「雨が降ると、外で遊べなくて、つまらないねえ」
「そうだねえ。天気の方がどれだけいいか判らないねえ」
「しんどい会議で、おれ、ほんとに、くさくさしたよ」
「皆集まって、一体何を話し合ってんだね」
「おれにもよく判らんけど、院長の悪口を皆して言ってたよ」
「そうかい。あっ、そうそう。あんた、この間のリヤカーのことで、何か大へんな掲示が出てんだってねえ」
「ああ。それでおれも弱ってるのや」韮山爺は泣き出しそうに顔をくしゃくしゃにした。「こんどの院長はごついねえ。先の院長はとても良かったけどなあ」
「ほんとにそうだねえ。こんどの院長になって、芝生の遊び場所もなくなったしねえ。で、もう会議は終ったのかい。会議が終ったんなら、おれ、あそこの風呂場の風呂桶の中にかくれてやろうと思っているんだ」
「まだやってるよ。滝爺さんも遊佐爺さんも、目を吊り上げて議論してるよ」
「ああ、あの爺さんたち、こわいねえ」甲斐爺は溜息をついた。「なんであんなにトゲトゲしく生きてるのかねえ。どうせ遠からず死ぬんだから、たのしく遊べばいいのにさ」
「ほんとにねえ。怒ってばかりいると、心臓にも悪いよ」
「心臓だけじゃなく、胃腸にも悪いよ。あんまり怒ると、消化が悪くなるってさ」
「そうだろうねえ。怒ってると言えば、院長の海坊主だって——」
「しーっ」甲斐爺は唇に指をあてて、ぎゅっと身体を小さくした。韮山爺も手足を極度に寄せてちぢこまった。二階から階段をおりてくる足音が聞えたのだ。古ぼけた階段は足音と共にぎいぎいと鳴った。韮山爺は甲斐爺の耳元にささやいた。
「鬼かな？」
それは鬼ではなかった。階段を降り切って廊下に姿をぬっとあらわしたのは、詰襟姿の黒須院長であった。黒須院長は右手に洋傘をわしづかみにし、左手には一枚の頼信紙をヒラヒラさせながら、まっすぐにこちらに歩いてくる。その頼信紙には

『コンバンザイインシヤトカイケンス」キロクノヒ
ツヨウアリ」スグライシヨセヨ」クロスゲンイチ』

と院長の筆跡で記されていたが、もちろん屑籠のかげの二老人の眼にそれが見える筈がない。黒須院長はいつもより眼をたけだけしく光らせ、なにものかに突っかかるような姿勢で、どしどしと廊下を踏んでくる。二人の爺さんはすっかり脅え、双生の胎児のようによりそって手足をちぢめ、ふるえ上った。屑籠のかげの二老人の存在についに気付かず、黒須院長はその前を通り過ぎた。

（今夜の会見に、あいつらは何人ぐらいで押しかけてくるか？）黒須院長は奥歯をかみしめて思った。（どのみち交渉は今夜だけでは片づくまい。何日も何日もかかるだろう。交渉の経過を記録して置き、そして相手の失言をつかまえて、ぎゅうぎゅうの目に合わせてやるぞ）

手にした頼信紙は、近頃やとい入れた臨時の書記兼秘書の男にあてたものである。専任の秘書を持ちたいとは、院長年来の希望だったが、予算がどうしてもそれを許さず、やっと近頃中途はんぱな男を臨時にやとうとこまでこぎつけた。黒須院長の宿願はやっと半分達せられたわけだが、もちろん院長自身はそれに満足していなかった。黒須院長は玄関に立ちどまり、頼信紙を四角に折ってポケットに入れ、洋傘をおもむろにひらきながらつぶやいた。

「こんど退院制度を確立することが出来たら、専任秘書を一人要求することにしよう。秘書はやはり若い女がいいな。高峰秀子か島崎雪子みたいな美人を、どこからか探してくることにしよう」

院長室において美人秘書にかしずかれている自分の姿を、黒須院長はうっとりと空想し、険悪な表情を大幅に和ませた。黒須院長は映画はほとんど見ない。しかし映画館前のスチールや街のポスターなどで、それらの女優の名や顔を覚え込んでいたのだ。玄関を踏み出した黒須院長の傘に、雨がじとじととかぶさってきた。玉砂利（じゃり）をしいた道の両側の菜園の、胡瓜（きゅうり）やいんげんの葉も青々と濡れている。院長は傘を前方にやや傾けるようにして、門に向ってとっとっとあるいた。玉砂利が靴の下でじゃりじゃりと音を立てた。廊下の曲り角から顔を半分ずつ出して、二人の爺さんがその院長の後ろ姿を見送っている。

［やぶちゃん注：「島崎雪子」（昭和六（一九三一）年～平成二六（二〇一四）年）は日本の元女優でシャンソン歌手。本名は土屋とし子。東京都出身。大田原高等女学校（現在の栃木県立大田原女子高等学校）卒業。判り易い言い方をすると、かの名作黒澤明の「七人の侍」（昭和二九（一九五四）年・東宝）で土屋嘉男演ずる百姓利吉（りきち）の、人身御供にされた女房（役名なし）役で出ている。野武士の山賊（さんさい）を菊千代らが襲うシークエンスで、彼らが火を放った際、火に気づいて叫ぼうとするが、急に唇を噛むとまたそっと座って、妙に引き攣った凄味のある笑みを浮かべて幽鬼のようにふらりと出てくる。と、眼前に現れた夫利吉を見て驚き、焼け崩れる山塞の中に走り戻って姿を消すのが、彼女である。出番は非常に少ないが、オープニング・タイトル・ロールの出演者クレジットでは津島恵子とともに三船敏郎・志村喬の次で二番手に二人併記で示される。グーグル画像検索「島崎雪

子」をリンクさせておく。]

9

熊井照子は窓枠（わく）にあやうく小鏡をもたせかけ、それをのぞき込みながら、いらいらした手つきで化粧の乱れをととのえていた。窓ガラスはこまかい雨滴をたくさんとどめて曇っている。栗山佐介は赤い卓上ピアノを包装紙でくるみ、それに紐（ひも）をかけようとしていた。鍵盤は紐でおされるたびに、グルルン、グルルンと不機嫌な音を立てた。熊井照子は指で眼の下をおさえ、いらだたしくつぶやいた。

「いやんなっちゃうわ。ここんとこに隈（くま）が出来てる」

そして熊井は顔を半分ずらして、鏡面のなかの佐介の背中に話しかけた。

「ねえ。ビールでも飲みに行かない。頭がくさくさして、やり切れないのよ」

「主任にあんなことを言われたからか」佐介は紐にかけた手を休め、鳩時計をあおぎ見た。時計は三時十六分のところで、長針と短針がピタリと重なっていた。「さてね、実は四時に人と逢う約束があるんだ」

「逢う相手は牛島さんでしょ」熊井は小鏡をつかみ、それを乱暴に自分の机の引出しにしまい込んだ。「牛島さんなんか、すっぽかせばいいのよ」

佐介はふり返って、かすれた声を出した。

「よく判るもんだね」

「そりゃ判るわよ。デパートで別れる時、打ち合わせたんでしょ。動作ですぐに判るわよ」

佐介は紐を結び終え、レインコートの袖に手を通した。鞄と卓上ピアノを重ねて横抱きにした。そしてなにかためしてみるように軽く足踏みをした。

「すこし僕も疲れた」佐介は足踏みを中止して、今度は右足だけを屈伸した。「雨が降ると、右足がとても具合悪くなるんだ。そのせいで身体も疲れるし――」

「お爺さんみたいな口をきくのね。神経痛？」

「いや」佐介はものうげに壁に背をもたせ、熊井の帰り仕度をぼんやりと眺めていた。「高いところから、落っこちたんだ。それ以来、空気がしめってくると、右の膝がしくしくしてくる」

「軍隊で？」

「そんな昔のことじゃない。ずっと近くだ」

そして佐介は首をうしろに曲げて、音のない欠伸（あくび）をした。その色艶のない口腔と舌の色を、熊井はすばやい視線で見た。熊井はレインコートのフードを頭に乗せながら、そこから視線をそむけた。

「そう言えばほんとにあなたは疲れているようね。見れば判るわ。顔かたちがすっかり変るんだもの」

「どう変る？」

「眼がだいいち変よ」
「どんなに変だ？」佐介は光のない眼で熊井を見据えるようにした。
「眼玉がかさかさに乾いてるわ。まるで干葡萄（ほしぶどう）みたい。あたし、あなたのそんな眼、嫌いよ」
熊井はつけつけと口をきいた。彼女も同じく疲れていた。それにこの一室に、第三者がいず、熊井と佐介の二人だけのことは、今までに一度もなかったことだ。そのことが熊井から気がねを取り除き、慣れ慣れしい気持にさせたのだろう。そして熊井は指をまっすぐに立てて、佐介の顔を見た。「その表情よ。何かむごたらしいことでもやりそうな顔！」
「ずいぶんハッキリ言うもんだね」佐介は気がなさそうにまた小さな欠伸をした。「昨夜はサクラ碁会所で碁を打ち、それから近所のある会合に出席して、床に入ったのが午前二時。そして今朝、菅医師を訪問するために、五時に起きた。三時間しか眠っていないのだ」
「睡眠時間のことを言ってるんじゃありませんよ。あんたの顔のことよ」
「うん。だからさ、くたびれて来ると無理が利（き）かなくなるんだ。無理が利かないと、地（じ）の顔が出てくる。もっともムリをしているのは僕だけじゃなく、みんながムリをしている」
「どんなムり［やぶちゃん注：ママ。底本の誤植かも知れぬ。］よ？」
「そら、人と逢ったり、しゃべったりさ、人を眺めたり、眺められたりさ、そんなのがみんなムリなのさ。顔だってムリに笑ったりしかめたり、つまりお互いにつながって生きていることを懸命に証拠立てようとしている。ところが本当はつながってやしないんだな。皆なにか、かんちがいしているんだ。パズル絵みたいに組み合わさっているだけなんだ。ひっくり返せば、皆ばらばらになってしまう。そうなりゃ眼玉だってみんな干葡萄だね」
「へんなこと考えてんのね」熊井は眉をひそめて窓の方に眼をやった。雨はまだ止みそうな気配はなかった。「それじゃあ、あんただってムリをしてるわけじゃないの」
「そうだよ。ムリをしている。困ったものだよ。だからもうムリは止しにして、一番確実なところから、もう一度やり直そうかと思っているんだ」
「あたしは？」
「ハムさんも相当ムリをしているね」佐介はしごく投げやりな口のきき方をした。「人を尾行して喜んだりしてさ。自分の意志で、自分の力で、そして尾行に成功したと喜んでいるんだろう。はかないことだね」
「ふん」熊井は鼻でせせらわらった。「尾行されたから怒ってんのね」
「怒ってなんかいないよ」
佐介は突然眼をやや大きく見開いて、熊井の全身をしげしげと眺めた。今までハムか何か、そんな物体に見えていた熊井の存在が、急に人間の女らしい感じをたたえてくるように見えたからだ。それはあるいはここが雨に降りこめられて、一種の密室になっているせいかも知れない。佐介は自分の中に、かすかに動く動物的な欲情を自覚した。それに感応したように熊井の体は一歩退いた。

「もう出かけましょう」熊井は白茶けたような顔で部屋中をぐるりと見回した。「どこかに鴨志田さんの傘がある筈よ。どうせ鴨さんはもう出て来ないんだから、貰ってってもいいわよ」

洋傘はたくさんの埃をのせて、鴨志田の机の下の床にころがっていた。佐介が机の脚でそれをはたくと、薄ぐろい埃がパッパッとしめった空気の中に飛び散った。

「ねえ。ビール飲まない。あたし咽喉（のど）がからからなのよ」

口内のねばりをそのまま感じさせる口調で熊井が言った。「ひとりでは、ちょっとビヤホールに入りにくいのよ」

「うん」傘を小さく開閉して埃をはらいながら、佐介は生返事をした。

「どうしても牛島さんと逢うの？」きめつけるように熊井は言った。「あんたは先刻、人間はお互いにつながってない、組み合わさってるだけだ、と言ったじゃないの。牛島さんとの組み合わせも、ついでに無視したらどう？」

「うん。でもね、うっかり組み合わせを無視したりずらしたりすると、そのズレが他の部分まで次々に波及して行くんだ。たかがパズル絵なんだけどね、そこんとこがむずかしいんだよ。僕はいっぺん、そこんところを計算間違いして」佐介はちょっと言葉を詰めた。「いや、計算間違いというより、つながっていると誤解したんだな。――」

佐介はそれきりでふいに黙りこんだ。熊井が次をうながした。

「それで？」

「それで、ビール飲みに行くとするか」佐介は不器用に話を外（そ）らした。「四時に逢うと約束したけれども、あれから二時間半の間に、ずいぶん情勢が変ったからな。牛さんと逢う意味もなくなってきた」

「ふん、二人して何か陰謀をたくらむつもりだったのね」

「陰謀じゃないよ。組み合わさったままでは窮屈だから、そいつをすこし変えてやろうかと思ったんだ。それだけだよ」

「じゃやはり陰謀じゃないの」

「陰謀じゃないさ。陰謀というのは、二人か二人以上でやるものだろう。ところがこれは僕一人だ」

「あら、ずいぶん悪党ぶったせりふね」熊井はわざとらしいイヤな笑い声を立てた。「どうしてそんなことをたくらむのさ」

「興味があるからさ。それ以外に面白いことはないもの。どうせ僕ははみ出ているんだ。そこらをゆすぶって、もぐり込むより他に手はないんだ」佐介は洋傘の埃をすっかり払い落し、ふたたび鞄と卓上ピアノを横抱きにした。もう体内の欲望はすっかり消え去っていた。「さあ。出かけるか」

佐介が先に立って扉を押し、附段を降り始めた。狭い階段なので卓上ピアノの角が壁にこすれてギチギチといやな音を立てた。熊井は鍵をかけるために少し遅れた。階下の土地事務所は客の姿はなく、事務員が三人ぼそぼそと私語していたが、佐介の足音でいっせいに顔を

こちらに向けた。この階段を上り下りする度に、佐介は彼等の視線でしごかれるような気がする。どういう意味にしろ、眺められるということは、いい気持のものでなかった。無意識裡に佐介は鞄を前に回し、防禦的な姿勢をとりながら、この古い建物の軒に出た。雨がやわらかに佐介の頬にしぶいた。窮屈に傘をひろげかけた時、町並の彼方の白濁した空から、鈍重な遠雷のひびきがつたわってきた。それは初めは低く、それからしだいに重いものをころがすような響きとなり、そのまましばらく連続して鳴動した。それは佐介に突然、あの夜闇の中を陸橋に近づいてくる牛車のひびきを、まざまざと憶い出させた。にぶい戦慄が佐介の身内をつらぬいた。海藻を満載した幻の牛車は、白濁の空を押しわけて陰鬱な鳴動とともにじわじわとこちらに近づいてくる。……

「ああ」佐介は思わず低くうめいた。「おれはいつもここに戻ってくる。離れよう離れようと思っても、おれはいつの間にかここに引き戻されてしまう」

遠雷がもたらす不快な空気の震動のなかで、佐介は瞼の裡にあの牛の顔をありありと思いうかべた。牛は意志も感情も持たない眼で、じっと前路の闇をむなしく見据えていた。その記憶が佐介の眼筋にひとつの刺戟としてつたわり、彼は眼を大きく見開いて、その焦点を雨に煙る町並の上に固定した。（こんな具合か）記憶に肩すかしをくわせるためには、これ以外の方法はなかったのだ。街は街自体の性格をすっかりうしない、無意味で雑多な堆積に見えてくる。しかし佐介の眼は彼の意に反して、外見的には牛の眼には全然似ていなかった。緊張によるかるい斜眼（すがめ）にかぶさって、瞼が神経的にぴりぴりと痙攣（けいれん）しているだけであった。佐介はぴくりと身体をふるわせて、背後をふりむいた。

「おまちどおさま」熊井がフードの加減を直しながらそこに佇（た）っていた。フードの中で熊井の顔はふだんよりもまん丸く見えた。「どうしたのさ、へんな顔をして」

「何でもないんだ」

熊井は佐介の肩を押すようにして、傘の下に入ってきた。そのままよりそった形で、二人は濡れた街の風景のなかに歩み入った。

「何でもないんだ」佐介は同じ言葉をくりかえした。「疲れているだけの話なんだ。それにしても、君の顔はほんとにまん丸いんだね」

「そのピアノ、あたしが持ちましょか」殺風景な部屋を離れ、雨衣ごしに身体を接して歩くことだけで、熊井の感情は単純に生き生きと動いた。「持ちにくいでしょう」

「いいよ」

「このピアノね、千円でいいわ。考えてみると、あんたにまるまるおっかぶせては、気の毒だもの」

「四百円分だけ同情するのかね」佐介はそっけない口調で言った。「同情はごめんだね。同情というほどイヤな言葉はない」

「だってあんたも先刻、同情という言葉を使ったわ」

「あの時、ほんとにうっかりしてたんだ。取消すよ。僕は今疲れていて、他人に同情する余裕はない」傘の柄をにぎる佐介の右手に、熊井の左掌がかるく触れた。「実を言えば、これ

を君から買い取ったことも、今少々後悔してる位だ」
「あら、そんならムリに買い取って貰いたくないわ。デパートに持ってけば、引取ってくれるんだから」
　また西の方から遠雷の音がつたわってきた。それは前のよりはいくらか弱かった。
「さて」と佐介がつぶやいた。「牛さんのことはどうするかな」
「すっぽかしなさいよ。あんな助平」
「そう簡単にも行かないんだよ。これも仕事の一つだから」
「ああ、さっき主任が言ってたの、それね。L十三号」
「ふん。君はすこし気が付きすぎる。しかも、その気の付き方の根元にあるのは、好奇心だけだ。いつか君はきっと自分の好奇心から復讐されるよ」声をおとして、「もっとも女なんて、皆そんなものだけどね。好奇心なんて、生きて行くことのテコや、行動することのテコには、絶対にならないものだよ」
「バカにしてるわね」
　熊井の指がつと動いて、傘の柄の佐介の手の甲をきつくつねり上げた。佐介はかすかに悲鳴をあげて、卓上ピアノを取り落そうとした。
「それじゃ、あんたは、一体何で生きてるのよ。いつもふらふら、ふらふらしている癖に」

　午後四時、駅の改札口からすこし離れた柱の下に、牛島康之は立っていた。着ているビニールのレインコートは濡れて額にへばりついていた。ふだんなら外であきないする筈の新聞売子たちが、雨のため駅の構内にたむろしていて、そこら一面が人波でごちゃごちゃに混雑している。牛島康之は柱の下にじっと立っていた。人間にはいろんな型があるが、牛島の下駄に似た四角な風貌は、『待つ』という動作においていかにもピッタリと似合っていた。いかにも人を待っているという感じで、牛島康之は棒杭（ぼうぐい）のように佇（た）っていた。
　一杯のビールが、熊井照子の頬をぽっと赤くさせ、栗山佐介の顔をやや生き生きさせていた。もう眼玉も干葡萄の感じはなくなり、唇もわりによく動いていた。時刻外れなので、ビヤホールの中もそう混んでいない。二人はシュロの鉢植えのかげでなく、見通しのまんなかのテーブルに腰をおろしていた。ああいう職業に従事していると、かえって逆の心理がはたらいて、そんな席を選んでしまうものだ。全然他人から見られない場所か、あるいは全然見通しの場所。中途半端な場所はかえって具合が悪かった。素通しの盲点みたいな席に腰かけて、二人は一杯ずつのビールを飲みほした。二杯目の券を買いに熊井が立ったあと、佐介は顎杖をつき、しばらく時計をにらんでいた。時計の針は四時二分過ぎをさしていた。佐介の隣の椅子には、鞄と卓上ピアノの包み、それに洋傘がたてかけてある。洋傘からの水が床に不規則な水たまりになってひろがっていた。包装紙もすこし濡れて破れ、卓上ピアノの赤塗りの地肌がのぞいている。デパートへ返品するという件も、うやむやになってしまったものらしい。店内のラジオが大きな音を立てて鳴っていたが、ビヤホールのまばらな客も給仕人

も、誰もそれを聞いていなかった。趣味講座『猫の飼い方』。声は空気をひっかき回すだけの役割を果たしていた。熊井照子が席に戻ってきて、二杯のビールが運ばれた。

「戦後になって、外米がぞくぞくと入ってくるようになってきた」ビールの泡を舌で舐(な)めて、佐介が含み声でそう言った。「ところが外米は、品種や栽培法の関係上、バサバサしている。そこで料理に工夫をこらして味をおぎなうと言うことになるね。たとえばどんな料理が外米に適するか」

「カレーライスやヤキメシね」熊井が口をはさんだ。一杯のビールが熊井の発音を軽くしていた。料理は女の専門だという自負の感じもあった。

「そうだよ」佐介はうなずいた。「だから戦後カレー粉の需要がぐんとふえた。外米の関係と、それにカレーライスというやつは、家庭料理の中でも安上りの料理に属するな。だからカレー粉は夏でも冬でも需要が絶えない。需要がふえると、生産もふえる。今までのカレー工場は拡張するし、また新規の工場もあちこちに出来てきたんだ。つまり外米の輸入にともなって、カレー粉の原料も続々と輸入されるということになった」

「そうね。カレーの木は日本にはないものね」

「そう知ったかぶりをするんじゃない」佐介は軽くたしなめた。「カレーの木は日本にはないが、外国にもないんだ。世界中のどこにもそんな木はないんだ。あのカレー粉というやつは、たくさんの木根草皮[やぶちゃん注:「もっこんそうひ」と音読みしている模様である。]を粉にして混合したもんだよ」

「木根草皮ということはないでしょ」熊井が揚げ足をとった。「草根木皮なら判るけど」

「そうだ。言いそこないだ。たとえばどういうものが入っているかと言うと、辛味としてはコショウ、ショウガ、唐辛子、カルダモン。香料としてはウイキョウ、肉桂、クミン、フェネグリーク、ナツメッグ、月桂樹」佐介は胸のポケットから、そそくさと小さな皮手帳を取り出し、頁を開いた。「ここにいろいろ書いてあるだろう。着色にはターメリックだ。つまり鬱金(うこん)だね。これは印度産。オールスパイス、これも日本に出来ない。世界で出来るのはジャマイカ島だけだ。カレー粉の原料の九割までは外国産で、日本で出来るのはわずか一割というわけだ。上等のカレー粉になると、三十何種類という草根木皮が使われるが、近頃出来[やぶちゃん注:「しゅったい」。]の町工場などではそんなに使ってやしない。せいぜい十二、三種類だね」

「よく調べ上げたもんねえ」

熊井は嘆声を発して、手帳の頁をのぞきこんだ。頁にはたくさんの片仮名の名前が、ずらずらと並んでいた。

「どうしてそんなに調べたの。町工場でも開くつもりなの?」

「それはあとで言う。もともとカレー粉というやつは、インド人種の中のタルミ族が使い始めたものなんだ。なにしろ印度は暑い。暑いから食欲がおとろえる。だから刺戟性のもので食欲を刺戟することになるんだ。カレー粉というものは、大へん刺戟の強いものだね。そこから問題が出て来たんだ」

駅西口の改札口の近くで、『待ち男』の牛島康之は円柱にもたれ、二本目の莨（たばこ）をふかしていた。時計は四時十五分をさしていた。彼は少しずつじりじりし始めていた。改札口の改札係は、次々出てくる人波をさばくためにアクロバティックな手の動かし方をしていた。さばいてもさばいても、流れてくる人波は絶えなかった。その時駅の内からあふれてくる人波の中に、ひときわ背の高い禿（は）げ頭の男の姿が見えた。夕陽養老院の黒須院長であった。黒須院長は洋傘をわしづかみにして、もまれるように改札口を出てきた。院長の禿げ頭はじっとりと汗ばんでいた。

（さあ。何か旨（うま）いものでも食べよう）

電報を打ちに出たついでに、ふっと気が向いて、院長はこの盛り場に出る気持になったのだ。久しぶり街を歩く若い女も眺めたかったし（女秘書の空想で院長はかなり情緒を刺戟されていた）、今夜の会見にそなえて栄養物を摂っておく必要もあった。栄養を摂らなきゃ耐久力も出ない。それに相手は大勢なのだ。黒須院長はあたりをへいげいしながら、『待ち男』牛島のそばをのっしのっしと通り過ぎた。牛島は莨をぐいとふみ消しながら、またいらいらと電気時計を見上げた。

「その工場はだね、今年の初めまで、キャラメル工場だったんだ。ところがそいつが大資本に圧迫されて、とたんに潰れてしまった。そしてカレー粉工場になってしまったんだ」佐介は熊井を見詰めながら、熱心な口調になった。牛島のことはもう忘れてしまっていた。「キャラメル工場ならまあ我慢出来るけど、カレーは困るな。修羅印（しゅらじるし）カレーと言うんだが、なんだか名前からして辛味が利いてるようだろ。だから売行きもいいらしく、近頃では三部制か何かにして徹夜作業をやっているんだ。運び込んだ原料を粉にするのに、どういう方法をとるか、原料が原料であぶらっ濃いのが多いから、製粉機やミキサーは使えない。キネでつくんだ」

「お餅みたいにして？」

「いや、人力でつくわけじゃなく、機械は機械だけどね、やはり形式としてはウスとキネだ。何十というウスと何十というキネが、間断なく、ガシャ、ガシャ、ガシャと落下する。その音がたいへんなものだ。夜なんか一町［やぶちゃん注：約一〇九メートル。］四方にひびきわたるね」

「あんたの家、その工場の近くにあるの？」

「その工場が、僕の家の近くにあるんだ」と佐介は訂正した。「塀ひとつ隔てたと言っていいくらいの近さにあるんだ。音は音として、それでいいとしよう。こんどはにおいだ。工場の設備が悪いために、そこら中がカレー粉で汚染されている。風向き次第でその粉は遠くまで流れて行く。毎日々々カレー粉を吸わされている人間が、一体どうなるか。どういう変化をおこすか。僕が今目の昼飯の注文で、カレーライスがイヤだと言ったら、仲間はずれをすると君は非難がましい口をきいたね。これでイヤなわけが判っただろう。だからあまりお節介はやかない方がいいんだよ」

「お節介じゃないわ。親切心で言ったのよ」

「そして僕らは集まった。僕らというのは、工場近くに住んでる連中のことだ」酔いが饒舌にさせているのを意識しながら、佐介はその流れに任せていた。しゃべることはこころよくもあった。「集まっていろいろ相談した。そして工場主の修羅吉五郎に交渉を始めることになったのだ。僕の役割は各種の調査ということになった。だからいろいろ調べ上げたのさ」

佐介は手帳をぽんと叩いて、ポケットにしまい込み、ジョッキの半分をごくごくと飲みほした。

「昨夜の会合というのもそうさ。そう須貝に報告したらいいだろう」

「ふん、なぜ？」

「あそこじゃあ原則的に、お互いがお互いを見張るという仕組みになってるんだ。人間の組み合わせとしては、一番単純な組み合わせだね。それであの須貝主任は、いっぱしうまくやってるつもりなんだ。もう彼も少しヤキが回ったね。L十三号だってそうさ。ああ、そうだ。牛さんはどうしたかな？」佐介はまた時計を見た。「もう三十分の遅刻だ」

「あたし、報告なんかしないわ」熊井は間接に監視の事実を認めた。「でも、研究所の仕事にはあまり熱心でないくせに、カレーのことになるとやけに熱心なのね」

「だってカレーのことは重大だもの。おかげで、カレーライスという旨い食べ物を僕は嫌いになったわけだろう。しかもそれは他力によってだよ。他の力によって、僕はカレーライスという快楽を奪い去られたんだ。奪われたものは奪い返さねばならない。そう僕は僕自身に、近頃くれぐれもそう言い聞かせているんだ」

佐介は苦しそうな笑いをうかべ、本当に自分に言い聞かせるような含み声になった。

「そこを黙っていると、僕はまたダメになってしまう。ダメになったきり回復出来なくなってしまう。人間なんてそんなものだというところに落っこちてしまう。今だって半分落っこちているんだ」

「あなたなんか、研究所の仕事をやめるといいのよ」母性的な衝動が熊井を動かした。「あんな悪党仕事はあなたには向かないわ」

「ふふん」我に返ったように顔を上げて、佐介はつめたい声を出した。「悪党仕事？　君だって平気な顔で勤めてるじゃないか」

「あたしは直接仕事にタッチしてないもの。雑用だけだから」

「へえ。そいつはずいぶん都合のいい論理だね」佐介は頬にうす笑いをうかべた。それはあの須貝主任の悪党めかした笑い方にどことなく似ていた。「なにが悪で、なにが善か。そこをはっきりさせないと、君の忠告はなり立たないんだよ。よくそういうごまかしの場所に、安心して坐って居れるな」

「あんただって、ごまかしじゃないの。カレーライスが嫌いになったからって、カレー粉を分析して何になるのさ」

熊井はいらだたしげに卓の下で足踏みをした。電気時計をまた見上げながら、牛島はいらいらと足踏みをしてつぶやいた。

「もう三十分以上待たせたな、これ以上待たせると、俺はほんとに怒り出すぞ。ほんとにあ

いつ、何をしてやがるんだろう」

そしてこの辛抱強い待ち男は、せかせかと鞄をひらき、中から針と糸を出して、レインコートの裾をつまみ上げた。裾の一部分が、さっき木馬の釘にひっかけて、かぎ裂きになっていた。牛島は柱の下にしゃがみ込んで、そこをつくろい始めたが、地がビニールなので、どうもうまく行かないらしかった。佐介は残りのビールを一気に飲みほした。熊井のそれはすでに空になっていた。

「さあ、出かけるか」佐介は言った。「じゃあこの卓上ピアノの代金を払うよ」

「千円でいいわ」

「ムリしなくてもいいんだよ」

そう言いながら佐介は千円札一枚を取り出し、卓の上に乗せた。卓にこぼれたビールにそれはきたならしくベタリと貼りついた。佐介はあわてて小指と親指でそれをつまみ上げた。

「千円でいいのかい？」

つまんだ指を離して、惨めな表情で牛島は立ち上った。針と糸を鞄にしまい込み、かなたに見える横町の方を眺めながら呟いた。

「すこし腹もへってきたな、どうも富岳軒のライスカレーは盛りが悪い。二つぐらい食わないと、腹にこたえないな。嘆かわしいことだ」

牛島が眺めているその食い物屋横町の三軒目の鰻（うなぎ）屋に、黒須院長はどっしりと腰をおろして、さっきから大串（おほぐし）の鰻をせっせと食べていた。鰻はしたたるばかりのあぶらを乗せ、院長の口腔の中をねとねとにした。黒須院長は飯を口に運び、そしてまた大串を横ぐわえにして、満足げに鰻の身をしごきとった。院長の居はねっとりと艶を持ち、その眼は単純なよろこびにあふれていた。少くともこの瞬間だけは、黒須院長は完全にニラ爺たちのことを忘れ果てていた。忘れ果てて鰻に没頭していた。

［やぶちゃん注：本章で遂に連関が不明であった「1」の自殺未遂のシークエンスがここで連結され、あの男が栗山佐介であったということが明らかにされる。また、唐突に映像的に黒須院長と牛島の街頭で行き違うカット・バックやモンタージュのシークエンスをことさらに挿入して描くところからも映像的面白さを狙った以外に、話柄中の別の関連性の可能性の示唆をも示しているのではないかという感じが濃厚に伝わってくるではないか。ここで、黒須が雇っている書記というのは実はこの佐介なのではあるまいかという推理が働くからである。週に三日しか出社義務がない佐介が、残りの日を「都内某団体の書記」をしているという自身の告知とが上手く当て嵌まってくるように見られるからである。

なお、底本の解説で中村真一郎氏もこの最後の部分の面白さを、『フランスの現代作家たちが多く試みている「同時性」の手法なども、彼は面白がって、殆んどパロディー風に、あるいは漫画風に活用させてみせている』。『第九章の終りで、作者が「熊井はいらだたしげに卓の下で足踏みをした。電気時計をまた見上げながら、牛島はいらいらと足踏みをしてつぶやいた」と続けて書いているが、熊井という女はビヤホールでメートルをあげているのだし、彼女にからまれている佐介という男に待ちぼけをくわされて、牛島は駅の構内で苛立って

いるわけである。二つの異った場面が、その同時性によって、相つぐセンテンスに結合させられている。こういうやり方は養老院の騒動の場面になると、殆んど映画のカット・バックのように頻用されて、滑稽な効果をあげているのである』と特に挙げて評価しておられる。

「フェネグリーク」マメ目マメ科マメ亜科フェヌグリーク属 *Trigonella foenum-graecum*。英語名「fenugreek」。ハーブ・香辛料の一種でもある、マメ亜科の一年草植物。地中海地方原産。古くから中近東・アフリカ・インドで栽培された。日本には享保年間に持ち込まれたことがあるが、農作物として栽培されることはなかった。英名の fenugreek は大雑把に言って古いラテン語「faenum graecum」（ギリシアの馬草（まぐさ））に由来し、この古語がやや変化して現在の種小名ともなっている。本邦では「フェネグリーク」の音写もよく使われる。詳しくは参照したウィキの「フェヌグリーク」を見られたい。

「タルミ族」これは「タミル族」のこと。主に南インドのタミル・ナードゥ州やスリランカの北部・東部に住み、タミル語を話すドラヴィダ系民族で、誤植や誤記ではなく、梅崎春生がわざと悪戯から、かくした可能性も排除出来ない（後で実際に洒落出る。そうした傾向は彼の中にある）。カレーの語源には諸説あるが、タミル語で「食事」を意味する「kaRi」という説が有力である。」

10

追加の鰻大串一本と、そえものの奈良漬をすっかり食べ終ると、さすがに黒須院長も腹いっぱいになったらしく、大きくひとつ背伸びをし、それから熱い茶をすすりながら、満足げにあたりを見回した。せまい店内に、客は黒須院長だけであったが、外の小路には人通りが繁く、洋傘と洋傘はぶつかり合い、中にはのれんの隙間から店内をのぞきこみ、そのまま行き過ぎて行く男女などもあった。向いのパチンコ屋からはひっきりなしに、玉の弾ける音、ざらざらと流れ出る音が、にぎやかに聞えてくる。黒須院長は茶碗を持ちかえて、調理場の方におもむろに首を動かした。調理場の横に畳敷きの小部屋があって、そこに一人の小さな老婆が先刻から、向うむきにひっそりと坐っている。針仕事かなにかをしているらしい。表のにぎやかさにことさら背を向けた風情（ふぜい）で、そのかたくなに曲った背中を眺めながら、黒須院長はふと考えた。（つまり、老人というやつは、死ぬために生きているんだな）その着想は黒須院長をすっかり満足させた。院長はつま楊枝を横ぐわえにして、一瞬目を凝（こ）らし、老婆の背中にしげしげと見入った。（子供が生きているのは、大人になるためと同じ如くにだ。死ぬために生きているのなら、我々壮者は出来るだけ手を尽して、彼等を死なしめて上げるべく努力しなければならん。それが我々の責務であり、親切と言うものだ）院長は老婆の背中に、在院老人たちの顔をずらずらと思いうかべながら、重々しくうなずき、そして詰襟服のポケットを探って奥に声をかけた。

「代はここに置いとくよ」

卓の上に紙幣や硬貨をならべ終え、店名入りの広告マッチをポケットにしまうと、黒須院長

は勢いよく立ち上った。のれんを禿げ頭でわけ、洋傘をぐいとひらいた。それをパチンコ屋から出てきたものとカン違いをした景品買いの女が、黒須院長によりそうように近づいてきたが、院長にひとにらみされて、あわてて軒下に退散した。院長が改札口の近くまでやって来た時、牛島康之は円柱の下に佇（た）っていなかった。その場所には小さな新聞売台が置かれ、頭髪を長くした青年が二人元気のいい声で『アカハタ』の呼び売りをしている。牛島康之は既にそこからずっと離れた別の柱のかげに移動し、時々顔をちらちらのぞかせて、改札目付近を監視していた。この敏感なネズミのような『侍ち男』は、佐介の遅刻になにか不吉な異変みたいなものを感じ、いくらかおどおどしているらしかった。電気時計は五時五分前を指している。牛島は柱のかげに頭をひっこめ、弱々しく舌打ちをして呟いた。

「畜生。五時までにやって来なけりゃ、もう待っててやらねえぞ」

黒須院長は洋傘を小脇にかかえたまま、『アカハタ』売台に眼をとめ、雑踏の中でちょっと立ち止り、その方を見据えるようにした。青年たちはなおも声をからして熱心に叫んでいる。でも熱心に叫んでいる割合には、『アカハタ』の売れ行きは良くないようだったし、ただ叫ぶために叫んでいると見えなくもなかった。院長の大きな軀（からだ）は人波に押されて、再びゆるゆると動き出した。（ふん、『アカハタ』か）脚をのろのろと動かしながら、視線は『アカハタ』売台に固定させ、院長は舌なめずりしつつ考えていた。唇にはまだ鰻の味が残っていた。（あいつら、滝川や松木、それに遊佐爺なども、ほんとにアカの一味かも知れんな。アカであったら、どうしたらよかろう？）院長はしかしアカに関しての知識はほとんど持っていなかった。書道教師の父親から、院長は少年時代に、アカは疫痢（えきり）やコレラより恐いものだと、呉々も教えこまれていた。院長はあざらしのようにぶるんと顔を振って、視線を『アカハタ』青年から引っ剝がし、肩をぐんとそびやかして恐怖を追っぱらった。そしてそのまま音もなく、改札口に吸い込まれた。改札係の両手は相変らず派手な動き方をして、あふれる人波を次々にさばいている。かなたの円柱のかげから、また牛島が形式的に顔を出して、背伸びをした。

「もう来ねえつもりかな？」しかし牛島の眼はとたんに緊張して、爪先立つだけでは足らず、両腕で柱を抱いてよじ登ろうとする格好になった。そして忌々（いまいま）しげにつぶやいた。「あの野郎、今頃になってのそのそと来やがる。まるまる一時間の遅刻じゃないか。それにありゃなんて格好だ。お上りさんじゃあるまいし」

『アカハタ』売台のすこし手前のところで、栗山佐介は立ち止り、あたりをきょろきょろ見回していた。卓上ピアノと鞄を重ねて胸に抱き、洋傘の曲り柄は二の腕に辛うじてかかり、不安定にふらふらとぶら下っていた。その窮屈な野暮ったい格好で、佐介はしきりに牛島康之を求めて四周（あたり）を見回していた。佐介のその視線を避けて、牛島はすばやく顔をひっこめ、柱のかげにしゃがみこんで莨（たばこ）に火をつけた。（どうもあいつはおかしいぞ）煙を吸い込みながら牛島はいつも考えることを考えた。（平気で人を待たせて、今頃きょろきょろしてやがる。ほんとにあいつはバカか、それとも何かたくらんでやがるのか――）莨はしめって味が悪かった。莨だけでなく、駅舎内部の空気は、乗降客の雨衣や傘から

たちのぼる湿気で、むっと濁っていた。佐介は電気時計を見上げた。その瞬間鴨志田の洋傘は、たまりかねたように腕から外（はず）れて、コンクリートの床にぐしゃりと辷（すべ）り落ちた。佐介があわてて腰を曲げようとした時、包装紙がやぶれてほとんどむき出しになった卓上ピアノは、コロロンと不随意な鳴り方をした。

（もうどこかに行っちゃったんだろう。なにしろ一時間の遅刻だからな）今度は胸の荷物に洋傘をいっしょくたにかかえ込み、佐介はきょろきょろするのをやめ、のそのそと切符売場の方に歩き出した。研究所勤務に彼は定期券を使用していない。隔日の通勤だから、定期ではむしろ損になるのだ。牛島は莨をふみにじり、柱のかげから飛び出し、膝を曲げるような奇妙な歩き方で（背丈を低くして人波に顔を没するためにだ）そのあとを追った。そして佐介のすぐあとに並び、手もとをのぞき込みながら同じ方角の切符を買い求めたのに、佐介はそれに全然気がつかないでいた。気がつかないまま背中を押されるようにして、窮屈に改札口を通り技けた。改札を通過した群衆は、それぞれ目的の線のホームに、ひしめき合いながら大束になって分れてゆく。そのひとつの束の流れに乗り、五分後に佐介がやっとQ電鉄のホームに到着した。そのホームにも人はあふれ、スピーカーの鼻にかかった声が、高い天蓋に反響している。やがて二番線ホームに三両連結の準急電車が、しずしずと徐行しながら入ってきた。電車は反対の扉から少量の乗客をはき出し、それからこちら側の扉をひらいた。ホームの上の群衆は自然の法則にしたがって、下水溝に流れ入る塵埃のように、各扉にずるずると引っかかりながら次々吸い込まれて行く。その流れにまきこまれて、足を動かした覚えはないのに、まるでエスカレーターに乗ったかのように、佐介の体もいつの間にか電車の中に搬入されていた。ほとんど身動きも出来ない姿勢で、前後左右からしめつけられていた。発車のベルが鳴り、扉が一斉にギイとしまると、湿ったもののにおいがむっと高まってきた。ゴム引きのにおいや毛織物のにおい、皮革や金属の発するにおい、呼吸や滓（かす）や分泌物や、それらをひっくるめた人間という生きもののにおい……。

（とにかく、ここには、人間が多過ぎるんだ。ここだけでなく、どこもかしこも――）ピアノの角で肋骨（ろっこつ）をぎりぎり押されながら、佐介はぼんやりとそんなことを考えていた。ビールの酔いがまだ気持をだるくしていて、牛島のことなんかすっかり忘れ果てていた。（あまり多過ぎるということのために、人間は人間でなくなろうとしているのだ。人間以外のものになろうとしている。ただはめこまれるだけの木（もく）ネジになりかかっている。昔はよかった。昔は人がすくなかった。だから人間は完全人間として生きることが出来た。たとえば他人に対しても、自然に対しても、病気に対しても、人間は人間らしく生きていた。今はちがう。今は自然は人間にとってもう自然ではないし、病気ももう病気でなくなろうとしているのだ。自然は建物や乗物や爆弾にかわってしまった。いろんなものが人間をおきざりにして、変ったり進んだりしてしまったんだ。人間はたちまち遅れて、おろおろ立ち止って人間であることをやめてしまうか、オートマティックに部品として生き残るか、それ以外に手はなくなった。生き甲斐の『甲斐』が人間から失われてしまって、雑多な日常にダニのようにくっついていることだけで精いっぱいで、それで生きていると思い込んでい

る。ダニも病んでいるし、吸いつくその本体も病んでいる。それに病んでいる自覚もないし、自分が不幸であることも知らないのだ）車体は速力を増して左右に動揺し始めた。佐介は人の頭の間から、窓外の景色をとぎれとぎれに眺めていた。（自分が幸福であることを知らない連中に、お前は幸福だと知らせてやることよりも、自分が不幸であることを知らない連中に、お前は本当は不幸なんだぞと知らせてやることの方が、よっぽどイミがあるのじゃなかろうか。つまり人を幸福にすることよりも、人を不幸にすることの方が……）車内にじとじとともったもののにおいの中に、その瞬間佐介の鼻はふと微かなカレーのにおいをかぎ当てた。佐介は眉をひそめて思考を中止し、鼻をくんくんと鳴らしながら顔を動かした。カレーのにおいはたしかに直ぐ近くでただよい動いているようであった。（俺の洋服やレインコートの地にまでしみ込んだカレー粉が、前後左右から押しつけられて、じわじわと滲（にじ）み出て来るのかも知れないな）佐介は右手を混み合いの圧迫からスポッと引きぬき、袖口あたりをそっと嗅いでみた。それからその手を不自然に曲げて、少しずつ荷物と胸の間に差込んだ。その人差し指が胸の内ポケットの中のがさがさしたものに触れた。そこらで線路が大きく曲るらしく、乗客の重味が一斉に片側にかかり、佐介の右掌は卓上ピアノと胸の間にぐぐっと万力（まんりき）のようにしめつけられた。佐介は声にならない悲鳴を上げ、力のおもむくまま全身をうしろのものに押しつけた。

「イテテテ」

佐介のすぐ背後にうまい具合にはさまっていた牛島康之は、佐介の肩で顔面をしたたか圧迫され、たえかねて小さな悲鳴を上げた。この実直な尾行者は、電車の内でも膝を半ば曲げ、背丈を四五寸ばかり倹約していたのだ。車内全部に声ある悲鳴、声なき悲鳴を充満させて、車体のひしぎはやっと正常に立ち戻った。人々は束の間を稼ぐように、大きく息を吸い、またいそがしく息をはき出した。牛島は憤然と足を伸ばし、本来の背丈になり、押しつけられた四角な顔を腹だたしそうに掌で撫で回した。佐介は内ポケットのがさがさをつまんで、右手をそこから一気に引っこ抜いた。つまみ上げたものはれいの無記名の脅迫状であった。佐介は窮屈そうにその裏表をしらべ、顔の前に持って行き、鼻を鳴らしてそのにおいをかいだ。牛島はそっと爪先立ち、肩越しにそれをのぞき込んだ。

（あれほど言って置いたのに、まだ平気で持ち回ってやがる！）牛島は眼を三角につり上げて、佐介の後頭部をにらみつけた。（万一この電車がテンプクして、乗客全員死亡ということになってみろ。貴様の屍体のポケットのその手紙から、貴様の仕事がばれ、ついでに白川研究所の仕事がばれ、そしてこの俺までが迷惑することになるじゃねえか。あ、そうか、全員死亡とすると、俺まで死んじまうわけになるか）もちろんこの声なき叱声は、佐介の耳には入らなかった。においを嗅ぎ終ると、佐介はちょっと首をかしげ、今度は封筒の下辺を口にぐわえ、指で中身の使僕を引っぱり出そうとこころみた。満員電車の中だから、なかなかその作業は難渋を極めた。

「えへ、えへへ」

封筒の一端をくわえたまま、突然后の端からだらしない笑いを洩（も）らしながら、佐介

はやっとペラペラの便箋を引っぱり出した。そんな危険な便箋を人前で引っぱり出させまいと、牛島が指を鈎の手に曲げて、背後から佐介の脇の下をこちょこちょとくすぐったのだ。

「えへへへ」

佐介は身もだえしながら、便箋をまた鼻の下に持って行った。そして宙でそれをがさがさと拡げた。佐介は笑いを収めた。くすぐりを牛島が中止したからだ。便箋をおおっぴらに拡げた以上、これ以上くすぐって佐介に気付かれると、周囲から同類と見なされる危険があったのだ。夕方の満員電車の乏しい光線の中で、佐介はふたたびその文言を、わざとらしい活字体のペン字の文章を黙読した。

『今の調査を打ち切れ。打ち切らねばお前の身は危険である。右警告す』

佐介と腹背を接して、牛島はむっとした表情で、太い頸（くび）を可能なだけ横にねじ向けていた。そっぽ向くことで無関係者の感じを出そうと試みていた。しかし牛島の配慮にかかわらず、佐介の周囲の乗客たちは、押し合いへし合いすることだけで手いっぱいで、誰ひとりとしてそのピラピラの便箋に関心を示してはいないようであった。佐介は読み終ると、またそれを鼻の頭に持って行った。さっきただよったカレーのにおいは至極かすかなものであったし、それに鼻が慣れてバカになったせいもあって、においの本体がこれかどうかもう見極めがつかなくなっていた。

（一体この手紙の発信者は――）便箋を苦労して封筒の中に戻しながら佐介は考えた。（白川研究所の事件の関係者かそれとも修羅印カレー粉関係か？）研究所気付で来たのだから、研究所関係とも考えられるが、しかしカレー粉問題も急迫していて、その方面からの警告かとも考えられる。さっきどこからともなくカレー粉のにおいがしたのも怪しい。この手紙から発したものとすれば、カレー粉関係だろうと推定出来るが、今のところはまだハッキリしない。しかしいずれにしても、彼の調査活動を封じようとしていることだけは、確かであった。佐介はふくらんだ封筒を二つに折り、車体の動揺の隙をねらって、やっと元の内ポケットに戻すことに成功した。そして佐介はまたぼんやりした眼付きになって、人の頭と頭の間から窓外に眼を放った。濡れた窓ガラスの向うに、黒い屋根や白い道が滲んだまま、うしろへうしろへかけ抜けてゆく。

（とにかくどこかに敵がいる。目に見えない敵がいるのだ）佐介はぎっしりと自分を取り巻く乗客の頭を見回しながら、やや悲壮な気持でそんなことをかんがえた。満員電車に乗ったりすし詰めの映画館に入ったりする時、いつも佐介は感傷的になり、孤独的になる傾向があった。準急電車はちょっとスピードをゆるめ、駅をひとつすっ飛ばし、また森々と速力を上げた。（目に見える敵、目に見えない敵から、じりじりと包囲されているようだ。そう思うこの俺も、他の誰かにとっては目に見えない敵であり、また別の誰かには目に見える敵になっている。俺たちがもしお互いにつながり合っているとすれば、そういう関係においてつな

がっているのだ）

しきりに周囲を見回していた佐介の眼は（周囲と言っても背後までは首が回らなかったが）、突然こみ上げてくる憎悪と苦痛をふくんでキラリと光った。またしても車体が片側に傾いて、周囲からぎゅうとしめ上げられたのだ。胸にはさんだ卓上ピアノの木質部が、グリグリグリというような音を発したようなので、佐介は必死にそれをかばいながら、思わず小さくうめき声を立てた。（ああ、皆してこの俺を、俺と卓上ピアノを、不法にもぎゅうぎゅうしめつける）その佐介の背に接して、牛島は歯を食いしばり、額から汗をふき出しながら、声なき怒声を立てていた。（畜生め、皆でよってたかってこの俺を、ぎゅうぎゅうぎゅうとしめ上げる。俺をペチャンコに押しつぶす気か！）

この二人だけでなく、車内のいたるところで、うめき声や悲鳴が不規則にあがっていた。乗客の一人々々が、周囲をぎゅうぎゅう押しまくることによって、周囲からぎゅうぎゅう押しまくられていた。すべての乗客は、被害者であると同時に、加害者でもあった。力学の法則によって彼等は余儀なく加害者となり、その結果としてお互いからぎゅうぎゅうしめ上げられていた。しめ上げられて呪詛（じゅそ）のうめきを発していた。準急電車はそれらの呪詛のうめきを満載して、雨の中をごうごうと走りつづけた。

下車駅に近づいても、佐介はまだ牛島が同車していることに気がついていなかった。それは牛島のかくれ方が巧妙だったせいではなく、佐介がとかく他のことに気を取られて、窓外などをぼんやり眺めていたからだ。停車のたびに乗客の数はすこしずつ減少し、人々は自分の周囲に空間を取り戻し、今やカーブにさしかかっても相閲（あいせめ）ぐことなく、立ったものは吊皮とともに、腰かけたものは座席とともに、先ずはゆるやかに揺れていた。平安と言うより虚脱にちかいものが、そこらにうっすらとただよっている。電車は十三号踏切を越えてから徐行にうつり、駅に入ってがたぴしと停車した。佐介は扉から狭い歩廊に降り立った。天蓋のない歩廊には雨がしぶいていた。牛島は別の扉から降りた。空の暗さをうつしてあたりはややうす暗くなっている。駅員詰所の板壁の賃上闘争のポスターを横目で見ながら、佐介は改札口を通り抜けた。それから五六人つづき、すこし遅れて一番最後に牛島が通った。板裏草履をつっかけた改札係は、牛島の風貌や風体から私服刑事かなにかとカン違いしたらしく、ちょいと目礼みたいなことをし、切符を受取らないでとことこと詰所に入っていった。牛島はそのことでやや気をよくして、頬をにやにやとゆるめながら、軒下に立ち止って、鞄の中からビニールの布をとり出した。レインコートの釦（ボタン）をきちんとかけ、ビニールの布で頭を包むと、まるでそれは古下駄の台を頭にした案山子（かかし）みたいに見えた。その格好で牛島は佐介の方を見た。佐介はかなた踏切の遮断機（しゃだんき）の前に立ち止っている。洋傘をひろげて肩にかつぎ、持ちにくそうに大きな荷物を胸にかかえている。

「あれはたしかにハムに無理矢理に買わせた卓上ピアノのようだが――」佐介の姿を遠くから眺めながら、牛島はいぶかしげにつぶやいた。「一体それをどうして今あいつがかかえ

てるんだろう。少しへんだな。もしかするとあいつとハムは、俺なんかの目の届かないところで、情を通じ合っているのかも知れんぞ」

筋違いの嫉妬が一瞬むらむらと牛島の胸を灼（や）いた。今日の昼、定規の角で、スカートの上から熊井の尻にいたずらをした。そのぶりぶりしたなやましい感触を牛島はありありと思い出していたのだ。その牛島のビニール布をあおって、そばの線路を準急電車が轟（ごう）と通り過ぎ、遮断機はするすると上った。ごちゃごちゃにたまっていた人間や自転車や小型自動車などが、両側から一斉に動き、線路上に入り乱れた。そこに混った佐介の姿を見定めて、牛島は駅の軒下から雨の中に足を踏み出した。雨滴がつめたく牛島の頬にあたった。

踏切をわたったところから始まるサクラ商店街は、雨天にもかかわらず、まだ夕方の買物客が行ったり来たりしていた。佐介は肉屋に寄りプレスハムを三十匁［やぶちゃん注：百十二・五グラム。］、八百屋でトマトを三個、パン屋に立ち寄ってパンを一斤買い求めた。いつも買い慣れているらしく、佐介はてきぱきと品物を受取り、てきぱきと代金を支払った。最後のパン屋で、パンを直ぐ食べられるように切って貰う間、店の棚にずらずらと並べられた修羅印カレー粉の罐を、佐介はしばらく眼を吊り上げるようにしてにらみつけていた。佐介が店に立ち寄る度に、牛島もその店の五、六軒手前で立ち止り、電柱のかげや理髪店の看板のかげにかくれて、不機嫌な顔で佐介を監視していた。この奇妙な尾行男は、もう自分が何のために尾行しているのか、自分でもよく判らなくなっていた。尾行するために尾行する。尾行欲を満足させるために尾行する、そうとでも考える他はないようなやけっぱちな状態になっていたのだ。傘を持たないので雨はようしゃなくビニールの隙間から牛島の顔を濡らした。

「もういい加減にこの俺に気がついたらどうだ」オート三輪のかげから、パン屋の佐介をじっと監視しながら、牛島は情なさそうにぼやいて、鼻をくすんと鳴らした。「気がついてくれなきゃ、風邪をひいちまうじゃないか。こんな抜け作のあとをつける気をおこすなんて、少々俺もヤキが回ったな。よし、こうなれば、あいつ、六時から会合があると言いおったが、それが何の会合か、是が非でも突きとめてやるぞ！」

牛島は職業的情熱をふるい起すように、力をこめて二三度足踏みをした。水のしみ入った靴の中で、濡れた靴下がその度にぐしゃぐしゃと音を立てた。やがて佐介はパンとトマトとハムを鞄の中にぎゅうぎゅう押し込み、パン屋をよちよちと出て来た。いろんなものを詰めこんだので、ぺしゃんこの皮鞄は見違えるようにふくらみ、しかも中身がやわらかい食料品なので、なおのこと持ちにくそうに見えた。持ちにくいことのために傘の方がおろそかになり、とかく通行人の傘とぶつかっては雫（しずく）を飛ばすので、まるで酔っぱらいかチンドン屋のように、佐介は右へ行ったり左に寄ったりして歩いた。（雨はイヤだな、膝は痛むし）傘のぶつかり合いに辛抱出来なくなったように、佐介は人気（ひとけ）のない横町に折れ込みながら考えた。（雨が降ると、カレー粉のにおいも強くなる。今頃は俺の部屋も、カレーのにおいがぷんぷんこもっていることだろう。あれはきっと、カレー粉が雨のために遠

くまで行かず、近所にばかり沈澱（ちんでん）してしまうせいに違いない）佐介は昨夜のカレー粉対策協議会の会合のことを思いうかべた。昨夜は十五人ばかりの男女があつまり、午前二時頃まで話し合ったのだ。言説はさまざまにわかれた。工場に忍び入ってカレー原料に砂をぶっかけろ。ウスとキネをぶっこわせ。そんな最強硬派から準強硬派、中間派、軟弱派といろいろあったが、それは手段方法のちがいだけで、身辺からカレー粉を排除しようという点ではすべて一致していた。佐介はここでは灰色派ということになっていた。灰色派は佐介ひとりであった。（灰色派か）佐介は傘をかたむけてサクラ碁会所の前に立ち止った。サクラ碁会所は雨のためにガラス戸をたてていた。三組の客が盤をはさんでいる。道路に一番近い盤面を佐介はじっとのぞきこんだ。肥った席亭が大儀そうに頸（くび）を回して、その佐介の顔をガラス越しにじろりと見た。そして身ぶりで、上ってこないか、と誘った。佐介は首をふり、まだ夕食前だと知らせるなめに、ふくらんだ鞄を動かして見せた。席亭にはその仕草の意味が判らなかった。席亭はあいまいな顔付きになって盤面に視線を戻した。そして石をつまみ上げてパチリと打った。（碁はいいな）あちこちの石の形に見入りながら佐介は思った。（この世とちがって碁は平面だし、単純でいて変化があるし――）横町に折れる曲り角のゴミ箱のそばに、牛島は濡れそぼって立ち、うらめしげに佐介の方を眺めている。席亭の相手が石を置いた。佐介は首をかたむけ、すっかり石の形に心をうばわれていた。遠くから雷の音が聞えてきた。五分ほど時間が経った。牛島は低いうなり声を立てた。さすが辛抱づよいこの待ち男も、ついにたまりかねて顔を振り、ぶるんと雨滴をはらい、はずみをつけてつかつかと横町に踏み入ってきた。一心に盤面に見入っている佐介の肱（ひじ）を、うしろからがっしとつかんだ。佐介は頓狂な声を上げてふり返った。

［やぶちゃん注：ここで「Q電鉄」「準急」「十三号踏切」と出るので、鉄道ファンならこれが何線でどこの駅か瞬時に同定出来るのであろうが、不幸にして私はその任には当たれない。識者の御教授を乞うものである。

「席亭」碁会所の主人。］

11

黒須院長が玉砂利をぎしぎしと踏み、夕陽養老院の門を入ってきた時、あたりはもうすっかり暗くなっていた。両側の野菜畠におちる雨声は、したしく院長の耳をくすぐり、院長は胸を張って勢いよく玄関に歩を進めた。二階建ての寮舎の窓々にはすでに燈が入り、それが自分の帰来を歓迎しているかの如く、院長には感じられた。久しぶりで旨（うま）いものに満腹したせいもあって、院長の気持は平穏に和（なご）み、幸福ですらあった。院長は傘をたたんで水を切り、はずみをつけて玄関に飛び上った。

しかし院長の気持の平穏は、玄関に足を踏み入れたとたんに、がしゃがしゃにかき乱されたのだ。玄関脇の掲示板の院長告示の上に、誰が書いたのか赤インクの筆太文字で、

『院長横暴！』

『海坊主！』

と、なぐり書きがしてあったからだ。それを見た瞬間、黒須院長の太い眉毛は見る見るつり上った。多量の憤怒と少量の困惑を顔いっぱいにみなぎらせ、院長はその文字にむかって仁王立ちになり、威嚇（いかく）的に双のこぶしをふり上げた。洋傘の尖端も宙を切って、雫を遠くまではね飛ばした。

「ああ、何たる不祥事（ふしょうじ）だ！」院長は告示にむかってかみつくように怒鳴った。

「こんな悪質なイタズラをやったのは、一体何奴だ！」

その時、かなたの東寮の廊下の曲り角からのぞいていた二つの首が、その怒声におびえたようにスッと引っ込み、そして足音が乱れてばたばたと遠ざかって行く。黒須院長はぎょっとしたようにそちらに顔をふり向けたが、もちろんその時は廊下は素通しで、天井からうすぐらい電燈がぶら下っているだけで、何者の姿も認められなかった。曲り角まで疾走して足音の主を確かめたい衝動が、一瞬黒須院長をそそのかしたが、院長の威厳ということを考えて、彼はやっと踏みとどまった。

「東寮のやつらだな」院長はふりあげたこぶしをおろしながら、腹立たしげに呟（つぶ）いた。「東寮にはタチの悪い奴が多い。あの不逞（ふてい）のやから奴！」

足音は東寮の廊下をかけ抜け、どんづまりの部屋に一気にかけこんだ。その部屋には十人ばかりの爺さんたちが、坐ったり寝そべったり、それぞれの姿勢で屯（たむ）ろしていたが、かけこんだ二人の見張り爺に一斉に視線をふり向けた。見張り爺は二人とも呼吸をぜいぜいはずませて亢奮していた。

「帰って来たか？」

「戻って来たか？」

異口同音の質問に、見張り爺はそれぞれあえぎながら口早やに報告した。

「今戻って来たぞ」

「告示を見て、えらく怒っとったぞ」

「大きな声を出してゲンコツを振り上げたぞ」

「振り上げたとたんに、傘なんかすっ飛んでしまったぞ」

見張り爺たちは院長の手振り身振りを真似しながら、口角から泡をとばして説明をつづけた。

「よし。もう判った」

部屋のまんなかに寝そべっていた遊佐爺が、掌をふって重々しく発言を制した。今まで手を休めていたニラ爺が、我にかえったように遊佐爺の背に指をあて、ぐいぐいと指圧を再開した。ニラ爺は指圧が上手で、一回四十円の料金で院内営業をやっている。遊佐爺なんかもその上得意の一人であった。

「院長が激怒したということはよく判った。御苦労だったな」遊佐爺は気持よさそうに指圧療法を受けながら、見張り爺たちの労をねぎらった。「先ず作戦は当った。怒らせて気持を動揺させることに、先ず我々は成功したようだな。向うは気持が大いに乱れ、こちらはしご

く平静な気持とくれば、今夜の会談は戦わずしてもう半分はこちらが勝ったようなものだ。そうか。海坊主は頭をふり立てて怒ったか」
「愉快。愉快」松木爺が掌をパチパチたたいて叫んだ。
「俺たちは先ず先取得点をあげたぞ！」
「まだよろこぶのは早い」うるさ型の柿本爺が松木爺をじろりとにらんで、にがにがしげにたしなめた。「今頃から有頂天になると、それこそ向うの思う壺だ。そんな単純な、一筋縄で行くような相手か！」
玄関脇の掲示板の前で、今や黒須院長は眼を閉じ、下腹に両掌をあてて、しきりに腹式呼吸をこころみていた。空気が束になって大きく鼻孔に吸い込まれ、また束になって大きくはき出される。院長の身体はさながら巨大な一個の**ふいご**となり、**ふいご**になることによって院長は怒りをしずめ、気持の平衡を取り戻そうと努力していた。黒須院長かっと眼を見開いた。
「これは同一人の字ではないな」『院長横暴！』と『海坊主！』の字体をしさいに見くらべながら、黒須院長はつぶやいた。憤怒はしだいにおさまり、闘志に変りつつあった。そう言えば二つの文言の字体は同じではなかった。院長はさらに眼を告示に近づけた。「ふん。同一人でないとすれば、このイタズラは二人以上の人間によってなされたことになる。これが一人ならば、発作的な行動と考えられるが、二人以上とくればこれは明かに計画的だ。院長に対する挑戦と考える他はない」
黒須院長はがっしりと腕を組んだ。そして素早く首を動かして東寮廊下の方をふり向いたが、やはり廊下はがらんとして、誰の姿も見当らなかった。院長はそこでまた顔を元に戻して、ふたたび告示をにらみつけた。
「このイタズラの犯人は、赤インクを持ち筆を持っている。抜き打ちの室内検査をやれば、きっと犯人はあがるだろうが、それには人手が足りないな。それにしても犯人は一体何奴（なにやつ）か？」腕をとき顎鬚（あごひげ）をしごきながら、黒須院長は首をかたむけた。
「院長横暴、というのは意味は判るが、この、海坊主、というのはどういう意味だろう？」
剛（こわ）い顎鬚をざらざらしごき、黒須院長はしばらく考え込んでいたが、とうとう判らなかったらしく、あきらめたように廊下のすみに行き、洋傘をひろい上げた。そして急に眼をするどくして、左右の廊下を見回し、また掲示板の前に戻ってきた。この告示をこのままにして置くか、それとも引き剝ぐか、黒須院長は迷っていた。そのままにして置くことはイタズラの容認を示し、引き剝ぐことはある意味では敗北を意味するわけであった。院長は手を掲示板へ伸ばそうとして、また引っ込め、あらためて告示の末尾に眼をむけた。

『以後本院の建物備品を、故意と不注意たるを問わず破損破壊せるものは、この事例に即して処分するものとす。
院長㊞』

（こんなイタズラをしたやつも、もちろん破損破壊の条項に適合する）傘を床にぎりぎりと突き立てながら黒須院長は考えた。（そうすればこのイタズラの犯人は、ニラ爺の例に即して、退院処分にしなけりゃならん。もちろんこの犯人は、滝爺松爺一味にきまっているが、どうやってその証拠をおさめたものか）

院長は傘を脇差しのように腰にかまえ、のっしのっしと階段をのぼり始めた。（こういうことはあまりやりたくないけれども、万（ばん）やむを得ないなら、在院老人の中から素姓（すじょう）や素質のいいのを二三選んで、秘密スパイに任命するか。そうすれば犯人は直ぐに挙がるだろう）

階段を登り切ると、黒須院長は院長室の扉を押し、電燈のスイッチを上げた。大きな電気スタンドに燈がともった。院長はすぐに回転椅子に腰をおろさず、動物園の熊のように室の中を行ったり来たりし始めた。かなた東寮廊下のどんづまりの部屋のガラス窓から、見張り爺の顔がこちらを見上げていた。

「そら。院長室に燈がついたぞ」見張り爺が一座に報告をした。「海坊主はしきりに部屋の中を歩き回っているらしい」

指圧師ニラ爺と指圧されている遊佐爺をのぞく全員は、たちまちどやどやと立ち上って、窓辺にそれぞれ取りついた。院長室の窓は曇りガラスだが、その乳色にうるむ窓の光を、ひとつの影が規則正しくさえぎって動いていた。それはその輪郭からしても院長の影にちがいなかった。腹這いになったまま遊佐爺が鎌首をもたげて聞いた。

「歩き回っているか？」

「歩き回っている。歩き回っている」と松木爺が答えた。

「よっぽどムシャクシャしているらしいぞ。愉快。愉快」

窓辺にとりついた全員は、頭微鏡をのぞく生物学者の熱情と、女湯をのぞく痴漢の好奇心をあわせもち、胸をどきどきさせながら、院長室の窓を見上げていた。その時影は突然大きく不規則に動き、そしてふっと曇りガラスの面から消え去ってしまった。松木爺が遊佐爺に報告した。

「動き回るのを止めたぞ」

黒須院長は動き回ることをやめ、大戸棚の上から硯箱をおろして、回転椅子にふかぶかと腰をおろした。卓上に紙をのべ、眼を閉じて深呼吸を開始した。あのムナクソの悪い告示文を剝（は）ぎ取り、ふたたび同文の告示文を貼りつけるつもりである。閉じた院長の瞼の裡（うち）に、父親の影像がぼんやりうかび上ってきた。父親の顔はきびしく、院長を叱りつけるようであった。

「お父さん。……お父さん」院長はお祈りでもするように呟いた。「お父さんの遺言のまま、僕は信念をもって生きています」

黒須院長は眼をかっと見開いた。そしておもむろに硯箱のふたをとり、大きな墨をわしづかみにして、しずかにすり始めた。墨のにおいが院長の鼻もとにただよってきた。

小さなくくり戸を窮屈にくぐり、まっくろに湿った地面を四五歩あるくと、そこにその家の離れの入口があった。離れといっても、納屋(なや)を改造して畳を敷いただけのもので、床を低く、屋根はトタンで葺(ふ)かれていた。雨声がそのトタンの上でかすかに鳴っている。手さぐりでその入口まで来た時、牛島はやっと佐介の肱(ひじ)を自分の掌から解放した。

「暗いな」

放した掌の各指をいたわるように屈伸させ、牛島は顔を左右に動かして、分厚(ぶあつ)な闇を嗅ぐようにした。たてつけの悪い扉を、佐介は力をこめてガタピシと押しあけた。

「いま電燈をつけるよ」

佐介は土間に靴を脱ぎ、ふたたび手探りで部屋の中に入って行った。牛島は表の闇に棒杭のように立ち、まだ闇にむかって鼻翼をびくびくうごめかしていた。そして呟(つぶ)いた。

「うん。相当ににおうもんだな」

ねっとりとただよい流れるものは、まさしくカレー粉のにおいであった。道ひとつ隔てた向うの板塀のかなたから、湿った空気をゆるがして、ガシャ、ガシャ、ガシャと金属と金属がぶつかり合う音が、間断なくひびいてくる。それも一つや二つの金属ではなく、何十という固いものが一斉に衝突し合う音である。鉄の靴を穿(は)いた数十の人造人間が、大きな鉄板の上で早足行進をしている。そういう単純な幻想が、その時ふと牛島をとらえた。牛島はそれにおびえて二三歩闇の中をあとしざりした。スイッチをひねる音と同時に、電燈の光が納屋からサッと流れ出た。光に額をひっぱたかれて牛島は眼をパチパチさせた。

「まあ上れよ」部屋の中から佐介が言った。

牛島は身ぶるいをひとつして土間に足を踏み入れ、おもむろにビニールの頬かむりを外(はず)し、次にレインコートを脱いで、粗(あら)い板壁の釘に並べてぶら下げた。裾からぼたぼたと滴が土間に落ちる。佐介はそれを気にして、罐詰の空き罐をそこに据えた。水滴はチピ、チピ、チピと罐の底にはねた。佐介の眼は、ぶら下げられたレインコートの、裾のかぎ裂きを見ていた。

「やはり――」身体を起しながら佐介はうす笑いと共に言った。「ロケーション先には行かなかったんだね」

「行かなかったよ。なぜ?」

「いや、なんでもない」

牛島は靴を足から引き剝がし、ついでに濡れた双の靴下もべらべらと剝ぎ取った。裸の足の裏の皮膚は、一面になま白く、気味悪いようにふやけていた。牛島は忌々しげに舌打ちしながら、靴下を束ねて力まかせにしぼり上げた。青黒いしずくがそこからたらたらと土間に垂れ落ちた。しぼり上げた靴下はそのまま並んで釘にぶら下げられた。粗板壁にはパチンコ台みたいに無数に釘が打ちつけられていて、まだ遊んでいる釘もたくさんあった。

「あれが、その音かい？」
ガシャガシャ音の方向を顎（あご）でしゃくりながら、牛島はのそのそと部屋に入ってきた。部屋といっても、柔道場で使用するような縁無し畳が六枚敷いてあるだけで、押入れもないから、壁際には寝具や行李（こうり）類がはだかのまま積み上げられている。部屋の真中には、小机が一つ置かれていた。机の上には小さく折り畳まれた紙片がぽつんと乗っていた。
「そうなんだよ。ここでは僕は被害者なんだ。大した被害者なんだよ」片づけようとした卓上ピアノを畳の上に戻し、佐介は不審そうに紙片をつまみ上げながら言った。
「研究所では一応、加害者の立場に立っているんだけどね」
「きっぱり加害者とも言えないぜ」牛島は机の前に大あぐらをかき、手刀で頸筋をトントンと叩いた。「加害者、加害者といい気になっているうちに、いつの間にか被害者の方に回っているかも知れないよ」
つまみ上げた紙片は電報であった。佐介はそれをがさがさと拡げて読んだ。

『コンバンザイインシヤトカイケンス」キロクノヒ
ツヨウアリ」スグライシヨセヨ」クロスゲンイチ』

「ムリを言ってるよ」佐介は電報をぐしゃぐしゃに丸めながら呟いた。「隔日務という初めからの約束じゃないか。それをこんな雨の夜に、カレー粉会議もあるというのに――」
「何をぶつくさ言ってるんだ」牛島は佐介をじろりと見上げた。駅で待ちぼうけを食わされた不機嫌な後味が、まだその牛島の頬骨に残っていた。「今丸めたのは、何だい。脅迫状か？」
「脅迫状じゃない。電報だよ」佐介はそっけなく答えた。
「あんたとは関係ないことだ」
「どれ」
牛島の右手が突然カメレオンの舌のように素早く伸びて、次の瞬間電報は牛島の掌におさまっていた。佐介はあわててそれを取り返そうとしたが、牛島はそうさせないために、蟹（かに）のようにぐっと肩肱（ひじ）を張り、がさがさと拡げて大急ぎで黙読した。
（こいつも強引（ごういん）で身勝手だが――）電報を取り返すことをあきらめ、卓上ピアノを畳から行李の上に移しながら、佐介は考えた。（黒須玄一というのも、まったく強引で身勝手な人物だな。あれじゃ俺も爺さんたちに同情するよ。あそこでは俺は傍観者であろうと思っていたんだが、その立場もれいによってひっくり返るかなあ）
「何だい、一体、こりゃあ」電文の意味を判じかねるらしく、牛島は首をかたむけた。「クロスゲンイチてえのは、誰のことだい？」
「僕の別口（べつくち）の勤め先の大将だよ。それの呼出し電報だ」
「別口とはうめえ世渡りを考えたもんだな。二枚鑑札というわけか。で、今夜行くのか？」
「行かないよ。カレー粉対策協議会があるんだもの」佐介も疲れたように小机の前に横坐り

になり、ふくらんだ皮鞄を引き寄せた。「さあ。早いとこ食事を済ませて、出かけなくちゃあ」
「そんな身勝手な言い草があるか」牛島は眉の根をぐっとふくらまし、ドスでも引っこ抜くような格好で、ポケットからウィスキーの瓶をぐいと引出した。「お前さんはおれと待ち合わせる約束をして、平気な顔で一時間も遅刻した。その上その俺を置きざりにして、カレー会議には定刻に出席するつもりか！」
「そういうわけじゃないけれど」佐介は困って鞄の上で指をもじもじ動かした。「会議というものは大切だからねえ」
「じゃあ俺との待ち合わせは、大切でないのか」牛島の眉の根はさらにふくらみ、かすかにくろずんだ。それは憤怒というよりも、善良なる魂の孤独、とでも言ったものを感じさせた。
「それじゃあ俺の立つ瀬はないじゃないか。ちったあ人の身にもなって考えろ」
「ではどうすればいいんだね？」
「とにかくコップを二つ持ってこい」牛島はおごそかな声で命令した。「一切はそれからの話だ」
　佐介はちょっとためらい、そして立ち上った。部屋の隅の棚に行き、飯用の茶碗と合成樹脂のコップを持って、机の前に戻ってきた。コップの方にはところどころ白い練歯磨が付着している。それもかまわず牛島は両方の器（うつわ）にウィスキーをとくとくと注ぎ、茶碗の方を抜け目なく自分の前に引き寄せた。そして佐介の鞄を顎でしゃくった。素直に器を持ってきたことによって、牛島の怒りとやるせなさは、やや和（なご）んできたようであった。
「プレスハムとトマトを出せよ。ハム三十匁とはケチな買い方をしたもんだな。そんなことじゃとても大人物にはなれないぞ」そして牛島は茶碗を唇に持って行き、ごくりと一口飲んだ。「ついでにパンも切れや。とにかく俺はものすごく腹が減っているんだ。富岳軒のカレーライスは、まったく盛りが悪いからなあ。あれじゃあ夕方までは保たない」
「カレーライスは厭だよ」鞄の中から包みを引きずり出しながら佐介が答えた。「だから会議をやるんだ」
「なるほどな。これじゃ厭にもなるだろうな」牛島はあらためて鼻をびくびく動かし、かなたのガシャガシャ音に耳をかたむけた。「しかし俺なら会議などは開かずに、俺一人で部屋を引越すな。その方がカンタンだし、さっぱりするじゃないか。なにもこんな小屋に踏みとどまって、カレーライスが嫌いになる手はねえだろう」
「船のネズミらしいことを言うね」佐介もコップを后唇に持って行った。「引越しのことは僕も考えた。何度引越ししようと思ったか知れやしない。その度に僕は僕を叱りつけた。自分のひるむ心を叱りつけた。ここで逃げ出すくらいなら、人間を止めにした方がいいんだ。ここが僕のぎりぎりのところなんだ！」
「何がぎりぎりだね？」佐介の語気におどろいたように牛島は眼をパチパチさせた。「俺にゃさっぱり判らねえ。早く引越して、カレーライスが好きになった方が、トクだと思うがなあ。なんなら俺が良い部屋を世話してやろうか」

「いいよ。この小屋に踏みとどまるよ」佐介はそっけなくハムをつまんで口の中に投げ込んだ。牛島もその真似をした。佐介は電熱器のスイッチを入れた。うずまき状のニクロム線は見る見る赤く熱してきた。「踏みとどまって会議をひらき、カレー粉と戦うんだ。脅迫状が来たってひるまない」

「あっ、そうだ。脅迫状と言えば――」怒りが突然よみがえってきたらしく、牛島は茶碗をぐいとあおり、熟れたトマトにぐいと嚙みついた。「お前、電車の中で、堂々と、あの手紙をひろげて読んでたじゃないか。あれほど俺がこんこんと言い聞かせたのに、そんな無茶をする。早くあの手紙を出せ。そしてその電熱器で燃しちゃえ」

「しかしこれは」内ポケットから封筒を取り出しながら佐介は弁解した。「研究所関係じゃないかも知れないんだよ」

「何でもいいから、燃すんだ！」牛島はいきり立った。酔いが牛島の感情を過多にさせていた。「危険なものを平気で持ってあるくかと思えば、片方では人に待ちぼけをくわせてケロリとしている。一時間、ああ、一時間、どんな思いで俺が待っていたか、お前にゃ判らないだろう。よし。お前は俺としばらくつき合い、カレー会議には一時間遅刻しろ！」

「そんなムチャな――」

「ムチャでない！」牛島はまたウィスキーを茶碗に充たしながら叱咤（しった）した。「俺にはその権利がある。お前は先刻俺から、一時間という時間を、まんまと盗み取った。盗まれたものは盗み返す権利がある。今度は俺がお前から、まるまる一時間を強奪（ごうだつ）するぞ。いや、利息がついて、一時間二十分だ。針金でしばり上げても、俺はお前を一時間二十分遅刻させるんだ」

「ああ、判ったよ」

佐介は情なさそうに封筒をひろげ、ふわりと電熱器の上に乗せた。それを見て牛島は反射的に、さっきの電報をその上にかぶせた。重ねられた紙片は黒く焦げて反（そ）りかえり、ボッと焔を放って燃え上った。

「あんたは他人のことになると、引越しゃいいだろうなんて、無責任なことを言うが、自分のことになるとヤケに頑張るんだね」割箸のさきで黒く焦げた紙片をはらい落しながら、佐介は低い声で言った。「僕だってここで、カレー工場主の修羅吉五郎から、カレーの旨（うま）さを盗み取られたんだよ。判るだろう」

「判るよ」牛島はにぶい眼付きでうなずいた。「だから引越せばいいではないか」

「そういうわけには行かないよ。引越しという手は、ちょっと見には本手のようだが、つきつめるとやはり筋違いの手なんだ。ねえ、このにおいをかぎ、あのガシャガシャ音に耳をかたむけてごらん」

からっぽの胃袋にしみこんだウィスキーは、ひどく回りが早く、牛島の顔色は粘土色からもう赤土色に変化していた。言葉も舌たるくなっている。牛島は顔を上げ、大きく深呼吸をし、音の方向に耳をかたむけた。単調な金属性の反復音は、永久に止むことなき重さとねばっこさをもって、夜の空気をずしんずしんとゆるがしてくる。牛島の視線はその時、行李の

上の卓上ピアノの赤さに偶然にとまっていた。
「ねえ。このにおいとこの音、いくら逃げ出したって、形を変えてかならず僕らを追っかけてくるよ。どこまでも、どこまでも」
「あの卓上ピアノな」牛島は行李の上を指してぼんやりした声を出した。「あれ、たしかハムがデパートで買ったやつだと思うんだが、どんないきさつでお前さんがそれをウロチョロと持ち歩いたんだい？」
「ゆずって貰ったんだ」
「なぜ？　お前さんが叩くためにか」
「いや、楽しみのない爺さんたちに寄贈しようと思ったんだよ」
「爺さんたち？」牛島は、いぶかしげに眼をぎろりと光らせた。「それでハムは、直ぐに手放したのかね？」
　佐介はうなずいて見せた。酔いのために佐介もいくらかあかい顔色になっていた。
「畜生。やっぱりハムの奴は、俺のあとをつけて来たんだな。ピアノを買いに来たんだなぞと言いおって。これも須貝のさしがねにきまっている。よし、皆がそういう気持なら、俺にも俺の考えがあるぞ」そして牛島は手を上げて、佐介の顔をまっすぐ指差した。「お前もきゃつらと同腹か？」
「冗談じゃない」と佐介は掌をくにゃくにゃとふった。「僕だってあの時、一緒にハム嬢につけられたんだよ。ハム嬢につけられ、さっきはあんたにつけられてさ、そしてそんなことを言われたんじゃあ、僕も立つ瀬がない」
「そうか？」牛島はなおも疑わしげな眼で佐介を直視した。「お前さん、俺に関して、須貝から何か秘密命令でも受けてやしねえだろうな。U十八号とか何とかさ」
「ううん。飛んでもない。U十八号なんて、本当のところ全然初耳だ」
「そうか。それならいいが」牛島は少し安堵（あんど）の色を見せて、ふたたびトマトにかじりついた。液汁が畳にぼたぼたとしたたった。牛島はあぐらの片足を立て、蹠（あしうら）で不器用にそれを拭きながら、押しつけるような声を出した。「俺は今日の昼間、お前さんと別れ、ひとりになってデパートの屋上にのぼり、いろんなことを考えた。あらゆる角度から、現在の研究所の情勢、そこに置かれている俺たちの位置について、黙々と検討してみた。高層建築の屋上というやつは、たしかに人間の神経をするどくし、思考力を増進させるもんだな。思考力だけでなく、推理力もだ」
「推理力だけでなく、カンもだろう」
「そうだ。カンも大いに働いた」牛島はあぐらの両足を擢（かい）のようにこいで、身体をぐいぐいと前に乗り出し、キラリと眼を光らせた。「その俺のするどい推理力とカンに賭けて言うが、A金庫の鍵型をとった犯人は、いや、犯人と言うとカドが立つな、鍵型をとった謎の人物は、いいか、性根を据えて答えるんだよ、あれは、お前さんだろう。お前さんだな！」

東寮のどん詰りの部屋で、ニラ爺の指圧の親指が、遊佐爺の背中に最後の一押しを加えた時、階上の院長室では、黒須院長が告示文の筆をおき、巨大なハンコをぺたりと押し終えたところであった。

楷書の各字のはしばしが躍るようにはね上っているのは、黒須院長の胸の怒りであり、感情の乱れのゆえであった。ハンコを投じ、じっと自分の字に見入った院長ののど元に、やがてにがい侮いと恥じがじわじわとこみあげてきた。

「ああ、こんなに書体が乱れるとは、まだまだわしも精神修養が足りない」回転椅子をぎいと鳴らしながら院長はつぶやいた。「この告示文は、とても人前には出せん。書き直すとするか」

「ああ、いい気持だった」遊佐爺はがさがさと起き直り、衣服の乱れをととのえた。「今夜の指圧は、とてもよく利（き）いた。これで元気が出てきたぞ。ニラ爺さん。指圧代はツケにしといてくれや」

「この前の分も、前々の分もまだ貰ってないで」ニラ爺は疲れたような情ない声を出した。

「煙草代にも不自由――」

「今ここに持ち合わせがない。部屋に戻ったら払う！」そして遊佐爺は、窓ぎわに立つ見張り爺に声をかけた。「院長室はどうだね」

「異状なし」

「動き回る気配なし」

見張り爺の声が、直ちに戻ってきた。

「よし。それではそろそろ、行動を開始するかな」遊佐爺は重々しくしわぶいて、部屋の中をぐるりと見回した。「いきなり会見に出かけるよりも、先ず使者を一人出して、通告させた方が、重みがついてよかろうと思うが、どうだな」

「うん。それがいいな」滝川爺が同感の意を表した。「俺が行こうか」

「いや、滝爺さんよりも――」遊佐爺の視線はふたたび部屋中をひと回りした。なにごとかを予感したかのように、ニラ爺は肩をすくめて躰（からだ）を小さくした。その動作がかえってニラ爺の存在を遊佐爺に教えたようなものであった。遊佐爺は言葉をついだ。「ニラ爺さんの方がよかろう。かんたんな仕事だから、ニラ爺さんにも結構つとまるだろう」

「へっ」ニラ爺は更（さら）に身体を縮めた。

「ニラ爺さん」と遊佐爺は呼びかけた。「たびたび御苦労だが、院長室におもむいて、今から一同会見したいと思うが、都合はどうだと、海坊主に訊（たず）ねてくれ。そら、お駄賃に、煙草を一本やる。ピースだぞ」

「へっ」ニラ爺は煙草を受取り、火をつけて旨（うま）そうに吸い込んだ。

「都合はどうだ、などとはなまぬるい」部屋のすみからウルサ型の柿本爺が異議をとなえた。「会見に行くから用意をととのえておけ、そう言うのが本筋だ」

「そうだ。そうだ」松木爺が賛成した。「茶菓の用意ぐらい、向うにととのえさせるべきだ。

なにしろ重要会談だからな」
「海坊主は相当なしたたか者だから、会見日時の変更を申し出るかも知れない」そして柿本爺はニラ爺を見据えるようにした。「ニラ爺さん。会見の目取りを明日にしてくれとか何とか、海坊主が言い出したら、絶対にダメだと答えるんだよ。即刻会見だ。判ったな。向うにそれを承知させるまでは、戻って来てはいけないぞ。さ、元気を出して、直ぐ出かけなさい。なに、相手を海坊主と思うから怕（こわ）いような気分になるんだ。影法師だと思えば何でもない。影法師と思うんだよ、影法師と！」
「へえ、影法師」
「そうだ。影法師だ」遊佐爺が口をそえた。「影法師で、でくの棒だ。恐れずひるまず、堂々と出かけなさい」
「へっ」ニラ爺は煙草をごしごしともみ消し、吸いがらを耳に大切そうにはさんだ。困惑したような立ち上り方をした。
「しっかりやってくるんだよ。首尾よく使命を果たしたら、またピースを一本上げるからな」
「へえ」入口のところでニラ爺は立ちどまり、一同をふり返って、何か言おうとしたが、そのまま諦（あきら）めたように顔をゆがめて、その姿は廊下に消えた。
「使う。使う」廊下をぼとぼとと足をひきずって歩きながらニラ爺はつぶやいた。「偵察には出されるし、使者には出されるし、ついでに指圧もさせられて、そのお代はツケとくるしなあ。もしこの俺が雑巾だとすれば、とっくの昔にすり切れてるわ」
「どうもニラ爺の奴はたよりないなあ」足音がすっかり遠ざかって消えた時、滝川爺が嘆息して言った。「一体あいつは何を考えているんだろう。俺たちが動かなきゃ、あいつは追い出されてしまうのになあ」
「ほんとにたよりない」松木爺が相槌（あいづち）を打った。「筋金というものが全然入っていない。まるで人生の落伍者だ」
「今夜の交渉委員にニラ爺を加えるのは」と滝川爺。「わしは反対だ。あんなのを加えたって、何の役にも立たんぞ」
「まあ、いいさ」と遊佐爺がなだめ役に回った。「だんだんやっているうちに、少しずつシャンとしてくるさ。交渉委員にも入れて、空気に馴れさせた方がいい。おい、見張り爺さん、まだ院長室に到着した気配はないか」
　ニラ爺は手すりにすがって、階段を力なく登っていた。疲れのせいでもあったが、黒須院長に会って話すことを考えると、とたんに足から力が抜けてしまう。手すりは湿気と脂（あぶら）でじとじとしていた。ニラ爺はそれにすがって、やっと二階の床面を踏んだ。遊佐爺が見張りにまた声をかけた。
「まだか」
　黒須院長は院長卓に頬杖をつき、視線を宙にぼんやりと浮かせていた。さっき大串の鰻（うなぎ）を詰めこみ過ぎたので、その満腹感がしきりにねむけを誘ってくるようであった。告示文を書き直すのも面倒くさかった。その時、扉をコツコツと叩く音がしたので、黒須院

長はハツと頬杖を外し、大急ぎで威儀をととのえた。
「栗山書記か？」と院長はいかめしい声を出した。「電報を見たか。入れ」
扉の外からぼそぼその答えが聞えた。それは栗山佐介書記の声ではなかった。院長はさらに声を大きくした。
「誰だ。入れ」
ノブがゆっくりと回り、扉が半開きにされて、そこからニュッとニラ爺の顔がのぞきこんだ。ニラ爺は顔だけのぞかせて、身体の方はおどおどと逃げ腰のかまえになっている。
「なんだ。ニラ爺さんか」拍子が抜けたように院長は言った。「何か用事か。入っておいで」
ニラ爺は身を横にして部屋に入り、扉をしずかにしめた。扉をしめたとたんに、ニラ爺の度胸はやや定まった。扉をしめた以上は、使命を果たさねば東寮に戻れない。ニラ爺は勇気を出してつかつかと院長卓まで歩いた。椅子にちょこんと腰をおろし、卓をはさんで院長とむかい合った。東寮の階下の部屋で、見張り爺が叫んだ。
「今入って行ったらしい。窓に影が動いたぞ」
「院長室まで行くのに」松木爺がにがにがしげにはき出した。「一体何分（なんぷん）かかるんだ。這って行くんじゃあるまいし」
ニラ爺は耳からピースの吸いさしを外し、気持をはげますために口の中で、影法師、影法師、とつぶやいてみた。そのニラ爺の一挙一動を、黒壕院長は眼をするどくして、黙って観察している。ニラ爺は勇気をふるって、わざと乱暴な言葉使いをした。
「院長。マッチを貸して呉れ」
（怒るな。怒るな。怒ると失敗するぞ）黒須院長は心の中で念じながら、唇を真一文字に閉じ、手元のマッチをぽいと放り投げた。それはさっきの鰻屋の広告マッチで、鰻が三匹にょろにょろ這（は）っている絵が印刷してあった。（ニラ爺はきゃつ等の手先だ。慎重に、慎重に！）
ニラ爺はマッチを手にして、吸いさしに点火した。緊張のため手がふるえている。ゆたゆたと煙をはきながら、院長と同じやり方で、ニラ爺はぽいとマッチを投げ戻した。そしてその時初めて、ニラ爺は卓上に拡げられた告示文を見た。そのはねおどるような文字の羅列と朱色の院長印を見た時、ニラ爺はもう目がくらくらして、思わず大声を出した。
「院長！」ニラ爺は防禦と威嚇（いかく）をかねて、やせた肩をぐいとそびやかした。「院長はどうあっても、この俺を、ここから追い出すつもりか」
告示文をさしはさんで、巨軀魁偉（きょくかいい）の黒須院長と小軀矮身（わいしん）のニラ爺は、一瞬緊張してじっとにらみ合った。
「そのつもりでない」三十秒ばかりの沈黙の後、黒須院長は意識的にすご味をきかせて、ゆっくりと発言した。「わたしの要求するところはリヤカー弁償金の支払いだ。一万二千円さえ納めてくれれば、誰も出て行けとは言わないのだ」
「一万二千円！」ニラ爺の声はふるえて、そのまま絶句した。
「そうだ」黒須院長は重々しくうなずいた。「一万二千円だ」

ニラ爺の無理にそびやかした肩が、見る見るうちになだらかになり、膝に乗せた双の掌がぶるぶるふるえ出した。悲哀と絶望がニラ爺をうちのめした。ニラ爺の眼にあふれてくる粘密度のうすい涙の色を黒須院長は冷静な視線で観察していた。涙はとうとう筋になって、皺（しわ）くちゃの頬をすべり落ちた。

「用事はそれだけかね？」院長もやや心を動かされたらしく、語調をやわらかにした。

その声でニラ爺ははっと本来の使命を思い出し、掌でごしごしと頬の涙をぬぐいとった。

「今直ぐに、遊佐爺さんたちが、ここに会見にやってくるよ。用意をととのえなさい」

「なに？」院長はちょっと戸惑った。「ニラ爺さんはそれをわざわざ注進に来たのかね？」

「そうだよ」

「そりゃ有難う」黒須院長はそれを、ニラ爺の親切心とかんちがいして、ニコニコしながら声を更（さら）にやさしくした。

「用意はあらかたととのっているよ。あとは栗山書記の到来だけだ」

「お茶にお菓子、そんなものを用意しとけって、松木爺さんが言っとったよ」

「なに？」いったんゆるめた頬の筋肉を黒須院長はぐっと引きしめた。「お前さんはあいつらのお使いでやって来たのか？」

「そうだよ」ニラ爺は手にしたピースの吸いさしを、巨大な灰皿の中に投げこんだ。吸いさしはさっきの涙で濡れ、火もすっかり消えて、吸えなくなっていた。

黒須院長は牛のようなうなり声を発した。そして探るようなきびしい視線でニラ爺を見た。ニラ爺も影法師、影法師と念じながら、勇気を出して見返した。やがて院長が口を開いた。それは堅い、押しつけるような声であった。

「栗山書記が来てから、会談を開く。それまでは会談に応じられないと、そう皆につたえておけ」

「それじゃあ困るのや」押されてはならじと、ニラ爺はなだらかな肩を、テコでも入れたようにぐっとそびやかした。「それでは俺はみんなのところに戻れん」

そのままの姿勢で一分間ほど、大きな壮者と小さな老者は、黙ってお互いの顔を見詰め合っていた。その一分の間に、黒須院長の胸の中で、あるたくらみがハッキリと結実した。院長の表情はとたんに老獪（ろうかい）なゆるみ方をした。

「なあ、ニラ爺さん」

院長は猫撫で声で呼びかけ、詰襟服のポケットから煙草を出し、身ぶりでそれをニラ爺にすすめた。ニラ爺は手を出さず、警戒の色をとかなかった。やむなく院長は一本引き抜き、自分でそれを吸いつけた。

「ここを追い出されたくないというあんたの気持は、わたしにも良く判っている。それにリヤカー破壊は、あんたの悪意ではなく、過失じゃな」

「そうだよ」

「その点においてだね」院長はわざとらしく目尻を細くした。「情状酌量の余地があるということを、わたしは明日の経営者会議において、経営者たちに力説しようかと思っているん

だ。幸いにその説が通ったならば、あんたは退院しないですむわけだ」
　ニラ爺さんはきょとんとした顔で院長を見た。
「この告示文も――」院長は告示文をがさがさと畳みながら「それまでは掲示しないことにしよう。そして階下の告示文は破り捨てることにする」
「へえ」ニラ爺はわけも判らないまま、かすかに頭を下げた。
「さっき見たが――」院長の声はますますやさしくなった。「階下の掲示に、小学生みたいないたずら書きのあとがあったな。無邪気な爺さんもあればあったものだ。はっはっはあ」
　院長は高笑いをしながら、ふたたび煙草の箱をぬっと突き出した。ニラ爺はつられたように一本引抜き、ちょっと押しいただいた。院長は素早くマッチをすり、腰を浮かせてニラ爺の方にさし出した。
「年をとると、皆童心にかえる。大へんいいことだなあ」ますます好機嫌な表情に院長はなった。「時に訊ねるが、あの、海坊主、というのはどういう意味だね？」
「へえ」ニラ爺の顔はとたんに困惑の色をたたえた。「へへ、へへへ」
「な、どういう意味か、あんた知っとるだろう」
「そ、そこにいるやないか」
「どこに？」ぎょっとしたように院長はあたりを見回した。
「そ、そこだよ」ニラ爺は院長を真正面から指差した。「そこに坐ってるやないか」
「わ、わたしのことか！」
　院長のこめかみの血管がたちまち怒張した。しかし院長の表情は、おどろくべき自制力によって、依然たるやわらぎを保持していたのだ。青筋を立てたまま院長はニコニコ笑っていたのだ。
「そうか。わたしのことか。なるほどな、海坊主とはよく言ったもんだ。ハ、ハ、ハ」
「ヒ、ヒ、ヒ」とニラ爺も笑いの合唱に加わった。
「ついでに聞くが、書いたのは誰だね？」
　ニラ爺は突然笑いをおさめて、ふたたび警戒の色を取り戻した。そして煙草をごしごしともみ消した。沈黙が来た。
「ニラ爺さんは、沖禎介――」すこし経ってやや沈痛な調子で院長が切り出した。「沖禎介、横川省三という人を知っているだろう」
「ロシヤ軍に、殺された、人だろう」ニラ爺は記憶を探りながら、とぎれとぎれに答えた。
「わしはその頃、たしか小学生、だった」
「そうだ」院長は大きくうなずいた。「このおふた方は日本帝国のために、ロシヤ軍の後方に潜入して敵情を探られたのだ。その結果、チチハル付近にて不幸にもとらえられ、明治三十七年二月、ハルビンにおいて銃殺をうけられた。自分をむなしくして国に殉死（じゅんし）せられた、まことに立派な人たちだ」
「へえ」

「もし今も生きていられれば、是非ともこの夕陽養老院に御入院下さいと、お願いしたくなるような見事な人たちだ」そして院長は急に声をひそめた。「この夕陽養老院にも、ごく少数ではあるが、たとえばパルチザンみたいな悪い考えをもった爺さんがいる。わたしが追い出したく思っているのは、あんたみたいな善良な爺さんではなくて、むしろこの人たちなのだ。判るね」

「へえ」怪訝（けげん）そうにニラ爺は顔を上げた。

「だからこそわたしは、明日の会議において、あんたの無罪を主張するつもりなのだ。わたしに任せなさい」院長は自分の厚い胸をどんとたたいた。胸板はたのもしげな音を立てて鳴った。「そのかわりにあんたは、夕陽養老院のために挺身して、沖、横川になって貰いたいのだ。なってくれれば、もちろん在院は保証するし、毎日の煙草代ぐらいは支給するよ」

「まだ動く気配はないか」松木爺がいらいらした声で言った。

「まだそのままだ」と見張り爺。

「一体何をしてやがるんだろう」

「うまくまるめこまれてるんじゃなかろうか」

「きっと頑張っているんじゃよ」遊佐爺が弁護役に回った。「承知させるまでは戻ってきちゃいかんと、柿本さんが釘をさしただろう。だからニラ爺さん、必死に頑張っているんだろう。人間というものは、わしの七十八年の経験によると、その気になればシャンと性根が入るものだ。どれどれ、わしが今度は見張りに立とう」

遊佐爺は立ち上ってウンと腰を伸ばし、窓ぎわに歩み寄った。しとしとと降る雨のかなたに、院長室の曇りガラスの窓が煙っている。その乳色の窓に、動くものの影はなかった。

「へえ……オキ……ヨコガワ」

ニラ爺はとぎれとぎれにつぶやいた。そのニラ爺の顔を、犬の調練士のような緊張した視線で、黒須院長は見守っていた。

「そうだ。沖、横川だ。正義殉国の士だ」院長はそそのかすように語調を強めた。「あの、海坊主、と落書きしたのは、誰だね」

「へえ」苦悶と昏迷の影がニラ爺の顔を一瞬よぎった。

「へえ、あ、あれは、松木、爺さん」

「もひとつの、なんとか横暴、というやつは？」と院長はたたみかけた。

「遊、遊佐爺さんです」

「よろしい」莞爾（かんじ）たる微笑がほのぼのと院長の面（おもて）にのぼってきた。院長は満足げに顎鬚をしごき、声を低くした。「今から情報蒐集（しゅうしゅう）、秘密探知の要領、それをこちらに伝達する要領を教えて上げよう。椅子を持って、こちらに回ってきなさい。くれぐれもこのことは秘密にしておかねばいけないよ」

ニラ爺さんの顔は、仲間を裏切ることの緊張のために、一面に汗の玉がふき出ていた。言われた通り椅子をかかえて、大きな院長卓をよたよたと回った。幸いに回ったのは窓ぎわの方ではなかったので、曇りガラスに影をうつさずにすんだのだ。

「まだそのままか？」待ちくたびれて柿本爺がうんざりした声を出した。「ニラに任して置いたら果てしがない。そろそろ勢ぞろいして出かけようじゃないか」

「まあ待ちなさい」窓ガラスに頬を押しつけたまま遊佐爺が言った。「これはニラ爺さんの初の大仕事だぞ。大仕事であるだけに、わしは完遂させてやりたいと思う。完遂するのとそうでないのとは、今後のニラ爺の仕事の自信にも、大いに関係してくるからな。もう少し待ってやろうじゃないか」

院長室では院長とニラ爺が、大きな顔と小さな顔、脂（あぶら）ぎった顔としなびた顔を突き合わせるようにして、しきりに密談にふけっていた。もっともしゃべっているのは院長の方だけで、ニラ爺はほとんど口をきいていなかった。ニラ爺は苦しそうに、また迷惑そうに、しきりに貧乏ゆすりをしながら、放心した視線をあちこちに動かしていた。

［やぶちゃん注：「沖禎介」（おきていすけ　明治七（一八七四）年～明治三七（一九〇四）年）は明治期の諜報活動家（スパイ）。長崎県平戸市出身。東京専門学校（現在の早稲田大学）中退後、横浜で貿易業に従事していたが、明治三四（一九〇一）年に中国に渡り、北京の日本語学校東文学社の教師となり、明治三六（一九〇三）年には自ら文明学社を設立した。明治三七（一九〇四）年、日露戦争開戦に際しては民間人ながら陸軍の特務機関に協力し、ロシア軍の輸送路破壊工作に従事する。横川省三とともにラマ僧に変装して満州に潜伏しているところをロシア兵に捕獲され、ハルピン郊外で処刑された。処刑に際して当初は絞首刑が予定されていたが、彼らの態度が立派だったため、現地の司令官がロシア皇帝ニコライII世に請願して銃殺刑に変更されたとされている（以上は概ねウィキの「沖禎介」に拠った）。「横川省三」（よこかわしょうぞう　元治二（一八六五）年～明治三七（一九〇四）年）は明治期の新聞記者・スパイ。南部盛岡藩出身。初名は勇治で、勇次のペン・ネームで活動することもあった。旧姓は三田村・山田（兵役逃れの目的で「徴兵養子」となったため）。若い頃には自由民権運動に加わり、「加波山事件」（明治一七（一八八四）年九月に発覚した、民権運動を厳しく弾圧した栃木県令三島通庸らに対する爆殺暗殺未遂事件。事前に発覚）により投獄された。また、明治二〇（一八八七）年には「保安条例」施行に伴い、自由民権運動家伊東圭介（後に衆議院議員）とともに皇居周囲三里以内からの追放を命ぜられている。その後、『朝日新聞』記者として、海軍軍人郡司成忠の千島列島探検隊に同行した特派員や、日清戦争の従軍記者などで活動をしたが、その後は記者を辞め、アメリカでの農園経営やハワイ移民の斡旋などに携わった。日露戦争開戦に際しては、北京公使館の内田康哉（やすや）清国公使に招かれ、青木宣純陸軍大佐率いる特別任務班のメンバーとなり、沖禎介とともに特殊工作に従事した。ロシア軍の東清鉄道（ロシア帝国が満洲に建設した鉄道路線。満洲里からハルビンを経て綏芬河（すいふんが）へと続く本線及びハルビンから南下して大連・旅順へと続く支線からなる。ロシアは先の日清戦争直後の日本による遼東半島領有を三国干渉で阻止した見返りとして一八九六年に清の李鴻章から満洲北部の鉄道敷設権を得ることに成功していた）爆破任務のため沖とともにラマ僧に変装して満州に潜伏したが、チチハルにて捕縛され、ハルピンで沖とともに銃殺刑に処された（以上も概ねウィキの「横川省三」

に拠った)。」

牛島は茶碗を手にしたまま、大きなくしゃみを続けざまに二つした。茶碗はその度に上下に揺れ、ウィスキーの相当量を畳にふり落した。足の裏でそれを拭きながら、彼は忌々（いまいま）しげにつぶやいた。

「畜生め。誰かどこかで俺さまの悪口を言ってやがるな」

「悪口のせいじゃないよ」佐介は不機嫌な手付きで窓の方を指差した。「カレー粉だよ。カレー粉のせいなんだ」

「あっ、そうか。カレー粉か。なるほどな」牛島は合点合点して窓を見上げ、小指を鼻孔につっこみ、カレー粉をかき出すようにしながら、鼻声になった。「うん。こんなところに住んでいると、ハナクソが黄色になるだろうなあ。だから早く引越すんだな」

「ハナクソだけじゃないよ。ハナクソだけにとどまるものか。カレー粉は鼻の穴を通過して、咽喉（のど）に行く。咽喉からさらに肺の方にくだって行く。また咽喉から胃に落ちて行く場合も考えられるね。なにしろ空気といっしょだからな、肺も胃もすっかり黄色になっちまう」佐介の口調はすこしずつ熱を帯びてきた。牛島はきょとんとした顔つきで聞いている。

「あんな強い刺戟物が、たとえ微量にせよ、毎日々々肺や胃に入って行く。そして臓器の細胞を刺戟する。刺戟した揚句に吸収される。吸収されると肝臓に回る。紙巻煙草の煙ですら、長い間には肺癌（がん）をひきおこすのだ。それより強い刺戟物が、毎日々々遠慮もなく入ってくる。そうすれば一体僕らの身体はどうなるか。ほったらかしてもいいものであるか――」

「そりゃ放っとけないだろな」牛島は電熱器から焼けたパンをつまみ上げ、引裂いて自分の口に投げこんだ。「で、それはやはり、工場の設備が悪いのかね？」

「そうなんだ」佐介はうなずいた。「原料の草根木皮、これを砕くのはウスとキネの器械なんだが、それを混ぜ合わせる作業と小壜（こびん）に詰め込む作業は、これは器械じゃない。手でやるんだ。つまり手工業なんだ」

「じゃ従業員たちもつらいだろう」

「勿論つらいさ。そこで彼等は全員マスクをかけて仕事する。しかしマスクをかけても、カレー粉はやはり侵入するんだな。仕事が終っても咽喉がヒリヒリするそうだ。仕事が終ると、彼等は工場内につくられた風呂に入る。その大きな浴槽の新湯（さらゆ）が、十人も入るとすっかり黄色になってしまうんだ。たいへんなものだよ。そして風呂に入ってゴシゴシこすっても、身体からカレー粉がすっかりなくなるわけじゃない。風呂から上って帰途につく。その途中で汗が出るな。その汗をハンカチで拭くと、ハンカチがやはり黄色に染まるんだよ。つまりこれは、カレー粉が皮膚の表面だけでなく内部にまで浸透している証拠だね」

「たいへんだな」牛島は初めて共感の色を見せた。「そんなところでよく働く気になるな」

「従業員のことはあとととして――」佐介は胸ポケットから小さな皮手帳を出して、頁をそそくさとめくった。「その混ぜ合わせ、詰め込みの作業場の窓から、カレー粉が外に流れ出る。ふわふわと流れ出る。もっともカレー粉の全部が流れ出るわけじゃない。成分の中の軽いやつだけだ」

「軽いやつと言うと？」

「一番軽いやつは」佐介は手帳の頁に眼を近づけた。「コショウだ。こいつは一粒五十六ミリグラムしかない。このオッチョコチョイが真先に立って流れ出る。流れ出ては風に乗り、あちこちただよい、他人の家に無断で忍び込み、現にあんたの鼻の穴にまでもぐり込んで、大きなくしゃみを二つもさせた。そういうわけなんだよ」

「ふてえやつだな」牛島は鼻を撫でながら、彼方ガシャガシャ音の方向をにらみつけた。「それにしても、コショウがそんなにオッチョコチョイ野郎だとは初耳だったな。いい学問をした。で、それからどうした。相手の大将と交渉したか。なんならおれが一肌ぬいで、ゆすぶってやろうか」

「駄目、駄目」佐介は忙しく掌をふった。「敵の大将なるものは、そんなカンタンな奴じゃない。修羅吉五郎と言って、ここら一帯のちょいとしたボスなんだ。しなびたような小男なんだけどね。相当の悪者で、前科も三犯か四犯ぐらいはあるらしい。あんたなんかが行っても、逆にゆすぶられちゃうだけだよ」

「あんたなんか、とは何だ！」牛島が聞きとがめて語気を荒くした。「なんか、とは軽蔑の言葉だぞ！」

「失礼しました」佐介は素直にぺこりと頭を下げた。「そして僕らは集まって相談し、代表を選出した。作業場の窓をとざせ。塀を高くしろ。そんないくつかの条項を記した決議文を、工場内の応接間で修羅吉五郎に手渡したんだ」

佐介は言葉を切って、コップをとり上げた。佐介の顔もすっかりあかくなって、先ほどの疲労の色もほとんど消えている。舌をタンと鳴らしてウィスキーを飲み干した。牛島もそれにつられて茶碗をとり上げながら、話のつづきを催促した。

「それで、断られたか？」

「ううん」佐介は肯定とも否定ともつかぬあいまいな返事をした。

「粉が四散するのは、混ぜ合わせ、詰め込みの作業が手工業のせいなんだ。これを機械で一貫作業にすれば、粉が外に流れ出ることはない。そう吉五郎が言うんだ。そこでこちらは、じゃ、早くその機械を据えつけろと要求した。すると吉五郎の答えは――」佐介はまた手帳の頁をぺらぺらとめくった。「うん。ここだ。ドイツのリッカーマン社の充填機（じゅうてんき）、これを買い込む予定になっていて、これさえあれば飛び散るうれいはない、と言うんだ。何時頃買うんだと質問したら、それが何時か判らんと言うんだよ」

「へえ。そいつはムチャな言い草だな」

「ムチャだろう。だから僕らもカンカンになって、何故判らんのかと、詰問したんだ。すると吉五郎は、これは外国の機械であるからして、通産省に輸入申請しなけりゃならん。とこ

ろが輸入申請をするにはしたが、いまだに許可が下りないという返事だ。木で鼻をくくるような答え方なんだ。なんなら君たちの方で、早く許可が下りるように、通産省にかけ合ったらどうだ、などとぬかしゃがる」
「窓をしめろ、という件はどうなった？」
「窓を閉鎖したら、従業員が窒息するからイヤだと言うんだ」
「塀は？」
「塀を高くするには金がかかるし、塀が完成したとたんに充填機が到着したら、工事費が全然ムダになる。その時の保証はどうして呉れると、逆に居直られた」
「うん。なるほどなあ」牛島は感心して首をかたむけた。「向う様にもいろいろと仕事のやりくりの都合があるんだろうなあ」
「そうだ。向うの頭にあるのは、仕事のやりくりの都合だけなんだ」佐介は声を高くした。「ところがこちらは、毎日々々、現実にカレー粉を吸い込まされているわけだろう。任意に吸い込んでいるんじゃなくて、強制的に吸い込まされているのだ。現にあれがカレー工場になって以来、ここら一帯に喘息（ぜんそく）や肝臓病が激増した」
「ふん。じゃ、警察に訴えたらどうだい」警察、という言葉を発音する時、やはり牛島は神経質に眉をひそめ、おどおどと周囲を見回した。「この世に弱味なき人間なし！」
「相手のすべての退路を絶て！」被害者意識から一瞬加害者意識に立ち戻って、佐介も今週の標語を唱和した。「ところがねえ、牛さん、警察は筋違いなんだよ。こういういざこざは、区役所の建築係か、都の建築局設備課、そういうところで処理するんだ。もちろん僕らはそちらにも手を打った。ところが相手はお役人だろう。手続きは煩雑だし、仕事はのろのろしているし、陳情したって一向にらちがあかないんだ。お役所というところは、白川研究所以上にナマケモノぞろいだ」
「何を言ってる。研究所でナマケモノはお前さんだけだ」牛島はきめつけた。「しかしまあ、役人がナマケモノぞろいというのは、俺もまったく同感だな。俺は、昔、子供の頃、都庁、いや、その頃は東京市役所だ、そこで給仕を三年ばかり勤めたことがある。だから役人がナマケモノぞろいだということは、身に沁（し）みて知ってるよ」
「へえ、あんたは給仕をやってたのかい」佐介はもの珍しげに牛島の顔をじろじろと眺めた。「さぞかし可愛い給仕だったろうねえ」
「ああ、実に可愛いもんだった」
　その時佐介はあわててポケットから塵紙を取出し、顎（あご）をだらしなく下げて、大きなくしゃみをした。すると牛島も大急ぎで茶碗を畳に置き、それに唱和した。くしゃみが終ると、牛島はまた窓のかなたをにらみつけた。
「ひでえもんだな。ほっとく手はねえやな、あんなの。取締る法律はないのかい？」
　「そんな法律は、残念ながら、今のところはないのだ」佐介はふたたび皮手帳をつまみ上げて、頁をひらいた。顔を近づけた。「現在、鉱業に対する鉱山法、河川汚染に対する河川法、騒音では各府県の条例なんかがあるにはあるんだが、そいつはみんな散在してるような

具合でね、それらの公害を体系づけた法律はまだないんだ。今のところ、被害者が民事訴訟であらそう他はないんだな」
「お前さんの手帳には――」膝を乗り出しながら牛島が呆れたような声を出した。「また実にいろいろなことが書き込んであるんだなあ」
「そうだよ。書いとかないと、忘れてしまうからね。あんたは手帳やメモは使わないのかい？」
「使わないな。使わねえ主義だ」牛島はさげすむように手帳の方を顎でしゃくった。「俺は全部を頭の中にたたきこむ方針なんだ。手帳やメモにたよるから弱くなる。行動的じゃなくなるんだ。お前さんもそんな**にせ**インテリ趣味は早く止めにした方がいいぞ。メモはメモだけに終って、メモ自身からは何もうまれっこないんだぜ。現にお前さんはさっきから、その手帳ばかりいじくって、ここから退いてはいけないなどと力んではいるが、つまるところ力んでるだけの話じゃないか。それにくらべるとこの俺は、さっきからくしゃみを三つしただけで、もうそろそろ本式に腹を立てているんだぞ」
「それはそれとして――」痛いところをつかれて狼狽（ろうばい）しながら、佐介は話をごまかした。「次の国会に、公害法という法案が、あるいは上程されるかも知れないんだ。そういう情報もあるにはあるんだけれどね。それが通れば修羅印カレー工場は、早速その法律に触れることにはなる。もちろんそれまで僕らは手を束ねて待つわけじゃないが――」
「公害法？」
「そうだ。公害法。騒音だの空気の汚染に対する法令だね」
「井戸水の汚れも入るか？」
「もちろんだね。それから放射能汚染。いずれ日本にも原子炉が出来るかも知れないからね」
「もうその手帳はいい加減にひっこめろよ」牛島はうんざりした声を出した。「お前さんが手帳だの脅迫状などを持ち回っているやり方が、俺はほんとに気に食わねえんだ。ついでにそいつも電熱器に乗せて燃しちゃえ」
「飛んでもない」佐介は手帳を閉じて、大急ぎで内ポケットにしまいこんだ。「これを燃しちゃうと大変だ。カレー粉工場の従業員から、苦労して聞き出したメモもあるんだから」
「従業員にも会ったのか」
「そうだよ」佐介は軽くうなずいて、牛島の手首をひょいとのぞき込んだ。「まだ一時間経たないのかね」
「経つわけがあるか」牛島はパッと手首を裏返しにして、腕時計を見せないようにした。「すこし腰を落着けろ。そわそわするな！」
　それから二人は顔を見合わせ、少時（しばらく）黙りこみ、騒音と刺戟臭のただよう部屋の中で、しきりに手や口を動かし、ウィスキーを含んだり、ハムをつまんだり、トマトを齧（かじ）ったり、パンの耳を引裂いて口に押し込んだりした。忙しくその作業に没頭することによって、時間の遅れを取り戻そうとするかのように。――雨は相変らずトタンの屋根を濡らしていた。入口の釘にぶら下げた牛島のレインコートから、土間の空罐に、まだ水滴が

チピ、チピと音を立てて落ちている。電熱器のうずまきニクロム線はあかあかと灼け、そこらに電報の白っぽい燃えかすがこびりついている。

（今晩在院者と会見す、とはどういうことだろう？）さっきの電報の内容のことを佐介はちらと思案した。（何か事件でも突発したのかな。会見。黒須院長が会見を申し出たのか、在院者が中し込んだのか。院長の方からだったら、しかし会見とは言わずに、訓示とか引見とかそんな表現をする筈だ。するとやはりこれは在院者が申し込んだものだろう。爺さんたちにも相当に不平家がいるからな。もしかすると在院者たちに、**残飯**のことが発覚したんじゃあるまいか。そうだとすると、これはちとうるさいぞ）

「で、修羅印カレーの従業員たちは」手近のものをすっかり平らげ、両掌で胃の上を撫でおろしながら、牛島が言った。「そんなイヤな職場で、そんな不健康な場所で、一体どういう気持で働いているんだい？」

「気持？」

「うん。気持だ」牛島の眼は酔いと好奇心のためにキラリと光った。「今時分までガシャガシャやってるところを見ると、奴さんたち、残業をやっているんだろう。定時労働だけでも黄色い汁、いや、黄色い汗が出るというのに、何を好んで残業までする気持になるんだろうな。ライスカレーを三杯食べて、更に二杯詰め込むようなものじゃないか」

「気持じゃないよ。気持だけで仕事なんか出来るものか。わけは簡単だよ。残業手当が多いからだよ」

「いくら残業手当が多いからって――」

「本給がそのかわりに、べらぼうに少いんだよ。若い女工員なんかには、月二千五百円か三千円程度の給料しか支払っていないんだ」佐介は内ポケットに手をやり、無意識裡に手帳をひっぱり出そうとして、あわてて元に押し込んだ。牛島がじろりとにらみつけたからだ。「ええと、労働基準法によるとだね、時間外労働には、定時給のたしか二十五パーセント以上を支給しなけりゃならないことになっている。ところがこの修羅工場では、その倍の五十八パーセントぐらいを払っているんだ。五十パーセントの手当で残業を釣るわけだね。だから従業員たちは、本給だけでは食えないから、自発的に残業をするということになる。無理な残業をして、顔や手足は言うまでもなく、鼻や咽喉や内臓まで黄色になって、まるで人間の形をしたタクアンになって、それでやがては働けなくなり、工場からおっぽり出されてしまう。一人がおっぽり出されれば、また新しく別のが入ってくる。今失業者はうようよしてるからねえ」

「それで、修羅工場の製品は、よく売れてるのかね？」

「うん。相当に出てるようだ。カレー粉なんてものは、料理に使って安上りなものだから、不景気になればなるほど、よく出るものらしいんだ。月給取りだって、シケたやつほどカレーライスをよく食べるものね」

「おい。お前は俺を侮辱する気か」と牛島は口をとがらせた。「俺のことをあてつけて言ってるな」

「いや、そういうわけじゃない」佐介は掌をひらひらと振った。「僕だって、こんなとこに住んでなきゃ、今日の昼飯に富岳軒のカレーライスを食べているよ。富岳軒も修羅印カレーを使っているんだ。この間料理場をのぞいたら、棚の上に修躍印の特大罐が乗っかっていたよ。それを見ただけで、僕は胸がムカムカした」

くぐり戸をくぐってひとつの足音が、小屋の入口にしのびやかに近づいてきたが、それはガシャガシャ音に紛（まぎ）れて、二人の耳には入らなかった。足音は入口に立ちどまり、少時（しばらく）小屋の内部をじっとうかがっていた。やがて板扉がコツコツと叩かれた。牛島はぎょっとして入口の方をふりむき、片膝を立てて身構えた。身構えたと言うより、遁走（とんそう）準備の姿勢をとったという方に近かった。

「どなた？」と佐介が声をかけた。「どなたさんですか？」

「あたしよ。曽我よ」女の声が戻ってきた。風邪でもひいたようなしゃがれ声だ。「連絡係の曽我ランコよ。入ってもいいですか」

たてつけの悪い板扉ががたごとと開かれて、若い女の顔が戸外の闇を背景として、しろじろとうかび上った。曽我ランコは紺色のスラックスとチェックのブラウスをつけ、それに番傘を手にしていた。番傘からは雫がぽたぽたと垂れていた。

「ああ、曽我君か」佐介は酔いであからんだ顔色をごまかすように、掌で頬をしきりに撫で回した。牛島はまだ片膝を立て、警戒の色を解かず、曽我ランコの一挙一動を見守っている。曽我ランコはその視線を黙殺して、番傘を板壁の遊んでいる釘につるし、草履を脱いで部屋に上ってきた。穿（は）いていたのは男ものの板裏草履だ。濡れた白い素足がそのまま畳をやわらかく踏んだ。

「会議には欠席するんですか？」

小机の横にごそごそと膝を折って坐りながら、曽我ランコはしゃがれ声で言った。牛島は警戒の色をややゆるめ、膝を横に寝かせ、また茶碗をとり上げながら、新人者のスラックスの腰の線を横目で眺めていた。スラックスの地は薄く、肉体の線をしなやかに浮き立たしている。牛島はそこから視線をムリに引き剝（は）がして、耐えがたきを耐えるような表情になり、茶碗の中のものをやけにぐっと飲み干した。曽我ランコはよく動く瞳で、そこらのウィスキーや竹の皮や電熱器などを見回した。佐介が口を開いた。

「いや、そろそろ出かけようかと、思っていたところだよ」

「今夜の会合は、昨晩以上にてんやわんやになりそうですよ」曽我ランコはむしろそのことが楽しいらしく、そそのかすような口調になった。「もしかすると今晩、殴り込みということになるかも知れないのよ」

「風邪でもひいたのかい、声ががさがさしているようだが――」佐介はちょこちょこと立ち上り、湯呑みを持って戻ってきて、それに瓶の残りを注ぎ込んだ。曽我ランコの膝の前に押しやった。「梅雨時の風邪はなおらないと言うから、用心したがいいよ」

「殴り込みとは面白いな」牛島が傍でわざとらしくひとりごとを言った。無視されたことも面白くなかったし、佐介がウィスキーを見知らぬ女についでやったことも面白くなかった。

（なんだい。もともと俺が買ってきたウィスキーじゃないか）
「風邪の気味もあるけれど」曽我ランコは首をやや傾け、平気で湯呑みをとり上げて唇に持って行った。「今日のお昼、代表の人たちといっしょに、修羅吉五郎に会いに行ったんですよ。だから声が嗄（か）れちゃった」
「なんだい。君もしゃべったのか」
「しゃべったのよ。しゃべらずにはいられないわ。吉五郎の奴、とても図々しいんですもの」ウィスキーが咽喉（のど）にしみたらしく、曽我ランコは軽くせきこんだ。「それにあの応接間でしょう。ここらの空気よりも、カレー粉の含有量がずっと多いのよ。それですっかり咽喉をいためちゃった」
「連中は元気で働いてたかね？」
「ええ。割に元気に働いていた。吉五郎が窓から工場の方を指差して、あんな風（ふう）に工員たちは元気で働いている。今までにうちの従業員でカレー粉で死んだものもいなければ、重病になったのもいない。それだのに塀の外であんた方が大騒ぎするのは筋違いじゃないか、なんて言い出してきたのよ。カレー粉が毒なら、インド人は全部死んでしまう筈だ、なんて言うのよ」
「ムチャを言うなあ。あの工場は、キャラメル工場から転身して、まだ半年しか経っていない。病人や死亡者が出来るのは、今後のことだ」
「そうよ。吉五郎の言い草ったら、そりゃカレー粉を多量に吸い込めば、病気にもなろうし、死にもしよう。でもそれは水なんかと同じで、水だっていっぺんに一斗も飲めば、力道山だって死んでしまう。それと同じことだと言うのよ。そこで許容量という問題になって、吉五郎とあたしたちとずいぶん言い争ったの」
「それでどうなった？」
「なにしろこちらも向うも、カレー粉の許容量については、ハッキリした医学的根拠はないでしょう。だから結局は水掛け論ね。向うでは、印度のタルミ族なんか、三度三度カレーをごしごし食べているが、弱るどころかとても元気だと言うの。写真を持ってきたわ。タルミ族がカレー飯を手づかみでむしゃむしゃ食べている写真よ。こんなに元気で頑丈だと言うんだけれどね、あたしたちが見ると、それほど頑丈には見えないの。やせこけて、肋骨なんかが出ていて、タルミ族の名前通りすっかりたるんでいるんですよ。それを吉五郎に詰問したら、そりゃ見解の相違だって言うのよ。吉五郎の言い分では、この程度に痩せてるのが本当の健康体で、これ以上肥ったらそれは高血器体質と言って、不健康体だと言うのよ。そして自分の腕をまくり上げて、自分はこんなに痩せてるけれど、シモの病いをのぞけば、生れてから病気という病気を一度もやったことがない、と自慢をしたわ。そのしなびた腕の上の方に、小さなイレズミが見えたわ。とってもイヤな形のイレズミ！」曽我ランコは顔をやや染めて、眼付きをするどくした。「男ってほんとに下劣ねえ。自分の腕にあんなものを彫りつけるなんて！」
「男にもよりますよ」ウィスキーもなくなって手持無沙汰をかこっていた牛島が、ここぞと

ばかり口を出した。「下劣な男もいるが、その半面、高尚な男もいる」
「あなた、どなた？」曽我ランコは顔をねじ向けて、牛島をまっすぐ見た。
「これは僕の親類」
「俺は彼のイトコ」
佐介と牛島は、瞬間に白川研究所員の習性と地金を出して、同時に同じようなウソを言った。曽我ランコは眼をぱちぱちさせた。
「イトコのくせにあまり似ていらっしゃらないようね。あなたの顔は四角だし、栗山さんの顔は南京豆型だし」曽我ランコは視線を佐介に戻した。「どこまでお話したかしら」
「イヤな形のイレズミだよ」佐介が答えた。「ランコさんの口を封じるために、吉五郎はそんなイレズミを見せびらかしたんじゃないかな。あいつのやりそうなことだよ」
「憎いわ、あの男」曽我ランコは騒がしい器械音の方角を見据（す）えた。「そう言い争っているところに、お待ち遠さまという声がして、社員の一人が大皿のカレーライスをささげ持って、しずしずと応接間に入ってきたの。そしてそれを吉五郎の前に置いたのよ。すると吉五郎は、お腹がすいたから失礼いたします、なんてバカ丁寧なあいさつをして、それをむしゃむしゃと食い始めたんですよ。あたしたち、もううんざりしちゃって、そのまま立ち上って帰ってきたの。どうも吉五郎の奸策にひっかかったらしいわ」
「そうらしいね」佐介は手刀で頸（くび）筋をたたきながら、大あくびをした。「昨夜ほとんど寝てないから、実にねむい。でも会議に出なくちゃいけないな。殴り込みなんかになるとたいへんだ。殴り込みはいけないね。ねえ、牛さん、つき合いはこれくらいでいいだろう」
「そうだな」牛島はとろんとした眼で腕時計を見た。「もう許してやることにしよう。そして俺も会議に出席させて貰うぜ」
「まだくっついてくるのか」佐介は嘆息した。「これは、ここらへんの住民だけの問題だから——」
「いや、イトコの問題は、同時に俺の問題だよ」牛島は頑張りの気配を見せた。自分が何をやりたいかという方途を失ったことにおいて、牛島はあきらかに頽廃していた。
「それに俺は昔から、殴り込みなどということは、大好きなんだ。放って置くわけには行かない。それに、何かネタがころがっているかも知れないし」
「この方、新聞記者？」曽我ランコが聞きとがめた。
「いや、そんなんじゃないよ」佐介は急いで口をさしはさみ、電熱器のスイッチを切って立ち上った。「ランコさんは人を憎むと、とたんに生き生きとしてくるようだね。ふしぎだね」
「あたし、生れつきそうなのよ」
曽我ランコも立ち上った。曽我ランコは佐介と同じくらいの背丈があった。スラックスに包まれた腰から脚は、女猛獣使いのそれのように、たくましくしなやかであった。牛島はまぶしくそれを見上げながら、つづいてごそごそと立ち上った。
「考えてみると、あたし、いつも誰かを憎んでるの。誰かを憎んでないと、気ぬけがして、ぼんやりなっちまうんです。へんなのねえ」

［やぶちゃん注：「12」の続きであるが、そのエンディングの牛島の「A金庫の鍵型をとった犯人は、」「鍵型をとった謎の人物は、いいか、性根を据えて答えるんだよ、あれは、お前さんだろう。お前さんだな！」という佐介の応答がない形で始まっている。談話の様態から佐介は否認したと読めるが、ちょっと読者にとっては不親切で不満である。

「ドイツのリッカーマン社の充填機」薬剤充填機や食品包装機を製造する会社として実在する。一八九二年創業。

「公害を体系づけた法律はまだないんだ」日本の四大公害病である水俣病・第二水俣病（新潟水俣病）・四日市ぜんそく・イタイイタイ病の発生を受けて制定された公害対策（当該法では「公害」を大気汚染・水質汚濁・土壌汚染・騒音・振動・地盤沈下・悪臭の七つを「公害」と規定していた）に関する日本の基本法である「公害対策基本法」は昭和四二（一九六七）年八月三日に公布されて同日施行した。後の平成五（一九九三）年十一月十九日の「環境基本法」施行に伴い、統合されて廃止された（「環境基本法」では「公害」の定義を『環境の保全上の支障のうち、事業活動その他の人の活動に伴って生ずる相当範囲にわたる大気の汚染、水質の汚濁（水質以外の水の状態又は水底の底質が悪化することを含む）、土壌の汚染、騒音、振動、地盤の沈下（鉱物の掘採のための土地の掘削によるものを除く）及び悪臭によって、人の健康又は生活環境（人の生活に密接な関係のある財産並びに人の生活に密接な関係のある動植物及びその生育環境を含む）に係る被害が生ずること』を指したが、福島第一原子力発電所事故による広範な放射能汚染を契機として、平成二四（二〇一二）年九月十九日に本「環境基本法」が改正施行されて、それまで適用除外とされていた放射性物質を公害物質と位置づけることとなっている）。ウィキの「公害対策基本法」他に拠る）。佐介は「次の国会に、公害法という法案が上程されるかも知れない」と言っているが、**本作の初出は昭和二九（一九五四）年八月で、「公害対策基本法」十三年後のこと**であり、「放射能汚染」とも佐介は挙げているが、それが公害と規定されたのは実に五十一年後となった。

「竹の皮」見かけることが少なくなったが、筍（たけのこ）の外側を鱗片状に包んでいる皮で、表が斑模様になっており、食べ物などを包むのに用いる。

「高血器体質」ママ。誤植とか誤字ではなく、高血圧器質体質の略のつもりであろう。

「シモの病い」性病の淋病であろう。］

15

ニラ爺は首を鬱々（うつうつ）とうなだれ、手すりにすがりつくようにして、一歩々々階段を降りた。西寮の廊下に動く人影をちらと眺め、そして東寮の廊下を歩み入った。廊下を踏む足は、ニラ爺の現在置かれた状況を反映して、自（おのずか）ら忍び足になっている。ニラ爺は肩を丸くして、墨汁の一合も呑んだような気持になり、どん詰りの部屋の入口に足を踏み入れた。部屋中の視線がいっせいにニラ爺に集中した。

「どうだった？」

「どうだった？」
「へえ」ニラ爺はさらに肩を丸くして、畳にへたへたとうずくまった。「くたびれた」
「くたびれた、じゃ判らん！」さっきからイライラしていた松木爺が、険のある口調できめつけた。「三十分以上もかかったぞ。一体何を話していたんだ！」
「まあまあ」と遊佐爺がとりなした。「くたびれるのも無理はない。なにしろ相手は海坊主ときてるからな。よしよし、お駄賃にピースを三本上げる。で、どうだった。海坊主は会見を承諾したか？」
「へえ、それが――」ニラ爺は三本の巻煙草を軽くおしいただいた。「栗山書記が来てから、会議をやると――」
「なに、栗山書記が来てから？」松木爺が早飲み込みをして憤然とつっかかった。「三十何分もかかって、そんな返答を貰ってきたのか。何ということだ。子供の使いじゃあるまいし！」
「まだ全部言ってないやないか」さすがにニラ爺もむっとして、語気をやや荒くした。しかしその表情は、憤怒というよりも、踏みつぶされた蟹（かに）に似ていた。「文句を言うなら、全部を聞いてからにして貰おう。途中で一々口を出されたら、おれ、何もしゃべれんやないか」
「判った。判った」滝川爺がニラ爺をなだめた。「これは松爺さんが悪い、松爺さんはあやまれ」
　松木爺はふくれっ面で、不承々々（ふしょうぶしょう）頭をぺこりと下げた。見張り爺たちも窓辺から離れ、ニラ爺を中心として、おのずからなる車座をかたちづくった。その時中庭のかなた、二階の院長室の曇りガラスの窓が一寸ばかり開かれて、そこから黒須院長の双のぎょろぎょろ眼が、こちらをじっと見おろした。院長は呟（つぶや）いた。
「ふん。ニラ爺が戻ったらしいな。影の具合で見ると、取巻いて坐っているらしい。ニラ爺のやつ、ヘマを言って、見破られなければいいが」
「だ、だから俺は頑張ったのや」ニラ爺は痩せ肩をぐっとそびやかした。「そんな返事では皆のところに戻れんと、タンカを切ってやったんや」
「ほう。それはニラ爺さんにしては上出来だったな。よく頑張って呉れました」遊佐爺がニラ爺の肩をやさしく叩いた。「栗山が来ないと会見はしない、そんな筋違いがあるものか。あんな**うすのろ**書記が来ようと来まいと、わたしたちは会見に押しかけるぞ」
「俺もそう言ってやったんや。あんな**うすのろ**書記」ニラ爺は遊佐爺の言葉にうまく**おんぶ**した。「そこで俺と院長の間に、はげしい押問答が始まった」
「それで三十分もかかったのか」松木爺が性こりもなく、疑わしげな口をはさんだ。「おや、ニラ爺さん、お前慄（ふる）えているな。なんで慄えているんだ？」
「慄えてるんやない。貧乏ゆすりや」ニラ爺は額をあおくして言い返した。そして慄えを止めようとしたが止まらなかった。「貧乏ゆすりぐらいしたって、いいじゃないか。俺の自由や」

「松爺さんはちょっと口数が多過ぎるぞ」見兼ねたらしく柿本爺がたしなめた。「他人の自由は認めてやらなければいけん」
「それで結局のところ」遊佐爺が言った。「海坊主は会見を承諾したか？」
黒須院長は猿（ましら）の如く階段をかけ降りていた。そして左右の廊下をするどく見回し、玄関脇の掲示板の前に立った。イタズラの赤インク文字をとどめた告示を勢いこめて引き剝ぐと、素早くくるくる丸め、それを小脇にかかえた。院長の巨軀はふたたび猛烈な勢いで、階段をいっぺんに三段ずつ、ピョンピョンとかけ上った。院長室の扉をしめると、丸めた告示文を大急ぎで書類棚にかくし、また窓辺にかけ寄って、細い隙間から中庭をぎょろりと見おろした。猛烈な運動のために、院長の胸は大きく動悸（どうき）を打っていた。東寮どん詰りの部屋の窓に、その時いくつかの影がばらばらと立ち上った。院長はあわてて窓をおろし、背をかがめて回転椅子に戻った。
「さあ、出かけるとするか」遊佐爺が部屋中を見回した。立ち上らないのはニラ爺だけであった。そのニラ爺の禿げ頭を遊佐爺はいぶかしげに見おろした。「さあ、ニラ爺さん、元気を出して出かけよう」
「俺、ここに残ってる」
「残る？」
「俺、くたびれた」ニラ爺はなさけない声を出した。ニラ爺の顔は恥じと自責で惨（みじ）めに歪んでいた。「ほんとに、俺、くたびれたんや」
「ムリに連れて行かなくてもいいじゃないか」さっきから黙っていた滝川爺が、初めて口を出した。「当人もくたびれたと言っているし、気が進まない様子だから」
「ニラ爺さん」遊佐爺はおごそかに呼びかけた。「お前さんの退所問題も、今夜の議題にのぼるんだよ。もしかすると、お前さんの余生がどうなるか、今夜そっくりきまってしまうかも知れないのだ。いわばお前さんの生命の瀬戸際だ。立ちなさい！」
「出かけたくない何か事情でもあるのか」松木爺が皮肉な口を入れた。
「出るよ」ニラ爺はむっとして松木爺を睨みつけ、のろのろと立ち上った。「出りゃいいんだろう、出りゃ」
「出りゃいいんだよ」遊佐爺が重々しくうなずいた。「出て、自分の言いたいことを、堂々と言うんだよ。なに、海坊主なんか、おそるるに足らんよ。滝爺さん。メモはちゃんとしてるな」
遊佐爺を先頭にして、一行はぞろぞろと廊下にあゆみ出た。廊下には人影がなかった、かくれんぼ爺さんたちも、もはや遊び倦（あ）きて、めいめいの部屋に引込み、同室の爺さんと雑談をしたり、日記をつけたり、あるいは眠っていたりした。人気（ひとけ）のない廊下を一行は声もなく、粛々（しゅくしゅく）として行進した。黒須院長は回転椅子にきちんと腰をおろし、一行の到着を待っていた。じりじりとして待っていた。こういう緊張した時間というものは、案外に長く感じられるものだが、その緊張の長さに耐えかねて、院長の手は硯箱の蓋を無意味に外したりかぶせたり、机の引出しをあけて書類綴りの耳をつまんだり、

揚句の果て引出しの一番底から、ごそごそとなにか写真を引っぱり出した。それは一カ月ほど前院長がしまい忘れていた、一葉の猥写真であった。これは先月の経営者会議の時、経営者の一人の食堂経営者が、ヒヒヒと笑いながら黒須院長に呉れたものだ。（こんなところにしまい込んでいたのか）　院長の眼は一瞬あやしく光って、その手ずれのした写真にじっと見入った。白人の若い女と黒人の若い者が、厚ぼったい絨毯（じゅうたん）の上で、裸身のまましらじらとからみ合っている。遊佐爺一行を待つことのじりじりと、写真の姿態のなまなましさがかさなって、やがて黒須院長の額にべっとりと汗が滲み出てきた。足音がざわざわと階段を登ってきた。院長は写真を急いで書類の間につっこみ、引出しをがしゃりと押し込んで姿勢を正した。（栗山書記のやつ、一体何をしてやがるんだろう）院長は掌を下腹にあてて、大きく深呼吸をした。（早く来院しないと、役に立たないではないか。あのウスノロ書記！）扉が外からこつこつと叩かれた。院長は荘重な声を出した。

「はいれ」

　扉がしずかに開かれた。遊佐爺を先頭に、一行はぞろぞろと院長室に入ってきた。黒須院長は眼をかっと見開き、素早く爺さんたちの数を目算した。（七名だな）そう院長が思ったとたんに、ニラ爺が廊下からちょこちょことすべり込み、扉をしずかにしめた。総勢はニラ爺を交えて八人であった。（ニラ爺を別とすれば、院内のアカ爺は、この七人だな。よし、恫喝（どうかつ）と懐柔。この両面作戦と行こう！）

「院長」立ったまま遊佐爺が呼びかけた。「俺たちは会見に来たぞ」

「まあ掛けなさい」黒須院長は壁の方を顎でしゃくった。そこには折畳み式の椅子がずらずらと立てかけてあった。

「ことわって置きますが――」院長卓をさしはさみ、各自椅子に腰をおろしたのを見定め、院長は相手方をいらだたせる戦術に出た。「諸君の話はうけたまわるが、これは正式の会談ではありませんぞ」

「なに。正式の会見でない」滝川爺が声をたかぶらせた。「それは何故だ？」

「何故かと言うと――」院長は落着いた声で言った。「諸君は八人だが、わたしは一人だ。立会人もいなければ記録者もいない。わたしの発言を、諸君がどうにでも解釈するおそれがある。それではわたしの立場はないではないか。だからこれは正式の会談でなく、予備会談ということにする」

「そんな言い分があるか」滝川爺がいきり立った。「俺があんたに会見を申し込んだのは、昼間ことだ。何故立会人の手配をして置かなかったんだ」

「手配はした」黒須院長はますます落着きはらった。「栗山書記に電報を打った。が、まだやって来ない」

「栗山書記でなくとも、立会人は誰でもよかろう」遊佐爺が長老の威厳をこめて発言した。

「階下の事務局員でも――」

「事務局員は全部帰宅した」院長は顎鬚を悠然と撫でた。「院内に残っているのは、わたしひとりだ」

遊佐爺は何か言い返そうとしたが、思い直して、味方をぐるりと見回した。
「院内にはもう誰もいなかったか。誰か見かけなかったか？」
「炊事係の木見婆さんがいたよ」ニラ爺がとんきょうな声を立てた。「さっき、院長室から戻る時、西寮の廊下の方にいたようだった」
「そうか」喜色が遊佐爺の頬を走った。「ニラ爺さん、ひとっ走りして、木見婆さんをつかまえてきて呉れや」
黒須院長は、余計なことを、といった表情で、じろりとニラ爺をにらみつけた。ニラ爺はその視線に射すくめられて、身体が一回り小さくなった。そのニラ爺の脇腹を、松木爺の拳骨がごくんとこづいた。
「早く行かんか。早くしないと、木見婆さんは帰ってしまうぞ」
「へへえ」
ニラ爺はつながれた犬みたいに、上目使いに院長をおそるおそる見た。院長は眼をパチパチさせて、顎をぐいとしゃくった。院長のつもりでは、それは木見婆さんを探すふりして、適当な時刻に手ぶらで帰ってこい、という意味だったが、ニラ爺はそれを、早く探して来い、という意味に受取ったのだ。ニラ爺の顔はやや活気づいた。「早く行きなさい」遊佐爺がはげました。
「へえ」
綱から放された犬のように元気づいて、ニラ爺は立ち上った。そろそろとあとしざりして扉に突き当り、身をひるがえして廊下に出た。その足音が遠ざかるのを待って、遊佐爺は院長の方に開き直った。
「先ず聞きたい。部屋割りくじ引きの期日が、例年より一カ月も遅れている。毎年の例では、梅雨に入る前、すなわち春季大掃除の翌日に、くじ引きが在院者代表によって行われた。それが一体今年はどうなったのか。院長の怠慢ではないのか」

木見婆は夕陽養老院における唯一人の女性であった。九十九人の爺さんに対して一人の婆さんであったにもかかわらず、さしてチヤホヤされることもなく、近頃はむしろ憎まれている傾向すらあった。憎まれている原因は、彼女が炊事婦であるということと、たいへんに肥っているということの二つであった。前者は近頃の院内食事の不味（まず）さにむすびついていたし、後者は彼女が旨いものばかり食っているに違いないという嫉妬にむすびついていた。
（木見婆さんのことを言っちゃあいけなかったのかな。院長が俺をグイとにらんだが）その木見婆の姿を探し求めて、西寮の廊下をふらふらと歩きながら、ニラ爺は考え、
た。（だって、いるものはいるんだから仕方がない。なんぼ沖、横川でも、いるものはいるし、いないものはいないのだ。しかしそれを口に出したのは、まずかったなあ。おかげでまた木見婆探しのお使いには出されるし――）
木見婆の姿は西寮のどこにも見当らなかった。ニラ爺はまたくたびれた足をとぼとぼと

引きずって戻ってきた。そして食堂の調理場の入口に立ち止った。扉に耳をあてて内部の様子をそっとうかがった。内部には電燈がついて、何かコトコトと音が聞えてくる。
「木見婆さん。木見婆さん」
　ニラ爺はそう呼びかけながら、肩で扉をギイと押した。扉には鍵がかけてなかったのだ。すると調理場のすみの薄暗いところから、何かぶわぶわとふくらんだものが、おそろしい勢いで飛んできて、ニラ爺の身体にぶっつかった。ニラ爺はよろめいた。
「駄目、駄目。駄目だってばさ！」木見婆は両手で懸命にニラ爺の肩を突っ張り、外に押し出そうとした。「爺さんたちは調理場に絶対入っていけない決めになってるんじゃないか。早く出なさいってば。院長先生に言いつけるよっ！」
「へっ、へへっ」ニラ爺も両手をあげ、同じく突っ張りをもって応じながら、厭がらせの笑い声を立てた。いつもはカンの鈍いニラ爺が、調理場のすみの状況から、珍しく早くカンを働かせたのだ。「一体、あんたは、こんな遅く、何をしてるんやね」
　調理場の一隅の巨大な米櫃のそばに、袋がひとつ置かれていた。袋は半分ばかり米が充たされ、その横に一升桝（いっしょうます）がころがり、床に米粒がしらじらと散乱している。米櫃から布袋に米をうつす途中、ニラ爺に呼びかけられ、大狼狽したさまが歴然であった。
「へへっ」ニラ爺はなおも突っ張りをつづけながら、笑いを洩（も）らした。相手が木見婆にせよ、とにかく女性ともみ合うことは十何年来のことで、それがニラ爺をその意味で結構たのしませていた。「院長先生に言いつけるなら、言いつけたらいいやないか。こちらは何も困りゃせん。困るのはあんたの方だろう」
　木見婆は突然突っ張りをやめた。ニラ爺を外に突き出しても、現場をすでに見られた以上は、無駄な話であった。
木見婆はせっぱつまって両掌で顔をパッとかくした。肥満して幅の広い顔は両掌にあまった。彼女はそのまま肩をふるわせて、涙をしぼり出そうとしたが、それはうまい具合に行かなかった。一方ニラ爺は立入禁止の調理場の光景を、さも珍しげにニコニコしながら眺め回していた。木見婆は指の間から片目をのぞかせ、ニラ爺の様子をうかがった。そしてまた指を閉じて、声をしぼり出した。
「オウ、オウ、オオウ」
「一人あたり二畳という広さで、一体人間が生活出来ると思っているのか！」遊佐爺は院長卓をばたんと叩いた。「二畳とはたった一坪だ。いくら我々が老人で、しなびているとはいえども、たった一坪では手足も伸ばせないではないか」
「二畳あれば充分だ」院長もすこし声を荒くした。「わたしは一週間前、板橋の養育院に視察に行ってきた。あの施設の良好な都立養育院ですら、一人当り何畳であるか。わずか一・一畳ですぞ。保護課長の談話では、せめて一人当り一・五畳を、さしあたりの理想としているとのことだった。それを、なんですか、あんたがたは。一人当り二畳も占領して、まだ不平を言うなんて！」
「オウ、オオウ、オウ」

木見婆は涙は出さず、泣き声だけを立てていた。ニラ爺はニコニコと頬をゆるめて、調理場の中をあちこち歩き回っていた。禁断の場所を大っぴらに歩き回るのは、なんといい気持のものだろう。とがめる者はとがめる力を失い、むしろ逆にこちらがとがめる立場に立っているのだ。今日の昼以来さんざんこき使われた恨みも、仲間を裏切った悩みも、これでいっぺんに晴れてしまって、ニラ爺は軽快にスッスッと歩き回った。戸棚の前に立ち止り、砂糖壺から大きな白砂糖のかたまりをつまみ上げ、口の中にぽいとほうり込んだ。純良な甘味がニラ爺の口の中にじわじわとひろがり、舌の根に沁み込んだ。

「旨（うま）いなあ」ニラ爺は舌を鳴らして木見婆の方に振り向いた。「木見婆さん。泣かなくてもいいやないか。特別のはからいで、海坊主には黙っといてやるよ。そのかわり、時には皆にないしょで、俺に砂糖だのカンヅメだの――」

そしてまたニラ爺は砂糖のかたまりを口の中に投げ込んだ。木見婆は安堵したように啼泣（ていりゅう）を中止して、調理場のすみに行き、大急ぎでこぼれた米粒を拾い始めた。三つ目のかたまりを口に入れ、しゃがみこんだ木見婆を見おろしながら、ニラ爺が言った。

「早く拾い集めるんだよ。早く行かないとまた叱られるからなあ」

「どこに行くの？」木見婆は顔をあげて、乾いた声で言った。

「院長室さ」ニラ爺は指先に付着した砂糖をべろべろと砥（な）め回した。

「今、遊佐爺さんたちと院長とが、会議をやってんのや。それであんたが立会人になるんだよ」

「立会人？」木見婆が不安げに発言した。「立会人って一体なにさ。あたしゃイヤだよ、そんなヘンテコリンな役目」

「そんなヘンテコリンな論理があるか」滝川爺がとげとげしい声を出した。「都立養育院はタダじゃないか。入院費は不要じゃないか。しかるに俺たちは、入院するに当って、ちゃんと入院費というものを支払っている。いっしょにされてたまるか。三畳確保は最初からの約束だ」

「三畳確保は戦前の約束だ」黒須院長は怒鳴り返した。そして引出しから在院者名簿を引っぱり出して、勢いこんでぺらぺらとめくった。

「ええ、ええと、タの部か。滝川十三郎と。滝川十三郎、昭和十七年入月入院か。滝爺さん、あんたは昭和十七年入院で、入院費はその時八百円だ。あの八百円当時の約束が、今でも継続していると思っているのか。常識でもって考えても判る筈だ。ね、その間に日本は負けたんですぞ。日本は四つの島にちぢんだんですぞ。日本がちぢめば、自然とあんた等の住居の広さもちぢんでくる。当然の話ではないか。他のものがすべてちぢんだのに、自分だけ元のままでいようというのは、虫がよすぎるよ。そういう利己心はこの際、一切捨てて貰おう。そうでないとわたしは、あんたがたとお話しは出来ません！」

カレー粉対策協議場は、修羅印カレー粉工場の裏門から乾の方角にあたる、一見アトリエ風の建物であった。悪路に歩きなやみながら、栗山佐介と牛島と曽我ランコがそこに着いた時、板の間にはすでに十四、五人の男女があつまって、こもごも発言したり、手をあげたりしていた。このアトリエ風の建物が、この一座のどの人物のものであるか、佐介は知らなかった。また知る必要もなかった。垣根がないから、三人は道路からじかに庭に足を踏み入れ、そこで穿（は）きものを脱いで板の間に上った。庭や道路は暗かった。道路にひとつ街燈がある筈だったが、その日何者かの手によって電球がとり外されていた。三人が上り込むと、一座の会話がちょっと途切れた。三人はちょっと具合の悪い感じで、ことに牛島は一座の視線をちくちくと全身に感じて、とにかくそれぞれの位置に坐り込んだ。三人を坐り込ませるために、皆は少しずつ腰を浮かしたり、膝をずらしたりした。原粉を砕くガシャガシャ音は、佐介の部屋ほどひどくないにしても、ここの夜気をも重苦しく押しつけがましく震動させていた。

「従業員は箝口令（かんこうれい）をしかれているんです」ざわめきのおさまるのを待って、ジャンパーを着けた若者が発言した。へんに響きの悪い沈んだような声であった。「労働基準監督署から、監督官が二人、修羅工場に派遣されてきたのです。なぜ監督官が派遣されてきたか。なんでも修羅工場の内部の事情について、監督署へ投書が何度か行ったらしい。誰が投書したのか、工場内部の者か外部の者か、これは今のところ不明ですが、まあ不明でもよろしい、投書があったということは事実で、そこで監督官がやってきた。若いのと年とったのの二人です」

「説明は簡潔に」隅で立て膝をしているイガグリ頭の男が口を入れた。「それはいつのことですか？」

ジャンパーはイガグリをじろりと見た。ジャンパーの傍に坐っている赤いスカートの女が質問を引取った。

「一ヵ月ほど前ですわ」

「監督官は若い方ののが職務熱心でした」ジャンパーが歯切れの悪い声でつづけた。「たとえば壜詰（びんづ）め作業の年少女工員が、一日百円程度の低賃金で働かせられていること、そしてそれによって時間外労働、深夜業、休日労働が事実上強制されていること、その他のことを、それらは多分投書に記されていたのだろうと推定出来るんですが、若い監督官は修羅吉五郎や現場の係長に、かなりくわしく突込んだようです」

「年寄りの方は何をしたんだね」ソバカスのある中年男が言った。「年寄りはその場に立ち会わなかったのかい」

「居合わせたわけでないから、僕も判らんです。多分立ち会っていたんでしょう。他に行くわけもないんだから」

「簡潔に！」とイガグリが言った。

「残業をしないものに対してわざと給料を遅配させている。そういう事実があるか、と監督官が修羅吉五郎につっこんだ。修羅吉五郎はそれを否定した」ジャンパーは小さなくしゃみ

をした。赤スカートがそれにならった。「そして従業員が一人々々呼ばれたのです。いや、全部ではない。何人かです。参考人としてですね。修羅吉五郎の言の如くであるか、投書に記された如くであるか、そのどちらかということについて」

「簡略に願います」丸首シャツの男が発言した。

「従業員の一人々々のそのどれもが、修羅吉の言の如くであると証言した」ジャンパーはぼそぼそと顔を上げて一座を見回した。「我々は修羅吉にサクシュされていない。家族的待遇を受けている。時間外休日労働、深夜業の強要の事実はない、彼等は異口同音にそう申告しました。彼等は修羅吉をおそれている。修羅吉そのものをおそれ、修羅吉による馘首（かくしゅ）をおそれている。修羅吉は物心両面において従業員に箝口令をしいている。彼等は犬のように口かせをはめられ、違法の労働を強制され、黙々としてカレー粉を生産し、それを空気中にふりまき、そして我々付近住民の健康を脅（おび）やかしている。我々の常住坐臥を脅やかしている」

「簡潔に！」とイガグリが庄意した。「それで君の役目は失敗したのか？」

「そうです」ジャンパーはうなずいた。「従業員を一人一人つかまえて、今夜のこの会に出席して呉れ、と僕は要請した。しかし皆言を左右にして、忙しいとか、用事があるとか、会合はニガ手だとか、何とか彼とか、僕の要請に一人として応じて呉れなかった。厳重な箝口令をしかれている以上、彼等をここに出席させることは無意味です」

一座はざわざわとざわめいた。丸首シャツが手を上げた。

「質問。それで監督官はむなしく戻って行ったのですか？」

「監督官はやむなく従業員の証言をあきらめ、工場設備の視察などをした。そして機械の安全装置、衛生装備などにいくつかの不備な点を発見しました。監督官は修羅吉五郎にそれらを指摘した。以後必ず改善すると、修羅吉五郎は誓約書を書きました。写しをここに持っています。そして監督官は二ヵ月後の再審査を申し渡しました。写しをお回ししましょうか？」

「カレー粉が工場の外にただよい流れ、我々に害を与えること」ソバカスが発言した。「それと器械の騒音が付近住民に及ぼす害について、監督官は修羅吉に何か注意をあたえたのか？」

「それは監督官の役目の外です」ジャンパーは答弁した。

「監督官は労働基準法が守られているかどうか、それをしらべるだけで、つまり雇用主と従業員のことだけに限られていて、僕たち付近住民のことまで言及する権限は持っていないのです。だから今となっては、カレー原料に砂をぶっかけるとか、器械をぶっこわすとか、そういう強硬策の他に手段は残っていない、と僕は思う。昨夜通り、僕はそれを主張する！」

一座は少時（しばらく）がやがやと混乱した。暗い道路の、電球をとり外（はず）された街燈柱のあたりから、五つか六つの黒い人影が足音を忍ばせ、背丈を低くかがめて、庭の中に入ってきた。足音を忍ばせると言っても、地下足袋にぬかるみだから、どうしてもピチャピチャと音が鳴る。しかしかなたのガシャガシャ音がその音を吸収してしまうのだ。黒い人影は板の間の内部をうかがい、顔を寄せてなにかささやき合った。その影のようなものの動

きを、牛島の眼がふととらえた。牛島は眼をこすり、パチパチと瞼を合わせ、佐介の脇腹を肱（ひじ）でこづいて耳打ちをした。
「庭に誰かがうろちょろしてるようだぜ。気のせいかな？」
佐介も庭を見た。慢性的なビタミンA不足のために、佐介の眼は一面の闇を見ただけであった。
「そうかね。何も見えないようだが」
「カレー粉臭ならびに騒音は、あれはあきらかに一方的な暴力です」ジャンパーがぼそぼそとつづけた。「一方的に押しつけられた暴力的秩序を、僕たちは放って行くわけには行かない。それを放置するということは、慢性的自殺をすることであり、それは頽廃というものです。そういう頽廃の中に自分を置くことを、僕は僕に許さない」

院長卓の横っちょの籐椅子（とういす）に、立会人の木見婆は無表情に腰をおろした。籐椅子はその重さに耐えかねたように、ギイ、ギギッと鳴った。木見婆の顔はもともと無表情であった。あんまり肥っているので、表情のはいりこむ隙がなかったのだ。その無表情なまんまる顔に、院長は声をかけた。
「いいかね。あんたは立会人だよ。立会人というのは、立ち会うだけでいいのだ。質問されても何も答える必要はないのだよ」と院長は釘をさした。木見婆にうっかりしたことをしゃべられては、元も子もなくなるのだ。「判ったね」
木見婆は返事の代りに、ぽたりとうなずいた。
「これで正式の会談らしくなったな」忌々（いまいま）しさを包みかくして、院長は老獪（ろうかい）にも柔和な笑顔で遊佐爺たちに向き直った。「正式の会談に先立ち、ひとこと諸君に申し上げたいことがある」
「何だ？」だまされないぞという表情で遊佐爺が問い返した。
「それは何であるかと言うと、先ずわたしが諸君の味方であるということだ」院長は満面に笑みをたたえて一座を見回した。「諸君の味方であると言うよりも、諸君の代表者だと言った方が正しい。すなわち諸君の代表者として、経営者たちに対し、諸君の利益や権益を守るのが、院長たるわたしの任務だ。わたしと諸君は同甘同苦だ。わたしはしばしば板ばさみとなる。板ばさみになるけれども、その度に強い信念をもって、経営者の言い分をはね返し、諸君の利益を守ってきた。その点を認めてほしいのだ。たとえばこの間の浴室の問題にしてもだ、経営者たちが金を出し渋るのを、わたしは敢然と叱りつけて、総タイル張りに改造させた。そのために浴室の衛生状態は見違えるほど良好となり、諸君の入り心地もぐんと快適になった筈だ」［やぶちゃん注：「同甘同苦」は通常は「同甘共苦」。「苦しいことも楽しいことも分かち合うこと」の意。「甘を同じくし、苦を共にす」とも読み、「戦国策」の「燕」が出典。］
「しかしその為に最長老の林爺さんは」松木爺が口をとがらした。「タイルで辷（すべ）って頭を打ち、死んじまったじゃないか」

「林爺さんのことは、わしもほんとにお気の毒に感じている」
タイルよりは板張りがいいぞ」松木爺はなおも頑張った。「あれ以来、みんなは戦々競々（きょうきょう）として、風呂場の中では鶏みたいにオドオドと歩いているぞ。わしもこの間すってんころりんと転んで、腰の骨を打った」
「タイルはタイルとして――」形勢不利と見て院長は話題を転じた。松木爺なんかひっくりかえってクタバってしまえ、と胸中に念じながら、院長はなおも表情だけはにこやかに崩していた。「近頃になって諸君の平均寿命がぐんと伸びた。これひとえに当院の――」
「ちょっと待って呉れ」遊佐爺が空気を押えつけるような手付きをした。「寿命が伸びたのは、わしたちばかりではない。日本人全般のことだ。問題をすりかえられては困るぞ」
「そうだ。日本人一般だ。その一般の中にあんた方も入っている」院長は言い逃れた。「厚生省の発表によると、日本人の平均寿命の伸びた原因として、四つを上げている。第一には予防医学の発達普及だ。これは当院もたいへん力を入れていて、俵（たわら）医師を専任者に依嘱（いしょく）し、月一回健康診断を励行していることは、諸君も御承知の通りだ」
「俵医師は――」滝川爺がたまりかねたように口を出した。「まさか本物の……」
「滝爺！」遊佐爺があわてて滝爺を叱りつけた。滝川爺は発言を中止して、首をすくめた。
「第二には、栄養補給の強壮剤、ビタミン、アミノ酸系統の強壮剤だな、それが大量に市販されてきた。当院においても、飯に強化米を炊き込み、且つミネラルも加えて、諸君に食べて頂いている。諸君の長寿をこいねがうわたしの努力の一端だ。御飯の中に黄色い米粒が入っているだろう。あれがそれだ」そして院長は木見婆の方を向き、目くばせをして賛成を求めた。［やぶちゃん注：「強化米」白米の栄養的な欠陥を補うためにビタミン B_1 や B_2 を主として、各種栄養素を濃厚に添加した特殊米粒を混入させたもの。普通、白米と特殊米の比率は二百対一程度の割合に混ぜられている。市販米の慣用名であって厳密な規準はない。特殊米は洗米による流失を防ぐために水に難溶な仕上げが行われているが、ビタミン B_2 の色素で黄色く着色していることが多い。］
「な、あれは強化米だな。黄変米じゃないな」［やぶちゃん注：「黄変米」展開の関係上、「28」で詳注した。］
木見婆は顔をあいまいに動かして、非常に怪しげなうなずき方をした。
「御飯に砂がよく混っているが」松木爺がまた切り込んだ。「院長の言うミネラルとは、砂のことか？」
「第三に原因療法剤としての抗生物質だ」院長はとり合わずに先をいそいだ。「ペニシリン、ストマイなどのことだ。こういう薬が出て来たために、諸君はたとえば肺炎にかかってもなかなか死なない。逝去せられない。またこれまではこれにかかったら最後と思われた脳出血、肝臓障害、ガンなどにも、良い薬が続々出来てきた。ますますもって諸君は逝去せられない。ガンにはザルコマイシン」［やぶちゃん注：「ザルコマイシン」和製外国語。「sarkomycin」で「これはドイツ語の「肉腫」の意の「Sarkom」に英語の「菌類から生じた抗生物質」を意味する接尾語「-mycin」を合成したもの。日本で最初に発見された制癌性抗生物質の一つ。

梅沢浜夫らが昭和二六（一九五一）年に鎌倉で採取した土壌中の放線菌の一種から分離したもので、以前は制癌剤として臨床に用いられ、乳癌・子宮癌・胃癌などに若干の効果が認められたものの、現在殆んど用いられていない。梅沢浜夫らが発見。現在は処方されない。」

「院長は俺たちが逝去するのを待っているのか？」と柿本爺。

「待ってはおりません」院長は切口上で言い返した。「第四に、生活水準が戦前なみにたち戻ったことが上げられる。衣料も潤沢（じゅんたく）になったし、食料事情も良くなった。当院の食事は都立養育院よりずっと良好だ。すなわち都立養育院においては、一日平均一人あたり一、九〇〇カロリー、蛋白質七〇ダラム、脂肪二〇グラムだが、当院においては一人あたり二、一〇〇カロリー、蛋白質八〇グラム、脂肪四〇グラム、という計算になっている。見渡したところ、都立養育院の爺さん婆さんたちよりも、諸君の方がずっと血色がよろしいようだ。これはすなわち――」

「そのカロリー計算は誰がしたんだ」と滝川爺がさえぎった。

「俵医師だ」院長は滝川爺をにらみつけた。「俵医師の計算だから、間違いはない」

「わしは俵医師のその計算を信用しないぞ」遊佐爺が長老らしくするどく切り込んだ。「たとえば今日の夕食の献立ては何であったか。盛り切りの丼飯に、キャベツの味噌汁と海苔（のり）のつくだ煮、それにトマトと漬物だけじゃないか。脂肪四〇グラムとはどこから割り出した？」

「そうだ。そうだ」

「この献立ては、まるで朝飯じゃないか。これじゃ栄養は摂れんぞ」

「そうだ。現にわしはもうお腹が空いている」

爺さんたちはこもごも発言した。何も発言しないのは、ニラ爺だけであった。松木爺はニラ爺の脇腹を肱でぐんとこづいて、小声で叱りつけた。

「ニラ爺さん。お前も何とか発言せんか？」

土ラ爺は困惑したように松木爺を見て、口をもごもごと動かした。黒須院長はいきり立った空気に肩すかしを食わせるために、悠々と煙草をつまみ上げて、マッチで火をつけた。遊佐爺の眼はするどくその広告マッチのレッテルをとらえた。鰻（うなぎ）が三匹にょろにょろと這（は）い回っている図柄だ。

「我々には夕食に飯としなびたような野菜をあてがっておいて」そして遊佐爺は大きくヤマをかけた。「院長はひとりで外出してウナギなんかを食べたではないか。それで同甘同苦などと言えるのか。わしたちにもウナギをくわせろ！」「な、なに！」黒須院長ははげしい狼狽（ろうばい）を感じて舌をもつらした。院長は煙草を持つ指を慄（ふる）わせながら、遊佐爺をきっとにらみつけた。どうしてウナギのことを知られたのか、院長は見当がつかなかったのだ。院長はいささか昏迷した。「ウナギ。ウナギだって？」

「ウナギを食べたじゃないか」院長の狼狽ぶりからヤマの適中を知った遊佐爺は、更（さら）に皮肉をこめて切り込んだ。「ウナギを食ったと、ちゃんとその顔に書いてあるぞ」

「ウ、ウナギを食べて悪いのか！」院長は居直った。「いかにもわたしは今夕、ウナギを食

べた。もちろん自分の財布でだ。なぜ食べたかと言うと、もすこし栄養を摂（と）れと、俵医師から勧告されたからだ。諸君も知っているように、近頃院内事務は多忙を極めている。そのおかげで、わたしはたいへん消耗した。ウナギなどを食べないと、身体がつづかないのだ」

「わしたちだって同じだ」

「老者と壮者とは、身体の組立てが違う」と院長は声をはげました。「何故諸君は、わたしがウナギを食ったことを知っているのか。さてはなんだな、諸君もスパイ戦術を用いているな！」

「諸君**も**、とは何だ」柿本爺が言葉尻をとらえた。「院長はスパイ戦術をとっているのか？」

院長はふたたび狼狽した。同時にニラ爺も狼狽した。松木爺の肱がニラ爺の脇腹をふたたびこづいた。

「ニラ爺、なんとか発言せえ」

「院長」ニラ爺はおろおろ声を立てた。ここで黙っていると、皆から疑ぐられるおそれがあったからだ。「院長。俺たちにあんな不味（まず）い食事をあてがって、あれじゃあ全然食欲が出ないぞ。今晩も半分ぐらい残したぞ。院長は俺たちを煮干しにするつもりか」

「煮干し？」院長がいぶかしげに反問した。

「煮干しじゃない」松木爺が耳打ちをした。「干乾しだよ」

「煮干しじゃない。干乾しだ」ニラ爺は訂正した。

「干乾しになるわけがあるか」院長は目を吊り上げた。

「老人はあれだけ食べればたくさん。皆満腹している筈だ」

「満腹してない」ニラ爺は言い返した。「皆がつがつして、チナマコになってるぜ」

「チナマコじゃない」松木爺が叱った。「チマナコだ」

「夕食だけ問題にするから話がおかしくなる」院長はやっと陣容を立て直した。「一日の食事は、朝昼晩の三回だ。それを総合して、カロリーや脂肪を計算するのだ。今朝の朝飯には何が出た。ニラ爺さん。言ってみなさい」

「朝？」ニラ爺はきょとんとした。「朝、朝はテンプラが出たよ。イカのテンプラ」

「そら、見なさい」院長は得意げに一附を見回した。「朝はテンプラ、そして昼にはごった煮を出した筈だ。朝からテンプラが食えるような身分の人は、世の中にたくさんはいませんぞ。まさしく諸君は王侯の生活をしているのだ。不平不満の出るわけがない」

「今朝のテンプラは揚げ立てじゃなかったぞ」

「においも変だったぞ」

「俺のは身が千切れてたぞ」

がやがやと爺さんたちは発言した。遊佐爺が手で一同を制した。

「朝からテンプラを出して、院長は得意がっているようだが」遊佐爺は正面からまじまじと院長を見詰めた。「今の皆の発言のように、鮮度が悪いし、身も千切れている。誰かの食い余しじゃあるまいかと思われるようなのさえあった。あれは一体当院で揚げたものか。いか

なる方法で揚げると、あんな不揃いなテンプラが出来上るのか。木見婆さん、あんたに訊ねるけれども、あれは一体何時揚げたんだね。今朝じゃなかろう。昨夜かね？」
「答えるな！」黒須院長は大あわてして、手をにゅっと木見婆の方に伸ばした。「答えちゃいかんよ。立会人は立ち会っておるだけでよろしい」
「何故答えさせないのか」遊佐爺は詰め寄った。「朝にテンプラを出すかと思うと、夕方は野菜だけだ。一体院長はどういう方針で、我々に給食しているのか。所存のほどをうけたまわろう」
「それは諸君の健康を配慮してのことだ」院長は詰襟服のポケットから、風呂敷ほどもある大きなハンカチを引っぱり出して、ごしごしと額をぬぐった。院長の額はウナギのアブラと脂汗のために、てかてかに光っていた。「当院の在院者は、年齢の関係上、早寝早起きの人が多い。夕食を食べると直ぐに寝てしまう人さえいる。だから夕食は、なるだけ淡泊な、消化のいいものを出すように心がけているのだ。晩に豚カツだのウナギだのを出せば、それだけ諸君の胃腸に負担をかけ、胃腸障害をおこさせ、かつ血圧を高める。御馳走を出したいのはやまやまだが、諸君の健康をそこなうのはわたしの本意でない」
院長はぐるぐると一同を見回した。
「ところが朝はどうであるか。朝は早い人は三時半頃から起きている。朝は一日の初めだからして、胃腸の機能も活発だ。だから脂肪分、蛋白質をたくさん摂取しても、完全に消化され、血と肉となるのだ。近頃諸君はあまり病気もしないし、死ぬ奴も、いや死ぬお方もほとんどいない。その原因のひとつは、こういう当院の給食方針によるのだ」
「わしたちは単に、カロリーだの脂訪だのを摂ればいいというのじゃない。わしたちは機械でもなければ、レグホンでもない。ちゃんとした人間だ。ちゃんとした老齢者だ」遊佐爺が言った。「人間として、日本人として、ちゃんとした食事を要求する。老人には老人の嗜好があるんだ。朝には朝らしい食事、たとえば味噌汁に焼海苔（やきのり）に半熟卵。夕方には夕方らしい食事、豚カツでもウナギでもよろしい。そういう食事を要求するのだ。院長はわしらの嗜好を完全に無視している！」
「健康をそこなってもいいのか？」院長は怒鳴った。「諸君の長寿を願えばこそ、わたしはこの給食方針をとっている。この方針の変更は、わたしの院長としての良心が許さない」
「調理場を俺たちに開放しろ！」柿本爺がすご味を利かせた。「一体どんな調理の仕方をしているのか、俺たちはそれを知る権利がある」
「開放だけでなく、材料仕入れや調理に、俺たちを参加させろ」松木爺が言った。「俺たちだって、料理ぐらいは出来るぞ」
「なんと言う情ないことをおっしゃるか」院長は禿頭に手をやって、大げさに嘆息して見せた。「君子は庖厨（ほうちゅう）に近づかずということがある。男が台所に近づくのは、恥とされているのだ。台所に入りたがるのは匹夫野人のたぐいだ。諸君は匹夫野人になりたいのか」
「匹夫野人でもいい。調理場を開放しろ」

「そういうわけには参りません」院長も必死に頑張った。「わたしは在院者に対して、健康な生活を送らせる責任を持っている。その責任に加えて、道徳的責任をも負わされているのだよ。諸君が悪い行為をしないように、悪い思想を持たないようにと、わたしの道徳的責任は重いのだ。もっともっと高邁（こうまい）な志を持って、ここで高潔な余生を送って貰いたいというのが、わたしの諸君に対する念願だ。そういうわたしに免じて、台所に入りたいなどと、恥かしいことをこれ以上言わないで貰いたい。調理や給食については、わたしが全責任を持つ！」

「その全責任を信用出来ないのだ」遊佐爺がつめたい口調で言った。「われわれは院長をヌキにして、直接経営者たちと話し合う用意もあるんだぞ。それでもいいか」

ニラ爺は折畳み椅子の背にもたれて、昼間からの疲れで、うとうとと居眠りをしていた。夢を見ていた。スカートと女のストッキングをむりやりに穿（は）かされ、人混みの街角に立たされて、困感し切っている夢であった。

［やぶちゃん注：「ビタミンＡ」日本人には「ビタミン無批判崇拝教徒」が多いが、ビタミンＡは過剰摂取すると、下痢などの食中毒様症状から、倦怠感を経て、全身の皮膚剥離などの重篤な皮膚障害などを引き起こし、また、多量の体内蓄積は催奇形性リスクが非常に高くなるとされることを申し述べておく。酸素と同様、強毒性の劇薬なのである。］

17

雨はすこしずつ上りつつあった。場所によっては、雲の切れ間さえ見え始めていた。

ニラ爺はまだうとうとと、悪夢のつづきを見ていた。躰がちいさいのと、居眠りの技術が巧妙なために、周囲の爺さんたちはまだ誰もそれに気がついていなかった。みんな黒須院長との対決に没頭し、かんかんに熱中していた。その烈しいやりとりの嵐の眼の位置で、ニラ爺は唇のはしから透明なよだれを垂らしながら、しずかに眠りつづけていた。院長室の窓ガラスを打つ雨の音が、その頃からようやく衰えを見せてきた。

栗山佐介の小屋のトタン屋根でも、雨声はまばらになりつつあった。小屋の中は、さっき三人が立ち去ったそのままの状況で、湯呑みやコップや竹の皮などが雑然と散らばっていた。その竹の皮のひとつに付着したハムの切れっぱしを、一匹の小さな泥棒猫が油断なく周囲に気をくばりながら、ぺろぺろと嘗（な）めていた。猫の毛並みは真黒で、眼だけが金色にらんらんと光っていた。身体の角度を変えたとたんに、後肢がコップに触れ、かたりと音を立てた。泥棒猫はぎょっとして頭を上げ、黒い尻尾をぶうとふくらませた。カレー工場のガシャガシャ音は、相変らず正確なリズムで、夜気をゆるがせている。

雨は乃木七郎の服を濡らし、シャツを通り抜けて、すでに肌にまで沁（し）みこんでいた。これまで濡れた以上は、雨が小止みになり、あるいは全然止んだとしても、さほど意味はなかった。ずぶ濡れになったことによって、乃木七郎の鼻や咽喉（のど）は、すでにカタル症状をおこしかけていた。水洟（みずばな）がしきりに流れ出たし、咽喉もいがらっぽかった。

肌にべとつくシャツの感触が気味が悪い。やがてそれは風邪特有の悪寒（おかん）に変って行く予感があったのだ。

（来なきゃよかったな）得体の知れない仕事をうかうかと引き受けたことについて、乃木七郎は何度目かの後悔をした。日当が高いのでつい引き受ける気になったのだが、カンタンな仕事だというだけで、仕事の内容はほとんど知らされていないのだ。あまり面白くない。と言って、仕事を放棄して自分の家に帰る、というわけにも行かない。そうすればぐしょ濡れになっただけソンになるのだ。その上風邪でもひどくなれば、目もあてられないではないか。チョビ鬚（ひげ）の男の指示通り仕事を果たして、八百円の日当を受取る以外に、手はないのだ。（雨が降ってても、傘を持って来ちゃいけないと言う。おかげでこんなにびしょ濡れになったじゃないか。どんな仕事か知らないが、雨降りに傘なしで歩くなんて、犬や牛じゃあるまいし！）

地面はぐちゃぐちゃにぬかるんでいた。地下足袋のあわせ目から、泥水はようしゃなく足に入ってくる。くらがりの中でチョビ鬚が腰をかがめたまま、うしろ手をふって、集まって来い、という合図をした。乃木七郎も中腰のまま、ぬかるみから足を引き抜くようにして、チョビ鬚の方に近寄って行った。

「みんな石を十個ずつ、持ってきただろうな」集まってきた六つの黒い人影を見回しながら、チョビ鬚が押しつけるような低い声を出した。「忘れた奴はいないだろうな！」

六つの人影はそれぞれの姿勢で、うなずいたり、低声で返事をしたりした。乃木七郎はそっと上衣のポケットを上から押えてみた。右のポケットに五個、左のポケットに五個、手頃の石が入っている。そのごろごろの感触をたしかめながら、乃木七郎は大きなくしゃみをした。

「シッー」チョビ垠が顔をねじ向けて、乃木七郎を叱った。

「こんなところでくしゃみをする奴があるか。向うに気取られたらどうするんだ！」

「だって」乃木七郎は蚊（か）のなくような声で抗弁した。「風邪をひいたらしいんで」

「風邪をひこうとひくまいと、俺の知ったことか」チョビ鬚が押し殺した声を出した。「くしゃみが出そうになったらだな、拳固を口の中に押し込め！」

そしてチョビ鬚は前方十二三米ほどのアトリエ風の建物を指差した。高い天井から百ワットの電燈がひとつぶら下っている。その下の板の間で、十四五人の男女が車座をつくって、何かしきりに話し合っている様子で、きれぎれの言葉が乃木七郎の耳まで届いてくる。そちらを指差したまま、チョビ鬚はみんなに振り返った。すご味のきいた声を出した。

「いいか。今からお前たちの仕事というのを説明する！」

「しかしだね、君が説明する通り殴り込みをかけるとしても、成功率はすくないと思うんだ」板の間の車座の一隅から、ソバカスの中年男が手を上げて発言した。「なにしろ向うは操業中だ。交代制で、四六時中器械が動き、従業員がせっせっと働いている。そこへ殴り込みをかけて、カレー原料に砂をぶっかけるとか、器械をぶっこわすとか、そんなことがやすやすと成功するとは思われない。その前に向うの反撃を食うだろう。成功率がすくない上に、先

に暴力をふるったという点で、こちらは不利な立場に追い込まれる。その点で私は不賛成です」
「じゃ、手を束ねて、今まで通り、カレー粉を吸い込むつもりですか」ジャンパーの若者がぼそぼそと言い返した。[やぶちゃん注：「束（つか）ねて」ただ両手を組んだままに手出しせず傍観する。なにもしないで見ている。「拱（こまね）く」「拱（こまぬ）く」に同じい。]
「そういう考え方は敗北主義というものです。それで恥かしくはありませんか」
「まあ、まあ」イガグリ頭がとりなした。
「殴り込みは殴り込みとして、署名簿の方はどうなったんですか？」丸首シャツが発言した。
「修羅印工場の騒音ならびに悪臭反対の署名は、現在のところ、どのくらい集まったのか。それを知りたい。これの係は誰でしたかしら。栗山佐介君ですか」
「ぼ、ぼくは調査の方の係です」佐介はきょとんと顔を上げ、目をぱちぱちさせて言った。
「あたしがその係です」連絡係の曽我ランコがしゃがれ声で発言した。「署名者は今のところ――」
「署名なんか意味ないわ。無力です」ジャンパーの隣に坐っている赤スカートの女がさえぎった。「署名をつきつけたって、ひるむような修羅吉五郎ですか」
「いいか」くらがりの空地で、チョビ鬚は声をするどくした。「あの部屋の中に、各自持っている石を投げつけるんだ。力いっぱい叩き込め！」
六人の人影に、一瞬ざわざわと動揺がおこった。
「も、もしあの人たちに当ったら、ど、どういうことになるんです」乃木七郎は中腰のまま、どもりながら質問した。「ケ、ケガでもさせたら――」
「バカ！　ねらいをつけて、あいつらにぶち当てるんだ！」
チョビ鬚は肩をいからせて、乃木七郎をにらみつけた。
「ただ投げ込んで一体何になる。あの悪者どもにぶち当てて、ケガをさせてこそ、こらしめになるんだ！」
「でも――」
乃木七郎はくらがりの中で、もそもそと尻ごみをした。その乃木の肩を、チョビ鬚の頑丈な掌ががっしと摑（つか）んだ。
「お前は電燈をねらえ」乃木の肩胛骨（けんこうこつ）をチョビ鬚はぐりぐりとしめ上げた。「昼間のキャッチボールの要領で、コントロールよく投げるんだぞ。電燈をぶち割れば、あいつらはますます泡を食うだろう」
「どうもやはり庭の方で、変な奴がうろうろしているようだよ」鼠男の牛島康之が腰を浮かせて、不安げに佐介の耳にささやいた。「デカじゃなかろうか」
「デカが来るわけないよ」佐介はささやき返した。「この会合は、別にデカにねらわれるような会じゃない。気のせいだよ」
「でも、なんだかイヤな予感がするぞ」牛島は逃げ途（みち）を探すように、落着きなく上り口を眺めたり、窓を見上げたりした。「おれ、もうそろそろ帰らして貰うよ」

「も一度従業員説得の工作をこころみたらどうだね」中年のソバカスが提案した。「一度当って失敗したからとて、それで諦（あきら）めてしまうのは性急に過ぎる。わたしたちと従業員たちとは、もともと同一の利害関係にあるのだ。係を他の人に変えて、も一度説得をこころみることを、私は提案する」

「対従業員係としての僕は、不適格というわけですか？」

ジャンパーはむっとしたように口をとがらせた。「つまりこの僕を信任しないというわけか？」

「俺が、突撃、という司令をかける」チョビ鬚は自分もポケットから石を三つ四つ摑み出した。「そうしたら一斉に石を投げるんだぞ。沈着に、着実に、ねらいをつけて投石する。十個全部、かならず最後まで投げるんだ！」

「そして、そのあとは？」緊張したふるえ声で誰かが質問した。

「あとはお前らの勝手にせい。逃げるなり、つかまるなり、どうなりとしろ。そのかわり、つかまったら、あいつらから半殺しにされることだけは覚悟して置けよ」そしてチョビ鬚は背を更（さら）にかがめて、ひたひたと建物の方に迫って行った。残る六人もおどおどと、あるいは無理に勇み立って、チョビ鬚と同一の姿勢で、ひたひたとそのあとにつづいた。足音がぬかるみにぐちゃぐちゃと鳴り乱れた。

車座の中から、その時牛島康之が脅（おび）えと不安の色を顔にみなぎらせ、戸外の闇を凝視しながら、ごそごそと立ち上りつつあった。

チョビ鬚は立ち止り、投石の姿勢をとり、六人を見回しながら、低いするどい声で号令をかけた。「突撃！」

雨に濡れた顔に更に汗をいっぱいふき出しながら、乃木七郎は無我夢中でポケットの石をつかんだ。天井からぶら下った百ワットの電球めがけて、力まかせに投げつけた。石は電球に当らず、コードをかすめて壁にぶつかり、空しくぼとりと畳に落ちた。他の六つの掌の石も、空気を切って飛んだ。カレー粉対策協議場はたちまちにして総立ちとなり、大混乱におちいった。男の怒声と女の悲鳴が入り乱れた。乃木七郎のふるえる指が二個目の石をつかみ出した。

［やぶちゃん注：**この章は非常に短い点で特異点であるだけでなく、遂に唯一、不詳のままであった「2」のシークエンスが本篇に絡んで明らかになり、無名だったその「男」にも姓名が与えられるという構成上の特異点でもある。**底本の解説で中村真一郎氏は本作のシークエンス（というよりもマルチ・カメラによるモンタージュ）ついて、『ここには作者の推理小説趣味も働いている。働いているといっただけでは言い足りないような、大胆な、殆んど乱暴と言ってもいい程の冒険を作者は試みている。推理小説の読者ならば「アンフェア」だと文句をつけたくなるくらいである』。『それは第二章で、火事の夢を見ていた「男」という無名の人物の十七章での唐突な再登場で、私はそこに図らずも梅崎の「人の悪さ」を見出して、怒るべきか笑うべきかに迷ったくらいである』と評しておられる。］

雨は小止みになったと言うのに、夕陽養老院東南方約三粁［やぶちゃん注：「キロ」。キロメートル。］の空あいで、突然雷がはたはたと鳴りわたった。それは重々しい鳴動を引きずりながら、養老院院長室の屋根にもかぶさってきた。激烈な会談は一瞬途絶えた。黒須院長は大きなハンカチで禿頭や額をごしごし拭きながら、むっと口をつぐんで耐えていた。実を言うと院長は雷が大嫌いであったが、自尊心や体面の関係上、爺さんたちの前で、嫌悪恐怖の色を示すわけには行かなかったのだ。爺さんたちもそこで一息入れて、莨（たばこ）を吸いつけたり、せきばらいをしたり、雷の余響に耳を傾けたりしていた。

鈍重な雷鳴の余韻（よいん）は、椅子にもたれてうとうとと居眠りしているニラ爺の夢の中にも、じわじわと忍び入っていた。夢の中でニラ爺は、リヤカーを引っぱって懸命に走っていた。走っていたと言うより、走ろうと努力していた。その必死の努力にもかかわらず、足がもつれてうまく走れない。そのニラ爺の背後から、青黒色の大型電車が雷のような音を立てて、ごうごうと追っかけてくるのだ。夢の中でニラ爺は汗みどろになり、手足をばたつかせて絶叫していた。〈そんなに追っかけて来ては、リヤカーにぶつかるやないか。リヤカーがこわれたら、おれ、養老院から追い出されるやないか！〉絶叫の果てニラ爺の意識は、泥沼の底よりポツンと浮き上る水泡のように、ふっと現実に浮き上ってきた。ニラ爺は眼を見開いた。そのニラ爺の眼の前に、卓をへだてて、黒須院長がテカテカ光りの頭をハンカチで傲然と撫で回している。夢の続きからまだ抜け切らない、半睡半覚の状態で、ニラ爺は思わず口走った。

「リ、リヤカーがこわれる。お、おれを追い出す気か！」

黒須院長の視線も爺さんたちの視線も、一斉にさっとニラ爺にあつまった。ニラ爺の語調があまりに悲しく、せっぱつまっていたからだ。しかし皆から一斉に見詰められたことによって、ニラ爺の意識はとたんに鮮明に復帰した。ニラ爺はきまりが悪くなり、また寝言を発したことについての非難叱責をおそれて、ぎゅっと体を固くした。それがまた一座に対して別の効果をあたえた。断続していた雷鳴がやっとその時に収まった。

「よく言った」松木爺がにこにこしながらニラ爺に耳打ちをした。

「頑張れよ。死んでも退くな！」

「ニラ爺退所の件もそうだ」機敏に議題をとらえて遊佐爺が院長に向き直った。「備品を破損したから退院を命ずるなどと、あまりにも一方的な措置じゃないか。一体そんな権限が院長にあるのか」

「そうだ。そうだ」一同はこもごも唱和した。「リヤカーをこわしたぐらいで、退院とはひどすぎるぞ」

「退院せよとは誰も言っておりません」

雷鳴が終ったので黒須院長はふたたび元気を取り戻し、悠然と一座を見回した。（ニラ爺のやつ、うまい時にうまい八百長質問をしたな。感心、感心）院長は心の中で、ニラ爺の件

は予定通り一応譲歩してもいい、と考えていたのだ。ニラ爺をふくめた爺さんたちに、院長はゆったりした老獪（ろうかい）な笑顔を見せた。
「そういう掲示を出したではないか」滝川爺が我慢ならぬという風（ふう）に詰め寄った。
「盗人（ぬすっと）たけだけしいとは院長のことだ！」
「盗人とは何ですか。言葉をつつしみなさい！」さすがに院長は色をなして、滝川爺を叱りつけた。「退所せよとはわたしは言っていない。リヤカー代を弁償せよと言っているだけだ」
「ニラ爺に弁償能力がないのは、判り切った話じゃないか。それに弁償せよと要求するのは、出て行けということと同じことだ」
「それでは、ニラ爺さんがリヤカーを破損した時の状況や条件を、お互いにじっくりと考えてみようではないか」遊佐爺は扇子を取り出して顔をあおぎながら、語調をややゆるやかにした。「韮山（にらやま）伝七爺さんが如何なる状況において、リヤカーを破損したか。それは院内栽培のトマトの行商に出かけ、その帰途に奇禍に出合って。つまりリヤカーがこわれたわけだ。そうだな、院長」
「そうだ」
「するとこれは公務遂行中におきた事件だと言えるな。公務遂行中だから、これはもちろん――」
「待て。待て」そして黒須院長も遊佐爺の向うを張って、引出しの中から大きな舞扇をとり出し、バタバタと顔をあおぎ立てた。「トマト行商が公務であるかどうか、その点わたしは――」
「なに。公務でないとでも言うのか」遊佐爺は言葉するどく切りこんだ。「これが公務でないとすれば、院長は公務外の仕事に、院内備品の使用を命じたことになるぞ。公私を混同してもいいのか？」
「全然公務でないとは言っておりません」院長は少しひるんで、そのひるみをごまかすために、扇の動きを更に大きくした。「遊佐爺さんが公務と主張するなら、あんたの顔を立てて、一応公務として置きましょう」
「一応も何も、公務は公務だ。公務遂行中の奇禍に対して、弁償を要求するなんて、われわれはそんな無道なことは絶対に許せないぞ！」
「そうだ。そうだ」松木爺が口をはさんだ。「院長はニラ爺に行商を命じながら、その行商手当をまだ払ってないじゃないか。なあ、ニラ爺さん。まだ貰っていないな」
「貰ってない」ニラ爺はこの時とばかり掌をひろげて院長の方にぐっと突き出した。「早く呉れえ、七十円」
　黒須院長は何か言い返そうとしたが、ここで話をもつらせてはこと面倒になると考え直し、ハンドバッグほどもある大きな財布を渋々ポケットから引っぱり出した。十円紙幣七枚をつまみ出すと、ニラ爺のしなびた掌の上に乗せた。ニラ爺の掌は紙幣をつかみ、取返されるのをおそれるかの如く、素早くスッと引込んだ。
「これで支払いましたよ」院長は強（し）いて頬の筋肉をゆるめながら、爺さんたちをひと

まわり見回し、木見婆の方に振り向いた。「支払いを確認したね。木見婆さん」
　ニラ爺にかわって居眠りをしていた木見婆は、その声ではっと目が覚め、わけも判らないままあわてて合点々々をした。
「行商手当のことはこれで片がついたと」財布をポケットにしまいながら院長が言った。
「さきほど、奇禍という発言があったが、奇禍というのは意外の災難ということだ。リヤカー破損が意外の災難であることはわたしも認めるが、その奇禍が不可抗力によるものか、本人の不注意によるちのか、そこはハッキリさせねばならんとわたしは思う。そのどちらかによって、取扱いもおのずから違ってくるわけだ」
「ニラ爺の奇禍は、当人の不注意だというのか？」沈黙していた柿本爺が発言した。「院長は現場に立ち合っていもしないのに、どうしてそんな断定が出来るのだ？」
「いかにもわたしは立ち合っていなかった」相手方にどんどん点数をかせがれるので、院長は内心大いにあせっていた。「しかし諸君だって、誰も立ち合っていなかったではないか。立ち合ってもいないくせに、不可抗力とは言わせませんぞ」「なにもわしは不可抗力と断定しているわけではない」と柿本爺。「院長はどういう根拠で、当人の不注意だと断定するのか」
「きっぱり断定するわけではないが――」
「断定したではないか。掲示文において！」と遊佐爺が声を高くした。「これひとえに本人の不注意に因するものなるによって、と掲示文にあった。わしはチャンと覚えているぞ。齢はとってもわしの記憶に間違いはない。なんなら階下の掲示文を引っ剝がして持って来ようか」
「掲示文はさっき見たら」と滝川爺が遊佐爺の袖を引いてささやいた。「すでに引き剝がされていたよ」
「わたしはあの翌日、直ちにQ電鉄におもむき、さらに現場に急行して調査した」院長は扇をたたんでパシリと卓を叩いた。「Q電鉄側の言い分では、運転手には何等の落ち度はないとのことだ。向うの手落ちでないとすれば、それはこちらの手落ちというわけになる。つまり当方の過失だな。それに、こう申してはなんだが、ニラ爺さんはあまりにも齢をとり過ぎたため、頭脳の働きが完全という状態ではなくなっている。いささか欠くるところなきにしもあらず、という状態になっている。もちろんこれは当人の責任でなく、年齢というものの責任であって、人間というものは宿命的に、齢をとればとるほど頭のネジがゆるんで――」
「齢をとればバカになると言うのか！」たまりかねたように遊佐爺も扇で卓をパチンと叩いた。「ニラ爺の頭が完全でないとすれば、それより五つ年長のわしはどうなるのだ。わしの頭のネジもゆるんでいるというのか。これは聞き捨てならんことだぞ」
「海坊主がお前のことをバカだと言ったぞ」松木爺が声を極度に低くして、ニラ爺に催促がましく耳打ちをした。
「何とか発言せえ！」
「院長。おれは。ハカか？」そそのかされるままニラ爺はなかば無意識に声を出した。疲労

と倦怠のために、ニラ爺の頭は本式にネジがゆるみかかっていた。言おうとしている事柄の軽重も考えず、ニラ爺は頭にうかぶままを反射的に言葉にした。「この俺がバカか。バカとすれば、バカに仕事のつとまるわけがないやないか。沖禎介、横川省三――」
「ニラ爺！」院長は毛虫のような眉をキリキリと吊り上げ、卓を叩いて大喝した。
「ニラ爺！」ほとんどそれと同時に遊佐爺も大声で叱りつけた。何だかわけの判らない人名などを出して、ネジのゆるみを気取（けど）られたら、院長に格好の言質（げんち）をあたえてしまう。遊佐爺はその懸念から叱りつけたのだ。そして遊佐爺と院長は、同時に同質の大声を出したことにおいてびっくりして、お互いに顔を見合わせて眼をパチパチさせた。
「俺はバカやないぞ」ニラ爺はおめず屈せず叫び続けた。「取消せ。俺のバカを取消せ。早く取消さないと、俺にも覚悟があるぞ！」
「取消す。取消すよ。それ以上叫ばないで呉れ！」院長はついにたまりかねて、頭をぺこりと下げた。これ以上ニラ爺に発言を許しては、どんなことをしゃべり出すか判らない。院長はひたすら頭を下げた。「今のわたしの発言は取消します」
「きっと取消すか」
「取消すとも」院長はやっと頭を上げた。「ニラ爺さんの頭のネジがゆるんでいるなんて、諸君の代表者であるわたしにも似合わない重大な失言だった。つつしんで取消します」
「本心から取消すのか」柿本爺がうたがわしそうに眼を光らせた。「ペテンじゃあるまいな」
「本心です」ニラ爺に関してはらわたが煮えくり返っていたけれども、院長は感情をぐっと押し殺しておとなしく答えた。「さきほども言ったように、諸君とわたしとは同甘同苦。ニラ爺さんの頭がゆるんでいるとすれば、当然わたしの頭もゆるんでいることになる。まったくわたしの失言だった。キッパリと取消す」
「取消すか」ニラ爺は言い分が通って、にこにこ顔になりながら、更に強気に出た。「失言を取消したついでに、俺の退院も取消して呉れ。どうせことのついでやないか。取消さないと、俺にも考えがあるよ。へ、へ、へ」

自分がどういう動き方をしているのか、栗山佐介はほとんど判らなかった。ただ反射的にむちゃくちゃに手足を動かしていた。庭の闇から石が次々に飛んでくる。それが天変地異でなく、人為的なものであることだけは、佐介にもはっきり判っていた。石塊（いしころ）が飛んでくる直前に、口笛のような響きと、突撃、という声をたしかに耳にしたのだから。立ち上るもの、伏せるもの、横に動くもの、手と手、足と足とが触れ合い、身体と身体がぶつかり合う。荒い呼吸や声やうめきが部屋中にたちまち入り乱れた。
「総員、庭へ。庭へ飛び出して下さい」懸命にジャンパーが叫んでいた。「敵は庭から石を投げ込んでいる。庭に飛び出してそいつらをとっつかまえて下さい！」
「電燈を消せ！」古机の下にもぐり込んだまま、牛島康之が苦しげに声を張り上げた。「電燈を早く消せ。目標になるぞ！」
闇の中で乃木七郎はポケットから、四個目の石をつかみ出していた。前の三個が失敗して、

ことごとく電燈を外れたために、彼はひどくあせっていた。一方部屋側の方でも、最初の混乱からやや立ち直って、逆に戸外に向って灰皿が飛んできたり、また勇敢に飛び出してくる人影もあった。

「しっかり投げえ！」

チョビ鬚が叫んだ。チョビ鬚の声も亢奮のため乱れていた。乃木七郎はぬかるみを踏みしめて、四度目の投石の姿勢をとった。わなわなと慄える胸を押ししずめ、ねらいを定めて腕を前方に振った。石塊は掌をはなれ、空気を切って飛んだ。電球がパリンと破裂して散乱した。次の瞬間四周（あたり）はほとんど闇黒と化した。

「当ったぞっ」乃木七郎は獣じみた声を出して飛び上った。盲目的な闘争心が彼の胸にむらむらと湧きおこってきた。五個目の石をつかみ出しながら、彼はふたたびやけくそな声で叫んだ。「命中したぞ！」

「庭へ飛び出せ」ジャンパーは叫びつづけていた。「一部は道路に回れ。はさみうちにして、そいつらを打ちのめせ。一人でも二人でも生けどれ」

「誰か走って行って、電話にとりつけ。百十番を呼び出せえ」机の下から牛島が怒鳴った。その瞬間、曽我ランコがくらやみにつまずいて、よろよろとその机の上にたおれかかった。いい加減くたびれていたその古机は、その衝撃と重量だけでもろくも斜めに歪（ゆが）み、ぐしゃりと横だおしにつぶれた。机と板の間に頭をはさまれ、ぎりぎりと押しつけられて、牛島はけたたましい悲鳴を上げた。「い、いたいよ。百十番。いてててて！」

曽我ランコの右手はぶったおれたとたんに、何か固いものをつかんでいた。それは横だおしにつぶれた机の脚であった。曽我ランコは小鹿のように敏捷（びんしょう）にはね起きた。力まかせにつかんだ机の脚をベリペリと剝ぎとった。彼女はすでに胸部に投石の被害を受けていた。憤怒の憎悪が彼女の動作をきびきびとさせていた。左掌で疼（うず）く胸部をおさえ、右手で机の脚を打ちふりながら、曽我ランコは窓の方に突進した。眼はやや闇に慣れて、窓はすでにかすかな四角のほの明りであった。闘うことの苦しさよりも、闘うことのたのしさとでも言ったものが、曽我ランコの身のこなしを軽くしていた。油断なく投石に身構えながら、曽我ランコはスラックスの脚を窓のわくにかけ、勢いこめて一挙に身体を窓の外に投げ出した。

「や、やったな！」頭にかぶさったこわれ机をばりばりと突き離しながら、牛島康之は傷ついた牛のようなうなり声を立てた。手も足も出ないような状態で、蟹（かに）のように惨（みじ）めにつぶされたことにおいて、牛島はかんかんになり、自制力を失いかけていた。あたり一面の闇にうごめくすべてのものが、もはや牛島の敵であった。牛島ははずみをつけてはね起き、手足を風車のようにふり回しながら、くらがりの中で荒れ狂った。「こうなりゃ俺が相手をしてやるぞ。おとなしくしてりゃつけ上りゃがって。もうかんべん出来ねえ。矢でも鉄砲でも原爆でも持ってこい。ひとをバカにしやがって！」

乃木七郎のポケットには、もう石塊は二つしか残っていなかった。彼の手はその二つをいちどきにつかみ出した。もうすでに十個を投げ終えたのか、仲間の一人がぬかるみを蹴って

逃げ出してゆく。つづいて一人、彼の肩を突き飛ばすようにして道路にかけて行ったのは、たしかにチョビ鬚であった。家の方から声が上った。

「逃げて行くぞ。あいつらは退却し始めたぞ。追っかけてぶちのめせ！」

乃木七郎も亢奮のあまりに、正確な判断力を失いかけていた。早くこの二個を投げつけて、逃走にうつらねばならぬ。そのあせりが彼の行動をかえってぎごちなくしていた。鼻の底がむずむずする。くしゃみがいくつも出かかっているのだが、忙しくて出す暇がないのだ。くしゃみはあと回しにして、乃木七郎はあわただしく九度目の投石の姿勢をとろうとした。その瞬間、眉毛からするりと流れた雨滴が、彼の右の眼にすべり込んだ。乃木七郎は左手で眼をおおった。地下足袋がぬかるみにスリップし、彼はとたんによろよろとよろめいた。

「退――散！」

道路上を猛速度で遁走（とんそう）しながら、チョビ鬚が最後の号令を張り上げた。

栗山佐介は部屋の入口のところで、背後から腰をぐんと蹴り上げられた。弱い右膝をかばうようにして、佐介は不器用に板の間にころがった。右膝の弱味をかばうのは、あの陸橋から飛び降りて以来の、彼の身についた本能みたいなものであった。そのころがった佐介の体に、四角なごつごつした感じの肉体が、がっしとかぶさってきた。

「畜生め。ふざけやがって！」

その肉体は**ふいご**のような荒い呼吸と共に、その両手が伸びて佐介の丸刈りの頭をはさみつけ、板の間にゴツンゴツンとぶっつけた。佐介も夢中で両手を伸ばし、そこらの闇をひっかき回した。佐介の手のやみくもな動きが、ぐしゃぐしゃしたものにからまった。それは相手の頭髪であった。佐介は十本の指に憤怒をこめ、髪をきりきりとつかみ、力まかせに横ざまに引きたおした。相手はググッというような声を出して、もろくも引きずりたおされた。今度は佐介が上からがっしと組み伏せた。

「こ、このカレー粉野郎め！」佐介は唇から泡をふきながら、両手をピストンのように動かして、相手の顔面とおぼしきあたりをつづけさまに殴りつけた。「カレー粉を吸わせた返礼に、この拳固でも食いやがれ！」

曽我ランコもぬかるみに足をとられて、二三度は転びそうになった。素足だからなおのことすべりやすいのだ。しかし彼女はひるまず突進した。突進することが今の瞬間、彼女の生の全部であった。すぐ前方のうすくらがりの中に、輪郭の不確かな人影がひとつ立ちはだかっていた。それは投石の姿勢をとっていた。曽我ランコは本能的にななめに飛び、その人影の頭をねらって、すばやく机の脚をふりおろした。鈍いひびきが掌に伝わって、その人影は姿勢をとたんに崩してよろめいた。膝をついて低くなった。彼女はふたたび机の脚を宙にふり上げ、力まかせにふりおろした。声にならない声を立てて、乃木七郎はそのぬかるみにへたへたとうずくまった。曽我ランコは無我夢中でまた机の脚をふり上げた。憎悪とも苦痛とも歓喜ともつかぬ復雑な衝動が、瞬間曽我ランコの全身をはしりぬけた。曽我ランコは瀆（けが）れた。

丸首シャツがどこからか蠟燭（ろうそく）を探し出し、イガグリが忙しくマッチをすった。板の間の入口では、まだ佐介と牛島がどたばたと組打ちを続行していた。あまりにも格闘に熱中していたので、蠟燭がともされても、両人がお互いに相手を味方同士だと認識するのに、三十秒あまりかかった。相手を認識し合ったあとも、格闘はまだ三十秒ほどつづいた。行き足がついているので、そう簡単にはストップ出来なかったのだ。どたばたはこの一ヵ所だけで、他はおおむね平静に戻りつつあった。襲撃者たちは、乃木七郎をのぞいて、投石完了の後みんな遁走してしまった。ジャンパーの懸命の指揮にもかかわらず、戦果としては乃木七郎の捕獲のみであった。すっかりあたりが静まり、新しい電球がはめられ、新しい光を取り戻した時になって、ジャンパーと赤スカートは初めて戸袋のかげから姿をあらわした。そこは投石から完全に遮蔽（しゃへい）された、安全にして格好の臨時指揮所であった。板の間には拳（こぶし）大の石があちこちにころがり、電燈の笠と球の破片が散乱し、器物はこわれ、壁にはところどころ凹（くぼ）みが生じていた。ソバカスが庭の方に気の抜けたような声で呼びかけた。［やぶちゃん注：「行き足」通常は船などが勢いを維持して走ることを言う。］

「おおい。つかまえた奴を、ここに引立てて来い」

佐介と牛島はむっとした不機嫌な表情で、お互いに横眼でにらみ合いながら、各自の服の乱れを正し、かつ痛む個所をさすったり揉（も）んだりしていた。乃木七郎が泥まみれのまま、殉教者（じゅんきょうしゃ）の如く引立てられてきた。引立てられながら乃木七郎は、今まで蓄（た）めていたくしゃみを、つづけざまに七つも八つも発散させた。鼻の下から泥が飛び散った。

19

黒須院長と在院者代表との会見は、ようやく終りに近づく兆候を見せていた。

しかしこれは、提出された議題が次々にばたばたと解決されて行ったからでなく、一座にみなぎる倦怠と疲労と睡気、ひとえにそのせいであった。それは老人側においてとくに顕著であった。黒須院長もたえざる緊張のために、相当に疲労を感じてはいたけれども、なにぶん齢は四十代だし、さきほど鰻（うなぎ）の大串を何本もたいらげたせいもあり、まだまだ充分な元気と精気を保有して、ぎろりぎろりと一座を睨（ね）め廻していた。これに反して老人たちの側は、ニラ爺のように頭のネジのゆるみかかったものや、しきりに眼をしょぼしょぼさせているもの、連続的に小さな欠伸（あくび）をしているものなど、総体的に消耗の色が濃くただよい始めていた。

院長はこの情況を待っていたのだ。敵が疲労してくればもうこっちのものだ。リール竿にかかった魚も同然だ。あとは糸を伸ばしたり縮めたり、ゆるめたり引きしめたりするだけでこと足りる。

「よろしい。リヤカー代弁償の件は、わたしの責任において、撤回することにしよう」院長

は満面に笑みをたたえ、恩きせがましい口調で、ぐるりと一座を見回した。「しかし、撤回すると言ってもだ、リヤカーは院内備品であるからして、補充しないというわけには行かない。いかにしてこれを補充すべきや――」

「経営者に金を出させりゃいいじゃないかよ」比較的元気な松木爺が口をはさんだ。「公務で破損したんだから、当然の話だ」

「かんたんに考えて下さるな！」院長は松木爺をきめつけた。「そうかんたんにことが運ぶなら、わたしも苦労はしない。いいですか。当養老院は在院者百名を擁する大世帯ですぞ。そういう大世帯になれば、会計制度もちゃんと確立しなけりゃならん。たとえば予算だな。備品補充費というものも、年度がわりにおいて、ちゃんと計上されている。計上されてはいるがだ、それは一年間にわたって使用されるべき金額だ。な、あんた方も子供じゃないんだから判るだろ。ここで一挙に一万二千円も支出すれば、あとはどうなるか。たとえばだな、二万円の月給取りが、月給を貰ったとたんに二万円のカメラを買えば、あとはどうなるかというのと同じことだ。あと三十日を、まるまる飲まず食わずで働かねばならんな。わっはっはあ」

「じゃどうしようと言うんだ」笑い飛ばされて松木爺は憤然となった。「まさかその一万二千円を、我々九十九名に割当てようと言うんじゃあるまいな。そういう振替えは絶対に認めんぞ」

「不肖（ふしょう）黒須玄一は、そんなケチな振替えはやりません」黒須院長は眉をぐいと上げて、大見得を切った。「諸君のふところをあてにするような、そんなしみったれた考えはいささかも持っておりません。リヤカー代は一応わたしが出す。わたしの責任においてわたしが支出することにする。そんなら諸君も文句はなかろう。すなわちわたしはわたしのポケットマネーをさいて、リヤカーを買入れることにします」

「ポケ、ポケット、とは何や」ニラ爺がそっと松木爺に質問した。

「へ、へそくり、という意味だ」松木爺が耳打ちし返した。「へそくりの英語だよ」

「一万二千円。一万二千円という金額は、もちろんわたしにも痛い。痛いけれどもだ」黒須院長は得意げに鼻翼をふくらませ、おもむろに一座を見渡し、そして視線をニラ爺の面上に止めた。「それによってニラ爺さんが幸福になると思えば、わたしも辛抱出来るのだ。同甘同苦。な、ニラ爺さん。もうくよくよすることはないよ。くよくよしないで元気よく、軽はずみをつつしみ、与えられた任務に、いそしんで貰いたい。判ったね」

「与えられた任務とは何だ？」滝川爺がいぶかしげに口をはさんだ。「何か任務でも与えたのか？」

「わたしが与えたのではない」院長は口のすべりをうまくごまかした。「与えられた任務というのはだな、清らかにして正しい余生を送るということだ。つまり神様から与えられた任務のことだね。これはニラ爺さんだけでなく、その任務は諸君全部に課せられているわけなのだ。わたしは諸君のその補佐役に過ぎない」

「さっき院長は」遊佐爺が発言した。「リヤカー代は一応自分が出す、と言ったようだが、

一応とはどういう意味だ。暫定的にという意味か？」
「一応は一応だ。一々言葉尻をとらえて下さるな」院長は舞扇で卓をピシリと叩いた。「こうしてわたしは身銭を切ってまでして、諸君に誠意を示している。だから諸君もその誠意にこたえてはどうか、それが同甘同苦というものだ。たとえば先刻保留になっていた調理場開放の件だな、あれなんかは早速諸君の方から、自発的に取下げることを勧告する。この誠意あふるるわたしが、諸君に不利益な調理方法をとるわけがないではないか。ましていわんや、わたしをヌキにして直接経営者と話し合おうなんて、もってのほかだと思わないか。なあ、遊佐爺さん。わたしを信用しなさい。そして調理場開放の件は取下げなさい。そうでないと、折角わたしがポケットマネーをさこうにも、さけなくなってしまうじゃないか。これはわたしにも不幸だが、ニラ爺さんにとってもたいへんに不幸なことだ」
「じゃあ、取下げることにしよう」遊佐爺はニラ爺を横目でにらみながら不承々々（ふしょうぶしょう）に言った。そしてあわててつけ足した。「一応取下げるということにしよう」
「ことのついでに部屋割りのことも」院長は得たりとばかりかさにかかった。「あれもわたしに委（まか）せてくれ。悪いようにはしないから」
「委してくれというのは、くじ引きの期日のことか？」
「くじ引きの期日もそうだが、くじ引きそのものだ」院長は傲然と老人たちを見回した。「くじ引きなんてものは、諸君が集まってやっても、わたしがひとりでやっても、同じようなものだとすれば、なにも諸君の手をわずらわすこともない。わたしひとりでやる。そしてその結果だけを、諸君に発表することにしよう」
「そんなバカなことがあるか」滝川爺がたまりかねたように大声を発した。その大声で、睡気をもよおしていた他の爺さんたちも、ハッと眼を見開いた。「そんな論理の立て方があるものか。それならわしも言おう。どちらがくじ引きしても同じなら、なにも院長の手をわずらわすことはない。わしたちがやる！」
「そうだ。そうだ」
「しきたりを破るな」
「伝統を尊重せよ」
睡気からさめた爺さんたちは、こもごも口を尖（とが）らせて発言した。
「どうしてそんなに一々わたしの言葉にこだわるのか」院長はやや情なさそうな声を出して舌打ちをした。自分の発言がたちまち一座を刺戟し、あたかも覚醒剤の如き役目を果たしたことに、院長は内心むかむかしていたのだ。「部屋なんかどこだって大体同じじゃないか。広さは一律に六畳だし、目当りもおおむね同じだし、どうして諸君はそんなに部屋割りにこだわるのかね」
「同じじゃないぞ」遊佐爺が一座を制して、代表して発言した。「部屋によっていろいろ条件が違うぞ。住み良い部屋と、住みにくい部屋。たとえば便所ひとつを考えても判るじゃないか。わしたち老人は、年齢の関係上、どうしても便所が近い。夜中に二度も三度も起きることがある。便所に遠い部屋に割当てられたら、冬なんかはまったく難渋するぞ。寒い廊下

を往復するだけで、身体のしんまで冷えてしまう。その間の事情が院長には判らないのか」
「便所のことだけじゃない」と松木爺。「たとえば二階と階下では、大いに条件が違う。院長には判るまいが、俺たちの年頃になると、階段の登り降りすらが実に身体にこたえるのだ。そちらでくじ引きをやると言うのなら、そのかわりに各棟にエレベーターかエスカレーターをとりつけろ。それを俺たちは要求する」
「エスカレーター？」院長は眼玉をぎょろりと光らせた。
「何たることをおっしゃるか。ここは百貨店ではありませんぞ。ばかばかしい。黙って聞いておれば、そのうちに、屋上遊園地をつくれと言い出すんだろう」
「屋上遊園地をつくっても当然だ」滝川爺は手を上げて、窓外の闇をキッと指差した。「院長は俺たちの遊び場だった庭を、全部掘りくりかえして、すっかり野菜畠にしてしまったじゃないか。俺たちは一体どこで遊べばいいのか。院長の所存をうけたまわろう」
「爺さんになっても、まだ遊びたいのか」院長も負けずに窓外を差しながら、大声で怒鳴り返した。「大体遊ぶということはだな、子供のやることだ。ここは幼稚園でもなければ、小学校でもない。れっきとした養老院だ。遊び場なんかつくる必要は認めない。それに滝川爺さんは野菜畠に反感を持っておられるようだが、飛んでもない心得違いですぞ。近頃の諸君の健康の一因は、かの新鮮な野菜の摂取にある。採りたての野菜からビタミンA、B、C、D、カロチン、葉緑素、カルシューム……」
「われわれは院長に栄養学の講義を聞いているのじゃない」うるさ型の柿本爺がたまりかねたように割込んだ。
「院長はエレベーター設置を、冗談として聞き流したようだが、それこそ飛んでもない心得違いだ。二階か階下かということは、これはたいへん重要なことだ。これはたんに階段の登り降りだけの問題でない。いいですか。もし万一この夕陽養老院が火事にでもなってみなさい。階上に部屋を割当てられたものは、階下のそれにくらべて、焼死の危険率がぐんと増大する。二階と階下と通じる路としては、中央階段とどんづまりの小階段、それ二つしかない。これじゃあ火事になって両方からはさみうちになった場合、どうすればいいのか。中央部にエレベーターを設置せよ」
「そうだ。全くそうだ」遊佐爺が憂わしげにうなずいた。「わしも日頃からそのことを心配していた。第一にこの建物は非常に古い。山川病院時代を加算すると、この建物はもう三十年以上も経っているわけだ。わしの七十八年の経験によると、建物というやつは老朽すればするほど、火の回りが早いようだ。しかもわしらは老齢で、どうしても行動の敏活を欠く。こういう状況で階下から火が出たら、階上のわれわれは集団的に焼け死んでしまうだろう。大体養老院に二階をつくるなんてことは、常識外（はず）れの暴挙だと言っていいことだぞ」
「屋上庭園をつくれと言うかと思えば、二階をやめろと言う。諸君の主張は全然支離滅裂だ」院長は顎鬚をしごき、わざとらしい軽蔑的な表情をつくった。「火災予防に関しては、当方もいろいろ手も打ってある。諸君さえ火に注意すれば、当院においては絶対に火災は起きない。すなわちだな、寝床の中で煙草を吸うとか――」

「煙草だけが火災の原因じゃないぞ。漏電なんかもある」
「もちろんそうだ。漏電にしてもだ、諸君がわたしの眼をぬすんで、電熱器などを使用しなければ、漏電なんかするわけがない。要は諸君の自覚ひとつだ」
「飛び火ということもある」遊佐爺はあくまで食い下った。「中央階段はまあいいとして、あのどんづまりの階段は古ぼけてガタガタして、また非常に狭い。二人やっと並んで通れる程度だ。もし火災が発生し、中央階段の方から火が回ってきたとすれば、わしらはいきおいその狭い階段に殺到し、ひしめき合い、つまずいて折り重なり、目も当てられないことになるだろう。それを思うとわしは慄然（りつぜん）として、夜もおちおち眠れないぞ」
「なにも狭い階段に逃げ出さなくても」と院長は声をはげました。「二階の各部屋には、命綱の設備があるではないか。あれを利用して、ぶら下って降りればよろしい」
「あの命綱なんか役に立つか」と松木爺。「あの命綱は終戦直後にとりつけたものだ。あの頃の綱はお粗末なもので、マニラロープじゃなくて、代用品だ。それに十年近く経っているから、もうボロボロになっている。あれにぶら下れということは、落っこちろと言うのと同じことだ」
「松木爺さんの言う通り、命綱はダメだ。それにわしらは老齢のため、腕の力も弱っている。エレベーターまでは行かずとも、命綱にかわる安全な脱出路を、早急につくって貰いたい」
「すべり台をつくったらどうや」ニラ爺が頓狂な声で発言し、自分のその発言に感心したように掌をパチパチとたたいた。「すべり台はいいぜ。火事になっても、スーッと辷って逃げられる」
「す、すべり台」院長はびっくりして眼をぱちくりさせた。「すべり台だと？」
「そうだよ。二階から庭へすべり台。みんなよろこぶぜ」
「そんなすべり台なんかを設置したら」院長は腹立たしげに顎鬚をぐいと引っぱった。「皆はすべり台で遊んでばかりいて、院内作業や畠仕事に精を出さなくなるだろう。それじゃ困る。院内の規律が保てない」
「いや、すべり台とは思いつきだ。ニラ爺さんにしては上出来だったぞ」遊佐爺が感心したように、奥歯をかみしめながら発言した。ニラ爺はほめられて、にこにこと相好をくずしながら一座を見回した。「すべり台なら、エレベーターほど費用もかからないし、操作もかんたんだ。乗っかりさえすれば、あとは地球の引力で、自然に下まで行きつくんだからな。すべり台で遊んでばかりいるだろうと院長は言うが、それは遊びではなく、火災時の退避訓練だと思えばいいじゃないか。なあ、海坊、いや黒須院長。梅雨があけたら直ちに、各寮にひとつずつ、すべり台設置の工事を始めて貰いたい。すべり台さえ出来れば、わしも夜安心して眠れる。費用も一本五万円ぐらいで上るだろう」
「五万円で出来るものか。十万円はかかるぞ」
　院長ははき出すように言って腕を組み、居並ぶ爺さんたちの顔をぐるりと見渡した。そして院長は一瞬胸の中で、これらの爺たちが折り重なってわめいているさまを想像し、つづいて寮の二階から不格好にニュッと突き出たすべり台の形を想像した。想像の中で、爺さんた

ちは次々に窓からすべり台に乗り、つるつると下へ辷（すべ）ってゆく。辷りそこねて途中から転落し、悲鳴を上げているのもいるのだ。（そうだな。つくってもいいな）院長は顎鬚をまさぐりながら考えた。（すべり台遊びで、ころがり落ちたり追突したり、それで怪我をしたり死んだりするやつが出るかも知れん。そうすれば在院者の回転率が早くなり、わしの成績も上ることになる。ひとつ設置してみるか。なるべく急傾斜で、幅のせまい、ころがり落ちやすいやつを！）

「金額の問題ではない。わしらの生命の問題だ」遊佐爺は膝を乗り出して、扇で卓の端をひっぱたいた。「先ほどわしらは、調理場開放において、一応の譲歩をした。院長もそこを考えて呉れ。こういうことは、我を張ってばかりいてはダメだ。お互いに歩み寄る精神を持たねばいかんぞ」

「そうだな。遊佐爺さんの言も一理があるな」手巾（ハンカチ）で禿頭を拭きながら、院長は苦しげな笑顔になった。「まあよろしい、すべり台設置の件は考慮して置こう。経営者会議にはかって、実現に努力します」

「断っておくが――」柿本爺が傍から釘をさした。「ペラペラの張り板のようなのでは困るぞ。ちゃんとした頑丈な材木で、幅は、そうだな、二人並んで辷れるぐらいにして呉れ。そうでないと、火急の場合には危険だからな」

「予算とにらみ合わせて、なるべく希望にそいたい」

「手すりもちゃんとつくるんだよ、手すりも」柿本爺がたたみかけた。「手すりがないと、辷り方によっては、すってんころりんと横にころがり落ちるからな。俺たちも怪我をしたり死んだりするのはイヤだよ」

「いろいろと気がつく爺さんだね、あんたは」院長はいまいましげに舌打ちをして、柿本爺さんをにらみつけた。「あんたの言う通りのやつをつくれば、一本二十万円では足りないだろう。そんな予算は当院にはない。まあ出来るだけ諸君の希望にそいたいとは思うが、手すりの件までは請負えないぞ」

「滝川爺さん」重ねて発言しようとする柿本爺を手で制して、遊佐爺が呼びかけた。会見が長びくと、体力の関係上、こちらが不利になると悟（さと）ったからだ。「すべり台の件はそのくらいとして、次の問題に進もう。滝川爺さん、メモをちょっと調べて呉れや」

「しようがねえな、こいつ！」

牛島康之は乃木七郎の額に二本の指をあて、にくにくしげにぐいとこづいた。乃木七郎は虚脱した表情で、されるがままになり、やがてぼんやりした声で言った。

「ここはどこですか。僕はどうして、ここにいるんですか」

「ふりをしているんでもなさそうだよ、これは」

栗山佐介はそう言いながら土間に降りた。乃木七郎は泥まみれになったまま、茫然と土間の中央に佇（た）っている。その乃木七郎のうしろに回って、佐介はあちこちに視線を動かした。

「そら、ここに大きなコブが出来ている」佐介は乃木七郎の後頭部に触れた。乃木七郎は瞬間痛そうに肩をびくっとすくめ、右掌を自分の頭に持って行った。「ここをしたたか殴られたもんだから、記憶が呆（ぼ）けたんだよ。僕も中学校の柔道の時間にここを打って、一昼夜ばかり呆けたことがある」

「どうしてここに」乃木七郎はいぶかしげにつぶやいた。「コブが出来てるんだろうな」

「そうよ。あたし力まかせに殴ってやったのよ」土間の入口で曽我ランコが言った。彼女のその口調には喜悦とも憎悪ともつかぬ強い響きがこめられていた。彼女はまだ机の脚を右手にぶら提げていた。そのままで彼女は短いヒステリックな笑い声を立てた。そして言った。

「あたし、三つも殴ってやったの。三つもよ！」

台風一過という感じで、部屋の中は平静にもどりつつあった。ソバカスは箒で電球の破片をはき集めていた。丸首シャツは投げこまれた石ころの整理に当っていた。イガグリは雑巾で床や壁の泥を拭いていた。建物の裏手でギッコンギッコンと音がするのは、窓から飛び出して反撃におもむいた連中が、身体の汚れを落すためにポンプを使用しているのだろう。

「君も洗っておいでよ」佐介は曽我ランコの方を見た。「足やスラックスが泥だらけだよ。早く洗わないと、しみになってしまうよ」

「いいのよ」ランコは深呼吸をして胸を張り、左掌を胸部の痛む個所にあてた。掌の下でランコの乳房は大きく脈打った。「最初に投げ込まれた石だったわ。それがここに命中したのよ。痛くって痛くって、呼吸がウッと詰ったわ。ほんとに卑怯な奴らねえ、飛道具を使うなんて！」

「今日の会合は、不測の妨害が入ったために、一応これで閉会とします」と戸袋の傍に立ってジャンパーがぼそぼそ声で宣言した。「明日午後六時、皆さんはも一度ここに集まって下さい。今夜の敵方の悪質な妨害と挑発、それについて協議したいと思います」

「その捕虜はどうするんだ」イガグリが雑巾をぶら下げて立ち上りながら言った。部屋中の視線が一斉に土間に集中した。その視線のまっただ中に、乃木七郎は気抜けした顔で、棒杭（ぼうくい）のようにつっ立っていた。その乃木七郎の服の裾を、牛島の右手がぎゅっと摑（つか）んでいた。牛島はまだ乃木七郎の記憶喪失を、芝居ではないかと疑っていたのだ。

「まだ呆けている様子か？」

「まだ呆けてるらしいわ」曽我ランコが得意げに答えた。「逃亡する気力もないようよ」

「警察に連絡して」丸首シャツが提案した。「身柄を一応留置して貰ったらどうですか。記憶を回復するまで」

「あたしは反対です」赤スカートがきんきん声で叫んだ。「修羅吉のことですから、警察にもわたりをつけてるに違いないわ。ですから、貴重な捕虜を警察に預けるのは、絶対反対です」

「どなたかこの男の身柄を」ジャンパーが響きの悪い声で言った。「記憶回復まで預かって呉れる人はありませんか？」

「僕が預かりましょう」ふしぎな力が栗山佐介の内部で働いて、彼は右手を挙げ、思わずそ

う叫んでいた。皆の眼が乃木七郎をはなれ、佐介の顔にあつまった。佐介は手を挙げたまま、へどもどとあかくなった。佐介の内部でそう発言させたものは、この投石男に対する憎しみでなく、むしろその反対のものであった。佐介は挙げた手を不器用におろしながらどもった。

「ぼ、ぼくが引受けましょう」

20

栗山佐介他三名の一行が、カレー粉対策協議会場を離れ、佐介の納屋住宅に到着したのは、もう午後十一時を過ぎていた。

協議会場から納屋までの暗い道、牛島康之は暗闇からの再度の襲撃をおそれ、眼を皿にして四辺に気をくばり、背丈をぬすんでこそこそと歩いた。彼の右手は相変らず乃木七郎の服の裾をしっかりとつかんでいた。それは乃木の逃亡をおそれるというよりは、不明者の襲撃にそなえて人楯（ひとだて）とするつもりであったらしい。その証拠に牛島は、乃木七郎の服をつかむだけでなく、身体をぴったりと七郎にくっつけ、背を押すようにして歩いていたのだ。背中をぐんぐん押され、地下足袋をぬかるみにピチャピチャ鳴らしながら、乃木七郎は迷惑そうにつぶやいた。

「どうしてこの人はこんなに俺を押しまくるんだろうなあ……ほんとに頭が痛いや……一体ここは何処なんだろう」

小さなくぐり戸をくぐる時、乃木七郎は頭を鴨居にぶっつけて、ヒヤッと言うような悲鳴を立てた。乃木七郎の頭は、先ほど皆我ランコに机の脚で三つ殴られ、捕えられたあとも三つ四つ殴られ、一面コブだらけになっていた。その乃木七郎を牛島が不機嫌に叱りつけた。

「へんな声を出すんじゃねえ。首をしめられた鶏じゃあるまいし」

曽我ランコが最後にくぐって、くぐり戸の扉をしめた。佐介はびっこをひきながら納屋に上り、手探りで電燈のスイッチをひねった。夜が遅いので電圧が正常に復し、その燈も夕刻よりぐんと明るい光を放った。入口からはみ出た黄色い光の輪の中で、牛島は眼をパチクリさせながら、まだ乃木七郎の上衣の裾をぎりぎりと握りしめていた。佐介はそれを見た。

「まだ摑んでいるのかい」電熱器やコップのたぐいを、足で隅の方に片寄せながら、佐介は呆れたような声を出した。コップや茶碗の耳をつまむことにおいて、佐介の足指は実に器用に働いた。「牛さんは実際なにかを摑みたがるんだな。摑んでいないと不安なのかな、さっきは僕の肱（ひじ）を摑み通しだったしさ。もういい加減放してやんなさいよ」

「そうよ。放したって逃げやしないわよ」土間の板壁の釘から雑巾をとり、それで脚を拭きながら曽我ランコが口をそえた。「逃げるきづかいはないわ。だってあたし、力いっぱい、殴ってやったんだもの」

乃木七郎はぼんやりと淀んだ眼で、その曽我ランコの顔を見た。牛島は不承々々上衣から掌を外（はず）し、乃木七郎の背中をどんと突いた。乃木七郎はふらふらと前のめりになって、土間に足を踏み入れた。

「さあ、地下足袋を脱ぐんだ。その泥ズボンもだ」牛島は忌々（いまいま）しげに命令した。
「逃げようなんて不心得を起したら、ほんとに承知しねえぞ！」
曽我ランコは部屋に上った。つづいて乃木七郎。最後に牛島康之が仏頂面（ぶっちょうづら）で、肩を交互にぎくしゃくとひねりながら、のそのそと上って来た。
「栗さん。お前はやせっぽちのくせに、案外力（りき）があるな」
牛島は自分の四角な顎に手をかけて、左右にがくがくと動かしながら佐介を見た。「横っ面ぶんなぐられて、あぶなく顎が外（はず）れるところだったぜ」
「僕だってひどい目にあったよ」佐介はズボンをたくし上げて右膝を露出した。そのあおじろい膝頭の部分々々を、彼は痛そうに指の先で次々に押して行った。「くらがりの中で、ここをあんたに手荒く蹴り上げられたんだ。また軽いネンザを起したらしい」
乃木七郎は泥だらけのズボンを、地下足袋といっしょに入口で脱がせられたので、下着だけの素足となり、その裸の膝をきちんと揃え、供待ちの従者のように畳の上にかしこまっていた。乃木の脚は佐介のそれとちがって、北海産の毛蟹（けがに）みたいに一面剛毛が密生していた。佐介はそれを見ると、あわてて自分のズボンをずりおろした。乃木七郎はきょとんと顔を上げ、首をかたむけた。
「あ、あの音は何でございましょうか」
自分が囚われの身であることだけはおぼろげながら判ってきたらしく、乃木七郎の語調はていねいとなり、ものやさしくなった。道ひとつ隔てた板塀のかなたで、金属と金属とぶつかり合うガシャガシャ音が、永遠の業苦（ごうく）の如く響いている。
「しらばっくれるな！」
牛島が背後から怒鳴りつけた。乃木七郎は反射的に頸（くび）をちぢめた。曽我ランコは窓框（まどかまち）によりかかり、失望したようなつめたい視線で、乃木の顔や脚をじっと見おろしていた。畳に坐らないのは、泥だらけのスラックスのせいであった。彼女は乾いた声になって言った。［やぶちゃん注：「窓框」この場合は窓枠の下の部分。下框（したかまち）のこと。］
「男って、案外だらしないのね。三つ四つ殴っただけで、もうへなへなになってしまうんだ。がっかりしちゃうわ」
「かんたんに片づけなさんな」曽我ランコの腰のあたりを牛島はにらみつけた。「だらしないのも時たまいるが、そうじゃないのも沢山いる！」
「ねえ君」佐介は乃木七郎と膝を突き合わせて坐り、その顔をのぞきこんだ。「あのガシャガシャ音、何の音か忘れたのかい。憶い出してごらん。よく考えると、憶い出せるよ。そら、もう頭の入口まで来てるだろう。それに、この匂い！」
「はあ、何かにおいますな」乃木七郎はにぶい表情で首をかしげ、鼻翼をピコピコと動かした。「はて、これは何のにおいだったかな。とにかくおいしそうなにおいですね」
朦朧（もうろう）たる記憶を手探りするかのように、乃木七郎は右掌を頭に持って行った。しかし頭に触れるやいなや、彼は痛そうに顔をしかめて掌を元に戻した。佐介は乃木の頭を

見た。
「なるほど。ずいぶん凸凹になっているな。痛いだろう」佐介は部屋のあちこちを見回した。
「なにか油薬でも――」
「バターでも塗ってやれ」牛島は乃木のそばに大あぐらをかいた。「それともカレー粉でもつけてやるか。ひりひりして、コブなんかたちまち蒸発するだろう」
「冷やすといいのよ。冷やすと記憶が戻ってくるかも知れないわ」曽我ランコは佐介の方に掌をつき出した。「タオルない？　あたしが濡らしてきて上げる」
「へえ。ご親切なことだね」
「ついでにあたし、身体を拭いてくるわ。スラックスの泥も」曽我ランコはタオルを受取って肩にかけた。「その他にも、記憶を取り戻す方法を、いろいろ研究するといいと思うのよ。早いとここの男の、このX氏の頭のネジを元に戻して、修羅吉の首根っこを押えつけなきゃ、胸が収まらないわ。そうでしょ。井戸はどこ？」
「入口を出て直ぐ右っ側だ」佐介は乃木に向き直った。「ふん。X氏か。一体君は何という名前だね？」
　乃木七郎はふたたび首を斜めにして、唇をかすかに動かした。が、それは声にはならなかった。曽我ランコはそれを尻目にかけて、納屋を出て行った。やがて井戸のポンプを押す音がした。
「自分の名前まで忘れたんじゃあ仕方がないな」牛島が舌打ちをした。「これじゃ全然使いものにもなりゃしない。一体これは治るかね？」
「さあ、僕にもよく判らないが」佐介が答えた。「多分一時的なもんだと思う。しかし本などを読むと、十年も二十年も記憶を取り戻せないで、そのまま別の人物として生活していた例もあるらしいね。このX氏がどちらに該当するか」
　乃木七郎は無感動な表情でそれを聞いている。佐介はつづけた。
「僕の勤め先にもね。少々呆（ぼ）けたのがいる。これはちょっと治らない」
「白川研究所にか」牛島が語気荒くさえぎった。「一体お前さんは誰のことを言っているんだ――」
「ごめん、ごめん。あんたのことを指してるわけじゃないんだよ。勤め先がちがうんだ。別口の方のやつだよ。養老院の方なんだ。やはり齢をとると、呆けてくるのがいるんだねえ。まあこういうのは極く自然な呆け方なんだけどね」
「水を一杯下さい」乃木七郎がぽつんと言った。「咽喉が乾きました」
「水ぐらい自分で行って飲め！」そして牛島は直ぐに思い直した。「いや、俺が汲んできてやろう。夜陰にまぎれて逃走されてはかなわんからな。そのコップをよこせ」
　電熱器のそばにころがった合成樹脂のコップを、佐介は牛島にひょいと手渡した。牛島は受取って立ち上り、そそくさと土間に降りた。土間に降り立ったまま、牛島は動かなくなった。視線もひとところに固定して動かなくなった。井戸端の石畳の上に、曽我ランコは上半身を裸にして立っていた。濡れたタオルを右の乳房の上にあてて立っていた。納屋からの直

接の光は届かなかったが、間接の光が彼女の胸や肩の輪郭を、ほの白く浮き立たせていた。曽我ランコは突然納屋の方に顔をねじ向け、するどい声で言った。
「誰？」
　牛島はあわてて首をひっこめ、足音を忍ばせて元に戻ってきた。困ったような笑い方をしながらささやいた。
「今、裸になってるからダメだ」そして声を更にひそめて、「あの女、いったい何者だね。お前さんの何かか？」
「そんなんじゃない」佐介はそっけなく首を振った。「僕もよく知らない。カレー粉会議で顔を合わせるだけだよ。僕は調査係だし、彼女は連絡係だ」
「そうか。どうも俺はあんな女が苦手だな。熊井照子の方がよっぽど俺の趣味に合う。第一荒っぽ過ぎらあね。男の頭を棒でぶん殴ったりしてさ。俺はああいう型の女は、ほんとに大嫌いだよ」
「わたしも嫌いでございます」乃木七郎が賛意を表した。
「つけ上るな！」牛島が乃木を即座にきめつけた。「誰もお前の意見なんか聞いてやしねえ」
「この人がぶん殴られた当人だから、意見を表明する権利ぐらいはあるよ。嫌いになるのも無理はない」佐介がとりなした。「つまりこの人はね、記憶を喪失したことによって、すべての責任から解放されたんだよ。いくらこのX君を責めたってムダなんだ。彼は責められる地点からはるか離れてしまった。もう別の地点に移ってしまったんだ。前場所から持ち越したのは、頭のコブだけさ。もっともこの人が移動出来たのは、自分によってじゃない。他力だね。殴打という物理的原因によって、この人は前場所の絆（きずな）から、完全に解放されたんだ。その解放が何時まで続くか、僕にも判らないけれどもさ」
「ありがとうございます」乃木七郎はにこにこしながら頭を下げた。「感謝いたします」
「しょうがねえなあ」牛島は怒るかわりに嘆息した。「ぬけぬけとお礼なんか言ってやがる。箸にも棒にもかからねえ。こんな奴が出て来ると、まったくはた迷惑だ」
「何が迷惑だね？」
「だってさ、俺たちはお互い同土で、ちゃんと一応のつながりだの連絡だのがあるだろう。因果関係やそんなものに結ばれている。そのまんなかに、こういう何も持たない奴がヌッと現われたんじゃあ、折角の連絡がそこらでズタズタに途切れたり、結滞したりしちゃうじゃねえかよ。こいつのおかげで、何かがバラバラになってしまった。人騒がせな奴だ。もっともそれはこいつのせいじゃなく、あの竹づっぽの責任かも知れないが」
「竹づっぽ？」
「そら、あの女のことさ。身体がすぽっとして、ちょいと竹の筒みたいだろう」戸外のポンプの方向を、牛島は小指で差しながら声を低めた。「でも、裸を見たら、案外いい胸の形をしていたな」
「全然の裸体か？」佐介はちょっと膝を乗り出すようにして聞いた。「はっきり見えた？」
「腰から上だけだ。そう膝を乗り出すんじゃない」牛島がたしなめた。「もう今はズボンも

脱いだかも知れねえけどな。さっきは胸だけだったよ。ああいうのをさし乳というんだろうな。いい型のオッパイだった」

ポンプが外でギイコギイコ鳴った。三人の男性は何となく一斉にそちらに顔を向けた。ちょっとした沈黙が来た。その瞬間、佐介は自分の眼が、牛島の眼になるのを感じた。牛島の眼が佐介を代行して、くらがりの曽我ランコの裸の皮膚をじっと見詰めている。ある刺戟が佐介の背筋をはしり抜けた。彼はかるく身慄（みぶる）いをしながら、顔を元に戻した。乃木七郎がかすれた声で言った。

「わたしは咽喉（のど）がカラカラです」

「でもね、僕たちはお互い同士できっちりと結び合ってるというけどもね」佐介は乃木の訴えを黙殺して、牛島に話しかけた。「そうでもないと僕は思うんだよ。つながっていると思い込んでいるだけで、つながっているという証拠はない。だって、つなぎ合わせるための釘やカスガイ、そんなものを僕たちは見ることは出来ないもの。たとえばあんたと僕の間にもさ。つまり僕たちはだ、自分たち全体が木造建築やブロック建築のつもりでいて、実のところは積木のお城じゃないのかねえ。ちょっとゆすぶると、床の上にくずれてバラバラになってしまう。そういう点でさ、健康なのはこのX君で、X君以外の人間がむしろ不健康なんだよ」

「また理屈をこね始めたな」牛島は不機嫌に言った。「すると気違いの方が俺たちより正常だと言うのか」

「この人は広大無辺の空白に入ったおかげで、そういうもろもろの錯覚から、一挙に逃れることが出来たんだ。おのずから逃れてしまったわけだね。非常に健全な状態だよ」

「水！」乃木七郎は右手で咽喉をかきむしった。「いくら広大無辺なブランクでも、水ぐらい飲ませないと可哀そうだね」佐介は思い切ったように立ち上りながら乃木をうながした。

「さあ、井戸端に連れてってやるよ」

「俺も行こう」牛島もごそごそと立ち上って、言い訳がましく言った。「逃げられると元も子もなくなるからな」

つづいて立ち上った乃木七郎の上衣を、牛島の手がふたたび摑（つか）んだ。佐介もつられて乃木の上衣を摑んだ。二台の貨車を率（ひ）き従えた機関車のように、乃木七郎はのろのろと畳の上を行進して土間に降りた。その足音で井戸端から曽我ランコがきっと顔を振り向けた。彼女はすでにブラウスを着け、髪を紐（ひも）できりりと束ねていた。入口の黄色い光線の輪の中に、三人の男の顔が突然ずらずらと現われ出た。その顔は三つとも光を背にしているくせに、どういう訳か、そろってまぶしそうな眼付きをしていた。その顔のひとつがやがてがっかりしたような声を出した。

「こいつが水を飲みたいと言うんでね」

「ついでに頭に水をザアザアかけて、冷やしてやるといいわよ」曽我ランコはタオルをしぼりながら、にくにくしげに言った。「痛い痛いと思ったら、あたしの胸、痣（あざ）が出来てたのよ。憎いわねえ」

「その石を投げたのは、あるいはこいつかも知れねえぞ」牛島は乃木の頸（くび）を背後から押えて、ポンプの流出孔に顔をあてがった。そして佐介がポンプをギイコギイコと押した。
「さあ、飲みたいだけ飲みな」
　水が束になってほとばしり出て、乃木七郎の顔を水だらけにした。乃木七郎の口は底の抜けた瓶のように、際限なく水を吸い込み、そののどぼとけは不規則に、また嬉しげに、ごくごくと上下した。いい加減のところで牛島は手を伸ばし、乃木の顔の向きをねじ曲げたので、今度は水の束は乃木の頭髪に殺到した。水は髪の泥をふくんで濁りながら、石畳にざあざあと流れ落ちた。
「さあ、もういいだろう」牛島が乃木の襟首を引っぱった。濡れた頭に曽我ランコがタオルをふわりとかぶせた。乃木は眼をぱちぱちさせながら、タオルでそこら一帯を拭き回した。牛島が訊（たず）ねた。「どうだ。何か憶い出したか？」
　乃木七郎はタオルの手をちょっと休め、首を静かにふった。牛島は激しく舌打ちをした。
「もうこのおっさんはダメだな」
「なにかショックを与えると回復するかも知れないわね」ぞろぞろと納屋に戻ってきた時、曽我ランコが乃木を見ながら発言した。「なにかそんな注射薬か何かがあるんじゃない？」
「注射もあるし、電気ショックもある」佐介が答えた。
「分裂症なんかに効果があるらしいよ」
「ここでやれないか？」と牛島。
「やれないね。注射器もないし、電気器具もないもの。でも、牛さんは先刻から、しきりにこいつを回復させようとあせっているが、この人の記憶が元に戻ったって、そして修羅吉五郎の陰謀がバクロされたって、それはあんたと何の関係もないじゃないか。もともとあんたは局外者なんだからさ。それによってあんたは別に得をするわけでもあるまい」
「そりゃそうだが」牛島はちょっと言葉につまった。「でもこいつが記憶をなくして、ポカンとなっているのを、俺は放って置けないんだ。それは天の理、人の理に反することだからな。折り目正しい俺の性格からして、どうしても黙って放って置くわけには行かない」
　牛島は乃木をにらみつけるようにした。乃木七郎はきちんと正坐し、裸の膝に両掌をのせ、頬をゆるめてにこにこと笑っていた。空気の如く透明にわらっていた。それはこの納屋にいる誰よりも充足し、幸福そうに見えたのだ。嫉妬に似たいらだたしさが瞬間牛島をおそった。牛島はいきなり立ち上り、足音荒く乃木の背に回った。乃木七郎は笑いを消さないまま、反射的に首をすくめた。
「注射も電気も出来ないなら」牛島は声を押えつけた。
「思い切りゆすぶってやったらどうだろう」
　そして彼は両掌を乃木の両耳にぴたりとあてがった。そしてカクテルシェーカーでも振るように、乃木の頭を前後左右にやや乱暴に、またリズミカルにゆすぶり始めた。佐介と曽我ランコは興味ありげに乃木の顔に視線を集めた。乃木の濡れた頭髪は、そのゆさぶりにしたがって、細かい水滴を前後左右に弾（はじ）き飛ばした。その微細な飛沫の中で、乃木七

郎は相変らずにこにこと笑っていた。曽我ランコが思い詰めたような声を出した。
「まだ笑ってるわ」
牛島はゆさぶりの手を休め、腕を二三度屈伸させた。少少くたびれてきたのだ。乃木七郎はここちよげに顔を掌でぶるんとこすり上げ、おもむろに牛島をふり返った。
「ありがとうございました。おかげさまで、さっぱり致しました」
「何か憶い出したか」牛島がたたみかけた。「何を憶い出した？」
「いいえ。なんにも」
「ああ、何ということだ」牛島はすっかり絶望して、両方の拳固で自分の頭を強く連打した。
「まるでのれんに腕押しじゃねえか。ダメだ。こいつはもうおしまいだ」
「おしまいじゃなかろう。始まりなんだ」佐介が訂正した。
「この人にとっては、これがおそらく始まりなんだよ」
「今度はくすぐってみたらどう？」曽我ランコが提案した。「殴られて記憶がなくなったんだから、くすぐると元に戻るかも知れないわよ」
「やってみるか」牛島は掌にぎしぎしと唾をつけた。「じゃ、君たち二人で、こいつの手をしっかり押えて呉れ。そうすればくすぐり易い」
乃木七郎はあおむけに寝かされ、右手は佐介に、左手は曽我ランコに、それぞれ畳の上にぴたりと押えつけられた。その姿勢になるまでに、乃木はいささかの抵抗や反抗の気配も示さなかった。牛島は乃木の胴体に馬乗りになり、両手の指をトレーニングとして忙しく屈伸させた。乃木七郎はあおむけのままにこにこしていた。
「いいか。やるぞ！」
牛島の両手はパッと動き、乃木七郎の両腋（りょうわき）の下に飛びついた。牛島の両手の指は、乃木の腋（わき）の下のくぼんだところから肋骨（ろっこつ）にかけて、縦横無尽に躍り回った。乃木七郎は大きな声を立ててわらい出した。しかし佐介も曽我ランコも、乃木の両腕を押えるのに、力をこめる必要はまったくなかった。乃木が腕をもがこうとは全然しなかったからだ。――乃木七郎は両手両足をゆるやかに伸ばし、腋の下をすっかり開放して、牛島のくすぐりたいままに任せながら、大笑いに笑っていた。天上の神々の如くに明るく、ここちよげに笑っていた。やがて牛島の額から汗がべっとりと滲（にじ）み出てきた。陰鬱なカレー器械のガシャガシャ音と、くったくなげな健康な乃木七郎の笑い声は、しばらく狭い納屋の中で入り乱れて響き合った。突然その笑いが佐介に伝染した。佐介は乃木の腕から掌を離し、自らの腹を押えるようにして、声を忍んでクックッと笑い始めた。
［やぶちゃん注：「ぎしぎしと唾をつけた」という表現がやや不思議に感じられ、方言ではないかと調べて見たが、見当たらない。「ぎしぎし」の意味の内で「隙間のないほど詰まっていくさま」の意を採ったものであろうか。］

夜更（ふ）けの夕陽養老院の中央階段を、在院者代表の八老人は二列縦隊となり、両側の手すりにすがりながら、黙々として降りて来た。階段の上り降りは年齢の関係上、手すりにすがってやるのが、当院一般のしきたりになっている。だから手すりには長年の老人たちの脂（あぶら）がしみ込んで、ねとねとと黝（くろ）ずんでいた。降り切った一行は、言葉を発するのもの憂いらしく、お互いに眼くばせのようなことをし合ったまま、ぞろぞろと東寮のどんづまりの部屋の方に歩き出した。歩き出さないのはニラ爺だけであった。ニラ爺は皆の眼を盗み、階段のかげにちょこちょこと隠れ込んだ。

「くたびれたあ、ほんとにへとへとや」廊下を遠ざかってゆく七老人の後ろ姿を、情なさそうに見送りながらニラ爺はつぶやいた。「院長も院長だが、あの爺さんたちも爺さんたちや。実際みんな詰まらんことによく頑張るなあ。仲間に入れられて、おれ、ほんとに迷惑するわ」

「ほんとに迷惑だったなあ」院長室で黒須院長は鰻（うなぎ）のマッチで一服つけながら、回転椅子をギイと鳴らして木見婆の方に向き直った。「もっともこんなに遅くなったのは、まるまるわたしの責任じゃない。爺さんたちがあまりにもワカラズヤだもんだから、ついついこんなに会見が長引いた。わたしもくたびれたが、立会いのあんたも相当にくたびれただろう。まったくもの判りの悪いあの爺たちには、流石（さすが）のわたしも手を焼いたよ。はっはっはあ」

木見婆は籐椅子にもたれたまま、別に笑いに和することもせず、ぶわぶわ顔をかすかに動かしただけであった。木見婆はくたびれてもいたけれども、会見の長談義に退屈してすっかり眠気をもよおしていたのだ。（もう話し合いも終ったんだから、早く戻してくれればいいのに）と木見婆は考えた。

「明日は月例の経営者会議の日だ」木見婆のそんな気持を察することなく、黒須院長は、ゆうゆうと足を組み、大きな煙の輪をふき上げた。「だから、いつものように、特別献立（こんだて）を六食分、用意して呉れ。あの連中ときたら口は奢（おご）っているし、それにそろってうるさ型と来ているから、材料や味つけに手抜かりなく、しかるべく頼むよ」

「はい」木見婆はぽたりとうなずいた。

「わたしは今日ウナギを食ったが、割に旨（うま）かった。明日の特別食にもウナギを一串（ひとくし）つけるといいな。いや、御苦労だった。それじゃ今夜はこれで引取ってよろしい。今夜の仕事は特別だし、それに臨時だったから、夜勤料は特別に二倍につけて上げる」

院長は老獪（ろうかい）に眼を細め、恩着せがましい声を出した。「今日あんたが立会人をやらせられたのも、原因はあの栗山佐介書記が怠慢したからだ。電報がとっくについている時刻なのに、まだもって登院して来ない。明かに栗山の怠慢だ。だからあんたの特別夜勤料は、栗山の日給から差引くことにしよう。そうすればこの院長たるわたしは、全然ふところが痛まず損得なしと言うことになる。わっはっはあ」

「御用はそれだけでございますか」籐椅子をギイと鳴らして木見婆は立ち上った。「それではこれで帰らしていただきます」

「夜は更（ふ）けたし、それに夜道は辺るから、用心するんだよ」黒須院長ものそりと立ち

上り、窓ぎわに歩み寄って外部の様子をうかがった。「雨はもう止んだようだな」
「止んだようでございます」
木見婆は院長の幅広い背中に一礼して、扉の外にそっと辷り出た。院長は曇りガラスの窓を音のしないように押しあけた。コの字型の建物の屋根の稜線（りょうせん）のかなたに暗い空がひろがり、時折音響を伴なわぬ稲妻が、かなたのかなたで小さくひらめいては消滅した。院長は頭をめぐらせて今度は中庭を見おろした。中庭も鬱然たる闇に沈み、それをめぐる部屋々々の燈も消えていたが、ただ一部屋だけ、東寮どんづまりのれいの部屋だけが燈をあかあかともし、その光は窓ガラスを通して、中庭の一部をぼうと明るく浮き出していた。院長の眉の根はとたんにぐいとふくらみ、眼もふたたびあのたけだけしい光を取り戻した。その窓ガラスにその時ちらと動くひとつの人影が見えた。院長はあわてて院長室の窓を閉じた。
（うん。懐柔と恫喝（どうかつ）。今日わしは確乎たる信念をもってやったつもりだが、思いのほか成果は上らなかったようだ）
奥歯をぎりぎりと噛み合わせながら、院長は室を斜めに横切り、隅の大きなソファーにごろりと横になった。憤怒と悔恨が院長の分厚い胸の中で波立ち騒いだ。
（残念ながら今夜は、あいつ等にも相当点数を稼がれた。今度からは細心に計画を立てて、敵に乗ずる隙をあたえないようにしよう。たしかにあいつらはアカの戦術を用いている。歴史ある当養老院に赤色分子が入りこむなんて、言語道断だ。芽のうちに摘み取らねば、どういうことになるか判らんぞ。よし。ニラ爺を督励（とくれい）して、きゃつ等一人々々の思想傾向、読書傾向を調査させよう。しかし、ニラ爺にそれが勤まるかどうか、実際あの爺はたよりないからなあ。勤まらなきゃ、やはりリヤカー破損の名目で、追い出すより他はないなあ）
木見婆も手すりにすがり、中央階段をぼとりぼとりと降りていた。丁度（ちょうど）降り切ったところを、横あいからいきなりぐいと腕を摑（つか）まれ、木見婆はびっくりして棒立ちとなり、ヒイッと呼吸（いき）を引いた。腕を摑んだのはニラ爺であった。木見婆をびっくりさせたことに満足したらしく、ニラ爺は眼を細めてにやにやと笑っていた。
「びっくりさせるじゃないか」木見婆はつっけんどんに言って腕を振り離そうとした。しかしニラ爺の握力は案外に強く、振り離すことが出来なかった。「なんだい。あたしに何の用事があるんだい」
「お互いに今夜は辛かったねえ」ニラ爺は顔を皺（しわ）だらけにした。「つまらん会議で、おれ、ほんとに退屈したよ、おれもちょっと居眠りしたが、木見婆さんも盛んに居眠りしてたねえ」
「つまらないことを言わないでよ」木見婆は腕を振り離すことはあきらめ、ニラ爺の顔を正面から見詰めた。「あたし、もう家に帰らなきゃ。夜遅いんだよ。一体何の用事だい」
「おれ、さっきからここに隠れて、あんたが降りてくるのを待ってたのや」ニラ爺は木見婆の腕を摑んだまま廊下を歩き出した。「おれ、実を言うと、お腹がすっかり空いたのや。そ

れにくたびれたもんで、甘いものが滅法欲しくなった」「甘いもの？」引きずられるようにして歩きながら木見婆が言った。「甘いものなら先刻、しこたま食べたじゃないか。白砂糖をどっさりさ」

「あれだけじゃ足らん」

「足りないことないよ。あたしが見てたら、つまんでは砥め、つまんでは砥め、一合ぐらいは砥めてしまったじゃないか」

「なんや、あんたはあの時、泣き真似をしてたのか。達者な婆さんやなあ」ニラ爺はふたたびにやにやと頬をゆるめた。「あんたが呉れんと言うのなら、おれ海坊主に直接かけ合ってくる。かけ合いの次第によっては、おれ、何をしゃべり出すかわからんぜ」

「あたしをおどすつもりなの？」

「何もおどすつもりじゃないが、なりゆきではそんなことになるかも知れんと言うことや」

まわりくどい言い方をしながら、ニラ爺は手の握力を強めたり弱めたりした。そして二人は食堂の調理場の扉の前で立ち止った。

「魚心あれば水心あり。古人はほんまにええことを言うたなあ」

「厭らし！」

木見婆は口の中でつぶやき、諦めたように調理場の扉の鍵をはずした。ニラ爺は摑んだ掌を離して、あたりを油断なく見回し、木見婆のあとにつづいて、すばやく調理場の中に飛び込んだ。そして扉をそっとしめた。

「おとなしそうに見せかけて、あんたという爺さんは、ほんとに悪だね」かるく舌打ちして木見婆が言った。「あたしみたいなか弱い女性を脅迫して、なにが面白いのさ」

「か弱い女性だなんて、可愛いことを言うねえ」

ニラ爺は相好（そうごう）をくずして、人差指で木見婆の頬をチョイとつついた。木見婆の頬はぶよぶよだし、ニラ爺の指は筋張って脂がぬけているので、その動作や接触も、若い日の如くにはスムーズに行かなかった。しかしとにかくそうしたことによって、二人のすでに硬化した情緒はいくらかほぐれ、かすかに揺れ動いたかのように見えた。

「あんたがか弱い女性なら、おれだってか弱い男性や。か弱い女性とか弱い男性。か弱い同士で団結しようじゃないか。団結すればこの世に恐いものはないぜ」

「一体何が欲しいのさ」

「そうだねえ」ニラ爺は唇のはしに唾をためながら、調理場をぐるぐると見回した。目移りがするらしく、ニラ爺の視線はきょときょとと落着かなかった。「そうやなあ。何から食べようかなあ。おれ、ほんとに迷ってしまうなあ」

「早くしなさいってば！」木見婆はいらだたしげに言った。「迷うことなんか、ないじゃないの。ほんとに食い意地が張ってんのねえ。さっさと食べたいものを言えばいいじゃないの。夜も遅いんだよ。あたし、早く家に帰らなくちゃ困るんだよ。さあ。何が食べたいのさ。さっさと言わなきゃ、あたしもう帰っちゃうよ！」

「俺、今晩、泊めて貰うぜ」ぐったりと畳の上に腹這いになりながら、牛島康之は怒ったような声を出した。「こんなにくたびれて、これ以上歩けるか」
　しかし牛島は怒っているのではなく、疲れ果てているのであった。さんざん歩き回り、デパートでは木馬に乗り、駅では待たせられ、協議会では組打ちをやり、またせっせとくすぐり、今や牛島は完全にくたびれていた。乃木七郎も牛島の真似をして畳に腹這いになった。彼も大笑いに笑った挙句、すっかりくたくたに笑い疲れていたのだ。佐介は板壁に背をもたせ、両足を投げ出していた。彼ももちろん睡眠不足や組打ちなどのために徹底的にくたびれていた。疲労が彼の顔をうすぐろく隈（くま）どっていた。元気なのは曽我ランコだけであった。曽我ランコの顔は、夜が更（ふ）けるにしたがって、ますます生き生きと冴えてきた。
「ほんとに笑いくたびれました」乃木七郎は頬杖をついたまま、佐介の顔を上目で見た。「わたしも今晩、ここに泊らせていただきます」
「あたり前だ」牛島がきめつけた。「帰ろうたってお前、帰る家も覚えてないじゃないか。一人前の口をきくな！」
　佐介はのろのろと立ち上った。納屋の隅に積まれた夜具の中から、毛布を一枚ひっぱり出し、それを牛島の背に投げてやった。牛島は座蒲団に手を伸ばし、ぐるぐると丸めて枕の形にして、頭をごろりとあてがった。そして大きなあくびをした。乃木も真似をしてごろんと横になった。
「このままこの二人を、野放しで寝かせるつもり？」曽我ランコが言った。「このままじゃあぶないわよ。皆が眠ってしまったら、その隙に逃げ出すかも知れないもの」
「大丈夫だろう」佐介は小さくあくびをした。「たいてい大丈夫だよ。僕も牛さんもくたびれているから、不寝番に立つ気力はない。それとも曽我君が立って呉れるかい」
「イヤよ！」曽我ランコはそっけなく拒絶した。「いい方法があるわ。このX氏に催眠薬をむりやりに服（の）ませたらどう？　そうしたら明朝まで眠りつづけると思うんだけど」
「催眠薬、あったかな？」佐介は小机の方に蟹（かに）のように横這いをした。引出しをごそごそと探した。「あった、あった。少し残っていた。服用させてみるか。しかしもし、X君が服みたくないと言えば、ムリに服ませるわけにも行かないだろうな。基本的人権というものがあるし」
「あんた、服む？」曽我ランコは乃木七郎を上からきっと見据え、猫撫で声で言った。「眠り薬よ。これを服むと天国に行ったみたいにぐっすり眠れるのよ」
「服ませていただきましょう」ためらうことなく乃木七郎は答えた。「粒ですか。粉ですか？　わたしは天国が大好きです」
「服んで呉れるか」と佐介がほっとしたように言った。「君の保管は僕の責任になっているんだ。曽我君。水をコップに頼む」
　曽我ランコはコップを手にして、いそいそと納屋を出て行った。佐介は積み夜具から蒲団を一枚引っぱり出した。ランコはいそいそと戻ってきた。蒲団を投げてやるはずみに、佐介の足が行李に触れ、行李の上の赤い卓上ピアノは乱雑な鳴動音を立てながら、畳の上にころ

がり落ちた。乃木七郎はびっくりしたように首を立てた。牛島は微動だにしなかった。彼はすでにかすかにいびきをかき、完全なる眠りに入っていた。
「もう眠ったのかい」佐介は卓上ピアノを拾い上げた。
「早いもんだね。まったく健康児童だ」
「はい。水」
皆我ランコは乃木にコップを手渡した。佐介は片手でピアノを摑み、片手に薬を持って、乃本の枕もとにあぐらをかいた。乃木はごそごそと身体を起した。
「薬を服む前にだね」佐介は言った。「このピアノをひいてみなさい」
乃木は佐介の顔を見た。そして指を鍵盤に近づけたが、指はそのまま困ったように宙にためらった。佐介はその指の動きをじっと眺めていた。
「もう、いいよ」佐介はピアノを引っこめた。「さあ、催眠薬」
「何なの、それ？」曽我ランコが訊ねた。「何の真似？」
「いや、この人が過去において、音楽に関係があったかどうか、ちょっとためしてみたんだ」
「止しなさいよ。バカバカしい」曽我ランコは失笑した。
「それよりかその卓上ピアノを、この人の足にくくりつけとくのよ。そうすれば万一催眠薬が覚めて、逃げ出そうとしても、音がするでしょう。すぐに感づかれて、逃げ出せなくなるわ」
「それもいい考えだ」佐介は乃木七郎の掌の上に、白い錠剤を二粒乗せてやった。「嚙まない方がいいよ。嚙むとにがいよ」
「いただきます」
乃木七郎は錠剤をひょいと口の中に放り込み、ゴクゴクと水と共に呑み込んだ。そしてけろりとした表情で頭を下げ、そのままごろりと横になった。佐介の手がかけ蒲団の具合を直してやった。
「おやすみなさい」
乃木七郎は眼をつむった。
佐介と曽我ランコは、その乃木の顔をじっと監視していた。沈黙のまま、五分間ほど経った。乃木七郎の呼吸はようやく深く、緩慢となり、眠りの翳（かげ）が顔一面にじわじわとひろがってきた。二人は顔を見合わせた。曽我ランコは卓上ピアノを手元にそっと引寄せながら、ささやくような声で言った。
「厄介な人間の身柄を引き受けたもんね。あなた、あの時、率先（そっせん）して手を挙げたけれど、どういう気持だったの。好きこのんでこんな貧乏くじを引かなくてもいいじゃないの。それとも、この男がそれほど憎かった？」
「憎かったんじゃない」佐介はどもった。「に、にくいんじゃない。なにか興味があったんだよ。興味が」

深夜の廊下をニラ爺は足音をぬすんで、東寮の方に曲り込んだ。身体よりは大き目の薄地のカーキ色の上衣、その双のポケットはずっしりとふくらみ、襯衣（シャツ）の中にも何か押し込んでいると見え、上衣の腹のあたりがむっくりとかさばっていた。

（追い出される心配はなくなったし、木見婆の弱味はおさえたし、今日は何という佳い日だろう）

さっき木見婆からせびり上げた、コップ一杯の味付用の味醂（みりん）、その酔いがほのぼのと身体中に回り、かつニラ爺の気持を浮き浮きと高揚させていた。味醂（みりん）にしろ何にしろ、酒精（アルコール）分の飲料を口にしたことは、ここ久しぶりのことであった。ニラ爺はふくらんだ上衣の腹を、たしかめるように両掌で押えて見た。

（もうあれから相当時間が経ったから、爺さんたちはとっくに解散して、それぞれ部屋に引き取り、ぐうぐう眠ってるだろう。松木爺さんたちも眠っているといいな。眠っているとこの獲物を見付けられずに済む。もし起きておれば、分け前をよこせと、あの爺さんたちは言うだろう。実際当院の爺さんたちは、意地きたないのが多いからな）

自分の意地きたなさをすっかり棚にあげて、ニラ爺はそんなことを考えた。しかしニラ爺のその考えは、たいへんに情況を甘く見過ぎたうらみがあった。松木爺はおろか、七老人はいまだ解散することなく、どんづまりの部屋に車座をつくっていたのだ。車座の中央には当院禁制の電熱器が置かれ、その上に薬罐（やかん）がしゅんしゅんと湯気をふき上げていた。爺さんたちはお茶を入れて飲んでいた。茶は松木爺の提供によるもので、割かた上質の煎茶（せんちゃ）であった。

「さあ、夜も遅いから、今日はこれで解散することにしよう」遊佐爺は舌を鳴らしながら残りの茶を飲みほし、重々しげに一座を見回した。「今日の会見は皆の努力によって、一応終了したが、必ずしも成功だとはいえなかった。残念ながら海坊主にも相当点数を稼がれた。しかし会見は今日一ぺんこっきりというわけではないからして、ますますわしたちは団結して、ことに当らねばならん。いや、みんな御苦労さんでした」

「御苦労さんでした」

「御苦労さんでした」

爺さんたちがこもごも唱和し、めいめい腰を浮かしかけた時、たてつけの悪い入口の扉がガタゴトと押し開かれた。皆の視線は一斉にそこに集まった。扉のすき間からニラ爺の禿頭がぬっとのぞいた。ニラ爺はたちまちどぎまぎして、顔をさっとあかくし、思わず逃げ腰となった。松木爺が怒鳴った。

「ニラ爺！」

ニラ爺はますますへどもどしながら、扉にすがるようにして、尻を後方に引いた。腰を曲げることによって、上衣のふくらみを皆の眼からかくそうとしたのだ。松木爺がふたたび叱声を上げた。

「ニラ爺。今まで、どこに行ってたんだ！」

ニラ爺はそのままの姿勢で黙っていた。顔のあかさは急に引いて、額はむしろ蒼味を帯びてきた。松木爺は三度たたみかけた。
「どこに行ってたんだと言うのに！」
「便所や！」ニラ爺はせっぱつまって言い返した。「便所に行くのは俺の自由や」
「便所だけにそんな時間がかかるのか」松木爺はかさにかかった。「お前さん、痔（じ）でも悪いのか。俺はお前さんとこの一年同室したが、そんな話はついぞ聞かなかったぞ！」
「ニラ爺さん」遊佐爺が松木爺を制して、重々しくニラ爺をさしまねいた。「ここに上って来なさい」
ニラ爺は本当にせっぱ詰まった。扉にすがった双の手がぶるぶるとふるえ出した。道佐爺が重ねて命令した。
「上って来なさい！」
「上るよ」ニラ爺はとたんにふて腐れて、腰をすっくと伸ばした。そしてのそのそと部屋に上って来た。「上ればいいんだろう。ここはおれの部屋や」
「ニラ爺さん。お前、ポケットに何を入れてるんだ」滝川爺が疑わしげに眼を光らせた。電燈の真下でポケットのふくらみはかくすべくもなかったのだ。「出して見い」
「こ、これは私物や」ニラ爺はどもって、きょときょとと一座を不安げに見回した。「私物にまで他人の干渉は受けん」
「お前、便所に行ったと言ってたが」松木爺がまた口を出した。「便所に私物をかくしてたのか」
ニラ爺は額をあおくして松木爺をにらみつけた。返事はしなかった。それがますます一座の疑惑を深めた。道佐爺はたまりかねたようにごそごそと乗り出し、自分の膝をニラ爺の膝にぴったりとくっつけた。おごそかな声で言った。
「ニラ爺さん。わしの顔を見なさい。まっすぐにわしを見なさい」
ニラ爺はいよいよふて腐れて、遊佐爺に向って顎（あご）を突き出した。
「おや？」遊佐爺は語気をするどくした。「何かアルコール性のにおいがするぞ。お前、酒を飲んだな」
「酒じゃない。味醂や」ニラ爺は度胸を定めて居直った。
「味醂（みりん）を飲んじゃあかんのか？」
「飲んでいけないとは、わしは言いません。飲んでもいいがだ、どこでその味琳を手に入れたのか」遊佐爺は教えさとす口調になった。「お前さんはさっきわしを指圧した時、近頃煙草銭にもこと欠いてると言ったではないか。煙草銭にもこと欠いてるお前さんが、味醂（みりん）を買えるわけがないではないか。お前さんの行動は疑惑に包まれている。この際一切を開陳して、みんなの疑惑を晴らせ。先ずそのポケットのものを出して見せなさい」
ニラ爺はポケットのものを出すかわりに、降伏する兵士のように、眼をつむって黙って両手をさし上げた。遊佐爺は自ら手を下すことなく、松木爺の方を向いて命令した。
「松爺さん。お前が引っぱり出しなさい」

松木爺はいそいそと膝行（しっこう）して、ニラ爺の背後に回った。ポケットから次々に紙包みやセロハン包みを引っぱり出した。それらは皆食べ物であった。煮豆。味醂干し。南京豆。せんべい。ニッケ玉。ジャムの瓶詰。それにセロハン包みのカンピョウなどが、最後に引っぱり出された。ニラ爺は観念したように両手を上げたまま、微動だにしなかった。一座の視線は疑惑と驚異にみちて、畳に並べられた品々にそそがれた。遊佐爺が言った。

「それだけか」

「ポケットはこれだけのようだ」

松木爺はニラ爺のポケットを両側からぱんぱんと叩いた。ニラ爺は眼を開いて両手を静かにおろした。そのニラ爺の挙動をにらんでいた柿本爺が、語気するどく発言した。

「ヘソのあたりが妙にふくれ上っているぞ」

ニラ爺はとたんに絶望落胆して、ふたたび両手をたかだかとさし上げた。松木爺の手がニラ爺の上衣をまくり、シャツの釦（ボタン）を外した。そこからも紙袋が二つ引っぱり出された。松木爺はその口をのぞいた。

「これは白砂糖。こっちの方は、黒砂糖だ」松木爺は誇らしげに一座に報告し、ニラ爺を横あいからにらみつけた。

「便所に行ったなんて言いやがって、一体どこからこれをくすねて来た」

「くすねて来たんじゃない！」ニラ爺はやけっぱちになって怒鳴り返した。「人聞きの悪いことを言うな！」

「では、どこから手に入れたんだ？」

ニラ爺は歯を食いしばり、発言を拒否する気配を見せた。その様子を見ていた道佐爺がしずかに発言した。

「松爺さんも、柿爺さんもしばらく黙っていなさい」そして遊佐爺はニラ爺の肩にやさしく手をかけた。「なあ、ニラ爺さん。あんたがその品々を持っていることを、わしたちは責めているんじゃない。物を所有するということは、各人の自由だ。その自由は尊ばれねばならん。しかしだな、ニラ爺さん、現在わしたちは在院者代表として、院内改革の闘いに立ち上っているのだ。あんたも光栄ある代表者の一人だ。代表者であるからには、公私両面において、その進退をハッキリさせて置く義務がある。な、そうだろう。あんたがこれらの品々を持つのはいいが、どこから手に入れたかということは、一応説明する義務があるだろう。そうしないと自（おのずか）ら、くすねて来たんじゃないか、という疑惑も生じるわけだ。それじゃあんたも困るだろう」

「くすねて来たんじゃない」ニラ爺は力なく言った。「貰ったんや」

「誰から貰った？」

ニラ爺はふたたび歯を食いしばった。松木爺がたまりかねたように、横あいから口を出した。

「まさか海坊主から貰ったんじゃあるまいな」

ニラ爺はギクリと身体を慄わせ、眼の色をかえて、松木爺をにらみつけた。

「う、海坊主から貰うわけないやないか。松爺はおれの人格を侮辱するつもりか！」
「そう、そう、海坊主から貰うわけがない。松木爺はすこし口を慎（つつし）みなさい」道佐爺はやさしくニラ爺の肩をゆすぶった。「誰から貰った？」
ニラ爺は口をもごもごさせた。言おうか言うまいか、瞬間ニラ爺の心は千々（ちぢ）に乱れた。その瞬間をとらえて、遊佐爺がおびやかすような声を出した。
「言わないと、くすねたものと断定するぞ！」
「木、木見婆や」ニラ爺は悲痛な声でどもった。「木見婆さんがおれに呉れたんや」
「なに、木見婆？」道佐爺はニラ爺をきっと見据（す）え、検事みたいな声を出した。「いかなるいきさつで、木見婆はこれらの品々を、お前に呉れたのか。ニラ爺はこれを説明せよ！」

「僕が何故死のうと思ったのか、そこだけが僕の記憶からポッカリと脱落しているんだ。今でも判らない」
積み夜具に背をふかぶかともたせかけ、栗山佐介は沈痛な声で言った。
「何故僕は死ぬつもりになったんだろう」
牛島康之は座蒲団を枕にし、毛布を抱きしめるようにして、大きないびきを立てていた。乃木七郎は顎まで夏蒲団を引き上げ、あおむけに行儀よく眠っていた。乃木七郎の左足首は帯でくくられ、その帯のもひとつの端には赤い卓上ピアノがくくりつけてあった。曽我ランコは板壁によりかかり、腕を組んで、その二人の寝姿を眺めていた。スラックスに包まれた両脚は、きちんとそろって、畳の上にまっすぐ伸びていた。佐介は眼を伏せて、スラックスからはみ出たランコの白い足の甲や、つちふまずや足指を、ぼんやりと見ていた。
「僕は東京を食い詰めた。しかし食い詰めたこと自体は、自殺の原因にはならない。だって僕は若いんだもの。若ささえあれば、どんなにやってでも生きて行ける」
「そうね」曽我ランコが相槌（あいづち）を打った。
「食い詰めて僕は田舎落ちすることになった。田舎に別にあてはなかったけれども、僕の友人がいてね、困ったらやってこい、半月や一月は食わせてやる、そう言って呉れてたもんだから、僕は行く決心になった。僕は駅を降りてそいつの家にとことこと歩いて行った。北小路、とそいつの名は言うんだが、北小路家はその地方の豪家で、庭も広く、梅の木や栗の木がたくさん生えていた。門をくぐって玄関まで、五十米以上もあったような気がするね。そこが石で畳んだ坂道でね、そこをえっちらおっちら登りながら、僕は突然イヤな予感がした。北小路のやつ、ああは言ったが、僕の顔を見たとたんに、イヤな顔をするんじゃないか、半月はおろか、一日だって泊めるのを迷惑がるんじゃないか。ちらとそんな予感がしたんだ。予感というより、確信と言った方が近いかも知れない」
そして佐介は黙った。曽我ランコは自分の足を佐介から眺められていることを意識して、足指をピコピコと動かした。足指は肉体から独立して、なまめかしく動いた。
「それで、やっぱり迷惑がられたの？」

「いや、そうでもなかった。が、僕の方でへんに遠慮しちゃったんだ。北小路は僕に、上れ上れ、としきりにすすめたが、僕はへんにひねくれて、かたくなになって、玄関先で帰ると言い張ったんだ。ほんとは一月ばかり厄介になるつもりだったんだがね、ふしぎな力が僕を駆（か）って、僕を玄関先だけで辞退させた。今直ぐ東京に戻るんだと、僕はもう喧嘩腰で言い張ったような気がする。そこで北小路も負けて、弁当をつくって呉れた。大急ぎでつくったもんだから、かんたんな弁当だね。赤ん坊の頭ほどもある塩味の握り飯、それにタクアンの五六片だ。僕はそれを貰い、そそくさと駅に引き返した。待合室でポケットウィスキーを飲み、その握り飯を食べた。食べ終ると待合室を出、線路沿いの土堤をあるいて、陸橋まで来たのだ。間もなく二十一時五十九分着の普通列車がやってくる。僕はそれをあらかじめ知っていた。それをじっと待っていた――。やがてかなたの闇に、突然ギラギラとヘッドライトが現われた。僕はもう夢中で陸橋にぶらりとぶら下り、そしてそのまま手を離した。僕は線路に落ちたのだ」

「轢（ひ）かれたの？」

「轢かれたら、僕が今君の前にいるわけがない」と佐介は真面目な顔で言った。「轢かれなかったのだ。なにかの手違いで、汽車は僕の身体の上を通過しなかった。僕は枕木に膝を打ちつけただけで、それでおめおめと土堤を這い上ったんだ」

佐介は手を伸ばして、ズボンをたくし上げ、右膝を露出した。青白い膝蓋を撫でさすった。

「その時から、この膝の具合があまり良くない。僕の身体の中でここが唯一の弱味となったな。この世に弱味なき人間なし。今夜の格闘でも、牛島からここを蹴上げられた。敵というやつは、必ず弱味をねらって来るものだ」

「それで」曽我ランコはちょっとうんざりした。「死にそこなったわけね」

佐介はうなずいた。

「僕は当日のことを、ほとんど何でも覚えている。北小路家のたたずまい、待合室にいた人々の顔やその会話の内容、陸橋を渡ってきた牛車の音、牛の眼の色、何でもありありと頭にこびりついている。ところが、自分が何故死のうと思ったのか、死のうと決心したのか、そこだけが僕の記憶から完全に脱落しているんだ。自殺を試みたからには、その理由がなくちゃいけないだろう。その理由が、今いくら記憶をひっかき回しても、出て来ないんだ」

「変なのねえ」曽我ランコは眉をひそめた。「そんなこと、あるかしら」

「あるんだね」佐介はまたランコの足指に視線をうつした。「イヤなもの、腐敗したものをたべると、胃はどうするか。嘔吐（おうと）というやり方で、これを排除してしまう。目にゴミが入ったら、目はどうするか。涙をさかんに出すことによって、異物を流し出してしまう。そんな具合に僕の死のうとした気持や動機が、あまりにも耐えられないものだったために、僕の記憶が自動的にそれを排除し、追放してしまったんじゃないかしら、傷口から膿（うみ）と共にトゲを排出するようにさ。近頃そんなことも考えるんだ。しかし、記憶に耐え切れないような、どんな切ない動機や原因が、その時の僕にあったんだろう。その耐え切れないやつを、記憶からしめ出すことによって、その日からやっと僕は生きてきた。死にそこな

って、生きて来た。いや、死にそこなったというより、僕はその時やはり死んだのだ。死んだと言っていいだろう。人を自殺におもむかせるほどの重大な素因を、すっかり排除し脱落させてしまったんだからね。生きてると自慢するだけの資格は僕にないよ。つまり人として感動する権利を、僕はなにものかによってすっかり取り上げられてしまった。取り上げられたというより、返上したと言った方がいい。時に君の足指は、よく動くもんだね。白雪姫の小人みたいだ」

「イヤな眼！」曽我ランコはすばやく足を引っこめた。「眼がかさかさに乾いているのね。まるで今にも残酷なことをやり出すみたい」

「疲れてるんだ」見るものがなくなったものだから、佐介は小さなあくびをして、視線をうろうろさせた。「ああ、僕はずい分長い間疲れている」

「自殺の気持の記憶は」足先を掌でつつみ込むようにしながら、ランコは訊ねた。「今全然ないというわけね」

「そうだね。あるとすれば、漠然とした憎悪の感じだけだ。それが膜のように僕の記憶にかぶさっている。それも、僕が誰かを憎んでるのか、誰かが僕を憎んでいるのか、全然ハッキリしないんだ。ただそこらの中核に、憎しみみたいなものがあったということだけが、漠然と残っているんだが、それだけじゃ仕様がないやね」佐介は乃木七郎の寝姿を顎でさした。「このおっさんは、いつ記憶が回復するか知らないが、あるいは僕も、ある日のある時、ふっとそれが戻ってくるかも知れない。戻ってくるかも知れないし永久に戻って来ないかも知れない。そのどちらが僕に有利なのか、幸福なのか、判らないけれどもね、その点はこのおっさんも同じだ」

「金魚をつかまえろ」その時牛島が寝言を言いながら、ごろりと寝返りをうった。佐介とランコは顔を見合わせた。「金魚を三匹だぞ」

「ノメクタ。ニエコヨ」夕陽養老院院長室備えつけの大型ソファーの上で、黒須院長は突然大声でハッキリと寝言を言った。院長は肱（ひじ）掛けを枕とし、くの字型の窮屈な姿勢で眠っていた。よだれが顎鬚を一筋光らせ、詰襟服の第一ボタンでとまっていた。院長は小学校時代の習字の夢をみていた。彼は右手をふわふわと宙に浮かせ、くにゃくにゃと動かしながら、寝言を続行した。「レルキヤ。ヒセハホ。……」

「ふ、ふ、ふ」寝床の中でニラ爺は低く笑っていた。ニラ爺も覚めているのではなく、眠っていた。眠りながらニラ爺はわらっていた。木見婆からの折角の獲物を、道佐爺たちによって全部没収され、以後かくの如き不正を働かないと誓わされ、ふんだりけったりの目に合わされたにも拘らず、ニラ爺は無邪気に眠り笑いをしていた。眠っている時のニラ爺の顔は、起きている時のそれにくらべて、五つ六つ若返って見えた。ニラ爺のとなりには松木爺が、松木爺のとなりには滝川爺が、それぞれの寝床にぐっすり眠っていた。その東寮どんづまりの六畳間に、ニラ爺の含み笑いの声だけが陰にこもって響いた。「ふ、ふ、ふ」

「ああ、疲れた。昨夜もほとんど眠っていないんだ」佐介は首をうしろに曲げて、音のないあくびをした。一層積み夜具にぐんなりと背をもたせながら、ふかぶかと眼を閉じた。「そ

れに膝も痛い。明朝、骨接（ほねつ）ぎに行こう。曽我君。君もいっしょに行かないか。サクラ通りをずっと行ったところに、上手な接骨医がいるんだ。爺さんだけれどもね、骨折だけじゃなく、ネンザや打ち身、そんなやつをうまくなおすんだよ。僕はいつも右膝の具合が悪くなると、そこにかけつける。曽我君、オッパイの具合はどうだね？」

「ずきずき痛いわ」曽我ランコは佐介を横目で見ながら、左掌で乳房を押えた。「その骨接ぎ、こんなのもやって呉れるの？」

「やって呉れるさ、打ち身だもの」佐介は眼を閉じたまま物憂（ものう）げに言った。「僕はどうもあいつ等が怪しいと思うんだ。こんなX君なんか、ほんとは問題じゃないよ」

「あいつ等？」

「ほら、あのジャンパーを着た男さ、それに赤スカートの」佐介の語調はしだいに舌たるく、あいまいになってきた。「あいつ等、対策協議会をリードしているようだが、どうもそのリードの仕方が怪しいな。今日の投石騒動だって、あいつ等は戸袋のかげにかくれて、初めから安全地帯にいて、何も傷つかなかった。偶然にしては出来過ぎている。何かあるんじゃないか」

「何が？」

佐介は返事をしなかった。そのままの姿勢で一瞬の間に、佐介は眠りの世界に入っていた。やがて曽我ランコは板壁から背を引き離し、音のしないようにそっと立ち上った。土間へ降りた。

「あたし、もう帰るわ」

少数のものを除いて、夜はほとんどの人間、ほとんどの物体を眠らせつつあった。その少数のもののひとつに、カレー工場の器械があった。数多（あまた）のウスとキネとをそなえたその大きな器械は、永遠の刑罰を受けた巨人のように、悲しげな音を立てながら、ガッシャ、ガッシャ、ガッシャと動いていた。寝しずまった周囲の中で、その周囲から憎悪されることによって、その音は孤独に自暴自棄に響きわたった。

［やぶちゃん注：「味酬」にルビがあったり、なかったりはママ。

「ノメクタ。ニエコヨ」「院長は小学校時代の習字の夢をみていた。彼は右手をふわふわと宙に浮かせ、くにゃくにゃと動かしながら、寝言を続行した」「レルキヤ。ヒセハホ」国立国会図書館デジタルコレクションの大塚治六著「硬毛両様　書方の指導書　尋一」（大正一五（一九二六）年東洋図書刊）の「教材解説並に指導法」の中に「第一　ノメクタ」・「第二　ニエコヨ」・「第三　フラソツ」・「第四　レルキヤ」・「第五　ヒセハホ」・「第六　アカイモミヂ」等とある。ここに出るそれぞれは、「ノメクタ」が『斜畫の用筆法と右向の點の打方との二つを授ける』とあり、以下、「ニエコヨ」は『横畫の用筆法とコとヨの曲り角の用筆法を授く』、「レルキヤ」は『勾』（かぎ）『と竪畫との用筆法を授ける』、「ヒセハホ」は『ヒセの第二畫の曲り角の用筆法を會得させる』とあった。なるほど！　と一人合点した。

「一層積み夜具」消波ブロックの施工で「一層積み」「多層積み」があるが、私は蒲団にこうした謂い方をしたことがないのでちょっと不審で、何らかの誤記か誤植かと思ったが、既

に牛島と乃木に使い、一枚しかない一つの蒲団を一度（「一層」）折りたたんだ（でないと「背をもたせ」られない）ものを指していると読んでおく。」

23

渋川接骨院は、駅の踏切から線路沿いにしばらく歩き、小さな自動車修繕屋から右に折れ、その小路の数えて六軒目にあった。

普通のしもたや風（ふう）のつくりで、門をくぐって玄関の前に立つと、ガラス扉に『ほねつぎ』という字が浮き出ている。その字も古びて、周囲から黄色く褪（あ）せかけている。そのそばに大きな表札がかかっていて、『柔道整復師』『漢方和方薬師』この二つの肩書をつけた渋川丈助の名が、筆太に記されてあった。ガラス扉をあけると、とっつきの部屋が待合室になり、それにつづいた十畳敷の部屋が診療室という具合だ。煎（せん）じ薬や練り薬のにおいが何時もそこらいっぱいにただよっていた。

午前十時、渋川丈助はその診療室にきちんと正坐し、相対した女客の足首に指を触れていた。かるく揉（も）むようにして、筋の具合をたしかめながら、重々しい声を出した。

「お名前は？」

女客は自分の名を答えて、痛そうに自分の脚を両掌で抑えた。渋川丈助は指をおもむろに離して、悠然と顎鬚（あごひげ）をしごいた。

「かるいネンザをおこしておりまするな」

渋川丈助の顎鬚は、長さが一尺に余る。齢のせいでもう真白になっている。この老人が町を歩くと、通行人が振り返るほど見事な鬚だ。もちろん老人は朝夕この鬚に、卵の白身など使って、丹念な手入れを怠らない。彼がこんな立派な鬚を仕立てたのは、趣味やおしゃれというよりも、職業上の要求からであった。接骨医だの漢方医などという商売は、相手を威圧し、信頼感をおこさせる必要がある。軽軽しく見られては繁昌しないのだ。それには尺余の白鬚などは、打ってつけの装置であることを彼は知っていた。渋川丈助は顔を左右に振って、その白鬚をゆさゆさと波打たせた。

「腰の筋の弱まりが、とかく足首にやってくる」渋川丈助は重々しく口を開いた。この重々しい口ぶりは職業上のものであった。その証拠にこの老人は、孫と遊ぶ時などになると、ずっとかるい若々しい声を出すのだ。「転びでもなされたかな？」

「はい」女客は神妙に答えた。「悪者にあとをつけられ、暗い夜道を走ろうとして転びまして――」

待合室に坐って番を待つ男たちの眼が、きらりと光って女客を見た。渋川丈助は右手を伸ばし、傍の戸棚から薬箱と黒い薬壺をとりおろした。女客は膝を押えたまま、まぶしそうに顔を上げて、出窓の方に顔を向けた。午前十時の陽光が、その出窓からさんさんと射し入ってくるのだ。久しぶりの日射しだが、この天気もすぐに崩れて、曇天や雨天に立ち戻ることだろう。渋川丈助は黒壺の蓋をとりながら、女客の足首に視線を据えた。足首には足首の表

情があった。足首はその形のまま羞恥と痛みを訴えていた。手当は直ぐに終った。
「いかほど？」裾をととのえながら女客は甘い声で訊ねた。
「百五十円」
布で指を拭きながら、渋川丈助は柱の方を顎でしゃくった。鬚がしろじろと前後に揺れた。柱には郵便受けみたいな木箱がとりつけられ、診療費は患者がめいめい自分でそれに納入する仕組みになっているのだ。女客は不自由そうに立ち上り、それに百五十円を入れ、小腰をかがめ、すこしびっこを引きながら、玄関の方に出て行った。渋川丈助は待合室の方をみた。待合室の壁には貼紙がしてあり、それにはこう書いてある。『日曜祭日は休診。平日は先着十五名に限り診療。主人敬白』渋川丈助はゆったりと腕を組み、今朝診療した患者の数を胸の中で勘定してみた。先着十五名に限るというのは、老齢でそれ以上診療出来ないというわけでなく、これももっぱら職業上の効果をねらったものであった。事実、一年ほど前から十五名に制限して以来、渋川接骨院には急に来院者の数が増加したようだ。それまでは来院者は平均日に十人ぐらいだったのに、この定めを貼り出して以来、時には二十人ぐらいも押しかけてくる日がある。二十人だと五人があぶれる勘定になる。渋川老人はこのやり方を、戦争中の配給制度から考えついた。配給が制限されると、人間は急にガツガツしてくる。診療の配給制度だって同じことだ。老人は腕組みをしずかに解き、職業用の重々しい声を出した。
「次の方」
待合室の連中はちょっと顔を見合わせ、その一人がのそのそと立ち上り、右足を引きずるようにして診療室に入ってきた。渋川丈助の前に腰をおろすと、慣れた風（ふう）にズボンをまくり上げ、そそくさと右膝を露出した。そのなま白い膝頭の格好や表情で、丈助はその膝の持主の名を直ぐに思い出した。この患者は以前にも時々やってきたことがある。右膝に弱味を持った若い男だ。
「栗山佐介さんじゃったな」渋川老人は確かめるように上目を使って、じろりとその男客の顔を見た。「また膝をやられたのかね」
「ええ」栗山佐介は膝頭を大切そうに撫で回しながら答えた。「またネンザをおこしたようです」
「あんたの右膝はもともと弱いんじゃから」渋川は両掌を伸ばしてその膝蓋をはさみつけるようにした。「せいぜい可愛がって、いたわらんけりゃならん。そうですな。ふん、やはりネンザをおこしておるようだ」
渋川丈助は指で患部をあちこち確かめるように押した。佐介は唇を噛み、眉をぴくぴくと動かして、その痛みをこらえた。
「い、いたわってはいるんですが、昨晩、つい取組み合いの格闘をやりまして」
「取組み合い？」老人はじろりと佐介を睨み上げた。「格闘なんか、膝のためにはもっともよろしくないですな。で、相手は？　相手はどんな悪者でしたじゃ？」
待合室の空火鉢のそばで、抜きかけていた鼻毛の手を休め、牛島康之がぎろりと眼を光ら

せた。佐介は待合室をちらと振り返り、直ぐに顔を元に戻して、困った顔で困った声を出した。「ワ、ワルモノというほどの奴、いや、ほどの男じゃありませんが、なにしろ力の強い人物で――」

「悪者という奴は、とかく御婦人のあとをつけたり、飛びかかったりするものじゃ」ふたたび棚から別の練り薬の容器を取りおろしながら、老人はもったいらしく言い聞かせた。「だから近頃このあたりでも、ネンザや打ち身の患者が急に増加しましたな。用心せんけりゃならん」

齢の割にはつやつやした渋川老人の指が容器の蓋を取った。蓋を取った瞬間その練り薬から、薄荷（はっか）、樟脳（しょうのう）、蕃椒（とうがらし）などの入り混った、刺戟性のにおいがゆらゆらと発散した。渋川は竹のへらを使って、それを器用に和紙に伸ばし、いきなりべたりと佐介の膝に貼りつけた。佐介はびくっと神経的に脚を慄わせ、かすかな咽喉（のど）音を立てた。つめたかったのだ。渋川老人はそれを無視して、慣れた手付きでその上に繃帯（ほうたい）をぐるぐると巻き始めた。（やはり夕陽養老院の爺さんたちとは違うようだな）渋川の自信ありげな物腰や動作を観察しながら佐介は考えた。（やはり自分の力で生きて行くやつと、そうでないやつとは、たいへんに違うものだ）佐介は老人の手さばきから視線をはなし、明るい出窓の方に移しながら、ぼんやりした声で訊ねた。

「自宅療法としては、どうするのが一番いいでしょう？」

「湿布じゃな」巻き上げた繃帯に小さな留め金をかけながら老人は答えた。「アオキ、忍冬（すいかずら）、接骨木（にわとこ）、この三つの枝や実や葉を煎（せん）じて湿布する。これが一番ですな」

「アオキ？」

「そら、庭木によくあるじゃろう。赤い楕円形（だえんけい）の実のなるやつ」老人は非現をしごいた。「忍冬、接骨木は上水路の堤にいくらでも生えている。あの堤は水道局のものだが、少少なら折り取ってもかまわんじゃろう。さあ、次の方」

待合室の三人はちょっと顔を見合わせ、曽我ランコが立ち上って、爪先立って診療室に入ってきた。じゅうたんがよごれてくろずんでいたからだ。曽我ランコは佐介と入れ替わりに座蒲団に坐り込み、かるい声で言った。

「あたし、打ち身よ。なおせて」

「打ち身はわたしの得意ですじゃ」

学をひけらかすことにおいて得意になっていた老人は、曽我ランコのその言葉に自尊心を傷つけられ、たちまちむっとなった。

「打ち身にもいろんな種類がある。大体十六種類ぐらいに分類出来る。あなたのはどれに該当（がいとう）するか、ひとつしらべて進ぜよう。出して見せなさい？」

曽我ランコは眼をぱちぱちさせて、ブラウスの胸部に両掌をあてた。そして待合室の方をきっと振り返った。空火鉢を囲んだ三人の男の眼が、好奇のかがやきを帯びて、曽我ランコに集中していた。彼女はややきつい口調で言った。

「こちらを見ちゃダメよ！」

佐介と牛島は直ちにがたがたと膝を動かして向うむきになった。乃木七郎は牛島から耳たぶを引っぱられ、暴力的に向きを変えさせられた。その三人の背中を確認して、曽我ランコは顔を元に戻した。そしてブラウスが開かれた。壁に面坐した乃木七郎の指が、所在なさそうに動いで、畳の上の卓上ピアノの鍵盤（キイ）をポンと弾いた。牛島がいらだたしげに叱りつけた。

「余計な音を立てるな！」

［やぶちゃん注：「薄荷」本邦産種はシソ目シソ科ハッカ属ハッカ変種ニホンハッカ *Mentha canadensis* var. *piperascens*。精油成分には大脳皮質や延髄を興奮させる作用があり、発汗・血液循環促進効果があり、外用すると、局所的に血管を拡張させる作用によって筋肉の緊張や痛みを和らげる働きをする。現在は化学合成されたメントールにとって代わられた。

「樟脳」クスノキ目クスノキ科ニッケイ属クスノキ *Cinnamomum camphora* の精油の主成分である分子式 $C_{10}H_{16}O$ で表される二環性モノテルペンケトン（monoterpene ketone）の一種。クスノキ片を水蒸気蒸留して得られる（現在では主にピネンから化学合成で作られている）。特異香のある昇華性の無色透明の板状結晶で、セルロイドの原料であった他、医療剤（カンフル（ドイツ語：Kampfer）と呼ぶ）・防虫剤・香料などに使用されている。

「アオキ」ガリア目ガリア科アオキ属アオキ変種アオキ *Aucuba japonica* var. *japonica*。生葉には配糖体オークビンなどが含まれ、排膿・消炎・抗菌作用があり、古くから民間療法で腫れ物・火傷・切り傷・おできなどの保護や消炎に用いられてきた。

「忍冬」マツムシソウ目スイカズラ科スイカズラ属スイカズラ *Lonicera japonica*。漢方の生薬としてよく知られる。

「接骨木」マツムシソウ目レンプクソウ科ニワトコ属ニワトコ亜種ニワトコ *Sambucus sieboldiana* var. *pinnatisecta*。和名の漢字表記は枝や幹を煎じて水飴状にしたものを、骨折の治療の際の湿布剤に用いたためとされ、現在も民間薬として筋骨挫傷に薬効があるとされる。

以下、底本も一行空け。］

久しぶりの晴天で、夕陽養老院もここしばらくの暗鬱（あんうつ）の風情（ふぜい）をはらいおとし、生き生きとよみがえったように見えた。

ねぎ、茄子（なす）、いんげん、胡瓜（きゅうり）、トマトの各畠では、さんさんたる陽光を浴びて、当番の爺さんたちが、虫をつまんで潰したり、病葉（わくらば）をチョキチョキと摘み切ったりしていた。豚舎に残飯を運ぶ爺さん、洗濯場でいそいそと洗濯にいそしむ爺さんたちの姿も見られた。屋根瓦やバルコニーからはさかんに水蒸気が立ちのぼっている。朝食後黒須院長が外出したので、院内には更にゆったりした空気がただよっていた。木見婆は調理室の椅子にもたれて、朝っぱらからうとうとと居眠りを始めていた。東寮階下のどん詰まりの部屋では、昨日の面々が集まって、また何かひそひそと密議を凝らしていた。その

一人の滝川爺がふと不審げに頭を上げて、一座をぐるぐると見回した。
「おや、どうも人数がすくないと思ったら、ニラ爺がいないではないか」
「ニラ爺の奴、朝飯を食ったきり、姿を見せないんだ」松木爺が応じた。「一体どこに行ってやがるんだろう。大切な会議だと言うのに」
「実際仕方のない爺さんだ」柿本爺が嘆息した。「我々にかくれて木見婆をゆするし、それで改心したかと思えば会議には欠席するし、あんな頼りない爺、在院者代表から除名したらどうだ」
「いや、いや、除名は性急に過ぎる。わしたちは長い目で見てやらねばならん」遊佐爺がゆったりと発音した。「松爺さん。お前行って、ニラ爺を探して来なさい」
「あそこで今朝も会議をやってるのや」西寮二階の廊下の窓から、ニラ爺は顔を半分だけのぞかせ、東寮階下を指差しながら、甲斐爺と煙爺と森爺に説明した。この三人の爺さんは、かくれんぼや追っかけごっこにおけるニラ爺の常連の相棒であった。「それを知ってるから、俺は朝からあの部屋に寄りつかないのや。会議なんかほんとにくさくさするぜ。かくれんぼの方がなんぼ面白いか」[やぶちゃん注：「煙爺」初出の人物である。すぐ後で本名が「煙田六郎右衛門」と出てくるのだが、恐らくこの「煙田」という姓は「たばた」と読むのであろうと思う。しかし「煙爺」はこれ、私は「けむじい」と読んでおくことにする。]
「そうだ。そうだ」と森爺が相槌を打った。「会議とかくれんぼとじゃ、土台くらべものにはならん」
「おや、誰か立ち上ったぞ。松爺さんらしい」甲斐爺が注意をうながした。「お前を探しに来るんじゃないか」
「便所に立ったんだろう。松爺は割かた便所が近いからな」と煙爺。
「それよか早くジャンケンをやろうよ。今日俺はニラ爺さんと組むよ。何時もの通り、一時間以内に探し出せねば、百円だよ」
「よし。やろう」
　四人の爺さんは二組に別れ、代表を出して勢いよくジャンケンをした。ジャンケンは二三合の後、韮山（にらやま）伝七、煙田六郎右衛門の組の勝ちとなった。煙爺は勝ち誇った声で宣言した。
「いいか、お前さんたちはここで目をつむって、二百数えるんだぜ。それから俺たちを探しに来い。なに、一時間やそこら、きっと隠れおおせて見せるわい」
「大きな口を叩くな」甲斐爺と森爺も闘志をたかぶらせ異口（いく）同音に叫んだ。「一時間はおろか、三十分で探し出して見せるぞ！」
　そして甲斐爺と森爺は両掌を眼にあて、壁を向いて、声たかだかと数え始めた。ニラ爺と煙爺は手をつないで廊下を走り出した。走り出したとは言え、老齢で足が遅いから、やはり二百という数が必要なのであった。ニラ爺組は呼吸をはずませながら廊下を曲った。
「今日は皆が、び、びっくりするようなとこに隠れようやないか」ニラ爺がせわしい呼吸のあい間に提案した。「ふ、ふつうのとこやったら、直ぐに見付かってしまうぜ」

「そうだねえ。たいていのところには隠れてしまったからねえ。風呂場の風呂桶の中も隠れたし」煙爺は疲労のために速度を落した。「天（あめ）が下には隠れがもなし、か」
「いいとこがある」突然ニラ爺が眼をかがやかして立ち止った。「院長室はどうや。院長室の書類戸棚。今海坊主は外出してるし、丁度好都合やないか。あそこなら一時間かかっても見付かる心配はないぜ」
「院長室とは考えたねえ」
二人の爺さんは立ち止り、はあはあ言いながら顔を見合わせた。
「やって見るか、思い切って」
「なにしろ百円の問題やからなあ」
鈎の手廊下の彼方で、今しも森爺と甲斐爺が数を読み終ったらしく、
「もういいかい」
という声が聞えてきた。煙爺とニラ爺はふたたびハッと顔を見合わせ、無言でうなずき合い、廊下を横っ飛びに飛んで、院長室の前に立ち止った。ニラ爺のかさかさ掌が扉のノブをつかんだ。廊下の彼方から、二人の鬼の声がしだいに近づいてくる。
「もう、いい、かい」
「もう、いい、かい」

「もう、いいわよ」
曽我ランコはブラウスの釦（ボタン）をとめながら、顔だけ待合室の方を振り返った。むっとした表情で壁に面していた三人男は、ごそごそと膝を動かしてこちらに向き直った。渋川丈助はタオルで指を拭きとりながら、もったいぶったせきばらいと共に言った。
「さあ。次の方」
「お前が先だ」牛島が乃木七郎の腰骨をぐいとこづいた。
「お前を待合室に残しとくわけにはいかない」
乃木七郎はふらふらと立ち上って、診察室に足を踏み入れた。それでも心配なのか、牛島もごそごそと立ち上って、乃木のあとにつづいた。佐介もつられて腰を浮かせた。待合室はそれで空になり、診察室は人だらけになった。渋川丈助はとがめるような眼付きで皆を見回し、やや険しい声で言った。
「そうどやどやと入ってきてはいけませんぞ。患者はどなたじゃ？」
「この男です」
佐介が乃木七郎を指した。曽我ランコが立ち退（の）いた座蒲団の上に、乃木七郎は悠然と坐り込み、渋川老人ににこにこと笑顔を見せた。老人はむっとしたまま笑いを返さなかった。
「この男は、頭にも打撲傷を負ったんですが」佐介が乃木の傍に坐り込みながら説明した。膝に繃帯（ほうたい）を巻きつけているので、右脚だけは立て膝だ。「その、頭を殴られたのが原因で、なんだか頭のネジがすこし狂ってしまったらしいんです。つまり、記憶がすっ

かりなくなって、何も憶い出せない。頭のコブもなんですが、この方もひとつ――」「コブの方は治療しなくてもいいぞ」牛島がつっけんどんに口をはさんだ。「コブなんかは手当しないでも、自然に引っこむ。治療費がもったいないよ。先生。その頭ボケの方だけは何とかして貰いたいですな」

渋川丈助は不機嫌そうに顎を引き、鬚をがさがさと動かした。先ほどの曽我ランコのあいさつ、総員そろってどやどやと診療室に入ってきたこと、それにこの無遠慮な言い方に、老人は少からず感情を害していた。老人は顎を引いたまま、じろりと四人を見回した。

「治療代が惜しいとおっしゃるなら、コブはそのままにしときましょう」老人は薬棚の引出しをガタゴトとあけて、サックの中から天眼鏡を取り出した。「頭のネジの狂い方にも、いろんな種類がある。大別すれば八通り、細別すれば三十二通りもある。わしが今調べて進ぜるから、素人（しろうと）がはたから口を出さないでもらいたいじゃ」

老人は天眼鏡を乃木七郎の面前にかざし、じっとのぞき込んだ。乃木七郎も相変らず頬をゆるめて、かざされた天眼鏡を通じて、逆に老人の瞳をのぞき上げた。天眼鏡を間にして、両者の瞳はしばらくお互いを眺め合っていた。やがて老人はかるく舌打ちをして、天眼鏡をおさめた。

「これは当分治らないな」威厳を保つために老人は横柄な声を出した。「この仁（じん）の瞳は、黄瞳（おうどう）と言って、一面に黄味がかかっておる。脳漿（のうしょう）が溷濁（こんだく）している証拠じゃ。記憶が戻るには、先ず一ヵ月はかかろう」

「一ヵ月？」牛島がうなった。「とてもそれまでは待ち切れん。薬はないんですか？」

「バカにつける薬はありませんじゃ」老人はそっけない答え方をした。「はい。あなたがた三人で、八百円いただきます」

「八百円？」乃木七郎はとんきょうな声で復唱して、小首をかしげた。もやもやと溷濁した記憶の中に、その『八百円』という言葉が、破片のようにキラッと光ったからだ。

「八百円。ええ、何だったっけ」

「なにか憶い出したか？」牛島がたたみかけた。

「ええ、八百円」乃木七郎は眼をキョトキョトさせた。

「わたしは、八百円、貰う権利がある。あるような気がする」

「何を言ってんだ」牛島は失笑した。「たわごと言わないで、そこをのけ。今度は俺が診療して貰うんだ」

「あんたも頭のネジの方か」老人はつめたく言って、すっくと立ち上った。「残念ながらこの仁で、十五人になる。あんたは明日やっておいで」

「明日？」牛島はぽかんとした顔付きになった。

「ここの規定なんだよ」佐介が牛島の袖を引き、待合室の貼紙を指差した。「診療は一日十五人に限定されているんだ」

渋川丈助はそのすきに皆の間を通り抜け、すっすっと奥の部屋に引込んで行った。牛島が規定を読み終えた時、老人の姿はもう見えなくなっていた。

「ばかにしてやがる！」牛島は奥の間に向って拳固をふり上げた。「なんだい。もったいぶりゃがって。あのヒゲ爺！」
「さあ、帰りましょうよ」曽我ランコは立ち上った。「十五人ときまっているなら、仕方がないじゃないの。でも、あのヒゲ爺さん、案外ヤブね。一ヵ月なんて、あたしも待ち切れないわ」
「わたくしだって待ち切れません」乃木七郎はにこやかに三人を見回した。「わたしは金を持たないんですが、わたしの診察費、どなたか立替えて置いて下さい」

24

二両連結の電車が、がたごとと小さな駅に入ってきて停止した。各扉からばらばらと人がはき出された。前の車両から四十がらみのでっぷり肥った食堂経営者、後の車両から色眼鏡をかけた三十四五の女高利貸がプラットホームに降り立ち、その二人は同時に相手を認め合って、あいさつを交した。
「久しぶりのいい天気ですな」
「ほんとに」女高利貸はちょっと**しな**をつくって答えた。
「ごみごみした町中に住んでると、時たまの郊外風景は、とても新鮮に感じられますわねえ」
二人は並んで改札口を出た。
五分経つと、次の電車が入ってきた。
前の車両から四十四五の痩せた菓子製造業者が降り、後の車両から三十前後の体格のいい運送業者が降りてきた。
運送屋が菓子製造業者を呼びとめて、にこにことあいさつをした。「やあ、いい天気だねえ」
菓子製造業者が近くの林や樹立（こだ）ちを指差した。「どうだい。樹々の緑が眼に沁みわたるようじゃないか」
「まったくですな」運送屋が相槌を打った。「仕事でトラックで走り回ってる時は、郊外なんか道ががたがたで、なんだいと思うけれどもね」
「人生とはそんなものだよ」
菓子製造業者が先に、それにつづいて運送屋が改札口を出た。
五分経って、また次の電車が入ってきた。
後尾の車両から、某大学教授と黒須院長がのそのそと、プラットホームに降りてきた。教授も院長に劣らず、つやつやと血色のいい顔をしていた。
「いつ来ても郊外はいいなあ」教授は院長をかえりみた。「人間も五十になると、自然の美しさがしみじみ判ってくるよ。君もなんだねえ、しょっちゅうこんな環境の中にいると、いくらか詩人的な心境にもなるだろう」

「そうでもありませんよ」院長は自分の頭をつるりと撫でた。「時たまやってくる人は、すぐに詩人になるらしいが、常住ここにいると、いろんなことがありましてねえ」
「そりゃそうかも知れないな」
教授は鼻眼鏡をちょいとずり上げ、威儀を正して改札口を通り抜けた。院長がそれにつづいた。院長の切符を受取ると、若い改札係ははさみをカチャカチャ鳴らしながら、詰所に戻って行った。院長は細長くて四角な包みを左に持ち換え、教授に追いついて肩をならべた。教授が訊ねた。
「ええと、今月は何人死んだかね？」
「残念ながら一人も」黒須院長はひょいと首をすくめて、恐縮の風情（ふぜい）を見せた。「先々月八十歳の林爺さんが、風呂場のタイルで辷って死んで以来、まだ誰も死んで呉れないです。どういうわけですか。わたしとしても、いろいろ心を砕いてはいるんですが――」
「心を砕いたって仕方がない」教授は渋い顔になった。
「そういう精神主義ではダメだ。在院者の回転率を高めるには、高めるだけの具体的措置を取らねばならん。君も就任以来、割に成績を上げたが、近頃はすこしたるんで来たんじゃないか」
「たるんでいるわけじゃありませんが」院長は弱ったような声を出した。「それに関連して、先生に御相談したいことがありまして」
「なんだね？」
「ち、ちかごろ在院者の一部に」院長はぎょろぎょろ周囲を見回した。「不逞（ふてい）の思想を持った奴が発生しまして――」
「不逞の思想？」
「つ、つまり、この連中の言動を観察していると、アカじゃなかろうかと思われる節がある」院長はせかせかとウィスキーの箱入り包みを右に持ちかえた。「連中と言っても、まだ少数ですが、放って置くとこれがだんだん拡がって、取りかえしのつかぬようなことにもなりかねない。わたしとしても、今後いろいろ手を打ってみるつもりですが、なにしろアカの対策というのは初めてのことなので、何か有効な措置があれば、先生の御意見を伺いたいと思いまして」
「アカが発生した？」教授はますます渋い顔になり、はき出すように言った。「それは大変だ」
「わたしも思い悩んでいるのです」院長は教授に身をすり寄せた。そのとたんにウィスキー箱が、教授の脇腹をぐいとこづいたので、教授は思わずギュッというような声を立てた。院長はあわててあやまった。「どうも失礼」
「痛いじゃないか」教授は唇をへの字に曲げた。「その包みは何だね？」
「へへ、ウィスキーです」院長は包みをまた左へ持ちかえた。「今日の午餐会（ごさんかい）に出そうと思いまして」
「ウィスキーで僕たちをごまかそうとするんじゃあるまいな」教授は疑わしげに眼を光ら

せた。
「いや、いや、かりそめにもそんなこと」院長はたいこもち的な動作で、ふたたび右掌で自分の禿頭をつるりと撫で上げた。「そんなことをわたしがたくらむわけがないですよ。和（なご）やかな月例午餐会を持ちたい、その誠心誠意だけです」
「泥鰌（どじょう）を殺すには酒を用いるからな」教授は皮肉な口をきいた。「院長は近頃在院者に同情を持ち始めたんじゃないか」
「飛んでもない」院長はあわてて掌を振った。「とんでもないことですよ。先生」
空は晴れていたけれども、赤土道はまだじとじととぬかるんでいた。ツバメが一羽、樹立ちの梢をかすめ、また道すれすれに飛んだ。その道の彼方に、やがて、夕陽養老院の屋根互やバルコニーが見えてきた。そ。のバルコニーにつづく院長室の扉のノブを、今しも食堂主の厚味のある掌が、ひねってぐいと押したところであった。
「おや。まだ誰も来ていない」食堂主はのっしのっしと院長室に足を踏み入れた。「するとわしたちが先着かな」
「黒須院長もいないのかしら」光線よけの色眼鏡を外（はず）しながら、女高利貸が言った。
「バルコニーに出てみない？」
「甲斐爺たちじゃないようだよ」その院長室の書類戸棚の中で、双生の胎児のようにちぢこまってよりそっていた二人の中で、煙爺がすこしあおざめてニラ爺にささやいた。
「女の声だよ」
「弱ったなあ」くらがりの中で、額から冷汗を滲（にじ）ませながら、ニラ爺はささやき返した。「木見婆さんかな」
「木見婆じゃないよ。声が若いよ」煙爺がささやいた。
「思い切って、飛び出して逃げるか」
「ねえ。バルコニーに出てみない」女高利貸がふたたび言った。「いい眺めよ」
「わしはここでいいですよ」食堂主はソファーにどっかと腰をおろした。「近頃また肥ってきたもんだから、ちょっと歩くとすぐにくたびれる。それに、御婦人の前でなんだが、この季節にはとかく股（また）ずれの傾向がありましてねえ」
「院長の声でもないらしいよ」煙爺はささやいた。「どうする。飛び出すか」
「ここに入って」とニラ爺。「もう一時間経ったかねえ」
「まだ三十分ぐらいだよ」
「すると今飛び出すと、百円取られるぜ」
「そうだねえ。百円取られるのもシャクだねえ」
「ほんまに俺、近頃取られてばかりいるのや」ニラ爺は悲しげにささやいた。「甲斐爺にも、おれ、二百円からの借金があるのや」
「しかし、ここに止ってると、海坊主が戻って来るかも知れないよ」
「そうやねえ。弱ったねえ」
「進退谷（きわ）まったねえ。どうする？」

その時、院長室の扉のノブが、ふたたびゴトゴトと鳴った。二人の爺さんは暗闇の中で、それぞれの姿勢でギュッと身体を固くした。扉が勢いよく開かれて、運送屋と菓子屋が入ってきた。そしてソファーの食堂主とあいさつを交した。

「やあ」

「やあ、やあ」

「また誰か入ってきたよ」煙爺が絶望的な声でささやいた。「二人のようだよ。困ったねえ」

「こんなとこに隠れたのはかるはずみやったねえ」ニラ爺は身体を小刻みに慄わせ、涙を瞼に滲ませていた。「どうしてこんなことを思い付いたか」

「思い付いたのはお前じゃないか」煙爺は小さな声できめつけた。「お前が思い付かなきゃ、こんなことになるわけないよ」

「お前だって賛成したやないか。あの時」ニラ爺もあおざめたまま小声で言い返した。「お前さえ反対すりゃ、こんなことにならん」

「ああ、院長と博士がやってくるわよ」バルコニーの上で女高利貸がかん高い声で叫んだ。

「院長の禿頭が、日光の反射でピカピカと光っている。まるで新しい銅貨みたいよ」

「どれ、どれ」

一番年若な運送屋が、元気のいい足どりでバルコニーに出て行った。野菜畠にはさまれた砂利道を、今院長と教授が何か語らいながら、玄関の方に歩いてくる。無帽の黒須院長の頭は、その角度によってキラリと日光を弾（はじ）き、またどんよりと曇ったりした。運送屋は両掌をメガホンの形にして、バルコニーから大声を出した。

「院長に博士。遅いぞう。かけ足イ！」

［やぶちゃん注：以下、一行空け。］

「さて」牛島康之がまぶしそうに空を見上げながら言った。「今日はどうしようかな。栗さん。お前はどうする。研究所に出勤するか？」

「しないよ」佐介も小手をかざして空を眺めた。「今日は養老院勤務だ」

「ああ、お前さんは隔日勤務だったな」牛島は忌々（いまいま）しげに爆音の方に顔を向けた。「じゃあ俺は、ロケ先に出かけることにするか。いい天気だからな。どうも今日の研究所出勤はヤバイような気がする」

空にはヘリコプターが一台、地上百米の高度を、不恰好なかたちで、爆音を立ててのろのろと動いていた。曽我ランコも乃木七郎もそれを見上げていた。高度が低いので、操縦者のかおかたちも眺められた。乃木七郎は卓上ピアノを両手で胸にかかえていた。いや、かかえさせられていた。その乃木七郎が言った。

「あんなところから、地上の人間どもを見おろすと、さだめし愉快でしょうねえ」

「こいつはどうする？」牛島は乃木を顎でしゃくった。

「ロケ先に連れて行くわけにも行かないし」

「僕があずかるよ」佐介は答えた。「身柄を託されているのは僕だ。あんたじゃない」

［やぶちゃん注：**以下、行空けが明らかに二行分ある。**］

焼け残り地区の木造ペンキ塗りの二階建て。そのてっぺんの飾り屋根の中から、明るい空気をななめに切って、つばめがしきりに出たり入ったりしていた。階上の白川研究所に、今日出勤しているのは、熊井照子と玉虫老人だけであった。須貝も牛島も、佐介も鴨志田も、その姿を見せていなかった。だから熊井照子は『所報』原稿整理の仕事をほったらかして、ミッキー・スピレインの『裁くのは俺だ』に没頭していたし、玉虫老人もスクラップつくりをさぼって、入れ歯を外してそれの掃除に専念していた。陽光の惰気が部屋に満ちあふれていた。熊井照子はふっと頁から眼を放して、不安げに部屋中を見回した。

「どうしたのかしら」彼女はいぶかしげに玉虫老人に話しかけた。「もう十一時だというのに、誰も出てこないなんて、なにか凶（わる）いことでもおこったのかしら」

王虫老人は返事をしなかった。老人は両眼をやや眇（すがめ）にして、義歯（いれば）の代赭色（たいしゃいろ）の人造歯ぐきを、小さなブラシでごしごしと熱心にみがいていた。熊井照子は腹立たしげに舌打ちをして呟（つぶ）いた。

「耳遠の爺さんにはかなわない。馬の耳に念仏だわ」

その時、壁の鳩時計から鳩が飛び出して、調子のいい声でつづけざまに十一声啼いた。老人はふとブラシの手を休めて時計を見上げ、落着かぬげにきょときょとと周囲を見た。

「どうしたんですかな。熊井さん」老人は心配そうな声を出した。「十一時だというのに、まだ誰も出勤して来ませんな。はて、何か凶（わる）いことでもおこったのか」

熊井照子はふんと言った顔付きで、返事をしなかった。そして机の下に手を入れて、ごそごそと靴下の具合を直した。スカートがめくれて、膝頭からすべすべした股のあたりまでがのぞけたので、玉虫老人の眼は急に一回り大きくなって、ものめずらしげに、熊井照子の手の動きや脚のかたちを眺め始めた。その視線に気付くと、彼女はあわててスカートをおろし、玉虫老人をにらみつけた。老人は首をすくめ、眼を元の大きさにして立ち上り、義歯掃除で汚れた水をとっ換えに、コップをささげ持ってとことこと部屋を出て行った。階段を降りる足音がした。階下の土地事務所ではソファーの上に、昨日と同じく中年の客が一人、紅茶をすすりながらしずかに煙草をくゆらしていた。玉虫老人の足音を聞きつけると、急に眼をするどくして、階段の方に顔を向けた。玉虫老人は無表情な顔で客の前を横切り、洗面所に水をあけ、ふたたびコップに新しい水を充たした。その背後からソファーの客が、低い押しつけるような声で、老人に話しかけた。

「爺さん。階上（うえ）の連中はどうしたんだね。今日はまだ姿を見せないようだが」

老人は返事をしなかった。相変らず表情のない顔で、新しい水をささげ持ち、とことこと部屋を横切り、そしてその姿は階段の登り口に消えた。足音が階段を登って行った。

「あの爺。かなつんぼか」

なんとなく得体（えたい）の知れないその客は、舌をタンと鳴らして立ち上った。ちょっ

と小首をかしげ、事務員たちの不審げな視線の中を、土地会社の赤塗り電話台の方へつかつかと歩み寄った。受話器をとり上げた。

［やぶちゃん注：ここで以前に須貝が疑った如く、階下の客の男は、実は白川研究所を見張っていることが判然とする。

次は一行空け。］

なんとなく得体の知れない人物たちは、ここだけでなく、あちこちの部屋の中にも、街頭にも、映両館にも、パチンコ屋にもいた。何と得体の知れない人物が近頃殖えてきたことだろう。きっとなにかが狂っているせいにちがいない。そいつらはうじょうじょと、駅の待合室にも、競輪場にも、公園の花壇にも、上水路の堤にも動いていた。上水の堤のは二人連れで、両者とも一見紳士風で、片方の紳士は胸に二眼のカメラを提（さ）げ、口にはチューインガムをしきりに噛んでいたし、も一人の紳士は鳥打帽子をかぶり、小型の胴乱を肩にかけていた。二人は肩をならべて、至極緩慢に歩いていた。胴乱紳士は時に小腰をかがめて、ありふれた雑草の葉をむしって、胴乱の中に大事そうに収めたりした。カメラ紳士の方は蓋をあけてファインダーをのぞき込み、上水路や土堤の樹々を写す真似などをしていた。上水路の幅は十米ぐらいで、その両岸から急斜面に堤がせり上っていた。道は堤の上に、すなわち水路をはさんで平行していた。斜面にはところどころ立札が立ち、『この流れは都民の上水道になる水ですから塵埃（じんあい）その他を投げ込まないで下さい。水道局』と書いてある。流れは碾茶羊羹（ひきちゃようかん）の色のようにねっとりと濁り、木の葉や屑を乗せてかなりの早さで動いていた。対岸の三十米ほど前方を、三人の男女がぶらぶらと歩いていた。その一人の栗山佐介の眼は、斜面に生えたさまざまの灌木（かんぼく）の、葉の形や枝ぶりなどをうろうろと物色していた。曽我ランコは佐介と肩を並べ、乃木七郎はすこし先を歩いていた。乃木は卓上ピアノを脇に抱き、吟遊詩人のように胸を張って、意気揚々と漫歩していた。「あれが接骨木（にわとこ）かな。ストップ」佐介は号令をかけた。乃木七郎は立ち止った。佐介はポケットかられいのメモ用手帳を取り出した。対岸の後方でも二人の紳士が同時に立ち止り、それぞれ写真のファインダーをあけたり、雑草の葉っぱを採集したりした。佐介は手帳に眼を近づけた。渋川接骨院の薬用植物図鑑からのメモがそこにある。「ええと、葉は対生し羽状複葉と。小葉は披針形にして縁辺に鋸歯（のこぎりば）を有すか。どうもあれらしいな」

［やぶちゃん注：さても、この最後のロケーションの「上水路の堤」「この流れは都民の上水道になる水ですから塵埃その他を投げ込まないで下さい。水道局」の注意書きのあるところというのは、東京に詳しい方なら場所が比定出来るのではないかと思う（栗山佐介の住所のそばとなる）。識者の御教授を乞うものである。

「うじょうじょ」のオノマトペイアは「うじゃうじゃ」と同じ。

「碾茶羊羹の色」鶯色。

「灌木」低木。概ね、通常成人の背の高さよりも低いものを称する。

「披針形」（ひしんけい）は先の尖った平たく細長い形（笹の葉のようなもの）の植物の葉の形について言う語。」

25

木見婆は大きな岡持を重そうにぶら下げて、調理室から廊下に出た。中央階段に足をかけたとたん、背後から呼びかける声がした。松木爺が両手をだらりと垂らして、階段の脇に立っている。

「木見婆さん。ニラ爺はどこにいるか、あんた知らんかね」

「知らないよ」木見婆は眼をきらりと光らせ、つっかかるように答えた。「あたしゃニラ爺さんの番人じゃないよ」「そんなにつんけんしなくてもいいじゃないか」松木爺は気勢をそがれて、にやりと笑った。「なにもあんたを番人だとは言ってない。知ってるか、知ってないか、ちょいと訊ねてみただけだよ」

「だからあたしゃ、知らないと答えたんだよ」木見婆は不興げに水洟（みずばな）をしゅんとすすった。「あたしゃもう行くよ。忙しいんだから」

「ニラ爺のやつ、どこに雲隠れしたのかなあ」松木爺は横目で岡持の方を見た。「何だね、それ。おいしそうな匂いがするが」

「あんたと関係ないわ。これ院長先生の食事！」

「へえ。院長はいっぺんにそんなに沢山食べるのか。ちょいと拝見」

松木爺は岡持へ手を伸ばそうとした。木見婆ははっと肥軀［やぶちゃん注：「ひく」。］をひいて、眼の色をたちまち険（けわ）しくした。

「よしてよ。ほんとに近頃の爺さんたちは、意地きたないったらありゃしない」

「なに。俺が意地きたない？」松木爺もむっとして眼を剝（む）いた。「なにもつまみ食いさせろとは、俺は言ってないぞ。見せろと言ってるだけだぞ」

「見せるのもおことわり！」

「何を言ってる！」松木爺は眼をつり上げた。「こう見えてもこの松木第五郎はだな、ニラ爺みたいな意地きたなとは違うぞ」

木見婆はぎょっと身体を固くして、一歩二歩後退した。松木爺はおっかぶせるように言葉をついだ。

「昨晩あんたはニラ爺に、いろんな食べ物を呉れたらしいじゃないか。御奇特なことだ。へへ、俺は何もかも知ってるぞ」

木見婆はぶよぶよした顔を硬化させたまま、黙って更（さら）に一歩後退した。それに応ずるように松木爺は大股に一歩踏み出した。

「俺はニラ爺とは違うから、何も呉れとは言わん！」松木爺は肩をそびやかして高圧的に出た。「その岡持の中を見せなさい！」

「厭らし！」

木見婆はふてくされて、岡持をがたんと階段の上に置き、そっぽを向いて舌打ちをした。松木爺は手を伸ばして岡持のふたをがたがたとあけた。
「おや、四つ五つ六つ。ウナギが六人前に、オムレツが六人前」松木爺はじろりと木見婆をにらんだ。「吸物も六人前。いくら海坊主が大食いでも、吸物六人前も飲むわけがないぞ。うわばみじゃあるまいし」
「お客さんの分も一緒だよ」木見婆は上眼使いに松木爺を見て、切なげな声を出した。「ニラ爺さん、何をべらべらしゃべったの？」
「いや、べらべらというほどじゃないが」松木爺は語調をやや柔かにした。「お客というのは、誰だね。お客は五人か？」
「経営者の方たち。経営者会議なのよ」木見婆は声をひそめた。「このこと、誰にも言わないでね。院側の行事のことをあんたたちにしゃべると、あたしゃあとで院長先生からこっぴどく叱られるからさ。お願い！」
「ふん。経営者会議か」松木爺は満足げにうなずいた。
「なるほどな。今日が会議か」
「他人に絶対に言わないでよ」と、木見婆はねんを押した。「ねえ。ニラ爺さんは、どんなことをしゃべったの。どんなことをよ」
「早く二階に行かないと、料理がさめてしまうよ」松木爺は質問をはぐらかした。「ふん。ウナギにオムレツが六人前、か」
「ニラ爺がしゃべったのは、あんだにだけ？」木見婆は顔をくしゃくしゃにして、岡持の柄を握った。「あんたにだけでしょうね」
「うん。ううん」松木爺はあいまいに首を動かした。「それについては、後刻じっくりと相談しよう」
「あんただけでしょうね」木見婆はおどおどとくり返した。「あたし、夜の八時まで、調理室にいるわ。さっきのこと、ほんとに誰にもしゃべらないでね。きっとよ」
木見婆はそして頬肉と額肉とを接近させ、眼を埋没させるような顔をして見せ、くるりとむこうを向き、手すりにすがりながら、力なく階段を登り始めた。力なげに見えたのは背後からだけで、木見婆は一歩ごとに歯ぎしりしながら、
「ニラ爺の奴。ニラ爺のやつ！」
とにくにくしげに呟（つぶや）いていた。その後ろ姿が踊り場に消えると、松木爺は身をひるがえして廊下を小走りにあるき、東寮の曲り角まで来た。その曲り角で、松木爺は向うから曲ってきた森爺と、あやうく正面から鉢あわせをするところであった。
「あぶないじゃないか」森爺がたたらを踏みながら口をとがらせてなじった。ニラ爺たちの姿をまだ発見出来ないものだから、森爺は少しいらだっていたのだ。「廊下の角を曲る時は走っちゃいけないと、かねがね注意されてることじゃないか」
「ごめん、ごめん」常に似合わず松木爺は素直にあやまった。「つい気が急（せ）いていたもんで」

「松爺さん」傍から甲斐爺が思いあまったように口を入れた。「ニラ爺さんの所在を知らないか」
「ニラ爺？」松木爺は二人の顔をじろじろと見くらべた。
「ニラ爺じゃなければ、煙爺でもいいんだ」森爺が言葉をそえた。一体あいつら、どこに隠れやがったのか。影も形も見当らぬ」
「かくれんぼをやってるのか」松木爺はすっかり呆れ果て、かつ腹も立てた。「何たることだ。ニラ爺のやつ！」
「まったく、何たることだ」
おしっこを怺（こら）える小児のように、森爺は両足で忙しく地だんだを踏んだ。
木見婆は岡持を両手で提（さ）げ、院長室の扉を脚でほとほとノックした。室内から黒須院長の声がした。
「はいれ！」
木見婆は岡持を床に置き、扉のノブを回した。院長卓を囲んで、食堂主、高利貸、菓子屋、教授、運送屋が、順々に、それぞれの姿勢で椅子に腰をおろしていた。院長はわざとらしく機嫌のいい声を出した。
「グラス六つ、持って来たか？」
「持って参りました」木見婆は岡持を卓のそばに運んだ。「料理は半分だけで、あとは直ぐ持って参ります」
「あとはゆっくりでいいよ」と院長はやさしく答えた。「料理は念入りにこさえたろうね」
「まさかあたしん店の残飯じゃあるまいな」食堂主が冗談を飛ばした。「わたしんちのなら、食い飽きてるよ」
「あれはみんな在院者に回してありますよ」一座の笑い声の中で、黒須院長は自分の額をポンと叩いた。「これは木見婆さんが腕によりをかけた、当院特別製の料理ですよ。木見婆さん。ウナギも焼いたね」
「はい」
木見婆は皿や椀を次々に卓上に並べ始めた。その器物のカチャカチャ音が、板戸のすき間を通して、書類戸棚の中にも入ってきた。ごちゃごちゃに積まれた古書類や記録の束の中に、埃をかぶってちぢこまっている煙爺が、そっとニラ爺の耳たぶに口を寄せてささやいた。
「ウナギだってよ」
「そうらしいねえ」ニラ爺の腹がグルグルと鳴った。「おれ、おなかがすこし空いてきた」
「おれもだ」
そして二老人はくらがりの中で、鼻をぴこぴことうごかした。板戸のすき間や節穴から、おいしそうな食べ物の匂いが、埃くさい空気の中に流れ入ってきたのだ。皿を並べ終ると、木見婆は院長の指示通りウィスキーの栓をぬいて、各自のグラスを充たして回りながら、柄にもない愛想を言った。
「こんなお婆さんのお酌ではお気に召しますまいがねえ」

「そりゃやはり若い女の方がいいね」運送屋が真面目な顔でグラスに后をつけた。「第一酒の味がちがうやね」
「じゃ若い女性でも雇い入れますかな」院長もグラスを手にしながら、すかさず口を入れた。「高峰秀子か島崎雪子みたいな美しいのをね。おい、木見婆さん。栗山書記はどこにいる？」
「栗山さんはまだ出勤して来られません」
「なに。まだ出勤して来ない？」院長の眉根がぐいとふくらんだ。「昨夜の呼出電報にも応じないし、今日も大切な会議だというのに、まだ出て来ない。一体何をしているんだろう。勤労意欲がないのかな。もしそうだとすれば、あいつはクビにするより他はないぞ」
「栗山書記って、あの頭の大きい、おかしげな男？」女高利貸がウナギをもごもご頬張りながら訊ねた。
「そうです。あんなのを雇い入れたのは、全くわたしの失敗だった」院長は演技的な大きな舌打ちをした。「いっそあれをクビにして、若い女秘書を雇い入れたいもんですな。皆さん、如何（いかが）でしょうか。女秘書は、隔日勤務でなく、常勤ですが、なにしろ女子のことですから、人件費という点では、あまり変りがないと思いますが」
「まあそれも、こちらでよく考えてみよう」と教授が渋い声で言った。「今日は俵医師はどうした？」
「只今当区は狂犬予防週間で」院長が答えた。「どうしても手が外（はず）せないと言って来ました」
「狂犬週間なら本業だから仕方がないが」菓子屋もグラスを舐（な）めた。「副業のこちらもあまりおろそかにして貰いたくないな」
「良く言い聞かせて置きましょう」そして院長は木見婆に目くばせをした。「木見婆さん。あの書棚から、会議録綴りを持ってきなさい。そしてあんたはもう下ってよろしい。適当な頃に次の料理を持ってくるように」
『書棚』という言葉が発音された時、書類戸棚の中の二老人はぎくっと身体をふるわせ、お互いを楯（たて）とするようにひしひしと寄りそい合った。しかし幸いにもそれは別の書棚のことであった。その書棚から会議録綴りをとり出し、院長の前に置くと、木見婆はぼたりと一礼して院長室を出て行った。
「なるほど。あの婆さんじゃ色気が全くないな」足音が遠のくと、食堂主が肥った身体をゆるがせて、にやにやと笑った。「院長もまだ独身だし、若い女秘書を欲しがる気持もよく判るよ。時に、この間の写真はどうしたい？」
「へ、へ、へ」と院長は照れくさげに笑った。「あれはちゃんとしまってありますよ」
「さあ、食べながらでもいいから、そろそろ会議を始めてはどうだね」教授が腕時計をちらと見て発言した。「僕は午後人に逢う予定があるんだ」
「ではそうしますか」院長はグラスを置いて、うかがうように一座を見回した。「では、今日の会議は、愉快に飲み食い、談笑裡にすすめたいと思います。栗山書記未参のため、記録はわたしがとることにしましょう。願わくは次回の経営者会議は、美しい女秘書によって記

録される、そういうことになりたいもんですなあ。わっはっはあ」
［やぶちゃん注：ここで俵医師は老人たちが疑った通り、驚くべきことに医師ではなく、獣医であったことが明かされる。
「ぼたり」のオノマトペイアはママ。］

「なに。経営者たちが集まっている？」滝川爺がぐいと膝を乗り出した。「院長室にか。どうしてそれが判った？」「木見婆をつかまえたんだ、階段のところで」松木爺は得意げに一座を見回した。「あの婆、大きな岡持ぶら提げてやがった。そこをつかまえて、俺はうまいこと誘導尋問をしてやったんだ」
「何人集まっている？」柿本爺が訊ねた。
「院長も入れて六人らしい。実際に見たわけじゃないが、岡持の中の料理は六人前だったから。いくら経営者でも、一人で二人前食べることはなかろう」
滝川爺はごそごそと立ち上って窓辺に行き、院長室のガラス窓を見上げた。いい天気だというのにその窓は固くとざされていた。
「会議は会議として」長老の遊佐爺が発言した。「ニラ爺はどうした。どこにいた？」
「それが見付からないんだよ」松木爺は面目なさそうに頭を垂れた。「ニラ爺は、煙爺、甲斐爺、森爺たちと、かくれんぼをやっているらしいんだ。オニの森爺と甲斐爺が、嘆いていたよ。影もかたちも見えないって」
「なに。かくれんぼだと？」遊佐爺は常にない犬声を立てて、白い眉毛をびくびく動かした。「昨晩あんなに言い聞かせてやったのに、もうかくれんぼだなんて、全く仕方のない爺さんだな。もすこし性根があるとにらんでいたが、わしの見込み違いだったかな。朽木は雕（ほ）るべからず。糞土の牆（かき）はぬるべからず。ニラ爺はついに糞土の牆であったかな」
「一体どこにもぐり込んだか」ニラ爺を発見出来なかった責めをごまかすように、松木爺は聞えよがしにひとりごとを言った。「森爺の話では、風呂場、便所にもいないし、豚小屋までしらべたけれど、いなかったらしい。平常はもそもそしてるくせに、かくれんぼなんかになると、うまく立ち回る。なにしろ困った爺さんだ」
「ふん。会議をやっているか」うるさ型の柿本爺が奥歯をかみしめながら、考え深そうに発言した。「遊佐爺さん。経営者が集会しているということだが、昨夜のあんたの発言のように、いろいろ山積した諸問題を、院長を抜きにして、いきなり経営者にぶっつけてみたらどうか。案外その方が解決が早いかも知れんぞ」
「いや、いや。それは問題だぞ」遊佐爺が答えた。「院長を抜きにして直接経営者と談合するということは、院長の懇請によって、こちらは一応撤回した。そういうことになっている。そのバランスを一挙にぶちこわすのは、まずいとわしは思う。やはりこういうことはフェアプレイで行こう」
「フェアプレイと言ったって」柿本爺が唇を曲げて抗議した。「それは両方とも紳士である場合にこそ成立するものだ。院長が果たして紳士であるかどうか――」

「判らんぞ」と窓辺の滝川爺が引き取った。「院長はおれたちにはうまいことを言うが、かげでは何を企んでいるか、判ったものではないぞ」
「そりゃそうかも知れないが」遊佐爺は一座を手で制した。「しかし一応相手を信頼しないことには、会見だの交渉だのは成立しない。だから今日、それをいっぺんにぶちこわしては、むしろわしらは不利な立場におち入ることになると思う。それにだな、いきなり経営者にぶつかっても、経営者たちがどんなことを考えているか、わしたちは判っていないから、やはり慎重に、一歩々々やっていく方がいい。せいてはことを仕損ずるとはこのことだ」
「あそこで今どんな話をしているか」滝川爺が窓から院長室の方を指差した。「そっと聞いてみたいもんだな。そうすれば、連中が何を考えているか、ハッキリ判るんだがな」
「遊佐爺さん。わしはあんたの考え方は、どうしても甘いと思う」柿本爺は直言した。「長老のあんたがそんなに甘いから、ニラ爺のような脱落者が出てくるんだ。一体ニラ爺はどこに行きゃがったんだろう」
「ほんまに弱ったねえ」
　書類戸棚の中に窮屈に閉じこめられ、身動きも出来ない状態で、ニラ爺が悲しげにささやいた。「この連中、しばらくこの部屋から、出て行きそうにもないねえ。おれ、泣きたくなってきた」
「泣いたら外に聞えるぞ」煙爺があわててニラ爺の股をつねった。「泣きたくなっただって。おれの方がよっぽど泣き出したいよ。お前のおかげで、こんなところに閉じこめられてさ」
「おれ、オシッコもしたくなったのや」ニラ爺は音を立てないように手を動かして、下腹を押えた。「どこかに便所ないか」
「戸棚の中に便所があってたまるか」煙爺が小さな声で叱りつけた。「オシッコなんてものは、その気になれば、一時間や二時間我慢出来ないわけはない。お互いに日本男児じゃないか。頼むから、辛抱してくれ。な、頼む」
［やぶちゃん注：「朽木は雕（ほ）るべからず。糞土の牆（かき）はぬるべからず」「朽木糞牆（きゅうぼくふんしょう）」「朽木糞土」「朽木之材（きゅうぼくのざい）」などと四字熟語でも言う。怠け者の譬え。手の施しようのない対象や、役に立たない無用な物を比喩するもの。掲げられたそれは逐語的には「腐った木には、到底、彫刻出来ないし、腐って崩れた土塀は、最早、上塗りが不能であるように、怠け者は教育し難いことを謂う。「朽木」は「枯れて腐った木」、「糞土の牆」は「腐ってぼろぼろになった土塀」の意。出典は「論語」の「公冶長（こうやちょう）」の以下である。

＊

宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可杇也、於予與何誅、子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行、於予與改是。
（宰予(さいよ)、晝、寢（い）ぬ。子曰く、「朽木（きうぼく）は雕（ゑ）るべからず、糞土の牆(かき)は杇（ぬ）るべからず。予に於いてか何ぞ誅（せ）めん。」と。子曰く、「始め吾（われ）人に於けるや、其の言を聽きて其の行（かう）を信ず。今、吾人に於けるや、其の

言を聴きて其の行を觀る。予に於てか是れ改たむ」と。）

＊

少し語注すると、「宰予」は宰我（予は名、我は字（あざな））。魯の生まれで孔門十哲の一人として弁舌が巧みであったが、ここで見るように「論語」ではたびたび孔子から叱責を受けているトリック・スターである。「晝寢ぬ」は勉強をせずに昼寝をしていたのである。「誅めん」反語。「朽木糞牆たるお前に対しては何を叱って意味があろうか、いや、処置なしだ」の意。それ以下は畳みかけて言ったもので、そういう宰予の為体（ていたらく）を例に「当初、私は人の言説を聴いて素直にその行動もそれに従うものと信じたものだった。しかし今は、他者の言説を聞いた時には、同時にその行動を観察するようになった。それはまさに宰予、お前のお蔭でかく改めたのである」の意。二重の叱咤がきつい。」

26

大きな調理台を前にして、午餐会の料理をあれこれ調製しながらも、木見婆の気持はいっこうに落着いていなかった。塩をつかもうとして砂糖壺に手をつっこんだり、つまみ食いのつもりで陶器の箸置きをガリッと噛み、あわててはき出してみたり、そんなことばかりしているので、調製はなかなかはかどらない。調理場にいるのは、木見婆ひとりであった。戸外はうらうらと天気がいいのに、調理場は完全な北向きだから、陽光のひとかけらもここには射し入って来ない。そのうすぐらい調理室で、木見婆は時折すっかり手元を留守にして、隅の米櫃（こめびつ）を横目でにらんだり、扉の方に素早い視線を走らせたりした。調理室の扉は、平常はかたく閉ざされているのに、今日ばかりはわざとなかば開かれているのだ。廊下に足音がする度に、木見婆はぽったりした瞼を引っぱり上げ、眼球をその方に、じろりと動かした。それは巣のすみにかくれて獲物を待つ蜘蛛（くも）の動作にも似ていた。扉を半開きにしてあるのは、ニラ爺が廊下を通りかかるのをつかまえるためであった。

「ほんとに、韮山（にらやま）伝七の糞爺！」

たびたび塩と間違うので、砂糖壺をかかえて手荒く戸棚に押し込みながら、木見婆は腹立たしげにつぶやいた。

「さんざんあたしからゆすって行ったくせに、それをまた他人にべらべらとしゃべるなんて！」

さっきの松木爺との会話以来、木見婆の気分はささくれ立ち、不安げに波打っていた。一体ニラ爺がどの程度までしゃべったのか、松木爺だけにしゃべったのか、松木爺以外の者にもしゃべったのか。それらの疑問が木見婆のいらいらに拍車をかけていた。ニラ爺が何もかもしゃべったとすれば、たちまちその噂は全寮に拡がるだろう。拡がったからには、それらはやがて院側の職員の耳にも入り、更（さら）に黒須院長の耳にも届くだろう。すると黒須院長はまっかになって激怒し、木見婆を呼びつけて大声叱咤（しった）するだろう。その想像だけでも木見婆はぞっと身慄いが出る。三十も歳下の院長を、木見婆はひどく怖がってい

たのだ。［やぶちゃん注：「大声叱咤」「たいせいしった」。］
「ほんとにニラ爺の奴！」胡瓜（きゅうり）を束にしてゴシゴシ刻みながら、木見婆はふたたび押え切れずにつぶやいた。「早くとっつかまえて、きゅうきゅう絞り上げて、口止めしなくっちゃ。べらべらしゃべり回られては、あたしの身の破滅じゃないか。院長がかんかんに怒って巡査を呼んで来たら、あたしはどうしたらいいんだろう」
木見婆は庖丁（ほうちょう）の手をハッと止め、顔を扉の方にぐいと振り向けた。廊下の方で忍びやかな足音が聞えたからだ。そして半開きの扉の間に、二つの皺（しわ）だらけの顔がぬっとあらわれた。それは木見婆の予期待望したニラ爺の顔でなく、西寮の森爺と甲斐爺の顔であった。その顔のひとつが猫撫で声で口を開いた。
「木見婆さん。入ってもいいかい？」
「入らせとくれよ」も一つの顔が言葉をそえた。「ちょっとでいいからさ」
「何の用事があるんだい」木見婆はつっけんどんに答えて、庖丁の背でまな板をとんと叩いた。「ここは院長先生の命令で、立入禁止、オフ・リミットになってんだよ。知ってるだろ」
「そりゃ知ってるけどさ」と森爺がやや哀願的に言った。「ちょっとでいいから、頼みますよ」
「立入りを禁止するなんて、水臭いじゃないか」と甲斐爺。「先代の院長の時分は、俺たち、ここに自由に出入り出来たよ。木見婆さんだって、知ってる筈じゃないか。それを今更、立入禁止だなんて――」
「何言ってんだよ。富士のお山だって、立入禁止になる世の中だよ。第一男が、用事もないのに調理室に出入りするなんて、間違いの元だよ。それとも何か用事でもあると言うのかい」
森爺と甲斐爺は顔をつき合わせて、何かこそこそと相談をした。そして森爺が二人を代表して、手を揉（も）みながら口を切った。
「実はね、ニラ爺のことだけどね、まさか木見婆さんは……」
「ああ。ニラ爺！」
木見婆はとたんに絶望して、両手を宙に上げ、傍の小椅子にくたくたと腰をおろした。小椅子はその重さに耐えかねて、ギギッときしんだ。木見婆は両掌で顔をおおい、ふてくされた声を出した。
「入りたけりゃ入んな。ほんとにいけすかない爺たちだよ！」
森爺と甲斐爺はびっくりしたように、顔を見合わせた。木見婆の態度があまりにも急変したからだ。次の瞬間、森爺はにやりと顔をほころばせ、甲斐爺の耳に口を近づけた。「やはり、ニラ爺、ここにかくれてたんだよ。木見婆さんの態度で判るよ」
「こんなところにかくれるなんて、ずるいねえ」甲斐爺はささやき返した。「さあ、探そうか」
二老人は爪さき立って、そろそろと調理室に歩み入った。甲斐爺が扉をしめた。それから二人は調理室のあちこちを歩き回り、棚をあけたり、調理台の下をのぞき込んだり、いろいろなことをした。しかしニラ爺の姿はどこにも見当らなかった。小椅子に腰かけた木見婆は、

顔をおおった両掌の指の股から、二老人の動作をじろじろと観察していた。しかし木見婆の予期に反して、二老人は棚や引出しをゴトゴトとあけたりしめたりするだけで、つまみ食いをしたり食物をポケットにくすねたり、そんなことは一切やらないようなので、木見婆はついに掌を顔から引き剝がし、いぶかしげな声を出した。

「あんたたち、一体なにをしてんだね？」

「探してるんだよ」

「探してるって、何をさ」

「ニラ爺さんだよ」甲斐爺が腰を伸ばして、不審そうに木見婆を見た。一体あの爺さんたちをどこにかくしたんだい？」

「ニラ爺さんたち？」木見婆は思わず大声を出した。「どこにかくしただって？」

「そうだよ」森爺も腰を伸ばして、天井を見上げた。「まさか、天井裏にもぐり込んでやしないだろうな」

「何故ニラ爺さんたちが、天井にもぐり込むわけがあるの？」木見婆は椅子をギイと鳴らして立ち上った。「大掃除はもう一ヵ月も前に済んだじゃないか」

「誰が大掃除だと言った」甲斐爺は失笑した。「大掃除なんかであるものか。かくれんぼだよ」

「かくれんぼ？」木見婆はふたたび大声を出した。「あんたたちは、かくれんぼをやってんのかい」

「そうだよ。かくれんぼをやっては悪いのか？」

「ニラ爺さんたちがここにかくれるわけがないじゃないか！」すっかり事情が判ったので、木見婆は元気を取り戻し、かつ大いに立腹してじだんだを踏んだ。「いい歳をして、かくれんぼだなんて。粋狂（すいきょう）も休み休みにして頂戴よ！」

「でも、一時間内に探し出さねば、百円とられるんだよ」甲斐爺が口をとがらせた。一時間を過ぎると、二十分毎に五十円ずつ加算されるんだ。たまった話か」

「かくれんぼをやりたかったら、外でやっとくれ！」木見婆はなおもつづけてじだんだを踏み、その振動で胡瓜（きゅうり）が一本、調理台からころころと床にころげ落ちた。「ここは立入禁止だよ。院長先生に言いつけるわよ。こんなところにニラ爺さんをかくすわけが、あたしにあるとでも言うの」

「だって、さっきニラ爺さんの名を出したら」森爺がなおもうたがわしげな声を出した。「とたんにあんたはへたへたと、元気がなくなったじゃないか。だからニラ爺がいると、わしらは思ったんだ」

「そうだ。そうだ」甲斐爺が冷蔵庫の把手（とって）に手をかけた。「この中かも知れないな」

「そこはムリだろう」と森爺が手で制した。「いくらニラ爺の身体が小さくても、そこには這入れないよ。第一そこだったら、ニラに煙はたちまち冷凍人間になっちまう」

「へたへたとなろうと、むくむくとなろうと、あたしの勝手だよ」木見婆は憤然ときめつけ

て、床（ゆか）から胡瓜を拾い上げた。「あたしもちょっとニラ爺さんに用事があるんだよ。ニラ爺さんを見付けたら、そう言っときな。あたしがカンカンになってるってね。あのおしゃべり爺！」

「ここにもいないのか」未練そうに冷蔵庫の把手から手を放しながら、甲斐爺は吐息をついた。「ここにもいないとすれば、あいつら、どこにもぐり込んでいやがるのか。メーターがどんどん上るじゃないか。困った。困ったなあ」

「困ったなあ」書類戸棚の中で、ニラ爺が何度目かの切なげな嘆息をもらした。「ほんとに進退谷（きわ）まった」

煙爺はそれに答えず、黙然と膝を抱き、頭をしょんぼりと垂れていた。戸棚の中で、戸板の隙間や節穴から入る光線は、縞（しま）や筒となり、内部をぼうと明るくしていた。そこに一尺ほどの高さにしきつめられているのは、よれよれの古記録や古書類のたぐいであった。それから蒸れたようなかびのにおいが立ちのぼり、紙魚（しみ）かがちょろちょろと這い回っている。ニラ爺に煙爺は、それらの堆積を座蒲団がわりにして、木乃伊（みいら）の如くちょこなんとちぢこまり、苦しそうにまた憂鬱そうに眉根を寄せていた。扉の外から隙間や節穴を通して、器物のカチャカチャ触れる音や咀嚼（そしゃく）音、旨そうなものの匂いなどが、遠慮なく侵入してくるのだ。煙爺の下腹がグルルと音を立てた。

「栗山書記がまだ出て参りませんので、細部までは行き届きませんでしたが、以上が大体の今月の報告です」黒須院長は帳簿をぱたりと閉じ、一座をにこやかに見回しながら、グラスに手を伸ばした。「今月だけで見ると、あまり成績が上らないように思われるかも知れませんが、まあ当院のような事業は、いわば継続事業とでも称すべきものですから、経営者側におかれましても、長い目で見ていただきたいと思いますな」

沈黙が来た。院長卓をかこんだ六人の男女は、そのしばらくの沈黙を、しきりと箸を動かし、またグラスを口に持って行ったりした。報告を検討するというより、咀嚼や玩味（がんみ）の方に忙がしい風なので、院長はほっとした表情でグラスを卓へ戻し、大きなハンカチを取り出してごしごしと額の汗を拭いた。陽光の加減で、室内の温度もかなり上昇していたのだ。

「これ、ピチピチしていて、おいしいわね」女高利貸がオムレツにつけ合わせた桃色トマトの一片を箸でつまみ上げた。「これ、当院で採れたの？」

「そうです」院長は莞爾（かんじ）としてうなずいた。「畠にしてみて初めて判ったんですが、ここらは実に地味（ちみ）が肥えていましてねえ、野菜栽培（さいばい）にはまったく好適の土地でしたよ」

「一年前の院長の英断が当ったというわけだね」酔いで額をうすあかくした食堂主が、同じくトマトをつまみながら口を入れた。「芝生を畠に一挙に改変するなんて、なかなかいい着眼だったよ。引っ剝（ぱ）がしたあの芝生は、いくらで売れたっけ」

「あれは上質の高麗芝（こうらいしば）でしたから」院長は帳簿をぺらぺらとめくった。フ兄えと、一坪当り百八十円でした。収入はちゃんと別途会計に繰り入れてあります」

「芝屋に売らないで、直接需要者に売ったら、もっと高値でさばけただろうねえ」運送屋が残念そうに言った。「今高麗芝の上等は、二百五十円から三百円してるよ」
「売り惜しむと時期外（はず）れになるんでねえ」と院長は弁解した。「芝生も植込みの時期があるんですよ。そこを外すと、値段もぐんとたたかれるんだ」
「で、在院者たちは」菓子屋が言った。「畠仕事に喜んで精を出しているかね。不平不満の向きも少しはあると聞いたが」
「まあどうにかやっています」院長もトマトをつまんで、べろりと口中に放り込んだ。「輪番制ですから、大した負担にはならないんですよ。しかし一部には、働いただけの報酬をよこせという声もありますが」
「今のところは無報酬というわけだね」
「そうです。園内の栽培物は、結局在院者の口に入るんですからな。それにわたしはかねがね、在院者に向って、適当な労働は長寿の秘訣だと言い聞かしてある。まったく畠仕事というやつは健康なものですからねえ」
「長寿の秘訣もいいけれど」教授がグラスを乾して口を出した。「皆が長寿を保ったら、当院としては困るじゃないか。さっきの報告によれば、今月も先月も死亡者は一人も出ていない。二ヵ月間一人も死なないなんて、当院始まってのことだよ。こんなに回転率が悪くては、とても経営は成り立たないぜ」
「そのこともわたしはいろいろ考えておりますが」院長はごまかすようにパセリをつまんでがしがしと噛んだ。「近頃老人がなかなか死なないということは、当院だけのことでなく、世界一般、日本人全般のことでして、現に戦前にくらべると、日本人の平均寿命はぐんと伸びている。これひとえに、予防医学の発達普及、栄養剤の進歩、抗生物質の発見、生活水準の復帰、その他のいろんな原因によって、寿命がぐんぐんと伸びました。だから当院だけを問題にされると、院長の立場としても困るんですがね」
「しかし経営が成立しなきゃ、元も子もないじゃないか。僕らは慈善事業をやっているんじゃないからね」教授は気取った手付きで、鼻眼鏡の位置を正した。「どうにかしてそこを調整する必要がある。そうでないと僕は経営から手を引かざるを得ない」
「わたしも」
「おれも」
「僕も」
「わたしもよ」
残る四人が異口同音に唱和したので、黒須院長はいささか狼狽の気配を示し、またハンカチで額をごしごし拭った。
「入所の資格年齢を、すこし引き上げてはどうですか」肥った食堂主がオムレツを引っくり返しながら提案した。「入所年齢が六十歳、払込金額が十万円。これで七十も八十も生き延びられては、とてもやっては行けませんやね。どうです。入所年齢を六十五歳ぐらいに引き上げては？」

「いっそのこと、七十歳に引き上げたらどうだね」と菓子屋。
「いや七十歳だと集まりが悪くなるだろう」と運送屋。
「空き人員に対して、入所希望者数が下回ることは、経営上面白くないよ」
「婆さんの入所を許可したら」と菓子屋。「希望者数が下回ることはないだろう」
「婆さんはダメだよ」と食堂主がむちむちと肥った手を振った。「婆さんの入所を許可すると、爺さんたちが張り切って、ボルモン分泌の機能を回復して、ますます長生きになってしまうよ。折角生命力が尽き果てる方向にむかっているのに、そんな刺戟を与えて逆行させる手はないよ」
「爺さんだけのことでなく、婆さんという奴はまったく長生きするよ」と運送屋。「女は男よりたしかに十年は長生きする。女って奴は図々しいからな」
「図々しくってお気の毒さま」女金貸が身体をくねくねさせて拗（す）ねた。「どうせ女は図々しいわよ」
「ごめん。ごめん」運送屋は頭に手をやってあやまった。「おれ、一般的な開題として発言したんだよ。気に障ったらあやまるよ」
「ではやはり中（なか）をとって、暫定的に六十五歳にしますか」
教授がぐるぐると一座を見回した。「異存ございませんね。では満場一致で、入所資格年齢の規約改正が成立しました」
黒須院長は大急ぎで会議録を開き、規約改正の件を記入した。
「今、在院者は何人でしたかね」女金貸が院長に訊ねた。
「ええ。九十九名です」
「九十九名。半端（はんぱ）な数なのね。もうすこし詰まらないの？」
「ええ、それはとても！」院長は、大げさに掌を振った。
「わたしが着任した時は総数六十六名。つまり一部屋に二名宛でしたが、それを無理して三人一部屋にこぎつけた。人員の五割増しですな。在院者の猛反対を押し切って、わたしがこの企画を敢行し成功したことは、皆さんの記憶にも新しいことと思います」
院長は鼻翼をうごめかして、得意げに一座を見回した。
「そういう経緯（いきさつ）でありますからして、この際一部屋の収容人員を殖やすことは、現在の段附では先ず無理でしょうな。強行すると、かえって在院者の気持を刺戟して、まずいことになるでしょう。現に在院者の一部から、寮舎増築の要求も出ています」
「寮舎増築？」菓子屋が眼を剝（む）いた。「そんな無茶な！」
「だからわたしが押えてあるのです」
「一部屋三人というと、一人当り二畳ね」と女金貸が言った。「二畳あれば充分じゃない？爺さんはしなびているから、体積や表面積が小さいし、二畳でも広過ぎるくらいだわ。都立の養老院ではどうなってるの？」
「板橋養老院では、目下のところ、一・一畳です」院長は言いにくそうに発言した。「もっとも将来は、一・五畳にまで拡げる予定だとのことですが」

「じゃ、うちも一・五畳にしたらどう?」女金貸は食い下った。「二畳なんてぜいたく千万よ」

「将来は知らず、現在の段階では無理です」院長は頑張った。女金貸の言い分を入れて、増員を断行する自信が院長になかったのだ。「折角今のところ、一部の不良老年をのぞいて在院者の大部分は、わたしをすっかり信頼し、かつ心服している。これは大切なことですからな。院内行政は在院者の信頼なくしては出来ません。わたしが在院者の信頼をなくすと、かえってあなた方の損になりますよ。わたしの立場にもなってみて下さい」

「それもそうだな」教授がグラスをなめながら、ややおだやかな口を利いた。「院長としては、あくまで在院者の味方だというゼスチュアを見せて置く必要があるだろうな」「そうです。そうです」院長は理解者を得て、喜ばしげに合点々々をした。「そこらのかね合いややりくりが、とてもむつかしいのです」

「我が国の総理大臣、今の総理や先代の総理大臣、あの人たちのやり口を二匿徹底的に研究してみるんだな。なあ、院長」そして教授が空のグラスをにゅっと差出したので、院長はそれにウィスキーをどくどくと注いでやった。「ことに先代の総理大臣は、すっかり国民の代表であり味方であるようなふりをしながら、実に巧みに外国にまるまる奉仕したからな。あの巧妙な手口を是非院長も学ばんけりゃならんよ」

「そうです。そうします」

総理大臣になぞらえられて、院長はすっかりいい気持になり、にこにこしながら自分もグラスを唇に持って行った。教授は続けた。

「とにかく何かをやろうとする場合、考えたりためらったりすることなく、先ず事実をつくってしまうんだ。それが肝要だ。いわゆる既成事実というやつだね。既成事実さえ出来れば、理屈や弁解はあとからどうにでもつくもんだ。自衛隊なんかがその一等好い例だね。その点において、一部屋三人の既成事実を強引（ごういん）につくったのは、これはまったく院長の手腕であり功績だった」

「それなら更（さら）に進めて」と女金貸。「一部屋四人の既成事実をつくったらどう?」

「それはやはりかえってまずい」と食堂主が院長の肩を持った。「そうすれば、院長は在院者の味方でなく、我々の手先だということが、ばれてしまいはしませんか」

「そうです。そうです」院長はますますにこにこしながら、自分のグラスに液体を充たした。「在院者たちは実に敏感で、猜疑（さいぎ）の念に富んでいますからねえ。うっかりしたことは出来ませんよ」

「と言って、在院者たちに感傷的な同情を持ってはいけないよ。事業に感傷は禁物だ」教授が、釘をさした。「近来学問の発達によって、有機物と無機物の差がだんだんなくなって来た。科学は有機物をも合成出来る方向に進みつつある。生命だって蛋白質（たんぱくしつ）の配列によることが判ってきたのだ。だから遠からず生命も合成されるようになるだろう。すなわち現今にあっては人間は物質だ。爺さんというのは、老朽した物質にほかならん。つまり老朽物質以外のものとして老人を考えてはならないのだ。その点において、院長はまだ

若いから、老人に対して甘い考えを持っているんじゃないかね。あいつらは単に朽ち果てて行く物質に過ぎないのだよ。人間だと考えるからいけない。人間なんていう特別のものは、もはやこの宇宙には存在しないんだ」
「そう、そうです」院長はへどもどしながら答えた。「わ、わたしも大体そういう風（ふう）に、考えてはいるんですが――」
「老人は老朽物質だ。と同時に、我々は現在生動しているところの動物だ」教授の口調はだんだん講義風になってきた。「我々自身が物質であるという認識の上に立ってのみ、我々は老人を老朽物質として眺め得る。これが原子時代における新しい視角であり理念なのだ。夕陽養老院の経営もその理念の上に立てられるべきだ。いいかね、院長。僕も物質だが、君も物質だよ。物質以外の何ものでもないよ」
「わたしもだ」
「おれも」
「僕も」
「あたしも物質よ」
面々は遅れじとそれぞれ宣言した。そして院長を含む六人の物質は、お互いに顔を見合わせ、何となくにやりと笑み交し、何となくそろってグラスを取り上げた。書類戸棚の中でニラ爺が煙爺にささやきかけた。
「むつかしい話をしてるねえ。まだ終らんのかなあ」
空腹に比例して、耳が冴えてくるのだ。聴覚のみならず視覚や触覚や嗅覚も、しだいにするどくなってくる傾向にあった。二老人はひしとちぢこまったまま、外界の気配に感覚をとぎ澄ましていた。節穴からグラスのカチリと触れ合う音と共に、面々の声が流れ入ってきた。
「乾杯」
「乾杯」
「乾杯」
「只今の人開物質説には感服しましたな」運送屋が童顔をほころばせて教授に言った。「物質。まったくそうですな。眼からウロコが落ちたような気がしましたよ」
「わたしも昨日、街で飯を食いながら、そんなことを考えましたな」二本目のウィスキー角瓶の栓を抜きながら、院長が言った。「小さな鰻（うなぎ）屋でしたが、その調理場の傍の小部屋に、小柄な婆さんが縫物か何かしていた。その後ろ姿を見て、ああこの婆さんは死ぬために生きている、そういう感じがわたしの胸を強く打ったのです。だから我々壮者は、あらゆる手を尽して、老いたる者を死なしめて上げなくてはならない。死ぬということが彼等の生の目的ですからね。そうすることが、わたしたち壮者の責務であり、義務というものです。そうわたしは考える」
「老人というものは」と菓子屋。「死ぬために生きているのか？」
「そうです」院長は得々として大きくうなずいた。「子供は何のために生きているか。若者になるために生きている。その若者は大人になるために生きている。それと同じことですよ」

「その論法で行くと――」運送屋が面白くなさそうに、口をもごもごさせて言った。「おれたちは、爺さんになるために、生きているのかね？」

「するとあたしは」女金貸も不快そうに口を入れた。「婆さんになるために生きてるとでもいうの？」

「いや、それは」論理の盲点をつかれ、院長はへどもどして、ウィスキーの小量を卓にこぼした。「わ、わたしたちは違う。違うような気がする。わたしはただ、鰻屋の婆さんを見た時、そんなことを感じたと申し上げたかっただけです。実際あそこの鰻はおいしゅうござんしたなあ。アッハッハア」

「抽象的な話はそれくらいにして」教授は忙しげに袖をまくり、腕時計を一瞥（いちべつ）した。「今後の経営の具体的方針に、そろそろ入ろうではありませんか。今の状態では、財政はジリ貧になる一方だ。強力な政策によって、打開策を講じなくてはならないと僕は思う」

「そうです。そうです」

「お互いに忙しい身体であるからして」教授は重々しく言った。「進行もてきぱきと願いましょう。院長。もう一杯、ウィスキーを呉れえ」

［やぶちゃん注：「富士のお山だって、立入禁止になる世の中だよ」種々調べて見たが、本作初出（『群像』昭和二九（一九五四）年八月号から翌年七月号連載）以前に富士山が全面入山禁止となった事実は見当たらない。充分な計画や装備がされていない夏山期間以外の富士登山は禁止とされている（但し、法的規制ではない）。但し、この頃から、恐らくは、富士の登山に最適な夏山期間（一般的に本邦の登山総体には夏季登山という認識があり、概ね七月上旬から九月上旬を指す）外の、高高度であるために登山用の重装備と熟練した登山技術を持たないと極めて危険な厳冬期（富士の場合は概ね十二月後半から三月一杯）は、仮に経験者であってさえも山頂は目指すべきではないと山屋の間でも常識として認識されており（昨年二〇一九年十二月一日からは十二月一日から三月三十一日までの期間の富士山の三千メートル以上の登山では登山届が義務化されている）、そうした保全認識や入山規制及び立入禁止区域の指定などを、木見婆さんは山登りという境界や占有利権者がいないはずの自然の日本一の「富士のお山だって」「立入禁止」という謂いとなったものであろう。富士演習場の米軍摂取は場所が場所で、それを謂っているというのは無理がある。

「じだんだを踏んだ」「地団太」の意味は怒ったり悔しがったりして、激しく足を踏み鳴らすこと。「地団太」「地団駄」などと漢字を当てるが、本来は、鍛冶に用いる足で踏んで送風する方式の大きな鞴（ふいご）を指す「地蹈鞴（じたたら）」の音変化で、転じて、怒ったり悔しがったりして、足で地を何回も踏みつけることを言うようになった。

「進退谷（きわ）まった」この「谷」は動詞で「窮（きわ）まる・行き詰まる」の意で、流れを遡って谷にぶつかってしまえば、それ以上進めずに窮まってしまうことから、後へも先へも行けぬ意となったもの。原拠は「詩経」の「大雅」に所収する「桑柔」という治世の乱れを嘆く詩篇の一節、「人亦有言　進退維谷」（人　亦た言へること有り／進退　維（こ）れ谷（きは）まれり）に基づく。

「先代の総理大臣」吉田茂。第五次吉田内閣は昭和二八（一九五三）年五月二十一日から昭和二九（一九五四）年十二月十日であるが、第一次（昭和二三（一九四八）年十月十五日就任）から連続しており、通算二千六百十六日も在任した。本章の初出は既に昭和三〇（一九五五）年になってからのものと推定される。

「自衛隊なんかがその一等好い例だね」昭和二九（一九五四）年七月一日、吉田茂は保安庁と保安隊を防衛庁と自衛隊に改組させ、野党が自衛隊は軍隊であるとして違憲と追及した際には彼は「軍隊という定義にもよりますが、これにいわゆる戦力がないことは明らかであります」と答弁している（「自衛隊法」及び「防衛庁設置法」の公布は同年六月九日で、七月一日は両法の施行日）。」

27

流れは相変らず碾茶色（ひきちゃいろ）にねっとりと濁り、塵芥や木片をのせて、かなりの早さで下流へ下流へと動いていた。その上水路の堤の急斜面を、栗山佐介は腰をひくくかがめ、斜面の立木の枝や草をつかみながら、用心深く降り始めた。昨夜半まで降りつづいた雨のために、草や地面はまだ濡れていた。濡れて辷りやすくなっていた。靴が辷るので、いい足場をえらぶ必要があった。

「大丈夫？」堤の上から曽我ランコが声をかけた。「靴を脱いだらどうなの。辷るとまた膝をいためるわよ」

「大丈夫だよ」佐介は堤上を見上げてわらった。「軍隊じゃもっともっと、危いことをやった」

曽我ランコから四五間［やぶちゃん注：約七・三〇～八・一〇メートル。］離れた場所に、乃木七郎は立っていた。小腰をかがめては石を拾い、ちょいと小首をかしげ、対岸に生えたアカシヤの木にねらいをつけた。石は乃木七郎の手を離れて勢いよく飛んだ。石はアカシヤの幹にあやまたずに命中し、急斜面を水路にむかってころころところがり落ちた。小さな水しぶきをあげて石はたちまち見えなくなった。

「ふん。何だっけなあ。ええ。何だったかなあ」

乃木七郎は、ひどい頭痛をこらえるような表情になり、左手に抱いた卓上ピアノをいらだたしげにゆすぶった。石を握ってねらいをつける、その手や肩や身体全体の感じ、それがうしなわれた記憶の中から、しきりに彼に何かを呼びかけて来ようとするのだ。もう一歩踏み込むと何もかも判りそうなのだが、その一歩がどうしても踏み込めない。事実頭の芯もしんしんと痛み始めていた。乃木七郎は再び腰をかがめて石を拾い、双の眼玉を中心に寄せて、ふたたび対岸のアカシヤにねらいをつけた。栗山佐介はあぶなっかしい腰つきで、斜面の四分の一ほどを降りた。

「大丈夫？　辷るとたいへんよ」

曽我ランコはそう言いながら、そこらから棒きれを拾い、板裏草履をぬいではだしになっ

た。はだしのまま棒を支えにして、彼女自らも佐介を追って斜面をそろそろと降り始めた。乃木七郎の石がまた空気をするどく切って、対岸に飛んだ。石はアカシヤの幹に見事にぶっつかり、カーンといい音を立てた。草を摑(つか)んだ不安定な姿勢で栗山佐介は顔を上げ、アカシヤの方に視線をむけてつぶやいた。

「いいコントロールだな。あんな奴にねらわれちゃたまらない」

「辷りやすいわねえ」用心深くのろのろと下方に移動しながら、曽我ランコがあぶなげな声を出した。「はだしでもツルツルするんだから、靴穿（は）きは用心した方がいいわよ」

「靴よりはだしの方が辷るんだ」佐介はやや不機嫌な声を出し、曽我ランコを見上げた。用事もないのにあぶない斜面を降りてくるランコに、なにか忌々（いまいま）しさを感じたのだ。それに乃木七郎をひとりに放置しておくことの不用心さもあった。「ダメだよ。君は降りて来ちゃいけないったら。辷り落ちたらどうするんだ。ここに落っこちたら、もう絶対にたすからないよ」

「あたしは大丈夫よ」曽我ランコは不安定な姿勢でせせらわらった。「わたしは小さい頃から、冒険ごっこが大好きだったんだもの」

石が又しても対岸へ飛んだ。五十米ほど上流にかかった木橋を、二人の男が急ぎ足で渡り終え、土堤上の小径（こみち）をこちらに近づきつつあった。一人の男はカメラを肩から提げていたが、もはや口にチューインガムは嚙んでいなかった。もう一人の男は小型胴乱を小脇にかかえ、どういうつもりか鳥打帽子を前後さかさまにかぶっていた。

曽我ランコはさらに下方に移動して、栗山佐介の地点に近づいた。佐介はさっきと同じ姿勢で、しかし何かまぶしげな眼付きになって、そのランコの姿をぼんやり見上げていた。姿勢の不安定さのために、彼女の若々しい肉体の輪郭が、スラックスの線に露わに出ていたのだ。佐介のその視線に気付くと、曽我ランコは急にとがめる眼つきになった。

「何見てるの。接骨木（にわとこ）はとらないの？」

「とるよ。今一休みしているところだ」佐介はあわてて視線を水路の方に向けた。接骨木は佐介の地点から更に三米ばかり下方に、その枝をひろげていた。そこに至る斜面は、今まで降りてきた斜面より、ずっと急になっている。その急斜のかたむきを佐介は眼で計って見た。

「さあ。降りるとすればここからかな」

「ずいぶん急ね」佐介の地点まで降りてきた曽我ランコは、その急斜をたしかめて二の足を踏んだらしかった。

「あたし、ここにつかまって、この棒を出したげるから、それにつかまって降りたらどう？」

「そうしようかな」

佐介は亀のように斜面に貼りついた。ランコは右掌で紅葉の細い根っこを握りしめ、左手につかんだ棒ぎれを佐介の方にぐっとさし伸ばした。佐介はその棒の端をつかみ、あぶなげな足どりを斜面に踏み入れた。靴がずるずると五寸ばかりすべった。佐介は棒をつかむ掌に、ぐっと力を入れた。曽我ランコも顔を紅潮させ、ふといぶかしげな顔になって、土堤道をななめにふり仰いだ。いそがしく乱れた足音が聞えたからだ。乃木七郎は悠然と五つ目の石を

拾い上げた。その背に二人の男の足音が殺到した。
「さあ、逃げるんだ」
カメラ男がはあはあと呼吸をはずませ、そう言いながら乃木七郎の右手に自分の腕をからませた。
「早く。早く。あいつらが登って来ないうちに！」
胴乱男が乃木の左方に回って、同じく腕をからませようとした。ところが乃木の左腕は卓上ピアノを抱いているので、白い鍵盤はけたたましい音を立てて、ジャランジャランと鳴りわたった。斜面の中途で曽我ランコが金切声を立てた。
「何、何をしてるの！」
「はあ」
乃木七郎は間の抜けた声で返事をして、きょとんとした顔で斜面を見おろし、そして二人の男の顔を見回した。自分にどんな事態が起りつつあるのか、もちろん彼に理解出来なかっかのだ。胴乱男はいらだたしげに乃木七郎の肩をこづいた。
「さあ、早く。そんなもの、捨てちまうんだ！」
肩をこづいた手で、胴乱男はいきなり卓上ピアノを乃木の左腕からはたき落した。ピアノはガシャンと地面に落ちた。カメラ男の靴がそれを蹴飛ばした。ピアノは大小高低の音をさまざまに響かせながら、斜面をにぎにぎしくころがり落ちた。
「待てえ！」曽我ランコがありったけの声で叫んだ。「泥棒。泥――棒！」
卓上ピアノはその曽我ランコをめがけて奔転（ほんてん）した。ランコは佐介をつないだ棒きれを突き離し、奔転するものを辛うじて受けとめた。受けとめたというより、身体全体でせきとめた。栗山佐介は離された棒きれと共に、一気に三米の急斜をすべり落ち、これも辛うじて目指す接骨木の幹に必死にしがみついた。佐介の眼は恐怖と衝動で青味を帯びてきらきら光り、毛穴からふき出した冷汗と脂で、顔中はべっとりと濡れていた。ねとねとと濁った水路の急流が、佐介の眼下を音もなくうねっている。
「ああ」佐介はかすれた声でうめいた。「ああ、おれはいつもこんな具合になっちまう。惨（みじ）めで貧乏たらしい役割を、いつもおれはこんな具合に引受けてしまう」
曽我ランコはがむしゃらな勢いで、草をつかみ木の根をつかみ、斜面を這い登っていた。堤上の小径を、乃木七郎を中にして、二人の男は足をぴょんぴょんとはね上げて、彼方に遁走しつつあった。得体（えたい）の知れない二人男の熱意にくらべると、乃木七郎はそれほど疾走の意志を持たないので、歩調がちぐはぐで、見た目の割にはスピードは出ていなかった。小学校の秋季運動会の父兄有志の三人四脚みたいな具合に、この三人編成の一団はぎくしゃくと動いていた。それでも曽我ランコが堤上に這い登った時、彼等の姿はもはや現場から六七十米の彼方にあった。人気のない堤の上を、並木に見えかくれしながら、一団は不格好にがたぴしと遠ざかって行く。
「待てえっ！」
曽我ランコは板裏草履をつっかけ、走り出そうとしたが、すでに及ばぬとあきらめたらし

く、口惜しげにじだんだを踏んだ。板裏草履の裏で砂利がぐりぐりと鳴った。その曽我ランコの姿を、水際の接骨木にしがみついたまま、栗山佐介は眼を大きく見開いて見上げていた。恐怖の一瞬が過ぎ、佐介の耳にはしゅんしゅんとはげしい耳鳴りが始まっていた。まっさおな空と目の光を背景にして、堤上にじだんだを踏む曽我ランコの黒い輪郭の動きは、なにか嘔（は）き出したくなるような醜悪な感じをただよわせていた。堤上の小径から横に切れたらしく、一団三人の後ろ姿はその時ふっとランコの視野から消滅した。ランコは足踏みを中止し、ブラウスの袖で瞼を拭いながら、栗山佐介を見おろした。天井にとりついた弱々しげな冬の蝉のように、佐介の身体はしなやかな接骨木の幹にとまっていた。そのたよりない姿を、曽我ランコは笑いに似た影を頬に貼りつかせ、しばらく見おろしていた。佐介も黙ってしがみついたまま、耳鳴りを耳に聞きながら、じっと身動きをしないでいた。

「上っておいで」

やがて曽我ランコが、非常にやさしい、ほとんど猫撫で声にちかい声で呼びかけた。佐介はそれに応じるようにもぞもぞと左手を動かした。ランコは喜悦をこめた厭らしい声で繰り返した。

「ひとりで、上っておいで。ひとりでよ」

気温はじりじりと上昇しつつあった。

森爺と甲斐爺は相変らずつながって、巣を失った蟻のように、院内のあちこちにふらふらと歩いていた。ニラ爺たちが見当らぬので、昼飯を食う気にもならないのであった。調理室で木見婆はぶよぶよと肥った顔に汗を滲（にじ）ませて、何かぶつぶつと呟きながら、調理に手をつけたり、半開きの扉の方をじろりとにらんだりしていた。

風通しの悪い湿った院長室の書類戸棚の中では、ニラ爺と煙爺が玉の汗を顔いっぱいに吹き出して、ぎゅっとちぢこまっていた。ニラ爺の玉の汗は、暑さのためというよりも、尿意をこらえる努力によるものであった。折しも節穴から黒須院長のがらがら声が流れ込んできた。

「今日は暑いですなあ。失礼して上衣を脱（と）らせていただきます」院長は五つの釦（ボタン）を外して、詰襟服をぐいと脱ぎ、ちぢみのシャツだけになった。そして仕舞扇で胸元をばたばたあおぎ立てながら、皆を見回した。「どうです。皆さんもお脱ぎになってはいかがですか。お互いに胸襟を開いて語り合いましょうや」

「そうだな、そうするか」

と菓子屋がそそくさと上衣をとった。つづいてデブの食堂主。逞（たくま）しい運送屋。最後に女金貸がボレロを脱いだ。白い肉付きのいい女金貸の左腕には、大きな種痘のあとが三つずつ二列縦隊にならんでついている。上衣をとらないのは教授だけであった。教授は鼻眼鏡をかけ、蝶ネクタイをきちんとしめて澄ましこんでいた。暑いのは気温の上昇のためだけでなく、ウィスキーのせいもあったのだろう。六人が六人とも頬や額をあかく染め、中には眼がとろんとなりかかっているのもいた。オムレツ付け合わせのジャガ芋の最後の一片

を、ぽいと口に放り込んで味わいながら、食堂主がひとりごとを言った。
「ふん。あのムクムク婆さん、なかなか料理が巧者なもんだな」
「そうですか」院長はいい気持で答えた。「そうでしょう」
「あの婆さん、古いのかね？」
「いや、勤め始めて二年ばかりですが、腕も確かだし、それに実直一点ばりで、わたしども
も大変重宝していますよ」
「わたしんちのコックよりもうまいかも知れんぞ」食堂主はフォークの背をべろりと嘗（な）
めて、お世辞を使った。「ところでどうです。わたしんちの料理は、在院者たちに評判いい
かね？」
「まあまあと言うところでしょうな」そして院長は憂わしげに眉をひそめた。「残飯そのも
のの味より別に、困ったことがあるんですよ」
「何だね？」
「一口に言えば、鮮度の問題です。冬の間はまだまだよろしいが、こんなに気候があたたか
くなって来るとね」院長は手で空気を引っかき回すようにした。「食堂さんから朝の残飯残
肴（ざんこう）が当院に運搬されてくる。それを翌日の朝まで保たしておくことは、もう気
温が許さないのです。だからそれを夕食にあてる他はない。同じ事情で食堂さんの晩の残飯
残看は、当院では翌朝の食卓にあらわれるということになる。それで昨日も在院者の一部が、
わたしに不平を言ってきた。朝には朝飯らしい食事、夕には夕方らしい食事を食わせろって
ね」
「何と返事した？」
「うまくごまかして、突っぱねましたがね。すると昨朝に出したテンプラ、あれが揚げ立て
じゃなかったとか、身が千切れていたとか、そんなことをてんでに言い出してきた」
「わたしんちのお客の食い残しだから仕方がない」食堂主が頬をぷうとふくらませた。「そ
れは在院者として、ゼイタクというもんだ」
「残飯残肴を食わせられていることを、在院者たちがそろそろかんづいて来たんではない
か」教授が口をはさんだ。「どういう搬入方法をとってるのかね？」
「それは俺んとこで請負（うけお）ってるんですよ」運送屋が引取った。「オート三輪で運
ぶんですがね、荷台は完全被覆だから、内部は全然のぞけないようになっている」
「そのオート三輪は、直接調理場の中まで入れるようになっているんです」院長が説明を補
足した。「調理室はわたしの命令で、在院者は一切オフ・リミットになっている。だから残
看積みおろしの現場を、在院者は絶対に見ることは出来ない。積みおろしだけでなく調理の
現状もです」
「積みおろしの現状を見ないでも、食事の内容によって、在院者がそろそろかんづくという
こともあり得るな」
「そうです。そうです」院長は大きくうなずいて、グラスをとり上げた。「そこがわたしの
立場の辛いところです」

「院内の食事内容に」女金貸が訊ねた。「残飯残肴は何割ぐらい占めてるの？」
「約半分です。あとは院内菜園からの収穫と、若干の購入品です」そして院長は食堂主に顔をねじ向けた。「ところでこの席上で食堂さんに御相談があるのですが」
「何だね？」
「この二ヵ月、当院の財政運営の上において、残念ながら若干の赤字を出しておる。それをわたしだけの責任のように皆さんはおっしゃるが、心外なことだと思うのです。赤字打開にはこの際皆さんの協力をも是非懇請したい。まずさしあたって、食堂さんの残飯残肴の購入価格ですが――」
「高いとでもいうのか？」食堂主はきらりと眼を光らせた。「あれが相場なんだぜ」
「相場であるかも知れませんが」院長はぐっと丹田に力を入れた。「この危機を乗り切るために、も少し安くしていただきたいと思う。なにしろ食料費というものは、当院経常費の大きな部分をしめているのですから、ちょっと負けていただいただけで、ぐんと違うと思うのです。わたしはなにも在院者の味方をして、そう言っておるのではない。わたしは信念をもって言っている。食堂さん、あなたも経営者の一人でしょう。残飯を安く入れてそれで当院が黒字になれば、黒字になったことによってあなたもトクすることになるでしょう」
「それも道理だ」先ほどから眼をとろんとさせて聞いていた菓子屋が、卓をぽんと叩いた。「うまい手を考えたな」
　教授と女金貸は互いに顔を見合わせて、賛意を表する如くうなずきあった。その一座の空気を察知して、食堂主はややいきり立った。
「院長は、わ、わたしんちばかりに皺（しわ）寄せをしてくるが、そいじゃ運送屋はどうなんだ？」
「お、おれは全然実費だよ」いきなり飛び火してきたので運送屋は目を白黒させた。「おれなんか残飯運搬で、全然儲（もう）けていないんだよ。犠牲的サービスだ。ガソリン代に毛の生えた程度しか受取っていない」
「その生えた毛を剃（そ）り落していただきたいものですな」
　と院長は強気に出た。経営不振の責任を分散させることによってのみ、院長の地位は保たれる。黒須院長はとっさにそう判断したのだ。教授と女金貸はふたたび顔を見合わせ、うなずきあった。それを見て運送屋は頑張るは非と判断したらしく、直ぐに折れて出た。
「じゃいいよ。おれ、ガソリン代だけに負けとくよ。光栄ある夕陽養老院の仕事だものなあ」
　菓子屋が手をパチパチとたたいた。食堂主は渋い顔をつくり、むっと頬をふくらませた。女金貸がその食堂主にむかって、なぐさめるように言った。
「残飯なんかタダみたいなもんじゃないの。在院者たちが食べて呉れるおかげで、処理費がまるまるたすかる勘定じゃなくって？」
「そうでもねえですよ」食堂主は渋面のまま答えた。「歿飯残肴というと、豚のエサにしかならないように人は思っているが、なに、そんなもんじゃない。豚が食うのは塵芥です。わたしんちみたいな高級食堂の残りものは、豚なんかには勿体（もったい）ないし、また当院

なんかにも勿体ないぐらいですよ。あたしんちの残肴で、もりもり栄養をとって長生きされては困る、という心配もあるほどだ」
「そのかわり鮮度が落ちていますからな」院長がわらいながら言った。「どんなに高級な料理でも、古くなると味が落ちるし、栄養もなくなる」
「そうだな。それでは暫定処置として」教授が重々しく勧告した。「今頃から夏場にわたって、値段を下げることにしたらどうだね。食堂さんも、栄養や味が落ちるとあれば、仕方ないだろう」
「そんなものですかね」食堂主は面白くなさそうに答えた。「じゃ暫定的にわたしが譲歩しましょう」
院長は大急ぎで会議録を開き、喜色を面上にみなぎらせて、残肴購入費ならびに運搬費の値下げを書き込んだ。食堂主はその院長の手付きを横目で見ながら、はき出すように言った。
「おれたちも犠牲的協力に出たんだから、院長も今いっそう経済を引きしめてもらいたいもんだな」
「さっきの報告で」運送屋が口を出した。「備品のリヤカーが破損したとのことだったが、どうして破損したんだね。気がゆるんで粗略に取り扱ったんじゃないか」
「ええ、それは」と院長は口ごもった。
「リヤカーなんてものは、よっぽどのことがなけりゃ破損しないもんだよ。おれんとこのように仕事の激しい運送屋でも、そんなことはめったにない」
「破損というのは」と女金貸。「どの程度なの？」
「なんなら俺んとこで」と運送屋。「実費で修繕してやってもいいよ」
「全壊です」と院長は腹を据（す）えて答えた。「修繕の余地はありません」
「修繕の余地がない？」食堂主が険（けわ）しい声を出した。一体どうしたんだ」
「本当のことを申し上げますが、これはわたしの手落ちでした」院長は恐縮と謹慎の意をこめて、禿頭をちょっと下げた。「当院に、韮山（にらやま）伝七という、すこしばかり頭の呆けたバカ爺さんがおりまして……」
「おい、お前のことを話してるぞ」書類戸棚の中で煙爺が、ニラ爺の脇腹を小突いてささやいた。「院長の声だぞ」ニラ爺は返事をしなかった。眼をかっと見開き、緊張して節穴をにらみつけていた。オシッコはまさに出そうだし、自分のことが話題に上っているし、緊張せざるを得ないのであった。黒須院長の説明が滔々（とうとう）と続いている。その一句々々を耳に収めながら、ニラ爺の顔はあかくなったりあおくなったり、歯を食いしばったりこめかみをビクビクさせたり、いろんな変化をした。
「沖禎介、横川省三の名前を出して、わたしはついにニラ爺を説得した」院長は得々として面々を見回した。「ニラ爺は欣然（きんぜん）としてその役目を引き受けることになりました」
「頭の呆けたバカ爺さんだと言ったが」食堂主が質問した。「そのバカ爺さんに、そんな重大な役目がつとまるかね？」

「つとまらなきゃ、ちょんとクビです。何とか名目をつけて追い出すだけです」
「院長は先刻、園内の栽培物は結局在院者の口に入るんだ、と言明しましたな」運送屋が意地悪い口調で言った。「ところが今の説明では、外部に売り出してるじゃないか」
「院内需要を充たした残りですよ」
「売上代金はちゃんと会計に繰入（くりい）れてあるだろうね」
「ええ、そ、それはもちろん」院長はどもった。「そうするつもりです」
「**つもり**だって？」運送屋が声を高くした。「じゃ、まだやっていないのか、まさか自分のふところに……」
　その時扉が外側からほとほとと叩かれたので、運送屋は口をつぐんだ。院長が大声を出した。
「誰だ、はいれ」
　扉が開かれて、岡持を提げた木見婆がのそのそと入ってきた。彼女は無表情に卓に近づき、岡持の蓋（ふた）をあけ、皿小鉢のたぐいを並べ始めた。院長が声をかけた。
「木見婆さん。あんたの料理は皆さんのお賞（ほ）めにあずかったよ」
「うん。なかなか旨（うま）かった」
「鰻（うなぎ）なんか」と女金貸が言った。「とくに旨かったわよ。本職はだしだわ」
「ありがとうございます」と木見婆は白髪頭を下げた。
「鰻はまだ残ってるかね？」院長が訊ねた。「残ってたら、白焼きにして五人分、折詰めを頼むよ」
「かしこまりました」
「それからちょっと」と院長は声をすこし低くした。「ニラ爺さんにちょっと院長室に来るように伝えて呉れ」
「ニラ爺さん？」木見婆はぎくりとして、手にした小鉢を取り落しそうになった。
「そうだ。ニラ爺さんだ。ちょっと訊ねたいことがあるのだ」木見婆の態度に気付かず院長はつづけた。「他の爺さんに気取られないように、そっとだよ。そっと耳打ちするんだよ」
「お前のことを呼んでるぜ」煙爺がじゃけんにニラ爺の脇腹をこづき、とげとげしくささやいた。「お前、スパイだったのか？」
「スパイやない！」ニラ爺は顔を蒼白にしてささやきかえした。「院長が勝手に決めてるだけや」
「ほんとか？」
　ニラ爺は唇を噛んだまま返事をしなかった。皿小鉢を並べ終って空の岡持をとり上げた木見婆に、院長は重ねて念を押した。
「いいか。そっとだよ。ことに遊佐爺や滝爺に気付かれないようにするんだよ。おや、木見婆さん、顔色がすこし悪いようだな。寝不足か」
「寝不足でございます」木見婆は答えた。「他に用事はございませんか」
「お前、出ないでいいのか？」煙爺がふたたびささやいた。「お前、呼び出されているんだ

ぞ」
「出ない！」ニラ爺はささやき返した。「おれ、ここでおしっこをする。もう我慢出来ん」
「ちょっと待て！」
煙爺はあわててごそごそと身体を動かして、ニラ爺との間隔を拡げた。ニラ爺は眼を据（す）えた。
［やぶちゃん注：「アカシヤ」これは真正のマメ目マメ科ネムノキ亜科アカシア属 *Acacia* ではなく（真正のアカシア類は温暖な気候でないと生育が難しく、本邦では関東以北では栽培が困難であるものが多いからである）、所謂、「ニセアカシア」、マメ科マメ亜科ハリエンジュ属ハリエンジュ *Robinia pseudoacacia* であると思われる。「ニセアカシア」＝ハリエンジュは北アメリカ原産であるが、本邦には明治六（一八七三）年に移入され、街路樹・公園樹や砂防・土止めに植栽されているが、広範に野生化もしており、しかも面倒なことに輸入された「ハリエンジュ」（ニセアカシア）を当時は「アカシア」と称していたことから、現在でも根強く混同されているからである。例えば、「アカシアはちみつ」として販売されている蜂蜜は「ニセアカシア」（ハリエンジュ）の蜜なのである（以上は主にウィキの「ニセアカシア」に拠った）。］

28

東寮階下のどんづまりの部屋では、各爺さんがそれぞれ昼食を済ませ、それぞれ食後のいこいをとっていた。長老の遊佐爺は肱（ひじ）まくらでかるい午睡をとっていたし、滝川爺と柿本爺は手製の将棋盤で将棋をさしていた。松木爺は輪番制の畠仕事をさぼって、鋏（はさみ）でチョキチョキと足の爪を切っていた。午後の陽光はこの部屋にもなめに射し入っている。やがて松木爺は爪をすっかり切り終え、鋏を投げ出して大きな欠伸（あくび）をした。
「さて」欠伸を閉じて松木爺はひとりごとめかして言った。「も一度ニラ爺でも探しに出かけるかな」
誰もそれに返事をしなかった。松木爺はふらふらと立ち上った。
木見婆は空の岡持を提（さ）げて、ふらふらと中央大階段を降りてきた。すると廊下の向うからふらふらと歩いてくる甲斐爺、森爺の姿を認めたので、木見婆はぎくっと身体を緊張させ、急ぎ足になってその両爺に近づいて行った。
「まだ見付からないのかい？」木見婆は早口で訊ねた。
「まだ？」
「まだなんだよ」甲斐爺がしょんぼりと答えた。一体どこにかくれやがったのか。木見婆さんは心当りないか」
「あるわけないよ」そして木見婆は声を強めた。「もし見付けたらね、何はさしおいてもあたしのとこに飛んで来るようにと、そう伝言してお呉れよ。ほんとに大事な用事があるんだ

からさ。きっとよ」
「わかったよ」と森爺が答えた。「そのかわり、あんたが見付けたら、直ぐに知らしとくれよな。その岡持は何だい？」
「院長室で今会議をやってんだよ。それに料理を運ぶのさ」
「どんな料理？」と両爺は眼をかがやかせ唾をのみこみながら訊ねた。
「それは焼魚とか、きんとんとか」と、木見婆は答えた。「茶碗むしとか、いろいろさ」
「残飯費運搬費の値下げ、院内菜園のことなんかは、経営の本筋から言えば、末の末のことだ」気取った手付きで茶碗むしの蓋を取りながら教授が重々しく言った。「経営方法の大宗は、在院者を次々回転させるにある。電車会社の経営と同じだ。降りる人があってこそ、次々に人が乗ってくるのだ。乗りっぱなしにされては、経営が成り立たないよ。だから我々も枝葉末節を論ずることをやめて、大宗を論じなくてはならん。近時の当院の不振も、死ぬべき人が死んで呉れないという点に最大の原因がある。如何にして在院者の回転率を高めるべきか」[やぶちゃん注：「大宗」は「たいそう」は「物事の初め・おおもと」或いは「大部分・おおかた」の意。]
「そうだ。そうだ」と食堂主が賛意を表した。「わたしんちでも、卓に坐りっぱなしで、一日中かかってゆっくり食べられては、やり切れんものな」
「どうして近頃」と運送屋が小首をかたむけた。「皆死ななくなったんだろうなあ」
「やり方も悪いんだよ」と菓子屋。「院長の怠慢だ」
「いっそのこと」女金貸が手を上げて言った。「院長の責任制ということにしたらどう？」
「責任制？」
「割当制のことよ」女金貸は院長の方に向き直った。「今在院者は、九十九人、だったわね」
「そうです」
「すると、一ヵ月に三人死ぬ」と女金貸は指を折って数えた。「全部入れ替わるのに、三十三ヵ月、すなわち二年と九ヵ月かかるわけね。四人だと、ええ、約二十五ヵ月か」
「そう」教授がうなずいた。「二年と一月だ。商売柄だけあって、計算は正確だね」
「一ヵ月三人というところでどう？」女金貸は一座を見回した。「一ヵ月三人を院長の責任額にするのよ。三人に足りない場合は、院長の月給から比例して相当額を差し引く。三人以上死んだ場合は、もちろんその分だけ院長に手当を出す。そうすれば院長も仕事に励みが出るでしょう」
「それはいい考えだ」と運送屋が卓をたたいて賛成した。
「三人死ぬと、新入りが三人で三十万円か。適当なところだね。院長、一月に三人殺すのは、わけないだろうね」
「飛んでもない」院長はまっかになり、眉をびくびく動かして掌を振った。「一月三人もわたしが殺すなんて、そんな無茶な、非常識な――」
「殺すというから具合が悪い」教授がたしなめた。「死なしめて上げるんだよ。さっきも院長は言ったではないか。老人は死ぬために生きているって。つまり老朽物質を、無に帰させ

るわけだね」
「そ、それはそうですが――」
「死なしめて上げるって、精神的にこいねがっているだけではダメだ」教授はあかくなった額をゴシゴシと掻（か）いた。「こういうことは組織的に、計画的にやらんといけないな。行き当りばったりじゃ困る」
「そうよ」女金貸が勢い込んだ声を出した。「この間の風呂のタイル張りの件だって、行き当りばったりよ。辷って死んだのは、たった一人じゃないの。あのタイルの張り替えはいくらかかったの？」
「六万円です」と院長が帳簿を開きながら答えた。「そして直ちに林爺さんが辷って死んで呉れたので新入者が十万円持って入ってきました。すなわち差引き四万円……」
「ちょいと待った」運送屋が口を入れた。「その算術はおかしいぞ。死んだ林爺さんは満八十歳だったな。するとタイルで辷らないでも、いずれ何かの原因で遠からず死ぬべき状態にあったわけだ。それをかんたんに引き算で片付けようなんて――」
「しかし」院長は禿頭をふり立てて抗弁した。「今までのところは一人ですが、これから先、タイルが張ってある限り、何人もが辷って後頭部を打つでしょう。それをこいねがってわたしは、石鹸だけは爺さんたちに潤沢（じゅんたく）に配給してある」
「そう都合よく行くものか。鼠だって捕鼠器に一匹かかれば、あとは用心してかからなくなるよ。ましてこれは人間だ」
「六万円とは金をかけ過ぎたよ」と菓子屋。「ひっくりかえすには、廊下や階段に臘（ろう）
［やぶちゃん注：漢字はママ。「蠟」の誤字か誤植。後も同じ。］を塗りたくった方が、はるかに安上りで効果的だったんじゃないか」
「しかし院長たるわたくしが、深夜ごそごそと床に臘を塗り回っている現場を、爺さんたちに見られたら具合が悪いですよ」と院長は言った。「それに廊下や階段に塗りたくって、爺さんたちでなく、あなた方が引っくり返ったらどうします？」
「そいつはごめんだ。桑原、桑原」食堂主は首をちぢめた。「わたしや近頃血圧が高いんだよ。頭を打ったらそれっきりだ」
「そうでしょう」院長は鼻翼をふくらませた。「わたしだって辷り転びたくない」
「黄変米の方はどうなってる？」教授が質問した。「継続して投与しているかね？」
「僕が毎月納入していますよ」と、菓子屋が引き取った。「菓子製造の加工用原料として払い下げを受けたやつの、その相当量を当院用に回しています」
「回ってきた分を、院長はチャンと飯にたき込んでいるか？」
「たき込んではいますがね」院長は瓶をとり上げ、各自のグラスに次々に充たしてやった。「あんまり多量に混入すると、ぼそぼそ飯になって、在院者は食べ残すし、それに黄色く色が染まるんでねえ。強化米などとごまかしてはいますが」
「その程度じゃ在院者に大した実害は与えないな」教授が軽蔑したような声を出した。「その程度なら一般国民も食べているよ。すでに現政府は、黄変米騒ぎのほとぼりがさめたのを

見はからって、こっそりと毒米を配給ルートに乗せ始めてるよ。僕んとこの大学の消費生活協同組合が、配給外米をだね、どうもおかしいてんで専門家に頼んで検査して貰ったんだ。するとそれからイスランジャ菌がうじゃうじゃと検出されたんだ」

「その組合って、何をするところです？」

「学内食堂を経営しているんだよ」教授はグラスを手にした。「学生、職員の数千名がそこを利用しているんだぜ」

「ひどいな」

「ひどいもんですねえ」

「ひどいわね」

面々は異口同音に、政府のやり方に対して、怨嗟（えんさ）の声を上げた。

「だから僕の家では」と教授は落着きはらった。「外米配給は一切辞退しているんだ」

「外米はまだ相当滞貨しているんですか？」

「相当あるようだね」と教授。「せんだって食糧衛生局長が、非公開の会議の席上でだがね、現在外米の滞貨は二十万トンに達しているが、なんとか早く配給ルートにのせて片付けてしまいたいと、語ったそうだ。二十万トンとは相当な量だよ」

「僕んとこにも毎月一定量」と菓子屋が説明した。「加工用原料として配給がある」

「全部を加工用原料に払い下げればいいのにね」

「加工用原料としての払い下げ価格は、たいへん安いんだよ」と教授。「全部を加工用に払い下げれば、食糧管理特別会計にたちまち五十億円の穴があくんだ。それじゃあ配給操作にもさしつかえるしねえ。だから政府は国民の目をごまかして、毒米を配給ルートに乗せたがっているし、また実際に乗せているんだよ」

「あんたその払い下げ米を」女金貸が菓子屋に顔を向けた。「タダで当院に納入してるの？」

「タダじゃないさ」菓子屋は困感したように見る見る渋面をつくった。「僕も商売人だがね。でも当院納入の分には、利益はほとんど見ていないです」

「いかほどで買ってるの」女金貸は院長に顔をねじ向けた。

「支払いは金じゃなくて、物々交換です」院長は帳簿を開いた。「ええと、払い下げ米三升につき、配給内地米一升という割です」

「それは暴利だ」食堂主と運送屋が一斉に叫んだので、菓子屋はいささか狼狽した。「払い下げ米はタダ同様だろ？」

「タダ同様じゃありませんよ」菓子屋は顔をぱっとあかくして必死に弁解した。「ちゃんとしかるべき値段を払っていますよ。しかし、諸君がそうおっしゃるなら、交換比率を改定してもよろしい。その用意はあります」

「あたりまえだよ」食堂主がきめつけた。「今までにあんたは相当儲（もう）けたな」

「儲けやしないよ」菓子屋はひらひらと掌を振った。「あんたんちの残飯と同じ程度だよ」

「皆さんがそんなに自分のことだけしかお考えにならないから」と院長は女金貸の方を掌で指した。「こちらから融資を受けねばならんということになり、また実際に融資を受けて

いる。嘆かわしいことですな」
「金利はいくらだ」と運送屋が訊ねた。「まさか十一（トイチ）じゃあるまいな」
「おほほほほほ」女金貸は手の甲で后をおおい、途方もなくいい声でわらった。「十一だなんて、そんなにわたしがむさぼるわけがないじゃないの。もう内輪揉（も）めは止しましょうよ。そんなこと、枝葉末節だわよ。ねえ先生」
「今日俵医師は出席しないのか」女金貸のながしめを受けとめて、教授が話題を転じた。「在院者の回転方法に関して、僕は俵医師の意見を聞きたいと思っていたのだが」
「先ほど申しました通り、当区の狂犬予防週間で」と院長が答えた。「そちらの仕事をやっているのです」
「今日のような大切な会議には」と運送屋が言った。「欠席されては困りますねえ。獣医だからそういうことになる。この際俵医師をクビにして、まっとうな人間の医者を雇うことにしたらどうですか」
「そうだよ」と食堂主が賛成した。「獣医は雇い賃が安い。しかし、安かろう悪かろうでは、かえって当院の損になる」
「俵医師を雇ったのは僕だがね」と教授がきらりと眼を光らせた。「獣医をえらんだのは、単に費用が安く上るからではない。君たちは人間医と獣医の心構えの差異を知っているか。人間医は人間の命を最高価値のものとして取りあつかう。ところが獣医はだね。たとえばここに一匹千円の犬がいて、それが病気になったとする。その病気を治すのに、千五百円の注射が必要だとする。その場合、獣医は決してその千五百円の注射液を使用しないものだよ。判るかね」
「なるほどねえ」と女金貸が相槌（あいづち）を打った。「注射液の方がその犬よりも、五百円がた高価な物質ってわけね」
「そうだ。まったく当院向きだ」教授は莞爾（かんじ）としてうなずいた。「それにしても俵医師の本日欠席はけしからんな」
「当区はとても狂犬が多いのです。都内随一の狂犬発生区なのです」と院長が説明した。「さきほど駅から当院までの道ばたに、犬が何匹もうろうろしていたでしょう。あれが全部野犬なのですよ」
『そいつはいけねえ』菓子屋が言った。「野放し犬が一番恐いんだ」
「在院者で誰か噛まれた？」と女金貸。
「いや、まだ誰も」と院長。「どういうわけか当区の野犬は、爺さんには噛みつかないようですな。旨くないからでしょう。噛みつかれるのはたいてい働き盛りの男女です」
「もし噛みづかれて、それが狂犬だったら、どうなるの？」
「発病したらもうたすからんね」と教授が説明した。「狂犬の唾液の中の狂犬病ビールスが、かみ傷から人体に入り、神経にとりついて脳の中に入りこみ、どんどん殖えて脳の細胞をメチャメチャに食い荒してしまう。それでかんたんに一巻の終りだ」
「怖いわねえ」女金貸はぞっと身を慄わせた。「帰りが怖いわ」

「狂犬のことはそれくらいにして」と教授は腕時計をちらと見た。「さっきの院長の責任制の問題だね、一ヵ月三人を割当てるという説が出たが、皆さんどうですか？」
「三人なんか飛んでもない！」院長は大声を立てて中腰になった。「三人なんか無茶ですよ。そんなに死ぬもんですか。当院の今までの歴史をしらべても、終戦前後の食糧悪事情の頃をのぞいては、月三人ということは絶対にありませんでしたよ」
「終戦前後はぞろぞろ死んだんだろ」と運送屋。「では、今にしても、やり方ひとつによっては、殺せない筈はない」
「そんなことをおっしゃるくらいなら」院長は興奮して卓をどんと叩いた。「当院に火をつけて、九十九名の爺さんもろとも、まる焼きにしたらどうですか。建物が古いから、火の回りは早いですよ。ただし、その炎上の責任はわたしは負いませんぞ」
「そりゃ無茶だよ。建物まで燃しては元も子もない。燃やしたいのは中身だけだよ」と運送屋が言い返した。「それにおれたちは、九十九人をいっぺんに死んで貰いたいとは言っていない。いっぺんにではなくて、順々に死んで貰いたいんだ。院長。一ヵ月三人。じたばたせずに引き受けたらどうだね」
「三人は無理です」院長は頑張った。「どうしても三人を押しつけるなら、わたしとしても辞職の他はない。辞めさせていただきます」
「じゃあ辞めて貰って」と運送屋は一座を見回した。「他に後釜を探しますか」
「どうぞお勝手に」院長はおどすように声をするどくした。「わたしが辞めると、後任の院長が来る。しかし世の中にはそうそう人物のいるわけがないから、今まで通りうまく行くと思ったら大間違いですよ。それに、ふつうの人間なら、院長と名がつけば、在院者の方を大切に考えるでしょうからねえ。わたしはいつでも院長の椅子を投げ出して、よろこんで後任と交替します。後悔なさらないように。黒須玄一みたいに都合のいい院長はいなかった。そうあとで考えても、もう遅いですよ」
「よし判った」教授がうなずき、にやりと笑った。「なかなかやるもんだねえ。どこかの首相みたいだ」
「わたしは信念をもってやっているのです」
「それじゃ院長さん」女金貸が院長にやわらかく言った。
「院長さんは一ヵ月に何人なら引き受けると言うの？」
「ええ、それはですねえ」院長は腕を組んで禿頭をかたむけた。「ええ、一ヵ月に一人というとこで、どうでしょう？」
「一人？」食堂主が眼を剝（う）いた。「するとこんな大きな所帯で、月々の収入がわずか十万円か」
「正式にはそうですが」院長は答えた。「他に羽根運動からの援助もありますし、菜園収穫物売却などの別途収入もありますので、最低の運営には差支えないと思います」
「一T人とは言いも言ったもんだ」運送屋が舌打ちをした。「全部入れ替わるのに、九十九ヵ月か。ああ、おれは気が遠くなる」

「一人を責任額にして、実はそれ以上毎月殺して、手当をごっそり稼ぐつもりだろう」と菓子屋。「ずるいぞ」

「あたしたちだって、ずいぶん犠牲をはらってるのにねえ」と女金貸。「院長だけがいい目を見るという法はないわ」

「院長」きんとんをもぐもぐ噛みながら教授が言った。

「いくらかけ引きとは言え、皆の発言の通り、一ヵ月一人は無茶だよ。承服出来ないよ。では、我々もいくらか譲歩するから、君も大幅に歩み寄れ。な、一ヵ月二人半ではどうだね。そこらで妥協して手を打とうじゃないか」

［やぶちゃん注：「黄変米」ウィキの「黄変米」より引く（一部、私が補足した）。『黄変米（おうへんまい）とは、人体に有害な毒素を生成するカビが繁殖して黄色や橙色に変色した米のこと』。主に菌界子嚢菌門ユーロチウム菌綱 Eurotiomycetes ユーロチウム目 Eurotiales マユハキタケ科属アオカビ（ペニシリウム）属（*Penicillium*）の『カビが原因となる。カビ自体は有害なわけではないが、カビが作り出す生成物が肝機能障害や腎臓障害を引き起こす毒素となる。カビ毒をマイコトキシン』（Mycotoxin）『と総称するが、総じて高温に強く』、『分解が困難なため』、『加熱殺菌によりカビ自体を死滅させても』、『毒素は無毒化されずに残存してしまう。黄変米はカビの拡散を防ぐためと毒素分解の必要性から高温で焼却して廃棄するのが最善の処理方法である』（とあるが、多くのアオカビ（ペニシリウム）属の種はマイコトキシンを産生しないため、これらが直接に重篤な食中毒の原因になることは殆どない。但し、アオカビが生えた食品では、他の有害なカビの増殖も進んでいると考えるべきではある。例外は次注参照）。『日本では戦後の食糧難の時代に外国から大量の米が輸入され、国民への配給が行われていた』が、昭和二六（一九五一）年十二月にビルマ（現在のミャンマー）より『輸入された6,700トンの米を横浜検疫所が調査したところ』、翌年の一月に約三分の一が『黄変米である事が判明し、倉庫からの移動禁止処分が取られた』。『すぐに厚生省（現厚生労働省）の食品衛生調査会で審議され、黄変米が1％以上混入している輸入米は配給には回さない事が決められた。基準を超えた米はやむを得ず倉庫内に保管されたが、その後も輸入米から続々と黄変米が見つかり』、『在庫が増え続けた。配給米の管理を行っていた農林省（現農林水産省）は処分に困り、黄変米の危険性は科学的に解明されていないという詭弁を用いて、当初の1％未満という基準を3％未満に緩和し』、『配給に回す計画を立てた。この計画が外部に漏れ、朝日新聞が』昭和二九（一九五四）年七月に『スクープしたことで世論の批判がおき、黄変米の配給停止を求める市民運動などが活発化することになる。在野の研究者も黄変米の危険性を指摘したが、政府は配給を強行し、配給に回されなかった米についても味噌、醤油、酒、煎餅などの加工材料として倉庫から出荷しようとした』。『この直後に厚生省の主導で黄変米特別研究会が組織され、農林省食料研究所の角田廣博士、東京大学医学部の浦口健二助教授などが黄変米の研究を開始した。研究会では、角田や浦口などの努力により極めて短期間に黄変米の高い毒性が解明される事になった』。『研究会の成果と、世論の強い反発のため』、『黄変米の配給は継続できなくなり、同年の』十『月には

黄変米の配給が断念された。このため、黄変米の在庫は増え続ける一方となり、窮地に陥った政府は』昭和三一（一九五六）年二月、『明確な安全性の根拠が無いまま、黄変米を再精米し、表面のカビを削り落として配給を行う政策を再度発表』した。『だが、黄変米の在庫は減る事が無く』、『長期にわたって倉庫に保管され続けることになり、結局は再精米の上で家畜の飼料など食用以外の用途として』実に十『年間に』亙って『処分されたといわれている』。『なお、特別研究会に参加した角田は黄変米が発見された当初より』、『職を辞する覚悟で農林省に強硬に抗議した事が知られており、はじめの時点で1%基準が策定されたのも彼の尽力によるものが大きい。彼の努力が無ければ』、『黄変米の配給問題は誰にも知られずに闇に葬られていた可能性が高いと言われている』。『第二次世界大戦の影響で若い男性はすべて戦争に駆り出され』、『農村の労働力は枯渇していた。また、肥料をはじめとする農業資材も極度に不足していた。この状況で、復員兵や満州などからの帰還者が大量に日本国内に流入したため未曾有の食糧不足が発生した。当時の状況においては外国からの輸入物資に頼るほかに道は無かったが、肝心の外貨は底を突き、度重なる空襲によって生産設備は灰燼に帰していたので外貨の獲得手段も無かった』。『政府は少ない外貨を効率的に使用し、食料と復興のための必要物資を調達しなければならなかった。このため、外国で米を調達する際には価格優先で低品質のものを選択する以外なく、輸送船も荷物を安く運べさえすれば良いという選択肢を取らざるを得なかった。結果的に、輸送中に米にカビが生え』、『黄変米となってしまった。貴重な外貨で手に入れた物資だっただけに捨てる事もできず、新たに輸入するにはまた外貨が必要となるので、何とかして当初の目的どおりに使用しようと考えた為に発生した事件であ』った、とある**（太字下線は私が本篇に語られる内容が事実であることを示すために附した）**。

「イスランジャ菌」上のウィキの「黄変米」では、『黄変米の原因となる主要なカビ』として以下の菌界子嚢菌門ユーロチウム菌綱ユーロチウム目マユハキタケ科属アオカビ（ペニシリウム）属の三種が挙げられてある（一部に私が補足を加えた）。

・ペニシリウム・シトレオビライデ *Penicillium citreo-viride*（「シトレオビリデ」とも表記される。当初は「ペニシリウム・トキシカリウム」（*Penicillium toxicarium*）と名付けられていた。毒素としてマイコトキシンの一種シトレオビリジン Citreoviridin という神経毒を生成し、呼吸困難・痙攣を引き起こす）

・ペニシリウム・シトリヌム *Penicillium citrinum*（「シトリナム」とも表記される。毒素としてマイコトキシンの一種シトリニン citrinin を生成し、腎機能障害・腎臓癌を引き起こす）

・ペニシリウム・イスランディクム *Penicillium islandicum*（「イスランジウム」「イスランジクム」「イスランジカム」とも表記される。毒素として孰れもマイコトキシンの一種であるシクロクロロチン Cyclochlorotine（イスランジトキシン islanditoxin とも呼ぶ）・ルテオスカイリン Luteoskyrin を生成し、肝機能障害・肝硬変・肝臓癌を引き起こす）

さても、この最後のペニシリウム・イスランディクム *Penicillium islandicum* こそが俗名を

「イスランジア黄変米菌」と呼ぶのである。「株式会社リンクス」のサイト「食品の二次汚染対策相談室」（同社藤川氏担当）の「ペニシリウム（*Penicillium*）属」を参照されたい。さらに、『日本植物病理学会報』（第二十号・昭和三一（一九五六）年発行・PDF）の『昭和30年度関西部会　於　神戸大学姫路分校　昭和30年10月16』・『17日』とある中の、「139」ページ右の、堀道紀氏と山本功男氏の講演要旨『（46）*Peuicillium tardum* の寄生に因る黄変米について』の中に『イスランジヤ黄変米』という表記が見出せる。以上の記載には「日本マイコトキシン学会」公式サイトのこちらも参照して正確を期した。ある種の現代作家は平気でいい加減な架空の病気や、都市伝説染みた病原体・細菌・ウイルスをまともな文脈の中に登場させて平気な顔している無責任なケースがあるが、梅崎春生はちゃんとしていることが判る。

「十一（トイチ）」十日で一割という金利（利息）を取ることを指すが、現在では十日に二割や三割といった暴利を貪る高利貸全般を対象に「といち」または「といち金融」と呼んでいる。

「当区はとても狂犬が多いのです。都内随一の狂犬発生区なのです」これは何かの資料を調べれば、夕陽養老院及びその他のロケーションをかなり絞ることが出来るのだが、当時の東京都の行政区別の狂犬病発生数を見出すことは出来なかった。しかし「東京都福祉保健局」公式サイト内の「日本における狂犬病の発生状況」に載る「全国及び東京での犬の狂犬病発生数」を見ると、

昭和二八（一九五三）年　【全国】176頭　【東京都】128頭
昭和二九（一九五四）年　【全国】98頭　【東京都】47頭
昭和三〇（一九五五）年　【全国】23頭　【東京都】3頭

とある。なお、昭和三二（一九五七）年以降、ヒトでは全国的に発生はない（外地罹患帰国発症事例は除く）。

「狂犬病ビールス」狂犬病の病原体は第五群（一本鎖 RNA -鎖）モノネガウイルス目 Mononegavirales ラブドウイルス科 Rhabdoviridae リッサウイルス属狂犬病ウイルス（Genotype 1）*Rabies virus* を病原体とするウイルス性の人獣共通感染症で、ワクチン接種を受けずに発病した場合、ほぼ確実に死に至る。確立した治療法はない。咬傷部から侵入した狂犬病ウイルスは、神経系を介して脳神経組織に到達して発症する。その感染の速さは、日に数ミリから数十ミリと言われており、従って咬傷を受けた部位が脳や中枢神経系から遠位であれば、咬傷後のワクチン接種処置の時間が稼げると言える。脳組織に近い傷ほど潜伏期間は短く、二週間程度で、遠位部では時に数ヶ月以上、事例の中には二年後という記録もあるという（ここはウィキの「狂犬病」他に拠った）。」

駅から夕陽養老院にいたる石ころ道を、栗山佐介は鞄と卓上ピアノを胸に抱き、びっこを

引きながら歩いていた。空は明るく平和と栄光に満ち、樹立ちはあおあおと天を指して伸びていた。道ばたに簇生（そうせい）した雑草の花々に蝶や蜂が群れ、中空を時折つばめがしなやかに身をひるがえして飛翔（ひしょう）する。卓上ピアノは佐介のびっこの足並にしたがって、ぐるるんぐるるんと不機嫌な音を立てた。昨日よりもずっと音色がわるい。靴で蹴飛ばされ、堤の斜面をころがり落ちたせいで、木質部の接合がゆるみ、釘の頭さえ出ていたし、形そのものが総体的にすこし歪（ゆが）んでいた。音階も狂っているらしい。［やぶちゃん注：「簇生」「叢生」とも書く。草木などが群がり生えること。］

（堤をころがり落ちたくらいで、こんなにガタガタになるなんて）卓上ピアノを持ち換えながら佐介は思った。（だから日本品は駄目なんだ。世界の市場からボイコットを食うんだ）

日の位置は正午をぐっと越していた。遠くで牛の鳴き声が聞え、また近くの林の中から、犬が何匹も厭な声で鳴き立てながら、街道を横切って走って行った。さっき上水路に辷り落ちそうになったことも忘れて、佐介はのんびりと口笛を吹いていた。口笛のつもりでも、唇の形が悪いので、それは音となっては出ない。やがて夕陽養老院の鉄の正門が近づいてきた。

「お腹（なか）がすいたな」口笛を中止して佐介は呟（つぶ）いた。「そうだ。今日は経営者会議だったな。木見婆さんが俺のために、御馳走の残りを取って置いてくれるといいんだがな。しかしあの婆、ふくぶくしい格好はしているが、見かけによらず全然親切げのない婆さんだからなあ。あの木見婆さん」

「木見婆さん」

調理室の半開きの扉から、松木第五郎爺の顔がそっとあらわれて、押し殺したような声で呼びかけた。焼き終えた鰻（うなぎ）を折りに詰めつつあった木見婆は、ぎょっとそちらに振り向いた。松木爺の顔が歯の抜けた口をひらいてにやにやわらっている。「入ってもいいか」

木見婆は折詰めの作業を継続しながら、入ってもいい、という身振りを黙ってしてみせた。松木爺はすばやく調理室に飛び込んで、用心深く扉をしめた。そして調理台に近づいた。

「ふん。ウナギか」松木爺は見下げ果てたような高慢ちきな声を出した。「折詰めと来たな。ふん、そうか。お土産か」

「ねえ、ニラ爺さんはどこにかくれている？」作業の手を休めないまま、木見婆は哀願的な声を出した。「もう見付かったの？」

「知らないね」松木爺は鰻に向って鼻翼を動かした。「まだだろう」

「ねえ、ニラ爺はどんなことをしゃべったのさ」木見婆は肥った軀（からだ）を切なげにくねらした。「そして、聞いたのはあんただけ？」

「ずいぶん御心配だね」松木爺ははぐらかした。「心配することはないよ。おれたち、黙っててやるからな」

「おれたち？」木見婆は顔色を変えた。「あんたひとりにしゃべったんじゃないんだね。あのニラの糞爺！」

「昨夜の会議が遅かっただろう。だからおれたちは寝不足で、とても疲労している」松木爺

はおもむろに本題に入った。「疲労回復には糖分摂取が第一だな。おれたちはこの数ヵ月というものは、汁粉という名の食物を一度も口にしたことがない。婆さんもこしらえたことがないだろう」

「院長先生がニラ爺さんを呼んで来いとおっしゃるんだよ」木見婆は苦しそうにばたばたと足踏みをした。「もう何か院長先生の耳に届いたんじゃないかしら。だからそれを確かめるために、ニラ爺を呼んで来いとおっしゃったんじゃないかしら」

「なに。院長がニラ爺を？」松木爺はいぶかしげに木見婆を見た。「そりゃおかしいな。聞き捨てにならんぞ。何時のことだ」

「何時だったかしら」今度は木見婆が質問をはぐらかした。院長から口止めされていることをふっと思い出したのだ。「な、なにを食べたいと言うの。汁粉という名の食物をかい？」

「おい！」松木爺は猿臂（えんぴ）を伸ばして、木見婆の肩をぎゅっとつかんだ。「ニラ爺を呼べと院長が言ったのは、会議の席上でか。それともそれ以外の場所でか？」［やぶちゃん注：「猿臂」猿の腕。転じて、そのように長い腕。］

「痛いよ！」木見婆は顔をしかめ、勢いを込めて松木爺の掌を肩から振り放した。「痛いじゃないか。いきなり人の肩をつかんだりしてさ。助平！」

「助平？」松木爺は失笑した。「そんなせりふは若い娘が言うことだ。六十にもなって、うぬぼれもはなはだしいよ。それよりも院長は、ニラ爺のことを何と言ってた？」

「うぬぼれで悪かったね。イイだ」木見婆は顎（あご）を憎々しげに突き出して、両掌をパンパンと打ち合わせた。折詰め製作をすっかり完了してしまったのだ。「そんなこと、教えてやらないよ。こちらが何か訊ねると、はぐらかしてろくすっぽ教えないくせに、自分の都合となると、しつこく聞きたがる。何て身勝手な爺さんだろう」

「そ、そんなことを言っていいのか、お前」

「お前？」木見婆はその呼称で自尊心をぐっと傷つけられたらしく、顔色を変えた。「お前。お前とは何だよ。お前呼ばわりされる覚えはあたしにゃないよ。あたしゃあね、これでも自分で働き、自分の力で食ってんだよ。養老院に放り込まれ、お情けで食わして貰っているヨタヨタ爺とは違うんだ」

「なに。ヨタヨタ爺とは何だ！」松木爺はたまりかねたように拳固をかためて振り上げた。「お情けで食わせて貰ってるとは、何という言い種（ぐさ）だ。よし、お前がそういう気持なら、おれにも考えがある。おれは今直ぐにでもお前のことを、あらいざらい院長に……」

木見婆は身構えたまま、松木爺は拳固を振り上げたまま、はたと絶句した。調理室の扉が外からコツコツと叩かれたからだ。二人は一斉に扉を見、そして黙って顔を見合わせた。そして松木爺はふり上げた拳固をへなへなとおろし、かくれ場所を求めるように忙がしく視線を動かした。ノブがぎぎっと回された。木見婆がするどく叫んだ。

「誰？」

「なんだ。鍵がかかってないのか」扉が開かれて声がはっきり飛び込んできた。「僕だよ。栗山だよ。ああ、おなかがすいた」

栗山佐介は皮鞄と卓上ピアノを窮屈そうに抱きかかえ、びっこを引きながら調理室に入ってきた。ふと立ち止って、不審げな視線を松木爺に向けた。松木爺はすっかり困惑して、あざらしのように顔をあてどなく左右に動かした。木見婆は頬をふくらませて手早く折詰めを五つ積み重ねた。

「木見婆さん。何か食べるものないかね」佐介は荷物を米櫃（こめびつ）の上に置きながら言った。「僕はおなかが。ペコペコだよ」

「何もないよ。お茶漬けでも食べな」木見婆はつっけんどんに答えた。腹立ちがまだ続いていたし、それに彼女はこの栗山書記をあまり高くは買っていなかった。「それは何だい。そのごろりんしゃん」

「卓上ピアノだよ」佐介は丼をとり大釜の方に歩きながら答えた。「もう会議は始まってるのかい？」

「もう終りかかってるよ。あんたの来ようが遅いんで、院長先生カンカンになってるわよ」

「だって僕、膝をネンザしたんだよ」飯をよそう手を休めて、佐介は不審げに松木爺の顔を見た。「はて、ここは在院者の立入禁止地区じゃなかったかな」

「そうなんだよ」木見婆は両手で折詰めをかかえ上げ、とげとげしく言った。「立入禁止だと言うのに、この爺さん、無理矢理に押し入って来たんだよ。図々しい」

「入ってもいいと言ったじゃないか」松木爺はふたたび勃然（ぼつぜん）といきどおって、両方の掌が自然に拳固の形になった。［やぶちゃん注：「勃然」突然に起こり立つさま。或いは、顔色を変えて怒るさま。むっとするさま。］

「入っていいという格好をしたから、俺はよんどころなく入って来たんだ。図々しいとはどちらのことか」

「まあまあ」両方の剣幕が意外にもはげしいので、佐介はびっくりしてとりなした。「まあそれはどちらでもいいよ。僕は別段とがめてやしないんだ。でも、院長に見付かるとまずいから、松木爺さんも早いとこ出て行った方がいいな」

「出ればいいんだろう、出れば」松木爺はくるりと背を向けた。「木見婆。ニラ爺の件で後悔するなよ！」

松木爺は捨ぜりふを残し、扉をパンと開き放したまま、肩をいからせて廊下に出て行った。

「ニラ爺さんがどうかしたのかね？」佐介はきょとんとした顔で木見婆に訊ねた。ニラ爺の件とは何だろう。リヤカーのことか？」

「ニラ爺さんの姿が今朝から見えないんだよ」木見婆はとぼけてごまかした。「悪者にでもさらわれたんじゃないかしら」

「そうかも知れないね。とっ拍子もない爺さんだからね」佐介は丼飯に茶をざぶざぶとかけ、木椅子にちょこなんと腰をおろして冗談めかした口をきいた。「悪者どもにかどわかされ、押入れか何かに幽閉され、今頃は嘆き悲しんでるかも知れないな」

しかしニラ爺は、幽閉されてはいたものの、嘆き悲しんではいなかった。悲しむかわりに怒っていた。その怒りはニラ爺の置かれた位置において、発散されることなく、刻刻と蓄積

されつつあった。煙爺も同様であった。ぐしょぐしょにしめった古書類の上にあぐらをかき、両老人は耳を猟犬のようにそばだて、眼をきらきらと光らせて怒っていた。板戸ひとつ隔てた院長室では、さきほどからの論議の中心であった院長の責任割当が、やっと妥協点に到達していたのだ。二瓶のウィスキーはすっかり空になり、それらは分散されて六人の男女の腹中に入り、各人の額や頬や顎をあかく染めていた。菓子屋の眼はとろけかかっていたし、女金貸の動作はじだらくになっていたし、黒須院長にいたってはさながら赤インクをすっぽり浴びた巨大な海坊主であった。その赤い海坊主は咽喉（のど）までのぞけるほどの大口をあけて、ここちよげに哄笑（こうしょう）した。

「やっと折り合いましたな」笑いを収めて院長は会議録を開いた。「毎月二人宛か。これじゃわたしもたいへんだな。よっぽど努力しなくちゃ責任額が達せられないぞ」

「その代り二人以上殺したら」と女金貸がくねくねと身体をよじらせた。「一人当り二万円の手当がつくんじゃないの。いい身分ねえ。あたしが院長になりたいくらいだわ」

「そのかわりに二人に達しない場合には」院長は会議録にゴシゴシ書きつけながら答えた。「一人当り二万円ずつの割合で、月給から差引かれるんですからな。一人も死ななきゃ、わたしはその月は手弁当で働くということになる。大へんなサービスだ」

「だから今までみたいな行き当りばったりな方針をやめて」教授がずり落ちかかった鼻眼鏡の位置を正し、重々しく訓戒した。「組織的、かつ計画的に運営して行かねばならんよ。それが院長の幸福であり、ひいては我々の幸福となるんだ。こんな狭い国土ではだね、誰かが幸福になるためには、その分だけ誰かが不幸にならざるを得ない。他人の不幸をこいねがうことは、とりもなおさず自分の幸福をこいねがうことになるのだ。老いたる物質に不幸が皺（しわ）寄せになるのは、まあ止むを得ないことだし、当然のことでもある。しっかりやるんだな、院長」

扉がことことと叩かれて、折詰めをかかえた木見婆がえっさえっさと入ってきた。教授は口をつぐんだ。木見婆は折詰めを卓上に、各自の前に並べ始めた。

「ニラ爺さんはまだか」院長が訊ねた。「何をしているんだね？」

「どこにいるのか見当らないのです」そして木見婆は思い余ったように院長に反問した。

「一体ニラ爺さんに、どんな用事がおありになるのでしょうか？」

「ちょっと訊ねたいことがあるのだ」院長は自分のあから顔を掌でぶるんとこすった。「当院にはたいへん悪い奴がいる。それについて聞きたいのだ」

「悪い奴？」

木見婆はぎくっと肩を慄わせて院長の顔を見た。院長の眼はとろんと好色的にうるんで、女金貸のふくよかな二の腕にそそがれていた。その腕も酔いのために桃色に染まっているのだ。そのままの姿勢で院長は大きくうなずいた。「そうだ。悪がしこい奴だ」

木見婆の心臓はどきんと波打った。彼女はそのまま二三歩後退し、丁寧に頭を下げながらやっとのことで言った。

「もう用事はございませんか」

「もう用事はない」院長が掌を振った。「下ってもよろしい」
何気ない院長のその言葉は、最後の宣告のように木見婆に響いた。木見婆はぶったおれそうな気分になり、扉を排して廊下に出た。よたよたと階段を降り始めた。教授が待ちかねたように口を開いた。
「在院者の回転率を高めるためにはだね、タイル張りのような物理的方法より、やはり化学的方法に重点を置くべきだと僕は思う。たとえば先ほどの黄変米の件だがね、あれを飯にたきこんで、一律に皆に食べさせるのは、あまり効果的な方法ではない」
「と申しますと？」
「たとえばだね、黄変米の中で、イスランジャ黄変米というやつは、これは人間の肝臓をおかす」教授は自分の肝臓の上を掌で押えた。「だから当院でも、肝臓の悪い人を集めて、これを食べさせるようにしたがよかろう。それからタイ国黄変米、これはもっぱら心臓や腎臓の障害をおこさせるな。だからこれは、心臓や腎臓の弱まった在院者にあてがうと効果的だ。そういう風に、黄変米と言っても、いろんな種類があるのだから、その種類に応じて医学的臨床的に使用することが大切だ。そうしないと、月二人は無理かも知れないよ。院長。当院在院者の健康診断簿はととのっているか」
「一応ととのってはいますが」院長は禿頭を押えて恐縮した。「なにしろ俵君は犬猫専門で、人間の方は専門ではありませんので」
「やはり人間専門の医者に変えるべきだねえ」食堂主が主張した。「獣医じゃ仕方がないし、それにあの俵医師はあまり当院に熱心でないようだからさ」
木見婆は力無く肩をおとして、ふらふらと調理室に戻ってきた。二杯目の茶漬をかっこんでいる栗山佐介に眼もくれず、調理室のすみの戸棚の前に立ち、引出しから私物の大きな風呂敷をとり出して、そそくさとエプロンを外した。
「どうしたんだね」佐介はいぶかしく訊ねた。「顔色が悪いよ。病気じゃないのか」
「あたしゃもうここで働くのがイヤになったよ」木見婆は投げ出すように答えた。「もう辞（や）めちまおうかしら」
「辞めちまいなよ」佐介は冷淡に答えて、茶漬の残りをざぶざぶとかきこみ、ぎくしゃくと立ち上った。「さあ、院長室に出勤するかな」
「部屋割り変更の件ですが」院長は空瓶を卓の下に片付けながら説明した。「当院では年に一回部屋替えを行う。それもくじ引きによってです。今年はその期日は過ぎているのですが、わたしはわたしの考えがあって、わざとそれを引延ばしているのです」
「それは好都合だったな」と運送屋が言った。「じゃ先生の提案のような具合にして、部屋替えをやればいいな」
「先ず人間の医者を雇って来ることね」と女金貸。「そして早急に全員の綿密な健康診断をやることね。近頃、人間ドック入りというのが、あちこちで流行しているらしいわよ」
「そう、そう」食堂主が相槌を打った。「わたしも近いうちにそれに入ろうかと考えているんだ」

「しかし在院者にそれを感づかれてはまずいよ」教授が言った。「肝臓の悪い者は悪い者同士、心臓は心臓、胃腸は胃腸、卒中体質は卒中体質と、各グループにわけて部屋割りを行うんだ。そして、各グループによって、食事の種類をかえる。たとえば卒中体質グループなどには、酒煙草の特別支給を考慮してもいいな。肝臓グループにはイスランジャ黄変米のヤキ飯などだ。なに、政府が大がかりでまた大ざっぱにやっていることを、僕たちはこぢんまりと計画的にやってみるだけの話さ。ははは」

「誰だ。はいれ」黒須院長が大声を出した。扉がまたコツコツと鳴ったのだ。「韮山爺さんか？」

「僕です」扉のすき間から佐介がぽっこりと顔を出した。

「栗山書記です。いささか遅刻しました」

「なにがいささかだ！」院長は眉を吊り上げて、不興気にはき出した。「いささかということは、ちょっとと言うことだ。見ろ、会議は終りかけてるじゃないか」

「膝にネンザが起きたので、接骨医に行ってたのです」鞄と卓上ピアノをかかえて、佐介は恐縮した表情でびっこを引き引き入ってきた。「診断書をお見せしましょうか」

「診断書なんかいらん！」院長は怒鳴った。「もう君には、何も要求しないよ」

「まあまあ、おだやかに」と女金貸がなまめかしくとりなした。「ネンザなら仕方がないじゃないの。ねえ、書記さん。どうしたの。ころんだの？」

「ええ。犬に追っかけられて」佐介は習慣的なうそをついた。「僕は、もともところびやすく出来ているもんですから」

「そうでしょうねえ」女金貸は同情した。「書記さんはまったく頭でっかちだものねえ」

「ころびやすいのはまとめて」運送屋が本題に戻った。「二階の部屋に割当てるといいね。階段の登り降りということがあるから」

「水爆マグロなんか惜しいことをしましたな」食堂主が膝を叩いて口惜しがった。「魚河岸（うおがし）にわたしの従弟が勤めていてね、そいつに頼めばガイガーカウンターで調べる前のマグロを、都合して呉れたかも知れない。そしてそれを当院用に回せたのになあ」

「水燥マグロは、今は入荷してないのかい？」

「入荷してるかも知れないが」と食堂主。「昨年暮で政府は検査を中止してしまったんだ。だからどれが水爆マグロで、どれがふつうのマグロだか、見分けがつかないんだよ、険呑（けんのん）なことだ」

「どういう体質や病気に」教授がまたしても腕時計をのぞいた。「どういう食物が悪いか。その精密な一覧表を、来月の会議までに、院長は人間医者と相談して作成して呉れ。部屋割りとか、具体的な食事給与の方法については、どうしますか。今日ここでやりますか。それとも来月に――」

「来月だ」

「来月だ」

「来月ね」

「では、時間も来たようだし、今日の月例会議はこれで終ります」と教授が宣言した。「とにかくこういう事業を運営するには、人の和ということが大切です。われわれ経営者はもちろんのこと、院長との連絡、院長と部下、職員や書記や調理人にいたるまで、緊密に団結してことに当らねばならん。そうしないととても九十九名を相手として運営しては行けない。院長。部下の統率掌握という点には、ぬかりはないだろうな」

「そ、それは大丈夫です」院長は大げさに胸をどんと叩いた。「調理人の末々にいたるまでわたしにすっかり心服しています」

「木見婆さんが辞めたいと言っていましたよ」書記卓から佐介がうっかりと口を辷らした。

「どういうわけですか、もうこんなところはイヤだって」

「なに？」院長は朱面をかり立てて佐介をにらみつけた。「いらざることに口を出すな。何も知らないくせに！」

「さあ、出かけるか」食堂主が立ち上りながら、居眠りをしている菓子屋をはげしく揺り起した。「おい、会議は終ったんだよ」

「え、なに、ああ、そうか」菓子屋は眼をぱちぱちさせながら口の端のよだれを拭いた。「僕のウナギはどれだ？」

経営者たちはそれぞれ立ち上り、上着を着け、おのおの折詰めをぶら下げた。院長はすばやく入口の方にかけて行き、侍従のようにうやうやしく扉を押し開いた。教授を先頭に、五人の男女はぞろぞろと廊下に流れ出た。院長もそのあとにくっついて、階段を三四段降りかけたが、たちまち飛鳥のように階段をかけ登り、勢い込んで院長室にまい戻ってきた。書記卓の栗山佐介の前にいきなり立ちふさがった。

「もう君は今日限り、当院に出勤して来なくてよろしい。私物をまとめて帰って呉れたまえ」

「え。クビですか？」佐介はびっくりして院長の顔を見た。

「でも、僕がいないと、いろいろ当院の事務に支障……」

「後釜には女秘書がやってくることになっている」院長は怒りを押えて無理ににやりとわらった。「電報を打っても出て来ないし、出て来たと思うと、いらざることに口を出すし」

「昨晩は僕の方にも都合がありまして――」

院長はその弁解を聞かず、くるりと身をひるがえして、経営者たちのあとを追って階段をどどどどとかけ降りた。経営者たちの群はおのおの折詰めをぶら下げ、すでに玄関を出て、陽光の玉砂利道を正門の方にゆるゆると進みつつあった。彼等の後ろ姿を見送るべく院長は笑いで頬を引きつらせながら、玄関の石畳のとば口に立ち止った。（今日はきゃつ等にも相当点数をかせがれたな）と院長は考えた。（ウィスキー戦術もあるいは逆効果だったかも知れないぞ）院長の頭上、バルコニーの端をかすめて、つばめが一羽すばらしい速度で飛んだ。その時院長室の書類戸棚が内側からがたごとと開かれて、煙爺とニラ爺がごそごそと這い出してきた。栗山佐介はぎょっとして書記卓の前に棒立ちになった。両老人の顔は憤怒と疲労と空腹のために、険（けわ）しい色にくまどられ、眼はにじみ出た涙や目やにのためにきらきらとかがやいていた。うしろめたい緊迫感と驚愕が佐介の身体を棒立ちのまま動け

なくした。
「ど、どうして、そ、そんなところに」佐介の舌はもつれた。「這入ってたんです？」
「聞いたぞ」煙爺が腰をさすりながら低い声で言った。
「何もかも聞いたぞ？」
「お前たちの相談を」ニラ爺はかすれた声でわらった。
「すっかり聞いてやったぞ。ヒ、ヒ、ヒ」
「ぼ、ぼくは今来たばかりなんだ」弁解にならぬ弁解を佐介はした。「来たとたんにクビになってさ。何が何だかさっぱり判らないんだ」
　両老人はじりじりと書記卓に近づいてきた。長時間戸棚の中にちぢこまっていたので、二人とも足がしびれているらしく、その動作は緩慢であった。佐介は身体を固くして二人の動きをじっと見守っていた。しかし二老人はただ無意味に動いているだけで、どうしたら自分の感情を動きに移せるか、判っていないように見えた。ニラ爺の手が偶然に書記卓の卓上ピアノに触れ、さげすむような声を出した。
「なんや。これ、オルガンか？」
「ピアノだよ」佐介はおとなしく答えた。「あんたに上げるよ。そのつもりで持って来たんだ」
「またこれにも、たくらみがあるんじゃなかろうな」煙爺が佐介をきっとにらんだ。「全く油断もすきもないからな。強化米だとばかり思っていたら、黄変米だと来やがる。ニラ爺さんにそれを弾かせて、皆を神経衰弱にしようという仕組みだろう」
「そ、そんなことはないよ」
　ニラ爺は卓上ピアノから手を放したが、また直ぐに抱き上げて、何を思ったかふらふらとバルコニーの方に動き出した。開かれた窓からさわやかな空気が流れ入ってきた。煙爺は両手を上げて深呼吸をしながら、いらだたしげな足どりでそのあとにつづいた。バルコニーの上からは、あおあおと茂った院内菜園が見え、鈍（にび）色の鉄の正門が見え、かなた駅に至る一筋の石ころ道が見えた。その石ころ道を経営者たちの一行が小さく歩いていた。その右手にあたる雑木林の中から、大小数匹のよごれた犬がのそのそと這い出し、いやな声で啼き立てながら、こもごも入り乱れて石ころ道に走って来た。最初に悲鳴をあげたのは、一行の最後尾を歩いていた女金貸であった。
「犬が！」彼女は走り出そうとしたが、石ころにハイヒールの踵（かかと）をとられてよろめいた。「あっ、たすけてえ！」
　四人の男はぎょっとして振り向いた。よろめいた女金貸の折詰めを、大きな灰色の犬が濡れた鼻先を近づけてくんくんと嗅いだ。脚の短い小さな犬は金貸の背後に回り、そのふくよかな腰のあたりをくんくんと嗅ぎ回った。教授が叱咤するように言った。
「悲鳴を上げるんじゃない。そんな声を出すと、ますます犬からバカにされるんだ！」
　女金貸は大急ぎで眼の色をかえて起き上った。犬たちは二三歩後退した。眼の色を変えているのは彼女だけでなく、四人の男たちもすっかり変っていた。なかんずく恐怖で眼を青く

していた食堂主は、その肥った躰［やぶちゃん注：「からだ」。］にはずみをつけて、いきなりかけ出そうとした。教授が大声で叱りつけた。
「走るな！　走るとガブリと嚙みつかれるぞ。ふつうの歩調で歩くんだ」
「自分のことばかりを考えるな！」運送屋が必死に怒鳴った。しかしその運送屋も声がうわずって、足どりもすこし早くなっていた。「落着け。落着いて、かたまって歩け。犬になめられるな！」
「アレエ！」
　女金貸はふたたび絶叫して、鰻（うなぎ）の折詰めを手から放した。灰色犬がガブリと折詰めを嚙んで引っぱったのだ。犬たちはたちまち折詰めにたかり、押し合いへし合い、低くうなり合って牙を鳴らした。折詰めはただちにばらばらに分解され、犬たちは舌を鳴らして鰻の白焼きをむさぼり食い始めた。女金貸は小走りで一行に追い付いた。
「落着いて、ゆっくり歩け！」運送屋がふたたびうわずった声で注意した。「俺もビルマ俄線で野犬に後追いされたが、走っちゃダメだぞ。走ったとたんに飛びかかられるぞ。粛々（しゅくしゅく）と歩け！」
「狂犬じゃないかしら」女金貸が半分泣き声で言った。「狂犬だったらどうしましょう」
「不吉なことを言うな」菓子屋が慄えながら歩を早めた。
「ああ、神様！」
「ははは、犬にたかられてるな」玄関のとば口で背伸びしながら、院長がたのしげにひとりごとを言った。「二人や三人嚙みつかれた方がいいよ。だいたい経営者にはウルサ型が多過ぎるからな」
「折詰めなんかぶら下げてるもんだから」バルコニーの上で小手をかざしたまま、佐介はにこにことニラ爺をかえりみた。「犬から、うようよたかられているよ」
　ニラ爺は沈黙していた。沈黙したまま、バルコニーから半身乗り出して、真下をじっと見おろしていた。その真下には、開き切った向日葵（ひまわり）の花のような形で、黒須院長の禿頭があった。ニラ爺は手にした卓上ピアノを、ねらいをつけて、バルコニーからぐっと差し出した。そのまま手を放した。風圧を鍵盤（キイ）に受けて、卓上ピアノは微妙なメロディを奏しながら、まっすぐに大地めがけて落下し、院長の肩をわずかかすめて、めちゃめちゃな音響と共に石畳の角にぶつかった。声にならない声を立てて本能的に腰を曲げた院長の禿頭に、一本の小さな釘をともなった木質部の破片が、まるでねらいをつけたかのようにするどく飛びかかった。釘は禿頭にぐさりと突きささり、木の破片は釘にとめられてそのまま額にぶら下った。院長は頭を押えて、大声でわめいた。
「ああ、誰か、誰か来てくれ！」
　院長は玄関に逃げこみながら力をこめて釘を引き抜いた。引き抜かれた穴から、アルコール分を若干含有した鮮血がどくどくと流れ出て、院長の掌やこめかみや頬をべっとりと濡らした。院長は顔色を変えた。電球のガラスの針で脳天を突き刺し、そして死んでしまった父親のことを、パッと思い出したのだ。院長は追いつめられた鼠のような顔になり、忙しく

左右を見回し、あえぐような声を出した。
「ああ、誰か来て呉れ。俵医師、いや俵じゃダメだ。木見婆さん。木見婆さん！」
木見婆は私物や米やカンヅメを大風呂敷に包みこみ、すでに夕陽養老院の建物を離れ、小走りで裏門の方にかけていた。行きがけの駄賃に、米やカンヅメ類を欲張って押し込んだので、その風呂敷包みの重みで、木見婆の走り方はまるで泥酔者のそれであった。ニラ爺はバルコニーから院長室へかけこみ、廊下に飛び出して階段を大急ぎでかけ降りた。どこに行くというあてもなく、ニラ爺は顔中を汗と涙だらけにしながら、大声を上げて階下の廊下を走っていた。煙爺もあてもなくそれにつづいて走った。院長はふたたび玉砂利道に飛び出し、頭を両掌で押え、玉砂利を蹴散らしながら、鼠花火のようにそこらを無目的にかけ回っていた。経営者たちはてんでに折詰めを道ばたに投げ捨て、走るな、走るな、とお互いを牽制（けんせい）し合いながら、競歩の選手のように足を突張って駅に急いでいた。競歩と言うにはそれは規約を無視し過ぎていて、やはりそれは一種の疾走であった。犬たちは折詰めにたかってはそれを食べ尽し、また疾走する経営者たちのあとを追って走った。走ったりよろめいたりかけ回ったりしている人間や犬たちに、晩春の陽光はうらうらとさしわたり、さわやかな大気を切って紫黒色のつばめが飛んだ。つばめの尻尾は翃（はね）とともに長く、しゃれた形に分岐していて、それを自在に操作しながら方向を変えた。人間はとてもこういう具合に身軽には行かない。

砂時計

完